

秋田県文化財調査報告書第385集

# 小鳥田 I 遺跡

—県営ほ場整備事業(中仙南部地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2005・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）  
遺跡出土の岩偶です。縄文時代晚期初頭、1992年8月  
発見、高さ7cm、凝灰岩。

こ ちよう だ いち い せき  
小 鳥 田 I 遺 跡

—県営ほ場整備事業(中仙南部地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2005・3

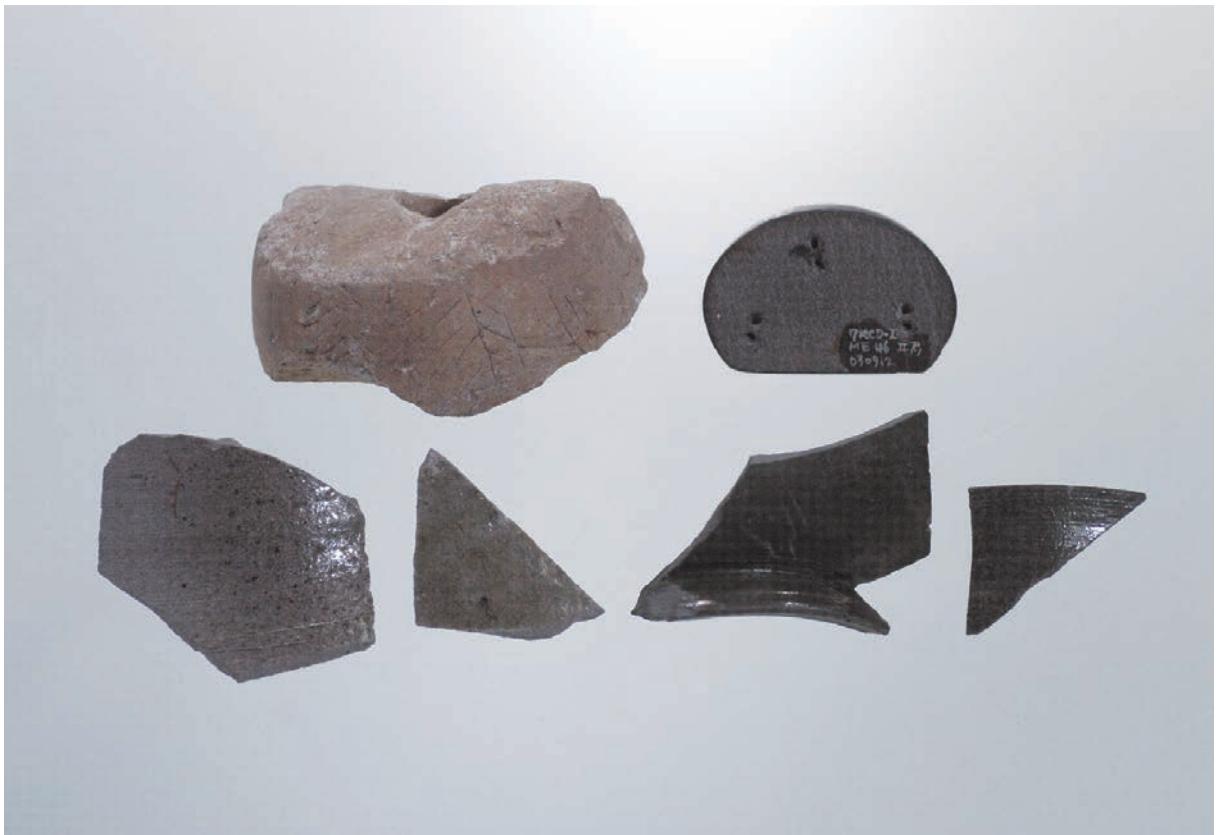
秋田県教育委員会



小鳥田 I 遺跡周辺の空中写真(南→)



1. SM198道路状遺構(北→)



2. 灰釉陶器・綠釉陶器・紡錘車・石帶

## 序

本県には、これまでに発見された約4,600か所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、農業地域においては、用排水路網の整備と水田の大区画化により、農業の大規模化と担い手の育成を目的とするほ場整備事業が行われております。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、県営ほ場整備事業に先立って、平成15年度に中仙町鎧見内（中仙南部地区）において実施した小鳥田Ⅰ遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑、井戸跡、溝跡、道路状遺構などが検出されました。また、縄文時代の土器・石器や、中世から近世に使用された陶磁器も出土しました。このことから、本遺跡は縄文時代に生活の場として利用され、平安時代には竪穴住居跡と掘立柱建物跡を中心とする集落が営まれ、鎌倉時代から江戸時代にも、この地に人々が生活していたことがわかりました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県仙北平野農村整備事務所、中仙町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺清

## 例　　言

- 1 本書は、県営ほ場整備事業（中仙南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、平成15年度（2003年度）に発掘調査した秋田県仙北郡中仙町鎧見内字水上に所在する小鳥田Ⅰ遺跡の調査成果を収めたものである。
- 3 発掘調査の成果については、既にその一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報22（平成15年度）』や『平成15年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』等で公表されているが、本報告書の記載内容がすべてに優先する。
- 4 本書に使用した地形図は、秋田県仙北平野農村整備事務所提供的1,000分の1「中仙南部地区ほ場整備計画図」と国土地理院発行の50,000分の1地形図「角館」、25,000分の1地形図「羽後長野」「六郷」である。
- 5 平成17年3月22日に、大曲市と仙北郡中仙町・仙北町・太田町・神岡町・西仙北町・協和町・南外村の1市6町1村が合併して「大仙市」が発足した。本遺跡が所在する旧中仙町については「仙北郡中仙町」の表記を「大仙市」と読み替える住所表示の変更となつたため、例言・抄録を除く報告書本文中においても、同様に読み替えていただきたい。なお、報告書抄録中の市町村コードについては、合併前の中仙町旧コードを記載した。
- 6 本書の挿図中に使用した土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版土色帖 2000年版』を使用した。
- 7 本書の航空写真は、昭和50年に建設省（当時）国土地理院が撮影したものを掲載した。
- 8 本書第5章の自然科学的分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の分析報告を収載した。
- 9 本遺跡の発掘調査ならびに報告書刊行にあたり、次の方々より御指導、御教示を賜った。記して謝意を表します（敬称略）。  
井上喜久夫、早川泉、高島英之、八重樫忠郎、伊藤博幸、三上喜孝、吉田歓、村木志伸、伊藤邦弘、熊田亮介、富樫泰時、藤田秀司
- 10 本書の執筆は次のように分担した。

第1章	……………	大信田壽一・石澤宏基
第2章第1節	……………	石澤宏基・打矢泰之
第2章第2節	……………	石澤宏基・千葉史宏
第3・4・6章	……………	石澤宏基
各遺構図の作成	……………	石澤宏基・大信田壽一・打矢泰之・千葉史宏
- 11 本書の編集は石澤宏基が行った。

## 凡 例

1 本報告書の遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系による座標北を示す。世界測地系を基準とし、グリッドの座標原点杭MA50（X = -52943.000、Y = -26048.000、標高 = 36.839m）とした位置における座標北と磁北との偏角は西偏11' 34"である。

2 遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。

S I .....	豎穴住居跡	S B .....	掘立柱建物跡	S K .....	土 坑
S R .....	土器埋設遺構	S E .....	井 戸 跡	S N .....	焼土遺構
S D .....	溝 跡	S M .....	道路状遺構	S K P .....	柱穴様ピット
S X .....	その他の遺構				

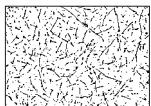
3 基本的に遺構実測図は1/20及び1/10の縮尺、遺物実測図は1/2及び1/3の縮尺で掲載した。しかし、挿図割付の関係上、さらに若干の縮小を施した挿図もある。各頁に付したスケールを参照されたい。

4 発掘調査の結果、検出した遺構のうち、規模の小さな柱穴様ピットについては、平面配置のみを掲載した。

5 土層の層序に用いた数字は、基本層位にローマ数字を、遺構内層位に算用数字を用いた。

6 挿図中の遺物番号は、各頁ごとに付した。

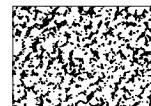
7 挿図中に使用したスクリーントーンは以下の通りである。これ以外については個々の頁に凡例を示した場合があるので参照されたい。



焼土範囲  
(遺構挿図)



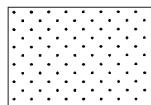
炭化範囲  
(遺構挿図)



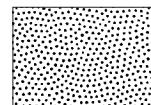
炭化物付着部分  
(遺物挿図)



内面黒色処理  
(遺物挿図)



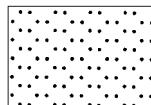
凹み  
(遺物挿図)



敲き  
(遺物挿図)



磨り  
(遺物挿図)



研ぎ  
(遺物挿図)



施釉  
(遺物挿図)

# 目 次

## 卷頭図版

### 序

### 例 言

### 凡 例

### 目 次

### 挿図・表・図版目次

第1章 はじめに .....	1
第1節 調査に至る経過 .....	1
第2節 調査要項 .....	2
第2章 遺跡の環境 .....	3
第1節 遺跡の位置と立地 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	5
第3章 発掘調査の概要 .....	10
第1節 遺跡の概観 .....	10
第2節 調査の方法 .....	10
第3節 調査の経過 .....	11
第4章 調査の記録 .....	15
第1節 基本層位 .....	15
第2節 検出遺構と遺物 .....	15
1 竪穴住居跡 .....	18
2 掘立柱建物跡 .....	29
3 土 坑 .....	29
4 井 戸 跡 .....	31
5 焼 土 遺 構 .....	31
6 溝 跡 .....	33
7 道路状遺構 .....	33
8 柱穴様ピット .....	34
9 その他の遺構 .....	34
第3節 遺構外出土遺物 .....	57
第5章 自然科学的分析 .....	75
第1節 放射性炭素年代測定 .....	75
第2節 樹種同定 .....	77
第6章 まとめ .....	79

## 図 版

## 報告書抄録

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第31図 S K P柱穴様ピット配置図	49
第2図 地形区分図	4	第32図 S K P86・92・94・113柱穴様ピット・出土遺物	50
第3図 周辺遺跡位置図	6	第33図 S X191その他の遺構・出土遺物	51
第4図 調査範囲図	12	第34図 S X200・205その他の遺構・出土遺物(1)	52
第5図 遺構配置図	13	第35図 S X200その他の遺構・出土遺物(2)	53
第6図 基本土層図(1)	16	第36図 S X205その他の遺構・出土遺物(3)	54
第7図 基本土層図(2)	17	第37図 S X205その他の遺構・出土遺物(4)	55
第8図 S I 01堅穴住居跡・出土遺物	19	第38図 S X205その他の遺構・出土遺物(5)	56
第9図 S I 10堅穴住居跡・出土遺物	21	第39図 遺構外出土遺物(1)	58
第10図 S I 49堅穴住居跡・出土遺物(1)	22	第40図 遺構外出土遺物(2)	59
第11図 S I 49堅穴住居跡・出土遺物(2)	23	第41図 遺構外出土遺物(3)	60
第12図 S I 91堅穴住居跡・出土遺物(1)	24	第42図 遺構外出土遺物(4)	61
第13図 S I 91堅穴住居跡・出土遺物(2)	25	第43図 遺構外出土遺物(5)	62
第14図 S I 199堅穴住居跡	26	第44図 遺構外出土遺物(6)	63
第15図 S I 199堅穴住居跡・出土遺物(1)	27	第45図 遺構外出土遺物(7)	64
第16図 S I 199堅穴住居跡・出土遺物(2)	28	第46図 遺構外出土遺物(8)	65
第17図 S B 208掘立柱建物跡・出土遺物(1)	35	第47図 遺構外出土遺物(9)	66
第18図 S B 208掘立柱建物跡・出土遺物(2)	36	第48図 遺構外出土遺物(10)	67
第19図 S K 07・44土坑・出土遺物	37	第49図 遺構外出土遺物(11)	68
第20図 S K 83・109・202・203土坑・出土遺物	38	第50図 遺構外出土遺物(12)	69
第21図 S K 203土坑・出土遺物	39	第51図 遺構外出土遺物(13)	70
第22図 S K 201土坑・S E 207井戸跡・出土遺物(1)	40	第52図 遺構外出土遺物(14)	72
第23図 S E 207井戸跡・出土遺物(2)	41	第53図 遺構外出土遺物(15)	73
第24図 S E 207井戸跡・出土遺物(3)	42		
第25図 S N 03・04・05・06焼土遺構・出土遺物	43		
第26図 S N 204焼土遺構・出土遺物	44		
第27図 S N 206焼土遺構・出土遺物	45		
第28図 S D 02溝跡・出土遺物	46		
第29図 S D 112溝跡・S M198道路状遺構	47		
第30図 S D 112溝跡・S M198道路状遺構・出土遺物	48		

# 図版目次

- 巻頭図版 1** 小鳥田 I 遺跡周辺の空中写真（南→）
- 巻頭図版 2**
1. S M198道路状遺構（北→）
  2. 灰釉陶器・綠釉陶器・紡錘車・石帶
- 図版 1 遺跡近景**
1. 調査区近景（南西→）
  2. 調査区近景（北→）
- 図版 2 検出遺構（1）**
1. S I 01堅穴住居跡検出状況（南西→）
  2. S I 01堅穴住居跡断面（南西→）
- 図版 3 検出遺構（2）**
1. S I 10堅穴住居跡北側（北西→）
  2. S I 10堅穴住居跡焼土断面（東→）
  3. S I 10堅穴住居跡検出状況（北東→）
  4. S I 10堅穴住居跡南側焼土断面（南西→）
  5. S I 10堅穴住居跡南側焼土検出状況（北西→）
- 図版 4 検出遺構（3）**
1. S I 49堅穴住居跡完掘（北西→）
  2. S I 49堅穴住居跡カマド確認（北→）
  3. S I 49堅穴住居跡カマド確認（南→）
  4. S I 49堅穴住居跡カマド1断面（西→）
  5. S I 49堅穴住居跡カマド2断面（南西→）
- 図版 5 検出遺構（4）**
1. S I 91堅穴住居跡完掘（南東→）
  2. S I 91堅穴住居跡断面（北西→）
  3. S I 91堅穴住居跡カマド内支脚（北東→）
  4. S I 91堅穴住居跡カマド（南東→）
  5. S I 91堅穴住居跡カマド断面（北西→）
- 図版 6 検出遺構（5）**
1. S I 199堅穴住居跡完掘（北西→）
  2. S I 199堅穴住居跡断面（北西→）
  3. S I 199堅穴住居跡炭化物および礫出土状況（北東→）
  4. S I 199堅穴住居跡カマド検出状況（北西→）
  5. S I 199堅穴住居跡カマド断面（南西→）
- 図版 7 検出遺構（6）**
1. S B 208掘立柱建物跡完掘（北東→）
  2. S B 208掘立柱建物跡柱穴断面（西→）
  3. S K07土坑断面（北西→）
  4. S K07土坑完掘（北西→）
  5. S K44土坑断面（南→）
- 図版 8 検出遺構（7）**
1. S K83土坑断面（東→）
  2. S K109土坑断面（北東→）
  3. S K109土坑断面（北東→）
  4. S K109土坑完掘（北東→）
  5. S K201土坑断面（北西→）
  6. S K201土坑材出土状況（北西→）
  7. S K202・203土坑検出状況（北→）
  8. S K202・203土坑完掘（南西→）
- 図版 9 検出遺構（8）**
1. S E 207井戸跡検出状況（北→）
  2. S E 207井戸跡完掘（北→）
  3. S E 207井戸跡湧水状況（西→）
  4. S E 207井戸材出土状況（南西→）
  5. S E 207井戸材出土状況（南→）
- 図版10 検出遺構（9）**
1. S N03焼土遺構検出状況（北西→）
  2. S N03焼土遺構断面（北西→）
  3. S N04焼土遺構断面（北西→）
  4. S N04焼土遺構完掘（南→）
  5. S N05焼土遺構断面（南西→）
  6. S N05焼土遺構完掘（西→）
  7. S N06焼土遺構断面（南東→）
  8. S N06焼土遺構完掘（南東→）
- 図版11 検出遺構（10）**
1. S N 204焼土遺構土器出土状況（北東→）
  2. S N 204焼土遺構断面（南西→）
  3. S N 206焼土遺構断面（南西→）
  4. S N 206焼土遺構断面（北→）
- 図版12 検出遺構（11）**
1. S D02溝跡検出状況（北→）
  2. S D02溝跡検出状況（北東→）
  3. S D112溝跡断面（南西→）
  4. S D112溝跡・S X 191断面（南西→）
  5. S D112溝跡・S M198道路状遺構（北東→）
- 図版13 遺構内出土遺物（1）**
1. S I 01堅穴住居跡出土遺物
  2. S I 10堅穴住居跡出土遺物
- 図版14 遺構内出土遺物（2）**
1. S I 49堅穴住居跡出土遺物（1）
  2. S I 49堅穴住居跡出土遺物（2）
- 図版15 遺構内出土遺物（3）**
1. S I 91堅穴住居跡出土遺物（1）
  2. S I 91堅穴住居跡出土遺物（2）
- 図版16 遺構内出土遺物（4）**
1. S I 199堅穴住居跡出土遺物（1）
  2. S I 199堅穴住居跡出土遺物（2）
- 図版17 遺構内出土遺物（5）**
1. S B 208掘立柱建物跡出土遺物（1）
  2. S B 208掘立柱建物跡出土遺物（2）
- 図版18 遺構内出土遺物（6）**
1. S B 208掘立柱建物跡出土遺物（3）
  2. S K07土坑出土遺物
- 図版19 遺構内出土遺物（7）**
1. S K44・83・109土坑出土遺物
  2. S K201土坑出土遺物
- 図版20 遺構内出土遺物（8）**
1. S K202・203土坑出土遺物（1）
  2. S K202・203土坑出土遺物（2）
- 図版21 遺構内出土遺物（9）**
1. S E 207井戸跡出土遺物（1）
  2. S E 207井戸跡出土遺物（2）
- 図版22 遺構内出土遺物（10）**
1. S E 207井戸跡出土遺物（3）
  2. S E 207井戸跡出土遺物（4）
- 図版23 遺構内出土遺物（11）**
1. S N03・04焼土遺構出土遺物
  2. S N204焼土遺構出土遺物
- 図版24 遺構内出土遺物（12）**
1. S N 206焼土遺構出土遺物
  2. S D02溝跡出土遺物
- 図版25 遺構内出土遺物（13）**
1. S D112溝跡出土遺物
  2. S M198道路状遺構出土遺物
- 図版26 遺構内出土遺物（14）**
1. S K P92～115柱穴様ピット出土遺物
  2. S X 191その他の遺構出土遺物
- 図版27 遺構内出土遺物（15）**
1. S X 200その他の遺構出土遺物
  2. S X 205その他の遺構出土遺物（1）
- 図版28 遺構内出土遺物（16）**
1. S X 205その他の遺構出土遺物（2）
  2. S X 205その他の遺構出土遺物（3）
- 図版29 遺構内出土遺物（17）**
- 図版30 樹種同定顕微鏡写真**

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経過

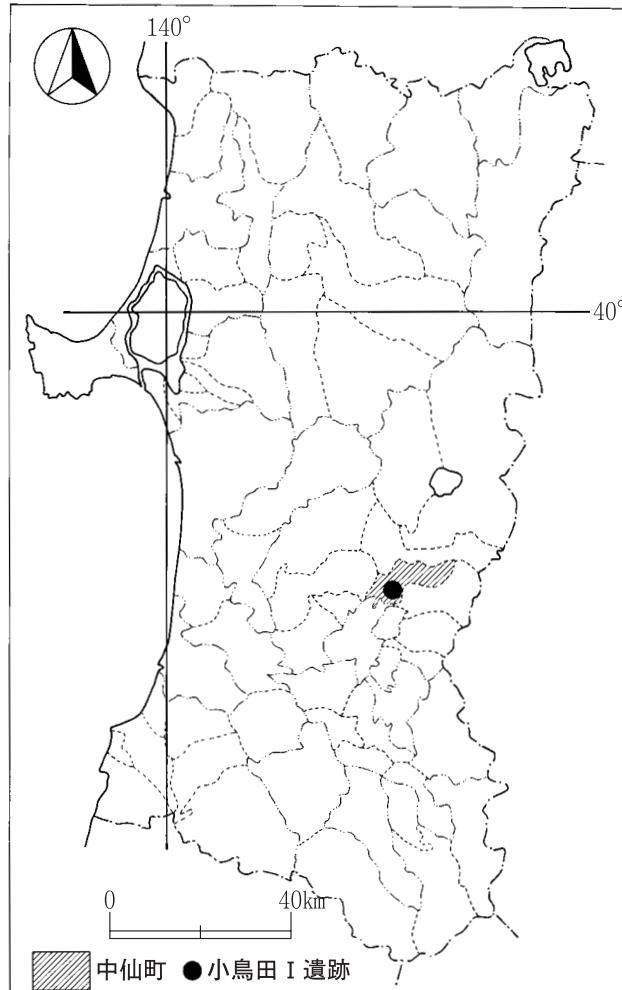
秋田県農林水産部は、農業の近代化と大規模経営をいっそう推進するため、県営ほ場整備事業を実施している。本事業は農地の大区画化および農道・用排水路網の整備を行い、農業経営環境の改善と安定を図ることによって、新たな農業の担い手を育成することを目的としている。

中仙町中仙南部地区の県営ほ場整備工事区域は『秋田県遺跡地図（県南版）』（1989年、秋田県教育委員会刊）の記載にあるように、埋蔵文化財が包蔵されていることが判明していた。このため、本事業を計画・実施する秋田県仙北平野農村整備事務所（現：仙北地域振興局仙北平野農村整備事務所）は、文化財保護法に基づき工事に先立って、事実確認と今後の対応について秋田県教育委員会に調査と指導を依頼した。これを受け秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室は、踏査・試掘および確認調査の結果、遺跡がある場合は記録保存としての発掘調査を実施すべきことを回答した。

平成12年5月25日および12月20・26日、文化財保護室と中仙町教育委員会が中仙南部地区の遺跡踏査・試掘を行った結果、事業予定地内に新発見の遺跡2か所（小鳥田I遺跡・下道満遺跡）が確認された。平成13年12月4日の試掘でも、この2遺跡から土師器片が出土し、平成14年5月1・10・22日の試掘でも小鳥田I遺跡からは土師器片が出土した。

この結果に基づき、小鳥田I遺跡および下道満遺跡の範囲について、秋田県埋蔵文化財センターは確認調査（平成14年11月21日～12月20日）を実施した。確認調査の結果、工事区域18,000m<sup>2</sup>内に3,400m<sup>2</sup>の遺跡面積が含まれ、両遺跡とともに平安時代の遺構や遺物を主体とすることが判明した。これを受け、仙北平野農村整備事務所、文化財保護室、中仙町教育委員会は、工事の施工上、破壊を免れない小鳥田I遺跡の一部（2,400m<sup>2</sup>）を発掘調査によって記録保存することを決定した。

以上の経緯に基づき、秋田県埋蔵文化財センターは、平成15年8月6日から10月7日の期間、小鳥田I遺跡の発掘調査を実施するに至った。



第1図 遺跡の位置

## 第2節 調査要項

遺 跡 名	小鳥田 I 遺跡（こちょうだいichiせき）：遺跡略号 7 K C D - I		
遺 跡 所 在 地	秋田県仙北郡中仙町鎧見内字水上216-1外		
調 査 期 間	平成15年（2003年）8月6日～10月7日		
調 査 目 的	県営ほ場整備事業（中仙南部地区）に係る埋蔵文化財事前発掘調査		
調査対象面積	2,400m <sup>2</sup>		
調 査 面 積	2,400m <sup>2</sup>		
調 査 主 体 者	秋田県教育委員会		
調 査 担 当 者	秋田県埋蔵文化財センター（所属と職名は当該年度） 平成15年度 発掘・整理担当者 石澤 宏基 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 学芸主事 大信田壽一 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 文化財主事 (平成15年度 中仙町教育委員会派遣職員) 打矢 泰之 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 調査・研究員 千葉 史宏 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 調査・研究員 平成16年度 整理担当者 石澤 宏基 秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班 学芸主事		
総務担当者	平成15年度 総務担当者 金 義晃 秋田県埋蔵文化財センター総務課 総務課長 高橋 修 秋田県埋蔵文化財センター総務課 主任 田口 旭 秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事 平成16年度 総務担当者 渡辺 憲 秋田県埋蔵文化財センター総務課 総務課長 高橋 修 秋田県埋蔵文化財センター総務課 主任 田口 旭 秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事		
調査協力機関	秋田県仙北地域振興局仙北平野農村整備事務所 中仙町教育委員会 中仙町文化財保護協会		

### 《参考文献》

- 秋 田 県『秋田県史 考古編』1960(昭和35)年  
秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県南版)』1987(昭和62)年  
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第324集 2001(平成13)年  
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第342集 2002(平成14)年  
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第365集 2003(平成15)年  
中 仙 町『中仙町史 通史編』中仙町郷土史編さん委員会 1983(昭和58)年  
中 仙 町『中仙町史 文化編』中仙町郷土史編さん委員会 1989(平成元)年

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置と立地

小鳥田I遺跡は秋田県の内陸中央東側、仙北郡中仙町にある。中仙町は、昭和30（1955）年3月31日に、当時の長野町、清水村、豊川村、豊岡村の4町村が合併して成立した町で、全国的にも著名な秋田民謡「ドンパン節」発祥の地である。町域は東に太田町、西に西仙北町、南に大曲市と仙北町、北に玉川を挟んで角館町と境を接している。地形は、町域の南西部に出羽丘陵（町域最高峰は長野山293.7m）があり、その麓を雄物川の支流である玉川が流れる。玉川左岸から東側は仙北平野で最大の水田地帯であり、東進するにつれ斎内川や小滝川が形成する扇状地となり、町域東部には奥羽山脈が連なる。町の規模は東西18.25km、南北10.50kmに及び、面積は78.92m<sup>2</sup>で、人口11,763人、3,274世帯（平成16年12月末現在）である。

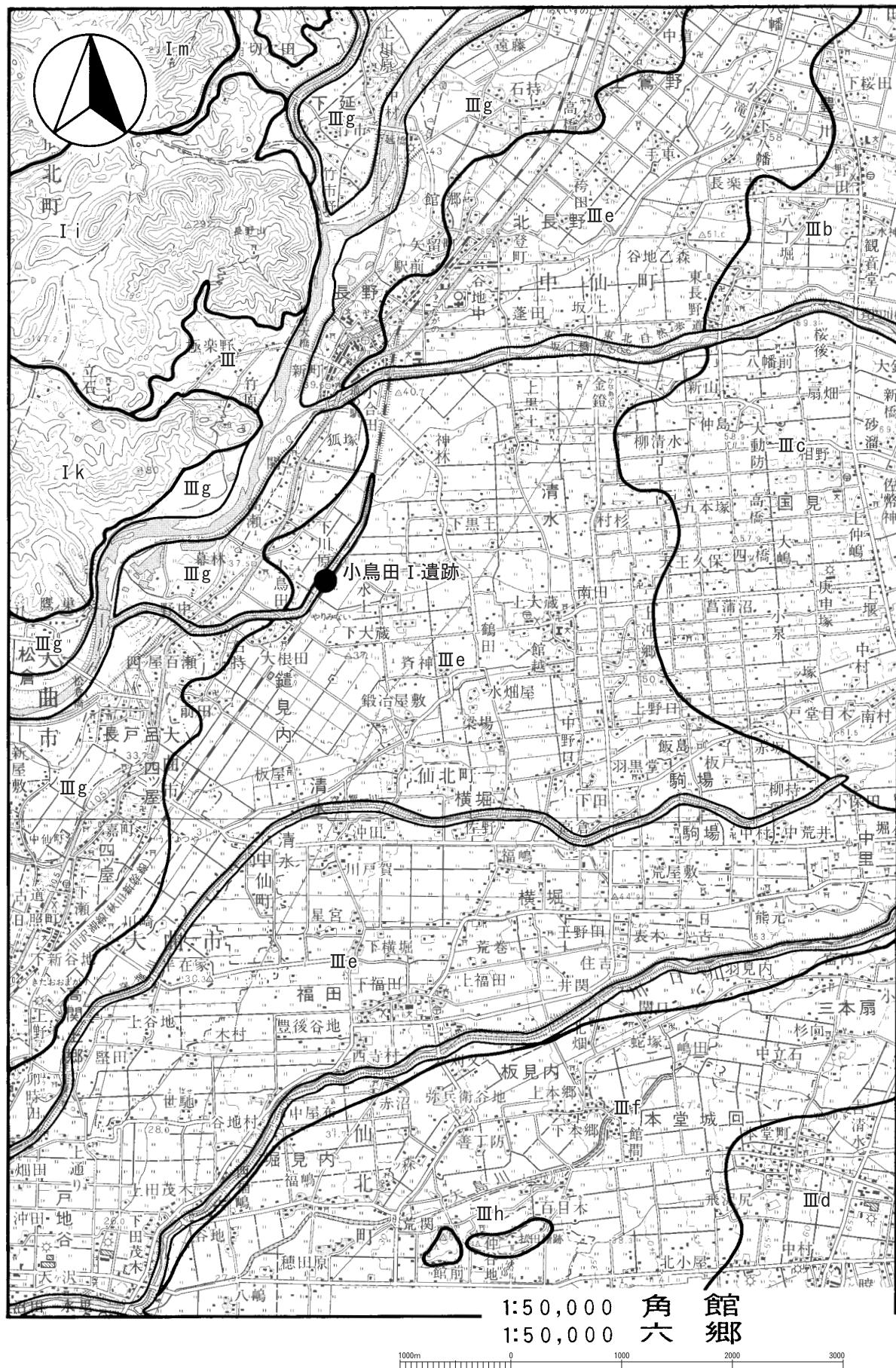
本遺跡は中仙町の南西端、JR田沢湖線鑓見内駅から北へ約500mに位置し、玉川左岸からは約960m東の水田地帯にある。奥羽山脈を源流とする斎内川が作る扇状地の前延構造低地上に立地し、標高は36～38mである。遺跡の中心位置は、北緯39度31分21秒、東経140度31分49秒となる。

地形区分上は、東部扇状地前延扇状構造低地〔III e〕の西端に位置し、約100m先の玉川下流沖積低地〔III g〕と境を接する。<sup>(註1)</sup>なお〔III e〕は、斎内川扇状地前延扇状構造低地と呼ばれる場合もある。表層地質は、第四紀完新世の未固結堆積物（扇状地前延扇状構造低地堆積物）である。この低地はほとんど勾配がなく、玉川および各扇状地の諸河川が形成した山麓沖積河川平野を成している。土壤区分は、細粒質グライ土である浅津統に属するが、一部遺跡の東側が黒泥土の井川統である。

I k : 諏訪山山地	I l : 長野山山地	I m : 明光沢岳山地
III b : 小滝川扇状地	III c : 斎内川扇状地	III d : 真昼川・釜湧川合成扇状地
III e : 東部扇状地前延扇状構造低地	III f : 真昼川・釜湧川合成扇状地前延扇状構造低地	
III g : 玉川下流沖積低地	III h : 払田丘阜群	

註1 秋田県農政部『土地分類基本調査 角館・鶴宿（5万分の1）国土調査』秋田県 1989(平成元)年

註2 秋田県農政部『土地分類基本調査 六郷（5万分の1）国土調査』秋田県 1988(昭和63)年



第2図 地形区分図

## 第2節 歴史的環境

小鳥田I遺跡の周辺には多数の遺跡が存在する。中仙町内の遺跡については『秋田県遺跡地図（県南版）』<sup>(註3)</sup>によると、90箇所の埋蔵文化財包蔵地が「周知の遺跡」として記載されている。しかし、現在までのところ町内で公的な発掘調査が実施された遺跡は、野口遺跡<sup>(註4)</sup>（中仙町清水字田中、現在は野口I・II遺跡：遺跡地図番号49-21・22）が唯一であり、この他は秋田県教育委員会・中仙町教育委員会および中仙町文化財保護協会が遺跡の試掘・踏査を行い、町民によって表採された遺物は長野公民館などに収蔵されている。

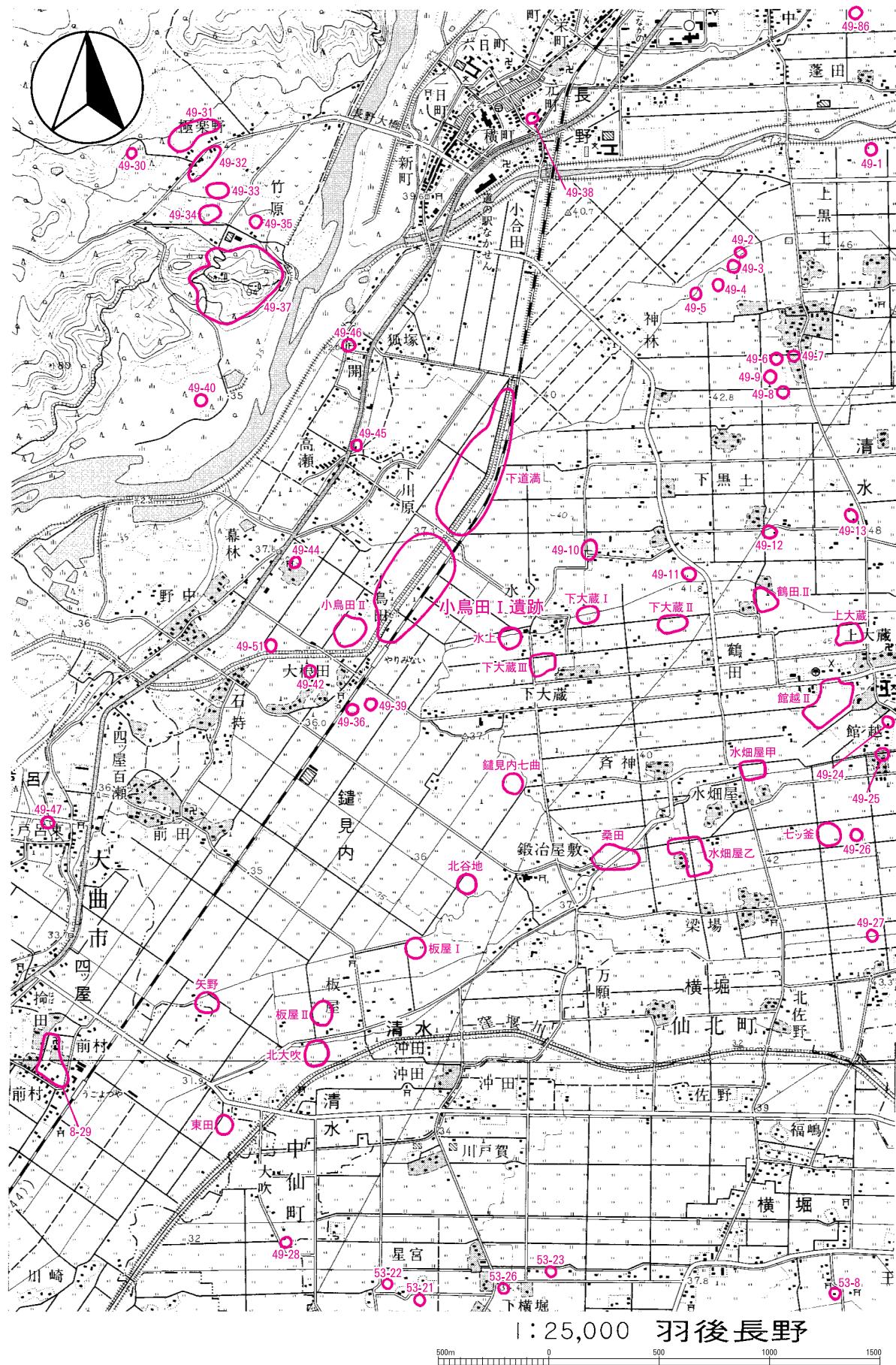
平成12年度以降、県営ほ場整備事業を推進するため、秋田県教育委員会と中仙町教育委員会が町内の遺跡分布調査（試掘・踏査）を行った結果「新発見の遺跡」が多数確認され、周知の遺跡についても既存の範囲を見直さねばならない事実が判明している。小鳥田I遺跡もこうした新発見の遺跡の1つである。なお、周辺にある遺跡を第3図と第1表に掲載した。以下、各時代の遺跡について触れる。

旧石器時代の遺跡は、現在のところ中仙町内および小鳥田I遺跡周辺では確認されていない。県南部の雄物川流域では、南外村小出I・IV遺跡、雄物川町新道I遺跡、横手市大乗院塚遺跡、山内村小田V遺跡、羽後町新成遺跡などがある。

縄文時代草創期の遺跡は、県南全体でも横手川上流の山内村岩瀬遺跡があるのみで、中仙町内およびその周辺では確認されていない。

縄文時代早期の遺跡には野中遺跡がある。この遺跡については、周辺遺跡を代表する遺跡なので、他の時期・年代も含め詳述する。野口遺跡は中仙町清水字野口田中にあり、小鳥田I遺跡から南東へ3.8kmの地点に位置する。藤田秀司氏の『仙北郡石器時代遺跡地名表』によって初めて紹介された遺跡であり、現在は周知の遺跡として『秋田県遺跡地図（県南版）』に記載されている。1963（昭和38）年、中仙町教育委員会が細谷宇三郎氏の協力を得て、氏所有の田圃を確認調査した結果、石器片が多数出土したため、町の遺跡として取り扱うことを秋田県教育委員会に報告した。その後1973（昭和48）年、県営ほ場整備事業（国見地区）の整備計画区域内に野口遺跡が含まれることが判明し、記録保存のため中仙町教育委員会と秋田県教育庁文化課および社会教育課が主体となって、緊急発掘調査が行われた。調査の結果、縄文時代晩期の住居跡1軒と土坑（墓）墓32基を検出し、縄文早期の爪形文土器（約80片）や中期の大木式土器、晩期の大洞式土器、円盤状土製品・同石製品などが出土した。出土した土器の大部分は中期のものであり、早期・晩期のものは少ない。なお、出土した遺物は長野公民館に保管されている。

縄文時代中期の遺跡は、考古学研究家武藤鉄城が1952（昭和27）年に調査し、14基の配石遺構を検出した雲穂野遺跡（雲穂野組石群：54-7）、千畠村教育委員会（当時）が1965（昭和40）年から4次に渡る発掘調査を実施し、計35軒の竪穴住居跡が検出され、大木8b式期の土器を中心に遺物が出土した一丈木遺跡（54-9）がある。この遺跡には、二回建て替えられ、二回とも規模が縮小されている竪穴住居跡が検出された。規模が拡大するものや増築される例は多いが、この時期の縮小する住居跡は少なく、貴重な例である。現在、公園内に一軒復元されている。また、秋田県教育委員会が1980（昭和55）年に発掘調査し、複式炉を伴う竪穴住居跡15軒が確認された内村遺跡（54-14）がある。この遺跡で出土した大木式土器は県内の縄文中期土器編年の指標となっている。



第3図 周辺遺跡位地図

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	遺構・遺物	参考
8-29	前村館跡	大曲市四ツ屋字上前村49外	中世城館	館跡	文献1
49-1	金鑰遺跡	中仙町清水字金鑰	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-2	尻長I遺跡	中仙町清水字上黒土937	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-3	尻長II遺跡	中仙町清水字上黒土904	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-4	尻長III遺跡	中仙町清水字上黒土807	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-5	尻長IV遺跡	中仙町清水字上黒土894	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-6	寺屋敷遺跡	中仙町清水字上黒土		寺跡	文献1
49-7	殿村I遺跡	中仙町清水字上黒土6	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-8	殿村II遺跡	中仙町清水字上黒土631	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-9	殿村III遺跡	中仙町清水字上黒土692	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-10	三尺遺跡	中仙町清水字下黒土1280	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-11	鶴田遺跡	中仙町清水字鶴田136	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-12	高野遺跡	中仙町清水字下黒土221	平安時代	遺物包含地	文献1
49-13	上高野遺跡	中仙町清水字下黒土260	縄文晩期	遺物包含地	文献1
49-24	館越遺跡	中仙町清水字館越83	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-25	堰合遺跡	中仙町清水字堰合71の1	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-26	七ツ釜窯跡	中仙町清水字七ツ釜78	平安時代	窯跡	文献1
49-27	大形遺跡	中仙町清水字大形67	縄文後期	遺物包含地	文献1
49-28	南谷地遺跡	中仙町清水字南谷地104	平安時代	遺物包含地	文献1
49-29	立石堤遺跡	中仙町長野字立石11	縄文晩期	遺物包含地	文献1
49-30	極楽野I遺跡	中仙町長野字極楽野110	縄文中・晩期	遺物包含地	文献1
49-31	極楽野II遺跡	中仙町長野字極楽野260	縄文晩期	遺物包含地	文献1
49-32	極楽野III遺跡	中仙町長野字極楽野273	縄文中・晩期	遺物包含地	文献1
49-33	極楽野IV遺跡	中仙町長野字極楽野158	縄文晩期	遺物包含地	文献1
49-34	極楽野V遺跡	中仙町長野字極楽野85	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-35	船コ山遺跡	中仙町長野字八乙女165	縄文晩期	遺物包含地	文献1
49-36	大根田遺跡	中仙町鐘見内大根田200の1	縄文晩期	遺物包含地	文献1
49-37	八乙女城跡	中仙町長野字八乙女200の内	中世城館	館跡	文献1、2
49-38	紫嶋山慈恩寺跡	中仙町長野字六日町33-1	中世末～近世	寺院跡	文献1
49-39	下谷地遺跡	中仙町鐘見内下谷地	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-40	長野山遺跡	中仙町長野山45	縄文時代	遺物包含地	文献1
49-42	源勝寺跡	中仙町鐘見内館の内175		寺跡	文献1
49-43	紫嶋村館跡	中仙町長野字紫嶋18	中世～近世城館	館跡	文献1
49-44	幕林経塚	中仙町鐘見内字幕林143	中世	経石	文献1
49-45	開南経塚	中仙町長野字開52-5	中世	経石・一字一石経	文献1
49-46	開北経塚	中仙町長野字開	中世	経石・一字一石経	文献1
49-47	六部塚	中仙町鐘見内字野中379	中世	念仏鏡	文献1
49-51	鐘見内城跡	中仙町鐘見内字館の内	中世城館	館跡	文献1
49-86	安楽寺跡	中仙町豊川字坂の上33-38		寺院跡	文献1

上記の昭和62年以降、踏査・試掘調査された周知の遺跡と新発見の遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代	遺構・遺物	参考
1	小鳥田I遺跡	中仙町鐘見内字水上	縄文～近世	堅穴住居跡、掘立柱建物跡、道路状遺構等	文献3、4、5
2	小鳥田II遺跡	中仙町鐘見内字小鳥田	平安時代	土師器	文献3
3	下道満遺跡	中仙町鐘見内字下道満	平安時代	縄文土器・土師器・近世陶磁器	文献3、4
4	上嘉町遺跡	大曲市四ツ屋字上嘉町	古代	土師器	文献3
5	下嘉町遺跡	大曲市四ツ屋字下嘉町	古代	土師器	文献3
6	切上遺跡	大曲市四ツ屋字切上	古代	土師器、須恵器	文献3
7	中嶋遺跡	大曲市四ツ屋字中嶋	古代	土師器	文献3
8	鳥屋場遺跡	大曲市四ツ屋字鳥屋場	古代	土師器	文献3
9	上大蔵遺跡	中仙町清水字大蔵	平安時代	土坑、柱穴、土師器	文献5
10	鶴田II遺跡	中仙町清水字鶴田	縄文・平安時代	堅穴状遺構、石器、土師器	文献5
11	下大蔵I遺跡	中仙町清水字下大蔵	平安時代	堅穴状遺構、溝跡、土師器	文献5
12	下大蔵II遺跡	中仙町清水字下大蔵	平安時代	土師器	文献5
13	下大蔵III遺跡	中仙町清水字下大蔵	縄文時代	柱穴、縄文土器	文献5
14	水上遺跡	中仙町鐘見内字水上	平安時代	土師器	文献5
15	東田遺跡	大曲市四ツ屋字東田	平安時代	土師器、須恵器	文献5
16	鐘見内七曲遺跡	中仙町鐘見内字七曲	平安時代	土坑、溝跡、土師器	文献6
17	北谷地遺跡	中仙町鐘見内字北谷地	平安時代	堅穴状遺構、土坑、柱穴、土師器	文献6
18	板屋I遺跡	中仙町鐘見内字板屋	縄文・平安時代	土坑、石器、土師器	文献6
19	板屋II遺跡	中仙町鐘見内字板屋	平安時代	堅穴住居跡、土坑、溝跡	文献6
20	矢野遺跡	中仙町鐘見内字矢野	平安時代	堅穴住居跡、土師器	文献6
21	北大吹遺跡	中仙町清水字北大吹	平安時代	堅穴状遺構、土師器	文献6
22	桑田遺跡	中仙町清水字桑田および甲泉	平安時代	土坑、土師器	文献6
23	水畠屋甲遺跡	中仙町清水字水畠屋甲	平安時代	土師器	文献6
24	水畠屋乙遺跡	中仙町清水字水畠屋乙および堰合	縄文・平安時代	縄文土器、土師器	文献6
25	館腰II遺跡	中仙町清水字館腰	平安時代	土師器、須恵器	文献6
26	諸又遺跡	大曲市高関字諸赤	縄文・平安時代	縄文土器・土師器	文献6
27	下新谷地遺跡	大曲市四ツ屋字下新谷地	平安時代	須恵器	文献6

弥生時代の遺跡は調査事例が少ないが、近隣では仙北町星宮遺跡（53-21・22・23）、大曲市宇津台遺跡（8-18）、千畠町中屋敷II遺跡（54-5）がある。

古代の遺跡は、仙北町と千畠町に跨る払田柵跡（53-1、54-1）がある。1906（明治39）年から始まった耕地整理の際に埋木が出土し、これを地元出身の後藤宙外氏と藤井東一氏が調べた結果、真山・長森の二つの丘陵を取り巻くように柵列が存在することが判明した。彼らと地域住民の努力によって、1930（昭和5）年には、文部省の上田三平氏が発掘調査を実施することとなり、遺跡としての全体像が明らかになった。その後1974（昭和49）年、秋田県教育委員会によって仙北町に払田柵跡調査事務所が設置された。この払田柵跡調査事務所が調査主体となって、現在も継続的な学術調査が行われている。この払田柵跡に隣接する厨川谷地遺跡は、平成12年の発掘調査によって、約400点に及ぶ墨書き土器や灯明皿、斎串や呪符木簡などが出土し、払田柵跡と強い関係を持つ平安時代（主に9世紀後半から10世紀前半の時期）の祭祀遺跡であることが判明した。近年、払田柵跡周辺では、墨書き土器が出土した遺跡が数か所確認されている。<sup>(註8)</sup> 厨川谷地遺跡の他にも、近隣では内村遺跡、中屋敷II遺跡、<sup>(註9)</sup> 飛沢尻遺跡、下中村遺跡などがあげられる。<sup>(註10)</sup>

上記以外の縄文時代から近世までの遺跡は、中仙町内だけでも88か所、仙北町・千畠町・太田町などの玉川左岸の平野部にある遺跡には、前村館跡、金鐙遺跡、尻長I～IV遺跡、寺屋敷遺跡、殿村I～III遺跡、三尺遺跡、鶴田遺跡、高野遺跡、上高野遺跡、新処遺跡、田屋敷杉遺跡、行人塚I～III遺跡、熊野神社遺跡、野口内城跡、春日遺跡、館越遺跡、堰合遺跡、七ッ釜跡、大形遺跡、立石堤遺跡、極楽野I～V遺跡、船コ山遺跡、大根田遺跡、紫山慈恩寺跡、下谷地遺跡、長野山遺跡、古館遺跡、源勝寺跡、紫嶋遺跡、幕林経塚、開南経塚、開北経塚、六部塚、鍛冶屋敷遺跡、長野鉄山跡、鎧見内城跡、大堀野南原遺跡、旭田遺跡、一里塚跡、羽黒杉遺跡、中西遺跡、松ヶ窪遺跡、新田I・II遺跡、肥前I～III遺跡、白岩街道傍提、南松の木、清水谷地I・II遺跡などがある。特に周辺の中世の遺跡には、城館跡が多い。<sup>(註11)</sup> 八乙女城跡、遠藤野城跡、鶯野城跡、野中内城跡、葛川館跡、鎧見内城跡、伊勢の腰館跡、上ノ山館跡、館山城跡、太田城跡、駒場城跡、払田柵跡の地形（払田丘阜群）をそのまま利用した払田城跡、小野寺氏配下の本堂氏が居城とした本堂城跡、元本堂城跡、境田城跡、川端山館跡、砂館跡、張山館跡、幡江館跡、神尾町館跡、上館跡などがある。

次の江戸時代になると「小鳥田」の名が文献史料上に現れる。著名な史料の中では、菅江真澄『月の出羽路』仙北郡二四「箭野の若草のまき○鎧見内本郷村」中に「小鳥田」が鎧見内枝郷のひとつとして『享保郡邑記』<sup>(註12)</sup> から引用されており、その神社部にも「小鳥田ノ千手觀音社 一戸鎮守、祭日正月十七日、斎主兵右エ門」と記されている。<sup>(註13)</sup> 寛政年間に近藤甫寛が調査・編述した『久保田領郡邑記』にも仙北郡「鎧見内村」の「支郷」の中に「小島（鳥）田村」<sup>(註14)</sup> が見える。この小鳥田の周辺では、文政年間に水田開発が行われており、秋田藩が文政7年に斎内川流域で着工した御堰（太田町：遺跡地図番号52-12）もこの時期のものである。小鳥田を含む鎧見内村は、明治22年に周辺6か村で合併し長野村となる。この長野村時代と町制施行後の長野町時代（大正11年から昭和30年まで）には、斎内川の改修と耕地整理が実施され、新たな遺跡が多く発見されたものの破壊を受けた遺跡も少なくない。<sup>(註15)</sup> 戦後、この仙北郡内の周知の遺跡および新たに見つかった遺跡（地名）を記録したのが、昭和23年8月にガリ版で刊行された藤田秀司氏の『仙北郡石器時代遺跡地名表』である。なお昭和30年以降、中仙町になってからは、前述の野口遺跡の調査時のような県営ほ場整備事業が行われた記録がある。

- 註3 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県南版)』1987(昭和62)年
- 註4 中仙町教育委員会『野口遺跡－仙北郡中仙町野口遺跡発掘調査報告書－』1979(昭和54)年
- 註5 秋田県教育委員会『内村遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第集 1981(昭和56)年
- 註6 秋田県教育委員会『払田柵跡I－政序跡－』秋田県文化財調査報告書第122集 1985(昭和60)年
- 註7 秋田県教育委員会『払田柵跡II－区画施設－』秋田県文化財調査報告書第289集 1999(平成11)年
- 註8 秋田県教育委員会『厨川谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第383集 2005(平成17)年
- 註9 高橋 学「大曲市和出土の墨書き土器－使用痕跡にも注目して－」  
『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第18号 2004(平成16)年3月
- 註10 秋田県教育委員会『中屋敷II遺跡』秋田県文化財調査報告書第384集 2005(平成17)年
- 註11 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
- 註12 ここで真澄が引用している『享保郡邑記』は秋田藩境目奉行の岡見知愛が編述した『六郡郡邑記』のことを指す。なお、六郡郡邑記の史料的詳細については、柴田次雄「六郡郡邑記の再発見」『出羽路』127・128・129号 秋田県文化財保護協会 2000～2001(平成12～13)年による。
- 註13 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第8巻 241～244頁 未来社 1979(昭和54)年
- 註14 柴田次雄編『校訂・解題 久保田領郡邑記』336頁 無明舎出版 2004(平成16)年
- 註15 中仙町郷土史編さん委員会「第6章第5節 一 斉内川改修と耕地整理」『中仙町史 通史編』中仙町 1983(昭和58)年

## «第1表 周辺遺跡一覧の参考文献»

- 1 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県南版)』1987(昭和62)年
- 2 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
- 3 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第324集 2001(平成13)年
- 4 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第342集 2002(平成14)年
- 5 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第365集 2003(平成15)年
- 6 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第380集 2004(平成16)年

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

小鳥田I遺跡は、仙北平野の北東部、出羽丘陵の麓を南流する玉川左岸から約940m東にあり、その標高は36～37m前後である。遺跡の範囲は、平成13年11～12月の確認調査によって括られた18,000m<sup>2</sup>全域であり、その工事区域圏内遺跡面積3,700m<sup>2</sup>のうち切土施工部分（面積2,400m<sup>2</sup>）が破壊を免れ得ないため、今回の発掘調査区が設定された。遺跡の現況は水田と畠地であり、第2章で述べたように藩政期には水田開発が、長野村時代（明治22年から大正11年まで）と町制施行後の長野町時代（大正11年から昭和30年まで）には耕地整理が実施され、昭和30年以降、中仙町になってからは、小規模の整備が行われた記録がある。水田は、町道鎧見内線に直交する北川幹線排水路と同軸方向（北北東）を向いて地割りされる。遺跡一帯は低く平坦な地形で、西側には周知の遺跡である鎧見内遺跡や小鳥田II遺跡、北には下道満遺跡が近接し、約500m南には鎧見内集落が、約200m西には小鳥田集落がある。

### 第2節 調査の方法

調査の方法はグリッド方式によった。国土交通省が打設した2か所の三角点（国土地理院作成25,000分の1地形図「羽後長野」記載、小合田三角点：標高40.7mおよび鎧見内三角点：標高37.1m）からスタティック測量方式（GPS併用）を用いて国家座標X・Yを導き出し、発掘調査区の中央に原点杭（杭記号：MA50、X=-52943.000、Y=-26048.000、標高=36.839m、北緯39度18分23秒、東経140度26分37秒）を打設した。これを通る座標北ラインを南北基線とし、同じく原点杭を通り南北基線と直交するラインを東西基線とした。この東西南北の基線に沿って4m×4mの方眼（以下、グリッドと略記する）を組み、その交点に杭を打設した。各グリッドを呼称するために、基線の交点には、西に行くに従いMA・MB・MC・MD……、東に行くに従いLT・LS・LR・LQ……、北に行くに従い50・51・52・53……、南に行くに従い49・48・47・46……と、アルファベットおよび算用数字を組み合わせた番号を4m置きの各杭に明記した。方眼に囲まれた区域を呼称する場合は、その区域の南東隅の杭番号を用いた。

各調査区を掘り進む方法は、基本層位I層（表土・水田耕作土）の上面のみ、重機を用いて表土を除去し、これ以外は機械を用いず、すべて人力によって掘り下げた。これは、前年度の確認調査の結果から、I層表土の下がすぐ遺物包含層・遺構確認面であることが判明していたことと、現地形が水田および畦畔だったからである。ただし、確認調査後のトレンチ埋め戻し土がある場所については、平成14年度にバックフォーで試掘された箇所である。

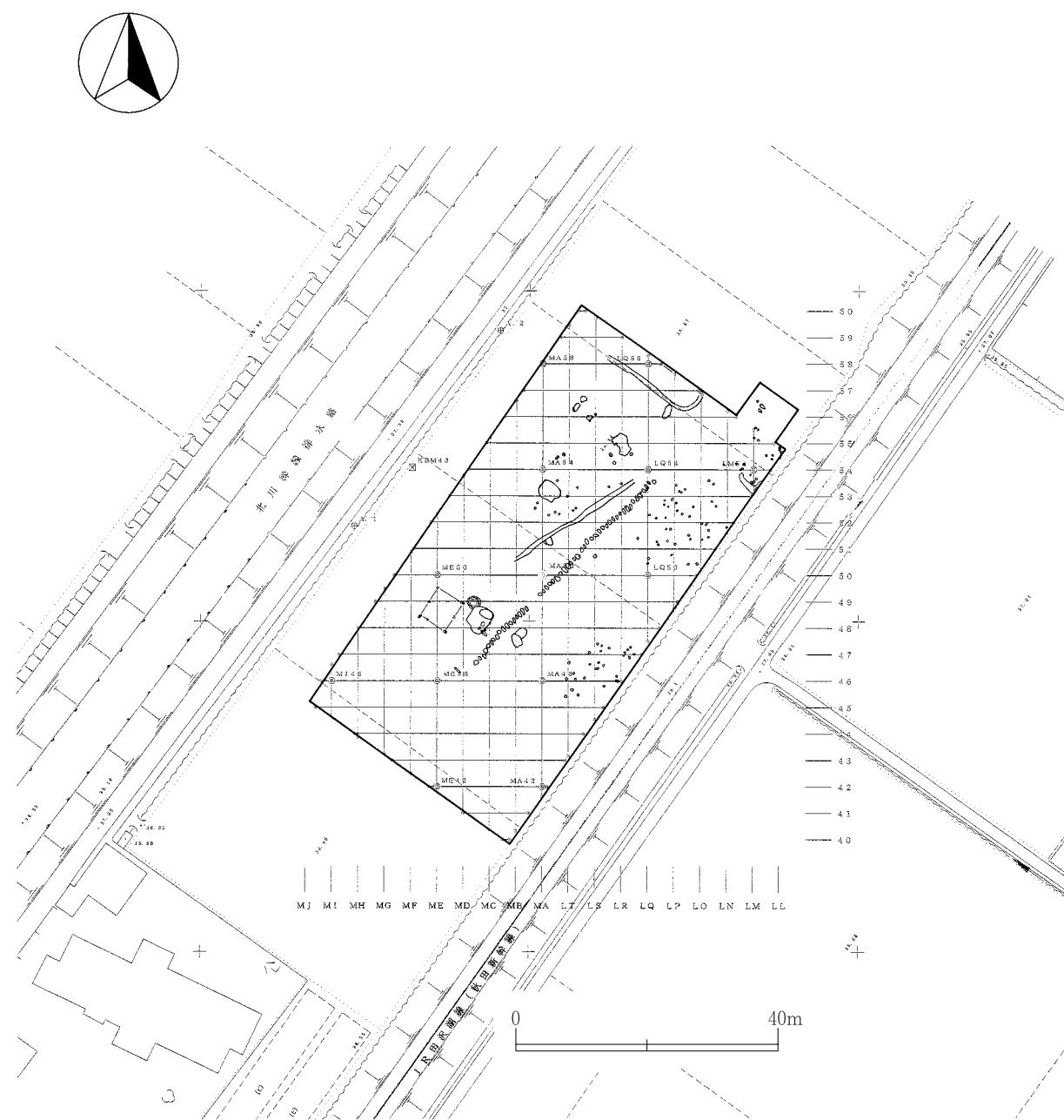
なお、調査条件上の理由で排土搬出用ベルトコンベアは用いなかった。遺構名は、全調査区を通じて検出した順に連番を付し、凡例にあげた遺構略号をつけた。ただし精査の過程で欠番となった遺構もある。遺構の記録については、実測図・写真・筆記によって行った。実測図は平面図・断面図と

も基本的に20分の1縮尺で作成した（遺構規模の大小により適宜縮尺を変更）。写真は基本的に35mm判のモノクロ・カラーリバーサル・ネガカラーの3種類のフィルムを用いて撮影したが、部分的に中判カメラやデジタルカメラでも撮影した。その後、本遺跡をほぼ直上から撮影した空中写真（国土地理院、写真番号 CTO-75-25 : C13-59およびC14B-20、昭和50年撮影）が存在するのを確認し、許可を得てこれを掲載した。

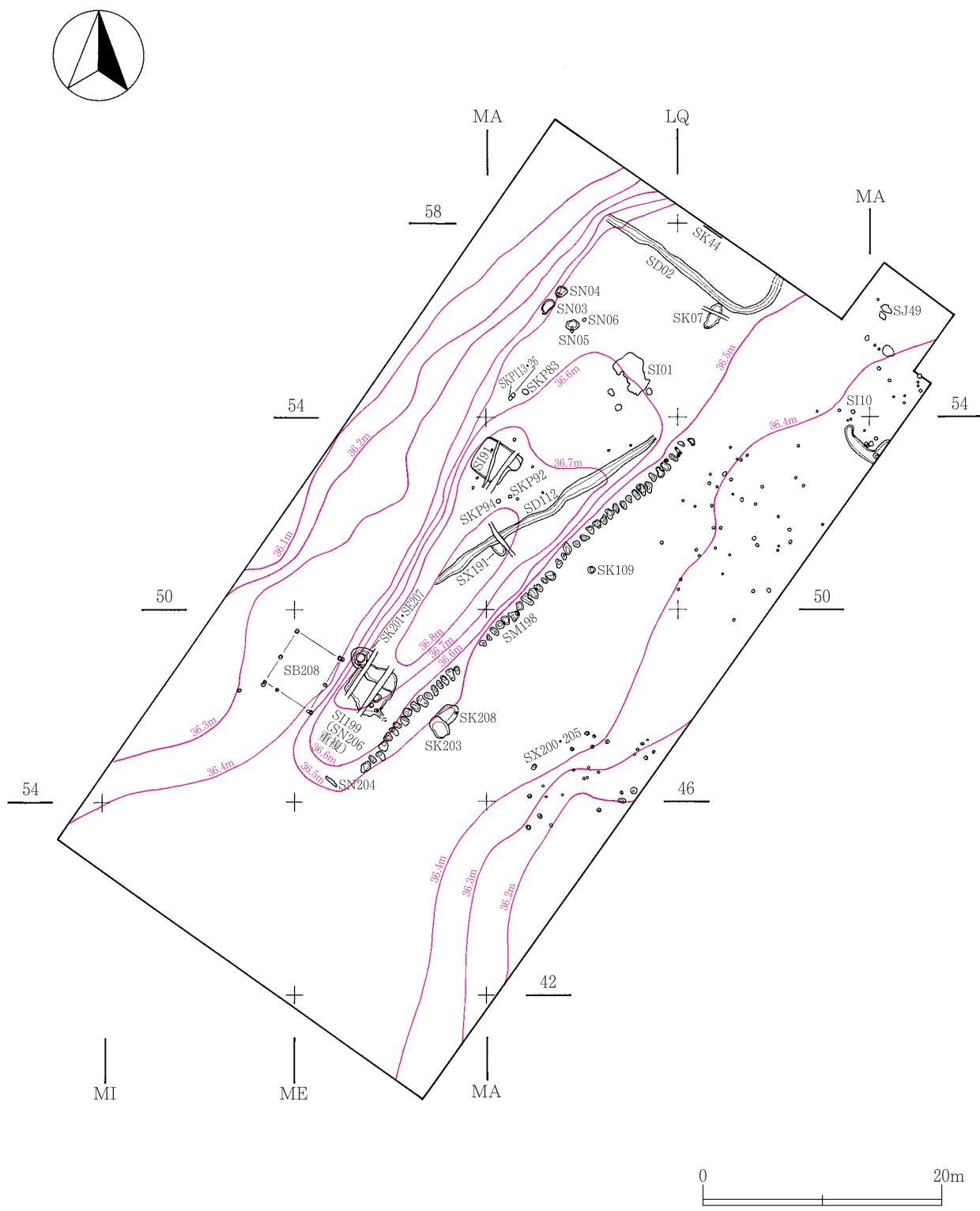
### 第3節 調査の経過

発掘調査は、平成15年8月6日（水）～10月7日（火）までの延べ41日間実施した。以下、調査日誌を基に調査の経過を記述する。

- 6月5日：中仙町役場にて、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室および秋田県仙北平野農村整備事務所、中仙町教育委員会、秋田県埋蔵文化財センターの四者で発掘調査開始前の現地協議を行った。ここで調査面積や調査条件・調査期間・相互協力事項などを確定した。
- 7月30日：中仙町町民会館ドンパルにて発掘調査作業員選考会を実施した。作業員の募集は中仙町教育委員会が行い、秋田県埋蔵文化財センターが選考した。
- 8月6日：発掘調査を開始した。同時に方眼杭の打設作業も開始した（8日に打設完了）。この日から、高橋佐登志安全管理指導員による発掘現場の安全管理指導が開始された。
- 8月7日：前年度確認調査トレチを一部基本土層として精査中、遺物が出土し始める。発掘調査前の遺跡近景写真撮影を行う。
- 8月8日：S I 01堅穴住居跡を検出した。中仙町文化財保護審議委員（代表：藤田秀司氏）10名が来跡し、調査状況を見学した。その際、鎧見内地区および周辺の遺跡について様々な御教示を得た。
- 9月1日：S D 02溝跡およびS N 03・04・05・06焼土遺構を検出した。溝跡は両端が途切れている。焼土遺構4基は比較的近接した場所で確認した。
- 9月2日：S K 07土坑を検出した。堆積土中から平安時代の土師器が出土した。
- 9月4日：L Q 50～54グリッドライン以東で、多数のS K P柱穴様ピットを検出した。また、調査区の北東端に近いS X 10は、住居の壁は削平されているものの、カマド跡の可能性がある焼土と炭化物の範囲を確認したことからS I 10堅穴住居跡とした。
- 9月11日：秋田県立大曲工業高等学校土木科のインターンシップ実習で、2年生3名が発掘調査に体験参加した。
- 9月12日：検出したS X 91は住居跡であることが判明し、S I 91堅穴住居跡とした。
- 9月16日：S D 112溝跡を検出した。これを精査した際、やや東側に浅い凹みが数十基、北東－南西方向に連続することが判明した（後にこれをS M198道路状遺構とした）。
- 9月22日：中仙町立清水小学校6年生26名が発掘調査を体験学習（総合的学習）した。S N 206焼土遺構とS I 199堅穴住居跡を検出し、これ以外にも複数の遺構と重複していることが判明した。調査区の線路側で確認したS K P柱穴群をS X 200およびS X 205とした。
- 9月26日：S I 199堅穴住居跡と重複して、S K 201土坑とS E 207井戸跡を検出した。
- 9月29日：中仙町立豊川小学校6年生13名が発掘調査を体験学習（総合的学習）した。



第4図 調査範囲図



第5図 遺構配置図

### 第3章 発掘調査の概要

10月3日：SKP群の一部が掘立柱建物跡となることを確認し、SB208掘立柱建物跡とした。調査区全体の地山レベリング（センター図作成作業）を行った。

10月6日：中仙町立豊成中学校3年生1名、2年生2名が発掘体験学習した。発掘調査終了前の遺跡遠景写真を撮影した。SI199竪穴住居跡のカマドから土製支脚が出土した。

10月7日：SI199竪穴住居跡の精査を終え、発掘調査を完了。現場を撤収した。高橋佐登志安全管理指導員による安全点検を受けたのち、発掘調査区（2,400m<sup>2</sup>）の全てを秋田県仙北平野農村整備事務所に引き渡した。

## 第4章 調査の記録

### 第1節 基本層位

小鳥田I遺跡の基本層位は、平成14年11～12月実施の確認調査トレンチ（埋め戻し済み）を再度掘り上げ、精査・観察した。その確認地点は、第6・7図に示した10か所の地点である。検出した遺構のほとんどがⅡ層上面で確認され、遺構外遺物もⅡ層以下で出土している。なお、発掘調査前の現況は水田であったため、土壤中には酸化・沈殿した赤褐色の鉄分層が斑入り、地山粘土層には暗青緑色にグライ化した場所も認められた。耕作による攪乱や削平が著しい場所では、土器片などの遺物がI層で多数表採された。また、第2章第1節で述べたように、本遺跡が立地する東部扇状地前延扇状構造低地〔III e〕は、第四紀完新世の未固結堆積物（扇状地前延扇状構造低地堆積物）が表層地質となっているため、土壤は細粒質のグライ土が主体となっている。基本層位の特徴は次の通りである。

#### 〔基本層位東西基線ライン〕

- I層：灰黄褐色土(10YR 4/2) 締まり強・粘性中、表土、耕作土。層厚10～20cm
- II層：黒褐色土(10YR 3/2) 締まり中・粘性中、遺物包含層、遺構確認面。層厚10～25cm
- III層：暗褐色土(10YR 3/3) 締まり中・粘性中、遺物包含層。層厚5～10cm
- IV層：暗灰黃褐色土(2.5Y 5/2) 締まり中・粘性強、遺物包含層、地山漸移層。層厚10～20cm
- V層：灰黄褐色土(10YR 5/2) 締まり中・粘性強、粘土層（部分的に砂礫層あり）、地山。

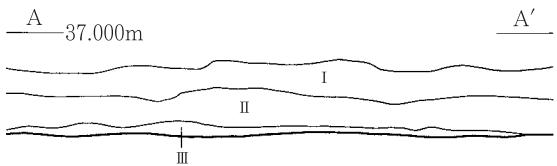
#### 〔基本層位南北基線ライン〕

- I層：灰黄褐色土(10YR 4/2) 締まり中・粘性中、表土、耕作土。層厚10～25cm
- II層：黒褐色土(10YR 3/2) 締まり強・粘性中、遺物包含層、遺構確認面。層厚10～30cm
- III層：暗褐色土(10YR 3/3) 締まり中・粘性中、遺物包含層。層厚5～15cm
- IV層：暗灰黃褐色土(2.5Y 5/2) 締まり強・粘性中、遺物包含層、地山漸移層。層厚15～25cm
- V層：灰黄褐色土(10YR 5/2) 締まり中・粘性強、粘土層（部分的に砂礫層あり）、地山。

本遺跡の周辺は玉川左岸まで一面に低く平坦な地形であるが、基本土層を観察した結果、表土から地山までの深さは、最も浅いところで20cm、最も深いところでは80cmである。これは遺跡全体の原地形に若干の高低差があったことを示している。特に調査区西側の北川寄りの方が東側よりも深くなる傾向が見られる。現在では護岸整備された玉川支流の小河川も、過去には幾度となく蛇行し、地形の起伏を作っていたものと考えられる。

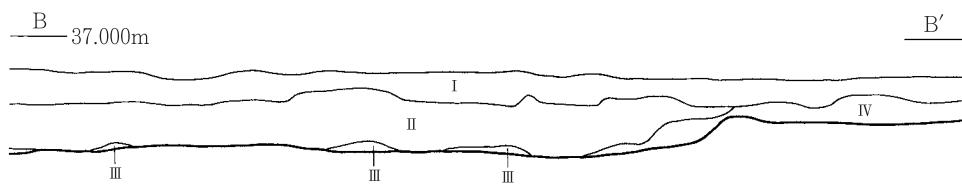
### 第2節 検出遺構と遺物

発掘調査の結果、小鳥田I遺跡で検出した遺構は合計206遺構である。出土した遺物は、縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器や木製品、鎌倉～安土桃山時代の中世陶器、江戸時代の陶



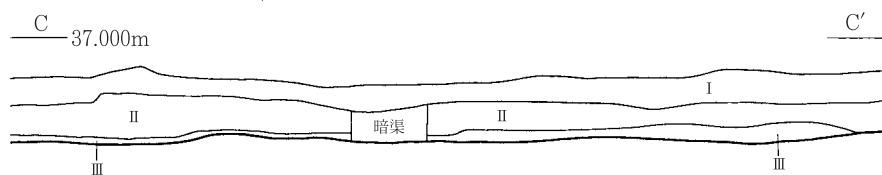
基本土層図① LN56グリッド(A-A')

- I層. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性弱、炭化物微量混入、植物根多量混入、表土・耕作土。
- II層. 黒褐色土(10YR 3/2)しまり強・粘性中、炭化物微量混入、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入、上面は耕作土。
- III層. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中、シルト質土。
- 地山. 灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強、粘土層(部分的に砂礫層あり)。



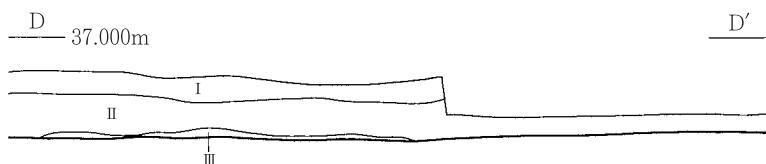
基本土層図② LP53グリッド(B-B')

- I層. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性弱、炭化物微量混入、植物根多量混入、表土・耕作土。
- II層. 黒褐色土(10YR 3/2)しまり強・粘性中、炭化物微量混入、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入、上面は耕作土。
- III層. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中、シルト質土。
- IV層. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり強・粘性弱、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)多量に混入。
- 地山. 灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強、粘土層(部分的に砂礫層あり)。



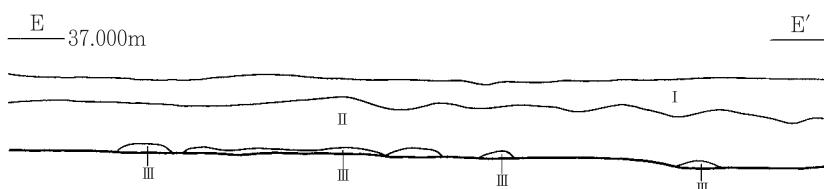
基本土層図③ LR50グリッド(C-C')

- I層. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性弱、炭化物微量混入、植物根多量混入、表土・耕作土。
- II層. 黒褐色土(10YR 3/2)しまり強・粘性中、炭化物微量混入、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入、一部暗渠で攪乱される。
- III層. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中、シルト質土。
- 地山. 灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強、粘土層(部分的に砂礫層あり)。



基本土層図④ LS49グリッド(D-D')

- I層. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性弱、炭化物微量混入、植物根多量混入、表土・耕作土、一部確認調査トレッチで削平。
- II層. 黒褐色土(10YR 3/2)しまり強・粘性中、炭化物微量混入、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入、一部確認調査トレッチで削平。
- III層. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中、シルト質土。
- 地山. 灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強、粘土層(部分的に砂礫層あり)。

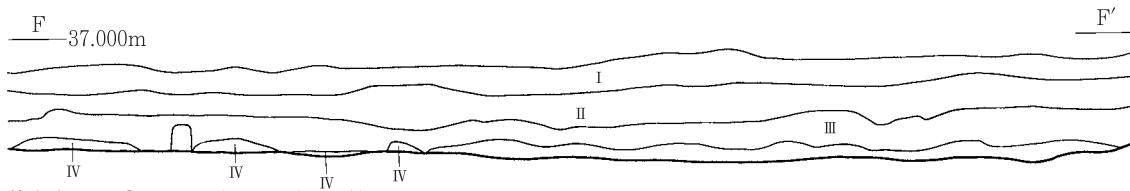


基本土層図⑤ MB45グリッド(E-E')

- I層. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性弱、炭化物微量混入、植物根多量混入、表土・耕作土。
- II層. 黒褐色土(10YR 3/2)しまり強・粘性中、炭化物微量混入、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入。
- III層. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中、シルト質土。
- 地山. 灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強、粘土層(部分的に砂礫層あり)。



第6図 基本土層図(1)



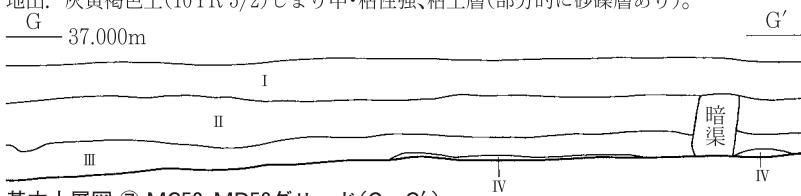
I 層. 褐灰色土(10YR 4/1)しまり弱・粘性中、炭化物微量混入、植物根多量混入、表土・耕作土。

II 層. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性中、炭化物微量混入、酸化鉄少量混入、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入、上面は耕作土。

III 層. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性弱、酸化鉄少量混入、灰黄褐色土(10YR 5/2)微量混入。

IV 層. 灰黄褐色土(10YR 6/2)しまり弱・粘性中、酸化鉄多量混入。

地山. 灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強、粘土層(部分的に砂礫層あり)。



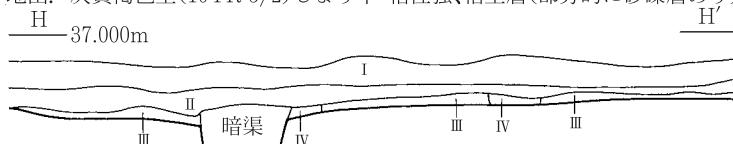
I 層. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性中、炭化物微量混入、植物根多量混入、表土・耕作土。

II 層. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり強・粘性中、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入、上面は耕作土。

III 層. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり中・粘性弱、黒褐色土(10YR 3/2)少量混入、若干シルト質土。

IV 層. 灰黄褐色土(10YR 6/2)しまり弱・粘性中、シルト質土。

地山. 灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強、粘土層(部分的に砂礫層あり)。



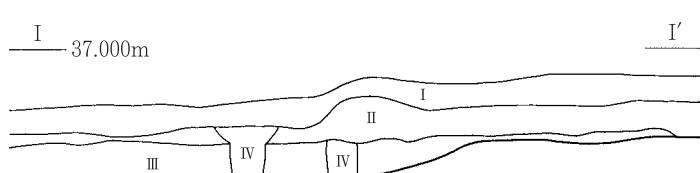
I 层. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性中、炭化物微量混入、植物根多量混入、表土・耕作土。

II 层. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり強・粘性中、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入、上面は耕作土。

III 层. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中、若干シルト質土。

IV 层. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり強・粘性中、柱穴様ピットの覆土。

地山. 灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強、粘土層(部分的に砂礫層あり)。



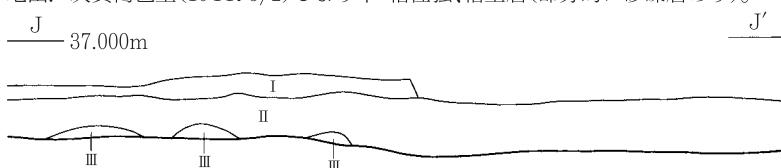
I 层. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性中、炭化物粒微量混入、植物根多量混入、表土・耕作土。

II 层. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり強・粘性中、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入、南北ラインの II 层に堆積状況が似る。

III 层. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中、若干シルト質土。

IV 层. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり弱・粘性中、柱穴様ピットの覆土。

地山. 灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強、粘土層(部分的に砂礫層あり)。



I 层. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性中、炭化物粒微量混入、植物根多量混入、表土・耕作土、北東側は大きく削平。

II 层. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり強・粘性中、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)微量混入、上面は耕作土。

III 层. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性中、若干シルト質土。

地山. 灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強、粘土層(部分的に砂礫層あり)。



第7図 基本土層図(2)

磁器など整理用コンテナで60箱分（中コンテナ換算）である。また、発掘調査区（2,400m<sup>2</sup>）内で検出した遺構数の内訳は、次の通りである。

第2表 検出遺構一覧

遺構の種類	検出数	遺構番号
竪穴住居跡	5軒	S I 01、10、49、91、199
掘立柱建物跡	1棟	S B 208
土 坑	7基	S K 07、44、83、109、201、202、203
井 戸 跡	1基	S E 207
焼 土 遺 構	6基	S N 03、04、05、06、204、206
溝 跡	2条	S D 02、112
道路状遺構	1条	S M 198
柱穴様ピット	180基	※第5図および第31・32図を参照。
性格不明遺構	3基	S X 191、200、205
合 計	206遺構	

これら調査によって検出した遺構は、発見順に一連の番号を付したものであるが、精査の過程で欠番となったものもある。検出遺構の時期は古代（平安時代）である。遺構外出土の遺物には、縄文時代、中世陶器、近世陶磁器などがある。

### （1）竪穴住居跡

#### S I 01竪穴住居跡

《位置と確認》L Q55～54、L R55～54グリッドのⅡ層で確認した。

《規模と平面形》平面形は整わないプランである。規模は確認できる範囲で、長軸3.60m×短軸2.60m、深さ0.08mである。主軸方位はN-17°-Wである。

《土層》3層に分層した。1層と3層は床面であり3層は貼床と考えられる。2層には焼土と炭化物多くが含まれていた。

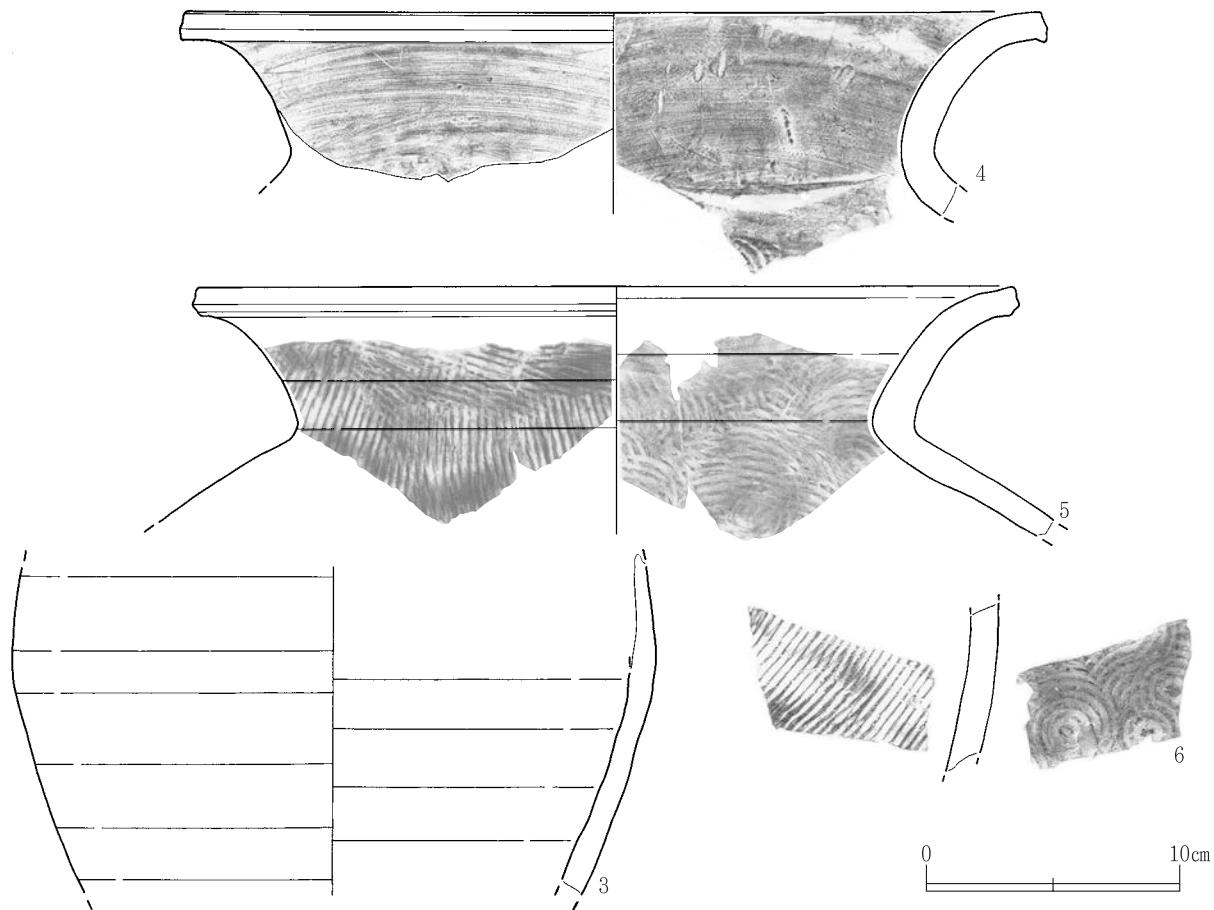
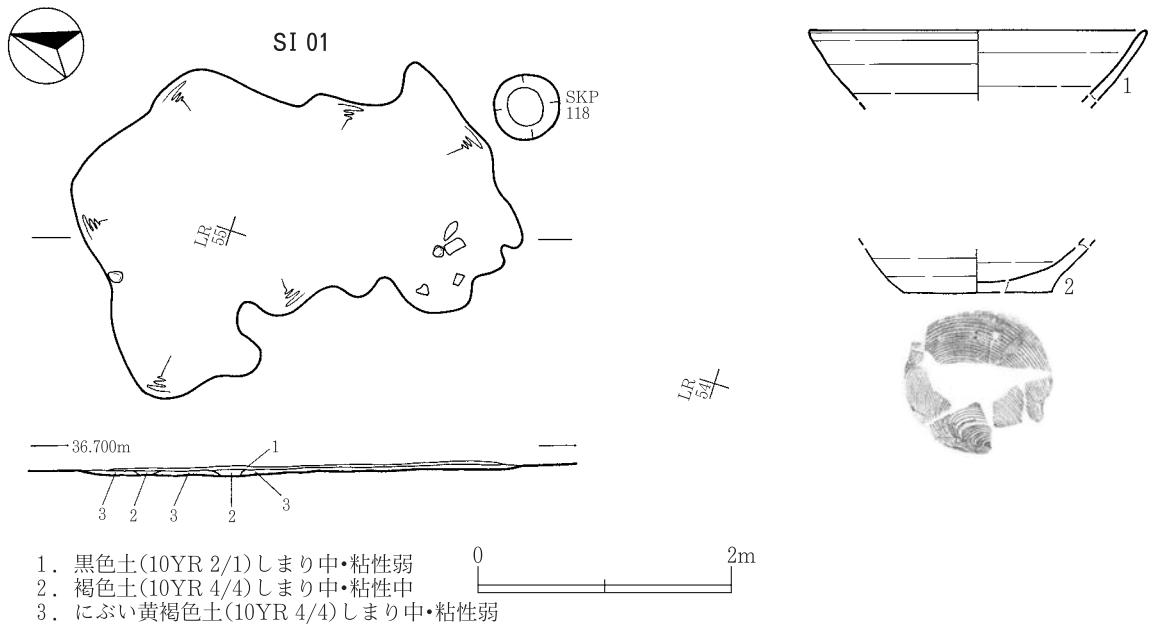
《壁》壁は耕作による攢乱で失われている。浅い平面プランの端部では僅かに緩い角度で立ち上がる。

《床面》確認した平面形が住居床面の残存した範囲である。

《柱穴》平面形の内側に柱穴は確認されなかった。しかし南東側にS K P 118柱穴様ピットが近接して位置し、住居内柱穴であった可能性がある。

《カマド》L R55グリッド杭の周囲の2・3層に炭化物および焼土が比較的多く確認され、この部分がカマド燃焼部であると判断した。明瞭な焚口や袖部・煙道部は確認されなかったが、遺物が出土している。

《出土遺物》6点を図示した（第8図1～6）。いずれも破片だが、土師器壺2点、土師器甕1点、須恵器甕3点である。



第3表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第8図1	土師器	环	口縁部	S I 01覆土中	(13.4)	-	-	ロクロ	
第8図2	土師器	环	底部	S I 01覆土中 E-4トレンチ	-	5.8	-	ロクロ 回転糸切り	
第8図3	土師器	甕	胴部	S I 01と範疇	-	-	-	ロクロ 胎土に砂混じる	赤褐色
第8図4	須恵器	大甕	口縁部	S I 01カマド覆土中	(33.6)	-	-	外:タタキ目 施釉 内:輪積痕 工具跡有り	残存部 幅29.5cm 高さ7.5cm
第8図5	須恵器	甕	口縁部	S I 01カマド覆土中 LQ51Ⅱ層RP・MC50Ⅲ層・MC52Ⅱ層	(31.4)	-	-	ロクロ 内外:タタキ目	
第8図6	須恵器	大甕	胴部	S I 01カマド覆土中	-	-	-	ロクロ 内外:タタキ目	

第8図 S I 01竪穴住居跡・出土遺物

《 時 期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。

### S I 10堅穴住居跡

《 位置と確認 》 L L53～54、L M53～55、L N54グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 推定となるが第9図に示した炭化物分布範囲から、一辺が5m以上6m前後の規模になるものと考えられる。平面形はP1～P15（またはP13）～P19（P22）を結ぶラインがほぼ直角に近いことから、隅丸方形になるものと考えられる。

《 土 層 》 炭化物が極めて薄く分層できなかった。

《 壁 》 壁は耕作による攪乱で失われているが、炭化物（一部焼土を含む）範囲のP1からP11およびP15を結ぶラインが住居壁の一辺となるものと思われる。

《 床 面 》 炭化物の分布範囲とその中に囲まれた部分が住居の床面と思われる。

《 柱 穴 》 24基確認した。このうちP11は浅い凹み状であり、P22は一部調査区外に位置する。

《 カ マ ド 》 第9図に掲載した炭化物範囲の中で、P18・19・22・37・38付近が最も強く焼けておりカマド燃焼部であると判断した。遺物もここから多く出土している。明瞭な焚口や袖部・煙道部は確認されなかった。調査区外から溝状の深い凹みが入る。

《 出土遺物 》 9点を図示した（第9図1～9）。いずれも破片だが、土師器壺2点、土師器蓋1点、土師器碗1点、土師器甕2点、須恵器壺1点、須恵器壺1点、砥石1点である。

《 時 期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。

### S I 49堅穴住居跡

《 位置と確認 》 調査区北側の境界線に沿ったL L55・L M55グリッドのII層で確認した。堅穴住居跡のカマド部分のみの検出である。

《 規模と平面形 》 平面形は二つのカマドとも長楕円形となるが、掘形はカマド1がほぼ円形、カマド2が長楕円形である。カマド1の規模は長軸1.70m×短軸0.90m、深さ0.52mで、主軸方位はN-24°-Wである。カマド2の規模は長軸2.01m×短軸1.26m、深さ0.26mで、主軸方位はN-59°-Wである。

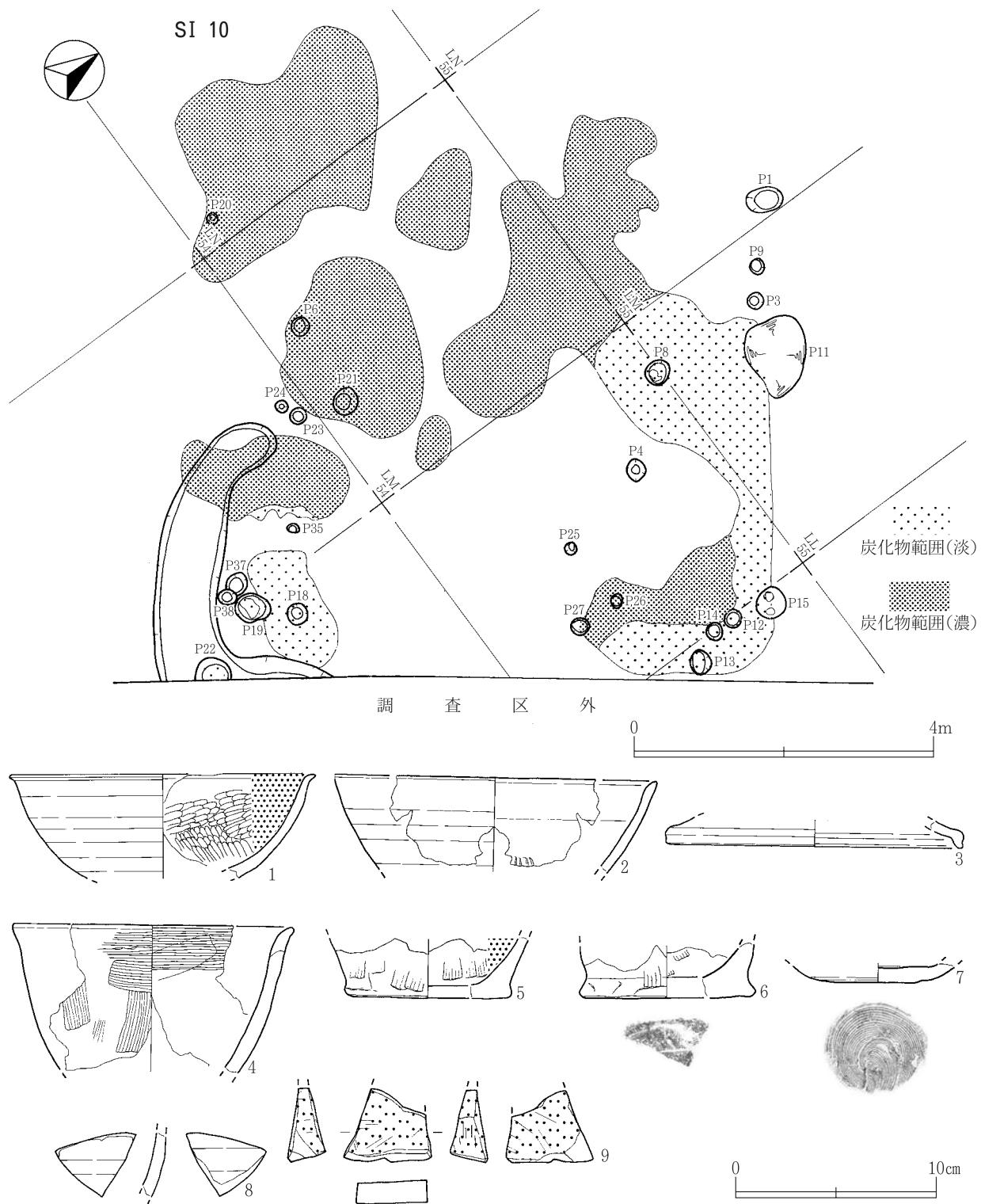
《 土 層 》 カマド1は6層に分層した。1～4層は焼土・炭化物の燃焼した層、5・6層は焼土・炭化物が少なく、遺物を多く含んでいた層である。カマド2は6層に分層した。1～4層が焼土・炭化物の燃焼した層、5層は焼土・炭化物が少なく、カマド底面となる6層が薄い炭化物層となっていた。

《 壁 》 壁は耕作による攪乱で失われている。

《 床 面 》 カマドより南東側は平坦であるが北西側はやや低くなるため、調査区外の北西方向に住居の床面が位置するものと考えられる。

《 カ マ ド 》 第10図に掲載した焼土範囲2カ所がカマド燃焼部であると判断した。明瞭な焚口や袖部・煙道部は確認されなかったが、多くの遺物が出土した。断面A-A'の側がカマド1、断面B-B'の側がカマド2である。

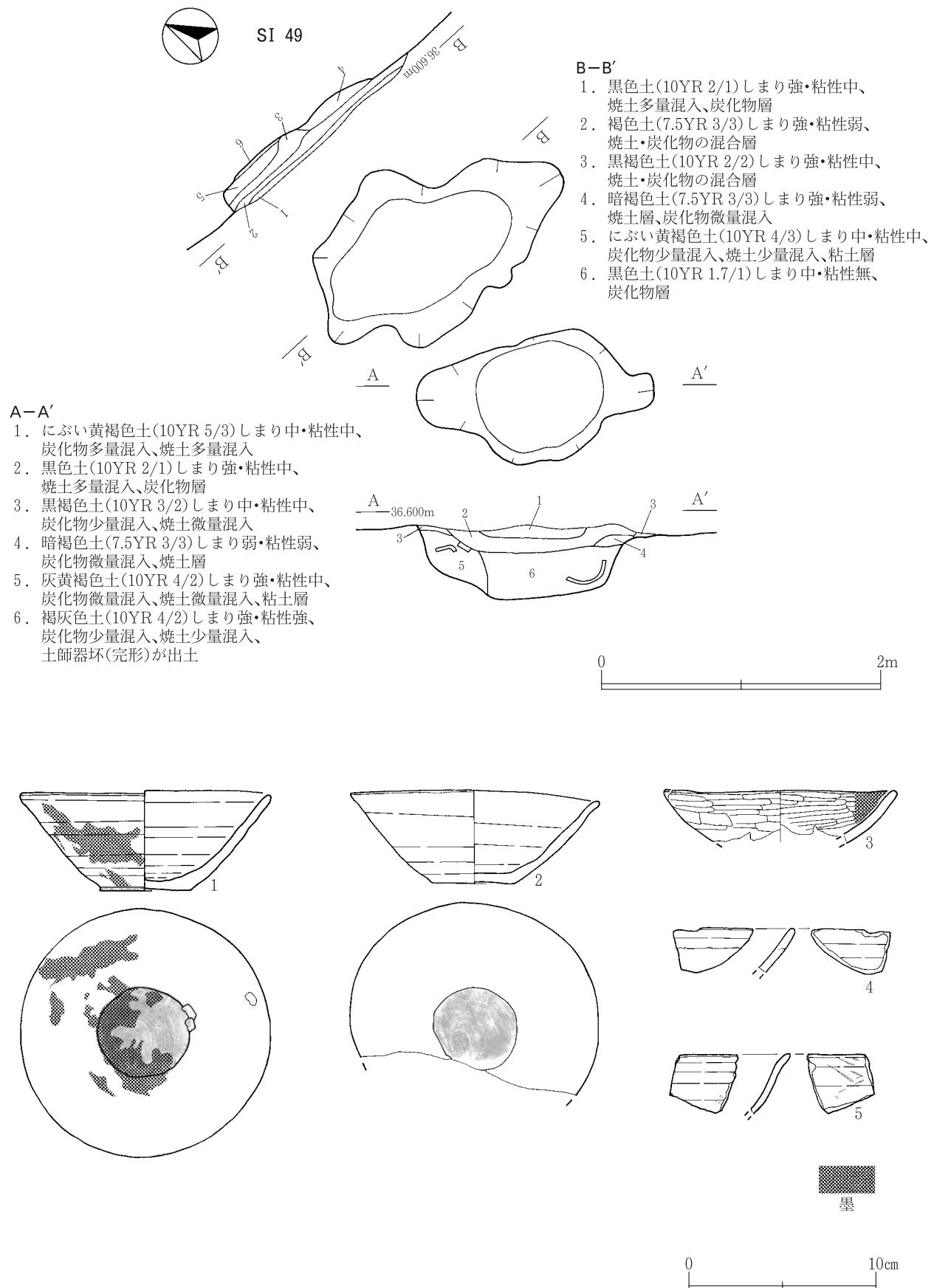
《 出土遺物 》 23点を図示した（第10図1～5、第11図1～18、第5表）。土師器壺8点（うち完形



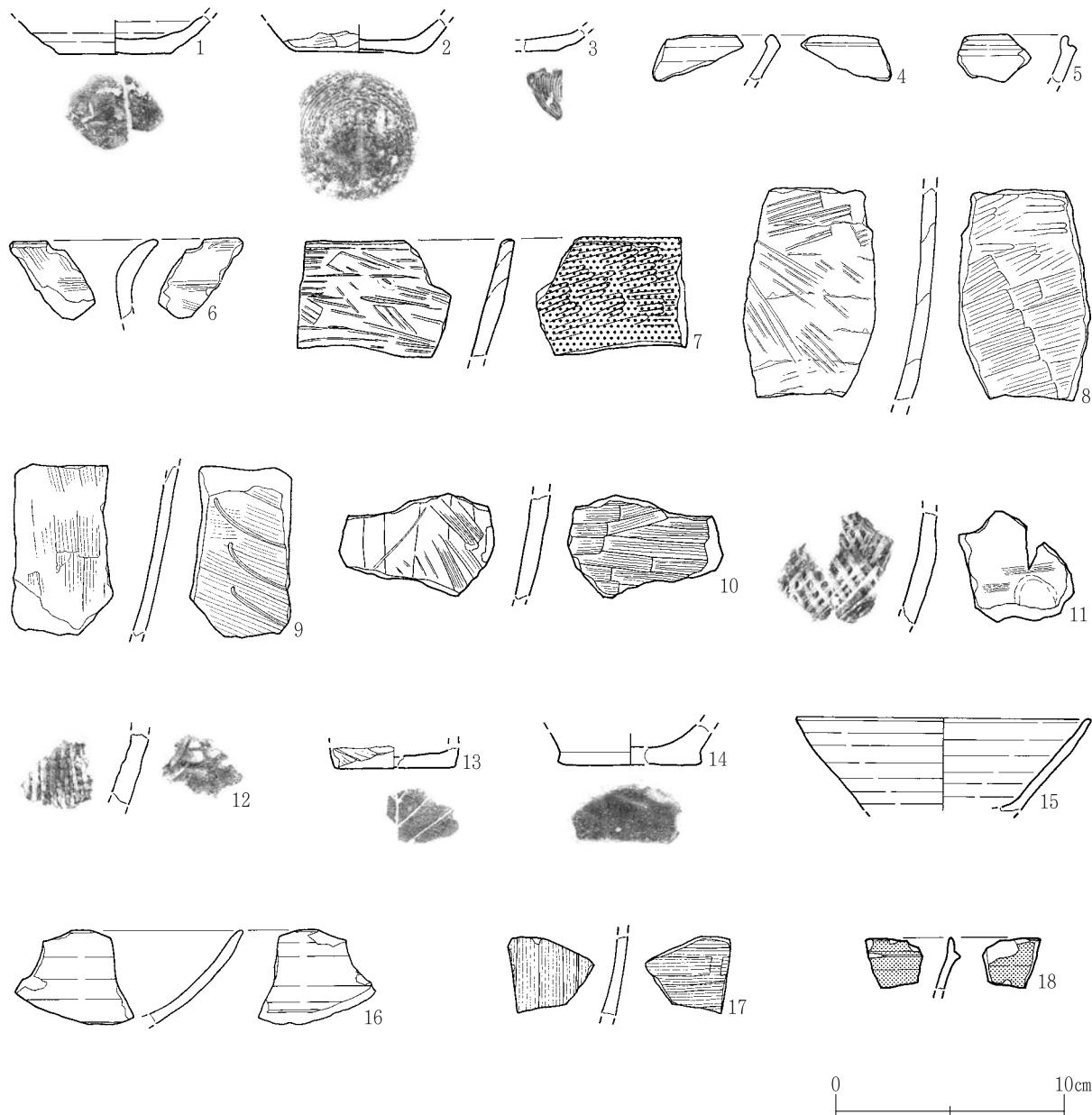
第4表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第9図1	土師器	環	口縁部	S 110 P 4	(15.0)	-	-	ロクロ 内:ミガキ→内面黒色処理	
第9図2	土師器	環	口縁部	S 110	(16.0)	-	-	ロクロ 内:ハケ目	
第9図3	土師器	蓋	口辺部	S 110 P 4	(14.6)	-	-	ロクロ	
第9図4	土師器	塊	口縁部	S 110 SK 15 R P 1	-	-	-	内外:ナデ 砂粒混じる	輪積痕有り
第9図5	土師器	甕	底部	S 110 R P 3	-	(8.0)	-	ロクロ 外:ナデ 砂粒混じる 内面黒色処理	
第9図6	土師器	甕	底部	S 110 R P 27	-	(8.6)	-	ロクロ 外:ナデ 砂粒混じる 指頭圧痕	底面葉脈 表側、指で一部を調整
第9図7	須恵器	環	底部	S 110	-	4.5	-	ロクロ 回転糸切り	
第9図8	須恵器	壺	胴部	S 110 SK 11 覆土中	-	-	-	ロクロ	
第9図9	石製品	砥石	-	S 110 S N 22	最大長(3.6) 最大幅4.35 最大厚1.90	重さ23.0g	両面使用 一部欠損		研ぎ

第9図 S I 10堅穴住居跡・出土遺物



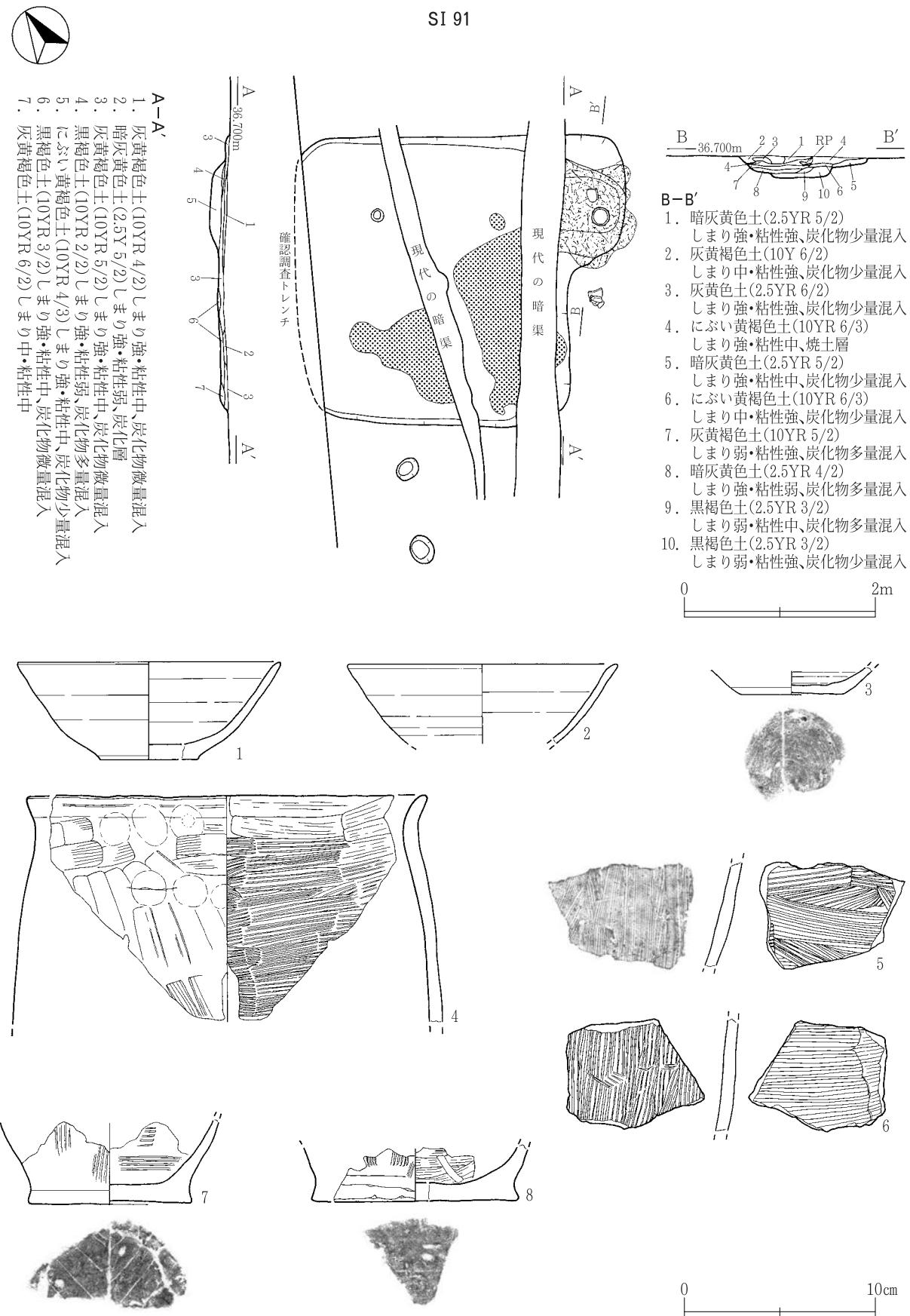
第10図 S I 49竪穴住居跡・出土遺物(1)



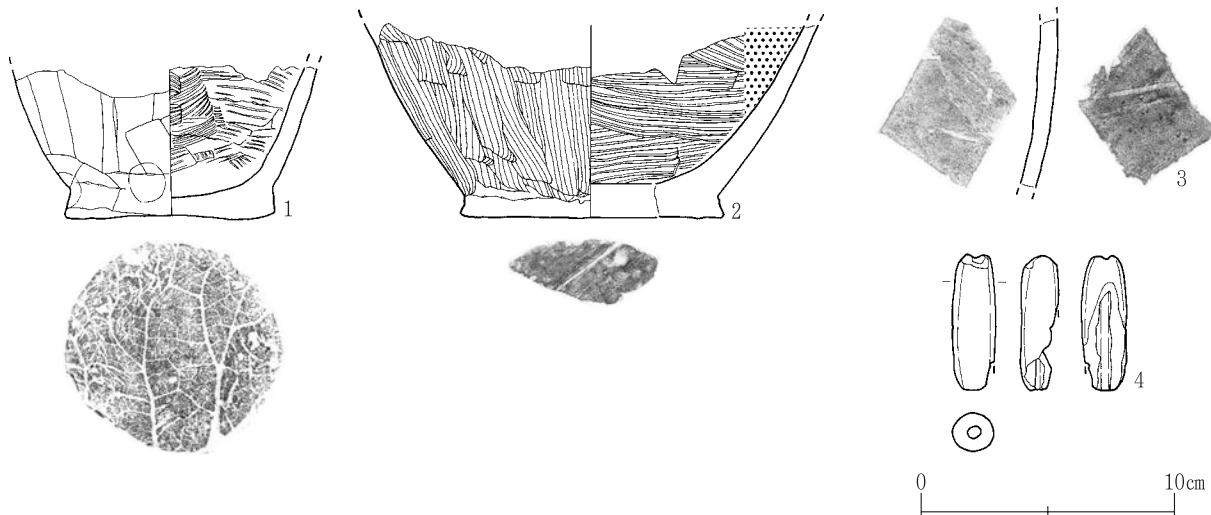
第5表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第10図1	土師器	壺	完形	S 149 R P-a カマド	13.3	4.8	5.2	ロクロ 回転糸切り 外：底面墨付着	9C後半
第10図2	土師器	壺	ほぼ完形	S 149 3層	13.3	4.5	5.0	ロクロ 回転糸切り	
第10図3	土師器	壺	口縁部	S 149 カマド2 (12.1)	-	-	-	ロクロ 外：ケズリ→ミガキ 内：ミガキ→内面黒色処理	9C
第10図4	土師器	壺	口縁部	S 149 2層	-	-	-	ロクロ 脱土に砂混じる	
第10図5	土師器	壺	口縁部	S 149 カマド 覆土中	-	-	-	ロクロ	内面赤褐色
第11図1	土師器	壺	底部	S 149 覆土中 R P24	-	(4.8)	-	ロクロ 回転糸切り	
第11図2	土師器	壺	底部	S 149 カマド1 R P3	-	5.7	-	ロクロ 外：ナデ 中心凹む 回転糸切り	
第11図3	土師器	壺	底部	S 149 2層	-	-	-	ロクロ 回転糸切り	
第11図4	土師器	塊	口縁部	S 149 2層	-	-	-	ロクロ	
第11図5	土師器	塊	口縁部	S 149 2層	-	-	-	ロクロ 蓋付塊の口縁部（蓋受けの支か）	
第11図6	土師器	壺	口縁部	S 149 カマド 覆土中	-	-	-	ロクロ 内外：ナデ 脱土に砂混じる	外反する
第11図7	土師器	甕	口縁部	S 149 カマド2 覆土中	-	-	-	ロクロ 外：ハケ目→ナデ 内：ミガキ 粘土斑痕有り 内外：黒色	雲母 槌成良好 固い
第11図8	土師器	甕	胴部	S 149 カマド2 覆土中	-	-	-	ロクロ 外：ハケ目 粘土斑痕有り 内：ナデ ミガキ	雲母
第11図9	土師器	甕	胴部	S 149 カマド1 覆土中	-	-	-	ロクロ 外：ナデ 内：ハケ目 ナデ→線	カマド出土 内面に線
第11図10	土師器	甕	胴部	S 149 2層	-	-	-	ロクロ 外：ケズリ→ナデ 内：ナデ	
第11図11	土師器	甕	胴部	S 149 R P21・23	-	-	-	ロクロ 外：タタキ目 内：ナデ 指頭圧痕	
第11図12	土師器	甕	胴部	S 149 2層	-	-	-	ロクロ 内外：タタキ目	
第11図13	土師器	甕	底部	S 149 2層	-	(5.4)	-	ロクロ 外：ナデ	葉脈
第11図14	土師器	甕	底部	S 149 2層	-	(6.4)	-	ロクロ 脱土に砂混じる 磨滅が著しい	
第11図15	須恵器	壺	口縁部	S 149 覆土中 範縛E3 排土中 (12.4)	-	-	-	ロクロ 口縁部に特徴あり	
第11図16	須恵器	壺	口縁部	S 149 R P19	-	-	-	ロクロ 糸切り痕有り	
第11図17	須恵器	甕	胴部	S 149 2層	-	-	-	ロクロ 内外：ナデ	
第11図18	須恵器	塊	口縁部	S 149 2層	-	-	-	ロクロ 施釉	口縁部に蓋が付く段有り

第11図 S I 49堅穴住居跡・出土遺物(2)



第12図 S I 91竪穴住居跡・出土遺物(1)



第6表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第12図1	土師器	壺	口縁部～底部	S I 91 R P10	(13.8)	(5.2)	5.1	クロ	
第12図2	土師器	壺	口縁部	S I 91 R P7	(14.0)	-	-	クロ	
第12図3	土師器	壺	底部	S I 91 R P13	-	(5.4)	-	クロ 回転糸切り	
第12図4	土師器	甕	口縁部	S I 91 R P2	(20.5)	-	-	クロ 外：指頭圧痕+ナデ 内：ハケ目 粘土斑痕有り 内外：砂粒混じる	
第12図5	土師器	甕	胴部	S I 91 R P6	-	-	-	クロ 外：ハケ目 内：ナデ	
第12図6	土師器	甕	胴部	S I 91 覆土中	-	-	-	クロ 外：ハケ目 内：ナデ	
第12図7	土師器	甕	底部	S I 91 カマド1	-	(8.4)	-	クロ 内外：ハケ目 砂粒混じる	底部葉脈
第12図8	土師器	甕	底部	S I 91 R P5	-	(10.8)	-	クロ 外：ナデ→ハケ目 内：ナデ 内外：砂粒混じる	
第13図1	土師器	甕	底部	S I 91 R P1 カマド 支脚	-	8.3	-	クロ 外：ケズリ→指頭圧痕 内：ハケ目 内外：粘土斑痕有り	底部葉脈 支脚
第13図2	土師器	甕	底部	S I 91 R P5	-	(10.4)	-	クロ 外：ハケ目 内：ナデ→内面黒色処理	底部筆
第13図3	須恵器	甕	胴部	S I 91 覆土中	-	-	-	クロ 外：ケズリ 内：ナデ	
第13図4	土製品	土錐	-	S I 91 R P3	最大長 5.4	最大幅 1.8	最大厚(1.5)	重さ 10.0g 長細い	浮子

第13図 S I 91堅穴住居跡・出土遺物(2)

1点)、土師器壺2点、土師器壺1点、土師器甕2点、須恵器壺1点、須恵器壺1点、砥石1点である。

《時期》平安時代（9世紀前半）と考えられる。

### S I 91堅穴住居跡

《位置と確認》L T52・53、MA52・53グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》平面形は隅丸方形の堅穴住居跡である。規模は長軸3.36m×短軸3.06m、深さ0.22mである。主軸方位は、N-54°-Wである。

《土層》現代の暗渠に切られた部分を断面とし7層に分層した。カマドは10層に分層された。

《壁》壁は削平されているため浅いが、緩く傾斜して立ち上がる。

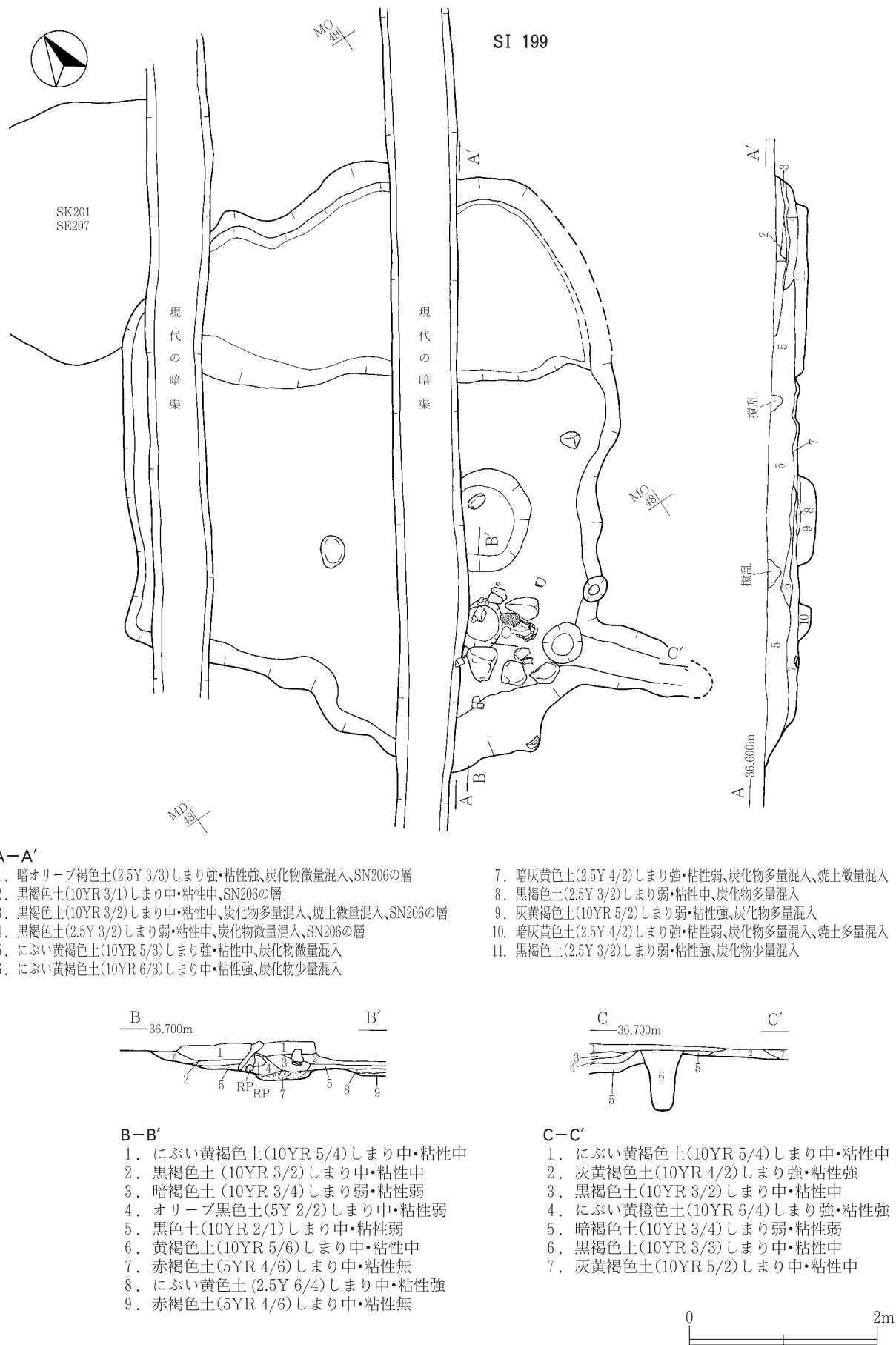
《床面》全体的に平坦である。5層の部分のみ深くなるが、これはカマドの焚口部分だったものと想定される。

《柱穴》カマド燃焼面中に1基確認した。

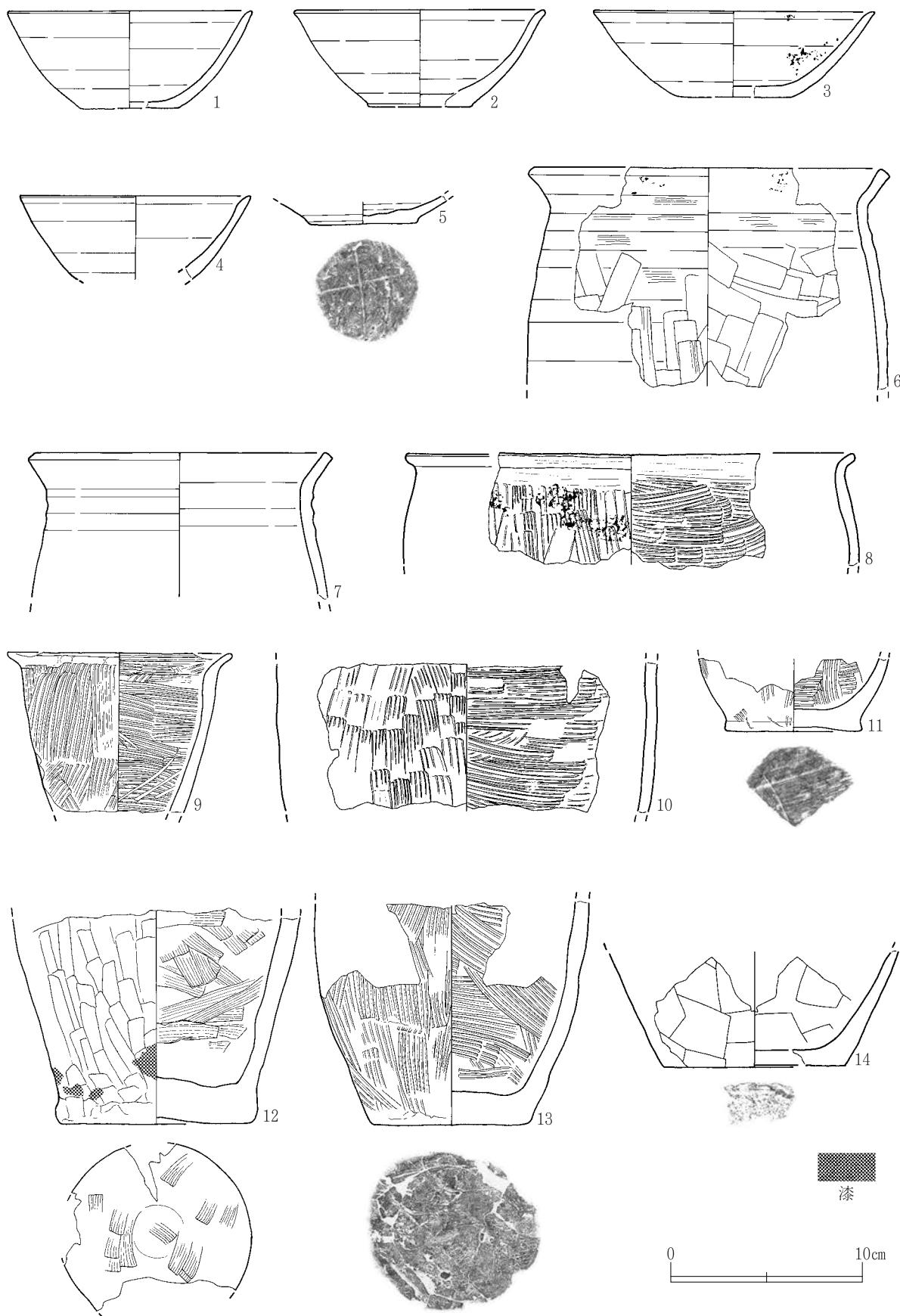
《カマド》住居東角に張り出す部分がカマドである。焚口や袖部は暗渠によって壊されているが、土製支脚の下半分が残っており、その周囲（張り出し全体）が強く焼けていた。煙道部は確認されなかった。

《出土遺物》12点を図示した（第12図1～8、第13図1～4、第6表）。いずれも破片だが、土師器壺3点、土師器甕7点、須恵器甕1点、土錐1点である。

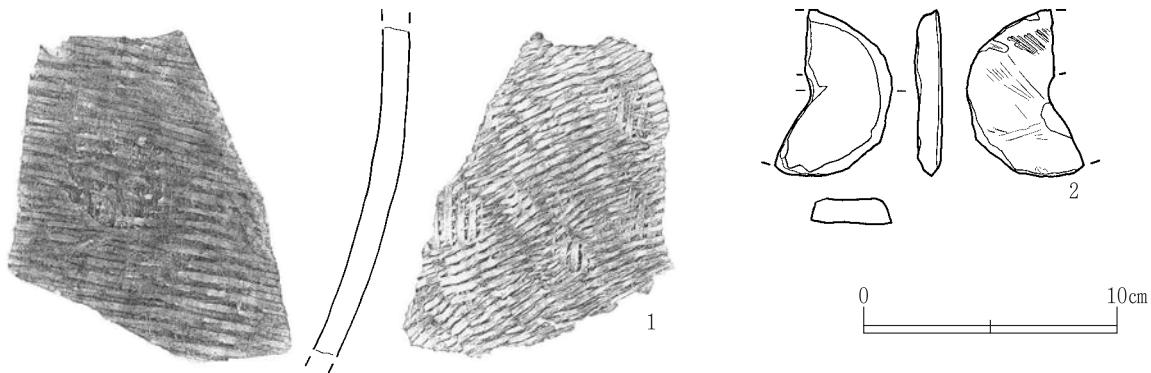
《時期》平安時代（9世紀後半）と考えられる。



第14図 S I 199豊穴住居跡



第15図 S I 199竪穴住居跡・出土遺物(1)



第7表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第15図1	土師器	环	ほぼ完形	S I 199 岗位不明	(12.6)	(6.2)	5.1	ロクロ	破片
第15図2	土師器	环	ほぼ完形	S I 199 カマド 覆土中	(12.9)	(6.4)	(5.1)	ロクロ	破片
第15図3	土師器	环	口縁部～底部	S I 199 R P1 カマド 覆土中	(14.7)	(6.6)	(4.5)	ロクロ 内面炭化物付着	
第15図4	土師器	环	口縁部	S I 199 R P2 MC47・48 岗位内覆土中	(12.0)	-	-	ロクロ	
第15図5	土師器	环	底部	S I 199 R P 4	-	5.5	-	ロクロ 底面線刻	底部のみ
第15図6	土師器	甕	口縁部	S I 199 R P 3	(18.4)	-	-	ロクロ 内外：ハケ目 ナデ 口縁部に少量の炭化物付着	
第15図7	土師器	甕	口縁部	S I 199 R P 8	(15.1)	-	-	ロクロ	
第15図8	土師器	甕	口縁部	S I 199 覆土中	(25.2)	-	-	ロクロ 外：ハケ目→ナデ 内：ハケ目→ナデ 炭化物付着	
第15図9	土師器	甕	口縁部	S I 199 R P 4	(11.8)	-	-	ロクロ 内外：ハケ目	
第15図10	土師器	甕	胴部	S I 199 覆土中	-	-	-	ロクロ 内外：ハケ目	
第15図11	土師器	甕	底部～胴部	S I 199 カマド 覆土中 5層	-	(7.0)	-	ロクロ 外：ハケ目 内：ハケ目 葉脈（管）	炭化物年代測定（分析-1）
第15図12	土師器	甕	底部	S I 199 R P 5	(10.0)	-	-	ロクロ 外：ケズリ 内：ナデ（工具による）	底面へラケズリ 漆有り
第15図13	土師器	甕	底部	S I 199 R P 6	-	(8.2)	-	ロクロ 外：カキ目 内：ハケ目	底面少し調整有り 土製支脚
第15図14	土師器	甕	底部	S I 199 R P 3	-	(9.4)	-	ロクロ 内外：ケズリ	底面砂底
第16図1	須恵器	甕	胴部	S I 199 R P 9	-	-	-	ロクロ 外：タタキ目 施釉 内：タタキ目	
第16図2	須恵器	紡錘車	-	S I 199 カマド 覆土中	最大長 6.6 最大幅(4.7) 最大厚 1.0 重さ34.0 g 工具跡有り				穿穴

第16図 S I 199堅穴住居跡・出土遺物(2)

## S I 199堅穴住居跡

《位置と確認》MB48、MC47・48グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》平面形は略円形の堅穴住居跡である。規模は長軸4.20m×短軸3.50m、深さ0.23mである。主軸方位は、N-33°-Eである。

《重複》SN206焼土遺構に切られ、SK201土坑とSE207井戸跡を切る。

《土層》11層に分層した。断面A-A'の1～4層は重複するSN206焼土遺構の土層を含む。7層は貼床、断面B-B'の7層はカマドの焼土である。

《壁》壁は浅いが、緩く傾斜して立ち上がる。

《床面》北東側の床面（11層の部分）が一段低くなる。南西側の床面はほぼ平坦だが、カマド焚口の北東に土坑状の凹みがある。

《柱穴》カマドの煙道側に1基、その東壁際に1基の計2基確認した。

《カマド》住居の南角に焚口・袖部・煙道部が確認された。断面B-B'の7層が焚口であり著しく焼けていた。袖部は石が組まれており、その内部から土製支脚が出土した。煙道部は末端が削平されているが、概ね南東側に向く。

《出土遺物》16点を図示した（第15図1～14、第16図1～2、第7表）。いずれも破片だが、土師器環5点、土師器甕9点、須恵器甕1点、紡錘車1点である。

《時期》平安時代（9世紀後半）と考えられる。

## (2) 掘立柱建物跡

### S B208掘立柱建物跡

《位置と確認》MD47~49、ME48~49グリッドのII層で確認した。当初、SKP柱穴様ピットとして検出したが、その配列から掘立柱建物跡と判断した。

《規模と平面形》規模は桁行2間×梁行1間、桁行総長は北西側(P1~P4)で5.30m、南東側では5.20m、柱間距離は北西側では南から2.73+2.57m、南東側では南から2.90+2.30m、梁行は南西側で4.50m、北東側では4.40mの側柱式建物である。平面形は正方形に近いが僅かに北東-南西方向が長くなる。建物方位は東側でN-30°-Eを示す。

《柱穴》P1~6の計6基を確認した。各柱穴とも土層は単層で、黒褐色土または黒色土である。P4には柱材が遺存していた。平面形はP1・3~5・7・10の6基が円形、P2・6・8・9の4基が略円形である。重複関係はP1がP2に切られ、P5がP6を切り、P8がP9を切る。P10のみ他の柱穴との間隔が異なる。深さは浅いもので0.18m(P9)、深いものでは0.48m(P5)と差がある。

《出土遺物》10点を図示した(第18図1~10、第8表)。いずれも土器片および掘立柱建物の構築材だが、土師器壺1点、土師器甕2点、須恵器甕1点、柱部材6点である。

《時期》出土した遺物から平安時代(9世紀代)と考えられる。

## (3) 土坑

### SK07土坑

《位置と確認》LP55・56グリッドのII層で確認した。北側は一部暗渠に壊されている。

《規模と平面形》規模は長軸2.40m×短軸1.02m、深さ0.19mで、平面形は長楕円形である。

《土層》3層に分層した。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は中央に凹凸がある。

《出土遺物》6点を図示した(第19図1~6)。いずれも破片だが、土師器壺3点、土師器甕2点、須恵器壺1点である。

《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

### SK44土坑

《位置と確認》LP57グリッドのII層で確認した。調査区の境界線上に位置していたため、断面のみ確認した。

《規模と平面形》規模は長軸2.80m(短軸は不明)、深さ0.34mで、断面から推定される平面形は楕円形である。

《土層》2層に分層した。炭化物の混入が2層とも確認された。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。2層部分は一段凹み、これが底面となる。

《出土遺物》2点を図示した(第19図7~8、第9表)。破片であるが土師器鉢1点、須恵器壺1点である。

《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

### S K83土坑

《位置と確認》LT54グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.70m×短軸0.50m、深さ0.25mで、平面形は略円形である。

《土層》2層に分層した。1層に対し2層は壁の立ち上がりに取り付く。

《壁・底面》壁は急な角度で立ち上がる。底面は2層側が高く傾いている。

《出土遺物》土師器壺の破片1点を図示した(第20図1、第10表)。

《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

### S K109土坑

《位置と確認》LR50、LS50グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸0.80m×短軸0.80m、深さ0.30mで、平面形は円形である。

《土層》灰黄褐色土の単層である。

《壁・底面》壁は傾斜して立ち上がる。底面は平坦である。

《出土遺物》4点を図示した(第20図2～5、第10表)。土師器壺2点、土師器甕2点である。

《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

### S K201土坑

《位置と確認》MC48・49グリッドのII層で確認した。南側は現代の暗渠で壊されている。

《重複》SE207井戸跡を切り、SI199竪穴住居跡に切られる。

《規模と平面形》規模は長軸1.90m×短軸1.03m、深さ0.76mで、平面形は略円形である。

《土層》8層に分層した。黒褐色土主体の土層で、炭化物と灰色粘土が混入している。

《壁・底面》壁は傾斜して立ち上がる。底面は半円形に凹み、SI199竪穴住居側でやや平坦になる。

《出土遺物》9点を図示した(第22図1～9、第11表)。土師器壺5点、土師器碗1点、土師器甕3点である。

《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

### S K202土坑

《位置と確認》MA47、MB47グリッドのII層で確認した。

《重複》SK203土坑に切られる。

《規模と平面形》規模は長軸1.60m×短軸1.30m、深さ0.14mで、平面形は略円形である。

《土層》4層に分層した(第20図中の3～6層)。黒褐色土主体の土層である。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は浅いレンズ状である。

《出土遺物》3点を図示した(第20図6～8、第10表)。破片であるが土師器碗1点、土師器甕1点、磨石兼敲石1点である。

《時期》平安時代(9世紀後半)と考えられる。

### S K203土坑

《位置と確認》MA47、MB47グリッドのII層で確認した。

《重複》SK202土坑を切る。

《規模と平面形》規模は長軸1.90m×短軸1.30m、深さ0.17mで、平面形は略円形である。

《 土 層 》 2層に分層した（第20図中の1・2層）。黒褐色土主体の土層である。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は浅いレンズ状である。

《 出土遺物 》 7点を図示した（第21図1～7、第10表）。土師器壺2点、土師器甕2点、須恵器甕1点、須恵器瓶1点、焼けた面のある礫1点である。

《 時 期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。

#### （4）井戸跡

##### S E207井戸跡

《 位置と確認 》 MC48～49グリッドのII層で確認した。南側は現代の暗渠で壊されている。

《 重 複 》 SK201土坑とSI199竪穴住居跡に切られる。よってS E207井戸跡→SK201土坑→SI199竪穴住居跡の順で新しくなる。

《 規模と平面形 》 規模は長軸1.40m×短軸1.32m、深さ0.88mで、平面形は円形である。

《 土 層 》 緑灰色土の単層で、上面にSK201土坑の2・5・7層の黒褐色土が多く混入していた。井戸の掘形は土壤のグライ化で確認できなかった。SK201土坑との間（5～7層と8層の境界）に加工痕のある木材が出土し、井戸の部材と判断した。8層に達すると井戸内の曲物が出土した。

《 壁・底面 》 壁は垂直に立ち上がるが、北西側は曲物より上で緩く傾斜して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

《 出土遺物 》 14点を図示した（第22図10～14、第23図1～3、第24図1～5、第11～13表）。土師器壺5点、土師器甕1点、井戸枠曲物1点、井戸の部材7点である。これらの遺物は8層から底面にかけて出土した。

《 時 期 》 平安時代（9世紀代前半）と考えられる。

#### （5）焼土遺構

##### S N03焼土遺構

《 位置と確認 》 LS56グリッドのII層で確認した。北西側は確認調査トレーニングで壊れている。

《 重 複 》 SKP08・09柱穴様ピットに切られる。

《 規模と平面形 》 規模は長軸1.40m×短軸0.75m、深さ0.08mで、平面形は楕円形である。

《 土 層 》 5層に分層した。全面焼土であるが、黒褐色土中に黄褐色・灰黄褐色土が混じる。

《 壁・底面 》 壁は緩やかに立ち上がる。底面は中央が僅かに凹むがほぼ平坦である。

《 出土遺物 》 2点を図示した（第25図1～2、第14表）。土師器壺1点、土師器甕1点である。

《 時 期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。

##### S N04焼土遺構

《 位置と確認 》 LS56グリッドのII層で確認した。北西側は確認調査トレーニングで壊れている。

《 規模と平面形 》 規模は長軸1.10m×短軸0.85m、深さ0.08mで、平面形は略円形である。

《 土 層 》 5層に分層した。全面焼土であるが、特に4層（赤褐色土）が主要な燃焼面と思われる。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は浅いレンズ状である。

《 出土遺物 》 4点を図示した（第25図3～6、第14表）。土師器壺1点、土師器甕2点、焼けた面のある礫片1点である。

《 時期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。

#### S N05焼土遺構

《 位置と確認 》 L S 55グリッドのII層で確認した。

《 重複 》 SKP柱穴様ピット2基に切られる。

《 規模と平面形 》 規模は長軸1.10m×短軸0.80m、深さ0.17mで、平面形は略円形である。

《 土層 》 8層に分層した。全面焼土である。上位は黒褐色土、下位は灰黄褐色土が多い。

《 壁・底面 》 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

《 出土遺物 》 極めて小さな土師器片が出土した。

《 時期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。

#### S N06焼土遺構

《 位置と確認 》 L R 55～56グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸0.30m×短軸0.30m、深さ0.07mで、平面形は楕円形である。

《 土層 》 灰黄褐色土主体の単層で、全面焼土である。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は浅い塊状である。

《 出土遺物 》 遺物は出土しなかった。

《 時期 》 近接するS N05焼土遺構との関連から平安時代と考えられる。

#### S N204焼土遺構

《 位置と確認 》 MD46グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸1.20m×短軸0.30m、深さ0.13mで、平面形は細長い楕円形である。

《 土層 》 2層に分層した。全面焼土であり、炭化物を多く含む。

《 壁・底面 》 壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は中央が平坦である他は凸凹が多い。

《 出土遺物 》 焼土範囲の外側にも土師器の破片が散在しており、後世の攪乱によって動いたものと判断した（同一個体も含まれる）。6点を図示した（第26図1～6、第14表）。土師器壺1点、土師器甕4点、須恵器甕1点である。

《 時期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。

#### S N206焼土遺構

《 位置と確認 》 MB48、MC48グリッドのII層で確認した。南東側は確認調査の坪掘りで壊れている。

《 重複 》 SI199堅穴住居跡を切る。

《 規模と平面形 》 規模は長軸2.00m×短軸1.30m、深さ0.26mで、平面形は楕円形である。

《 土層 》 8層に分層した（9層はSI199堅穴住居跡の層）。特に5層が焼土面となる。

《 壁・底面 》 壁は緩く立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

《 出土遺物 》 6点を図示した（第27図1～6、第15表）。土師器壺2点、土師器甕3点、須恵器甕1点である。

《 時期 》 平安時代（9世紀後半）と考えられる。

#### (6) 溝跡

##### S D02溝跡

《 位置と確認 》 MA51、MB50、LQ53、LR52～53、LS51～52、LT51グリッドのII層で確認した。

《 規模と平面形 》 規模は長軸（北西→南東方向）13.50m、短軸（LP56杭付近からカーブする北東→南西方向）3.50m、深さ0.16mで、溝幅は0.90mである。調査区外の北側に溝が続くものと思われる。

《 土層 》 4か所計測したが、溝跡自体の堆積土は暗褐色土または黒褐色土の単層である。

《 壁 》 壁は緩く傾斜して立ち上がる。

《 底面 》 粒状の炭化物が底面に多く含まれる。遺物も底面からの出土が多い。

《 出土遺物 》 12点を図示した（第28図1～12、第16表）。土師器壺4点、土師器甕5点、須恵器壺1点、須恵器甕1点、砥石1点である。

《 時期 》 平安時代（9世紀代前半）と考えられる。

##### S D112溝跡

《 位置と確認 》 MA51～50、MB50、LQ51、LR51～52、LS51～52、LT51グリッドのII層で確認した。北東側はLQ53グリッドで途切れ、南西側はMB50グリッドで消失する。

《 規模と平面形 》 規模は長軸21.60m×短軸1.10m、深さ0.16mで、平面形は北東→南西方向に直線状となる。軸線方向はN-59°-Eである。溝幅は場所によって一定しない。

《 重複 》 SX191その他の遺構を土坑を切る。

《 土層 》 2か所計測し、2～3層に分層した。溝跡自体の堆積土は黒褐色土だが、底面に灰黄褐色土が多く含まれる。

《 壁 》 壁は急な角度で立ち上がる。

《 底面 》 溝の底面は概ねレンズ状であるが、部分的に凹凸がある。

《 出土遺物 》 11点を図示した（第30図1～11、第17表）。土師器壺5点、土師器甕1点、土師器甕4点、須恵器壺1点である。

《 時期 》 平安時代（9世紀代後半）と考えられる。

#### (7) 道路状遺構

##### S M198道路状遺構

《 位置と確認 》 MA48～49、MB47～48、MC46～47、LP53、LQ52～53、LR51～52、LS50～51、LT50～49グリッドのII～III層で確認した。

《 規模と平面形 》 径35～70cmの凹みが54基北東→南西方向に連続する。規模は長軸39.00m×短軸1.00m（凹み連続部分のみの幅）、深さ0.22m（平均値）で、平面形は直線状である。北東側（全長の約3分の2）は標高36.5mの等高線に沿い、南西側（全長の約3分の1）は標高36.6mの等高線に沿う。

《 土層 》 凹み自体の堆積土は黒褐色土の単層だが、炭化物が底面に多く含まれる。

《 底面 》 凹みの中央がより深く、底面は整わず凸凹がある。

《出土遺物》12点を図示した（第30図12～23、第17表）。土師器壺9点、土師器甕1点、須恵器壺2点である。

《時期》平安時代（9世紀代後半）と考えられる。

（8）柱穴様ピット（※数が多いため、下記以外は第31図に掲載）

#### S K P 92柱穴様ピット

《位置と確認》L T 52グリッドのII層で確認した。

《出土遺物》土師器壺1点を図示した（第32図1、第18表）。

#### S K P 94柱穴様ピット

《出土遺物》土師器甕1点を図示した（第32図2、第18表）。

#### S K P 83・113柱穴様ピット

《出土遺物》S K P 113側から出土した土師器甕1点を図示した（第32図3、第18表）。

#### S K P 98柱穴様ピット

《出土遺物》須恵器甕1点を図示した（第32図4、第18表）。

#### S K P 151柱穴様ピット

《出土遺物》土師器甕1点を図示した（第32図5、第18表）。

（9）その他の遺構

#### S X 191その他の遺構

《位置と確認》L T 51グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》規模は長軸1.30m×短軸0.90m、深さ0.11mで、平面形は橢円形である。主軸方位はN-34°-Eを示す。精査後の形態からその他の遺構としたが、その機能は土坑に準ずるものと想定される。

《重複》S D 112溝跡に切られる。

《土層》2層に分層した。1層はS D 112溝跡の層である。

《壁・底面》壁は緩く傾斜して立ち上がる。底面は平坦である。

《出土遺物》4点を図示した（第33図1～4、第19表）。土師器壺1点、土師器甕3点である。

《時期》平安時代（9世紀代後半）と考えられる。

#### S X 200その他の遺構

《位置と確認》L Q 46～47、L R 47グリッドのII層で確認した。

《規模と平面形》掘立柱建物を構成する柱穴様ピット群になるものと考えたが、判定できなかった。

《土層》黒褐色土の单層である。

《出土遺物》15点を図示した（第34図1～5、第35図1～10、第20・21表）。土師器壺5点、土師器9点（うち台付甕1点）、須恵器甕1点である。

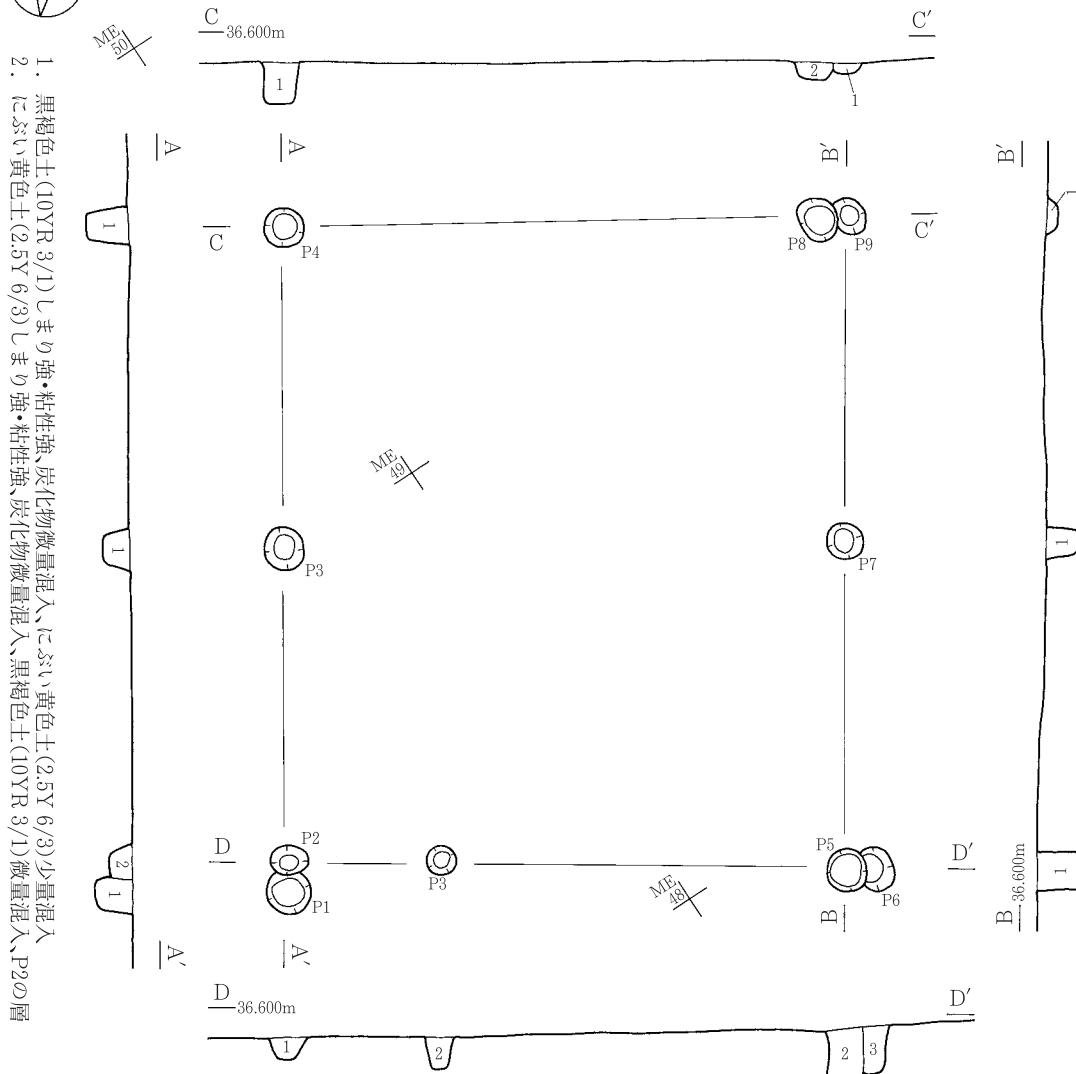
《時期》平安時代（9世紀代後半）と考えられる。

#### S X 205性格不明遺構

《位置と確認》L R 46～45、L S 45～47、L T 45～46グリッドのII層で確認した。

## SB 208

1. 黒褐色土(10YR 3/1)しまり強・粘性強、炭化物微量混入、オリーブ灰色土(2.5GY 6/1)少量混入、P4からは建物材が出土  
 2. 黒色土(10YR 2/1)しまり強・粘性強、オリーブ灰色土(2.5GY 6/1)多量混入、P8の層

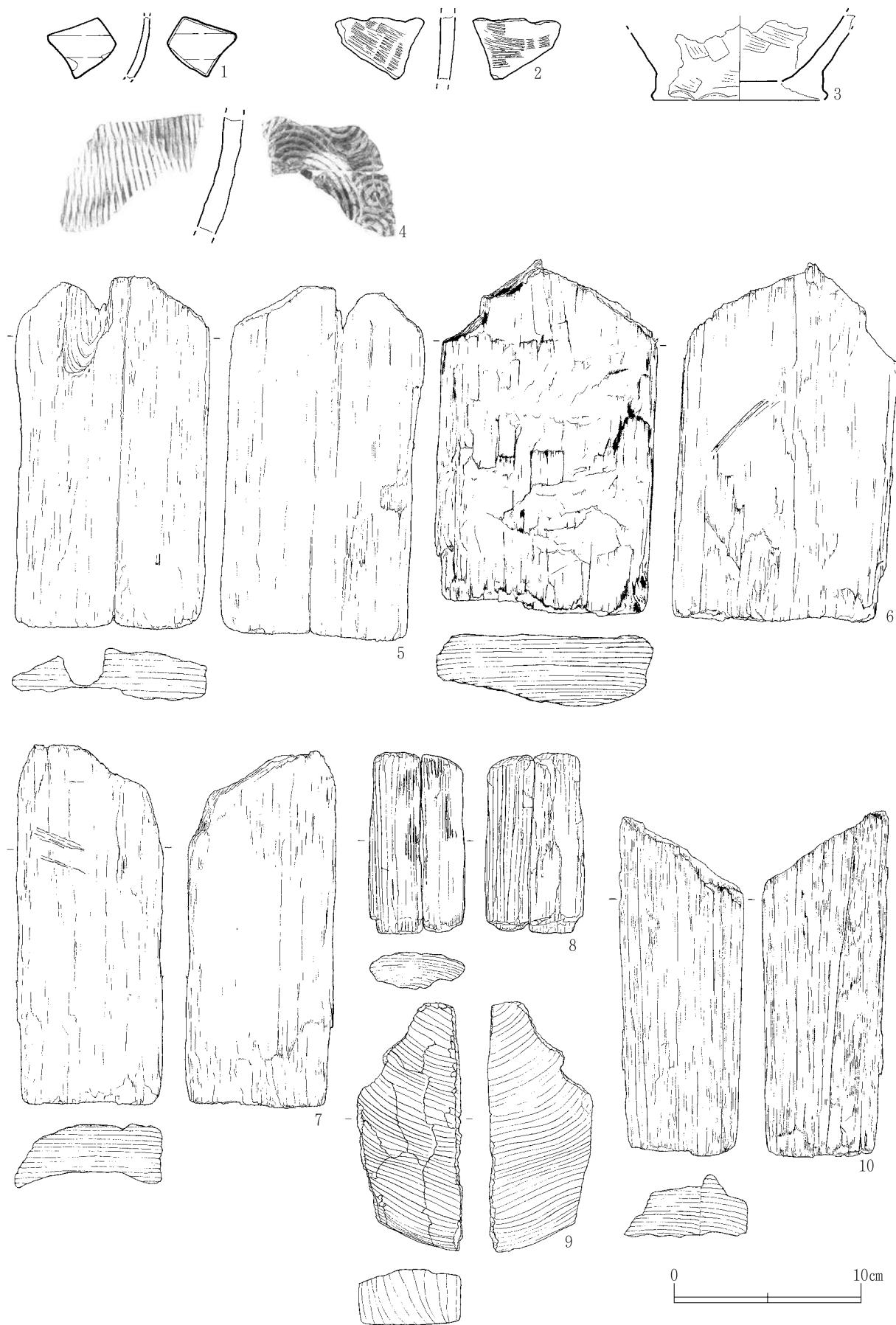


1. 黒褐色土(10YR 3/1)しまり強・粘性強、炭化物微量混入、にぶい黄色土(2.5Y 6/3)少量混入  
 2. にぶい黄色土(2.5Y 6/3)しまり強・粘性強、炭化物微量混入、黒褐色土(10YR 3/1)微量混入、P2の層  
 3. 黑褐色土(10YR 2/1)しまり強・粘性強、炭化物微量混入、にぶい黄色土(2.5Y 6/3)微量混入

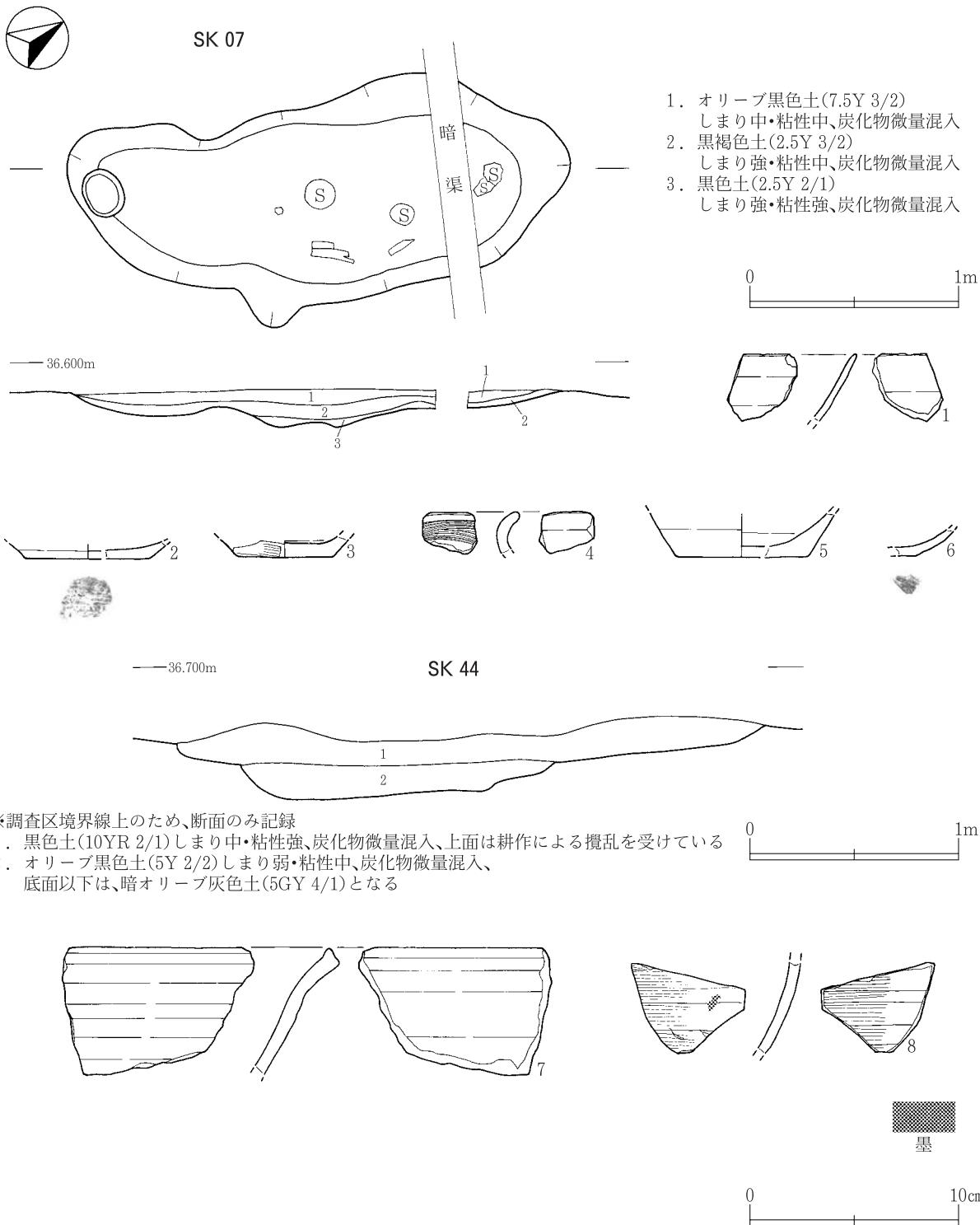
第8表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第18図1	土師器	壺	胴部	S B208-11 R P	-	-	-	クロ	
第18図2	土師器	甕	胴部	S B208-11 R P	-	-	-	クロ 内外:ハケ目	
第18図3	土師器	甕	底部	S B208-3	-	(9.2)	-	クロ 内:ケズリ→ナデ 内:ナデ	底面が欠けている
第18図4	須器	甕	胴部	S B208-11 R P	-	-	-	クロ 内外:タタキ目	
第18図5	木製品	部材	-	S B208 P4のRW1-1 1層	最大長18.8	最大幅10.4	最大厚 2.7		(分析-11)
第18図6	木製品	部材	-	S B208 P4のRW2-2 1層	最大長19.0	最大幅11.4	最大厚 3.7	裏にキズ 加工痕	(分析-14)
第18図7	木製品	部材	-	S B208 P4のRW1-2 1層	最大長19.2	最大幅 8.0	最大厚 3.5	裏に加工痕	(分析-12)
第18図8	木製品	部材	-	S B208 P4のRW2-1 1層	最大長 9.7	最大幅 5.2	最大厚 2.0		(分析-13)
第18図9	木製品	部材	-	S B208 P4のRW2-3 1層	最大長13.3	最大幅 5.7	最大厚 3.0		(分析-15)
第18図10	木製品	部材	-	S B208 P4のRW3 1層	最大長18.2	最大幅 6.7	最大厚 3.4		(分析-16)

第17図 S B208掘立柱建物跡・出土遺物(1)



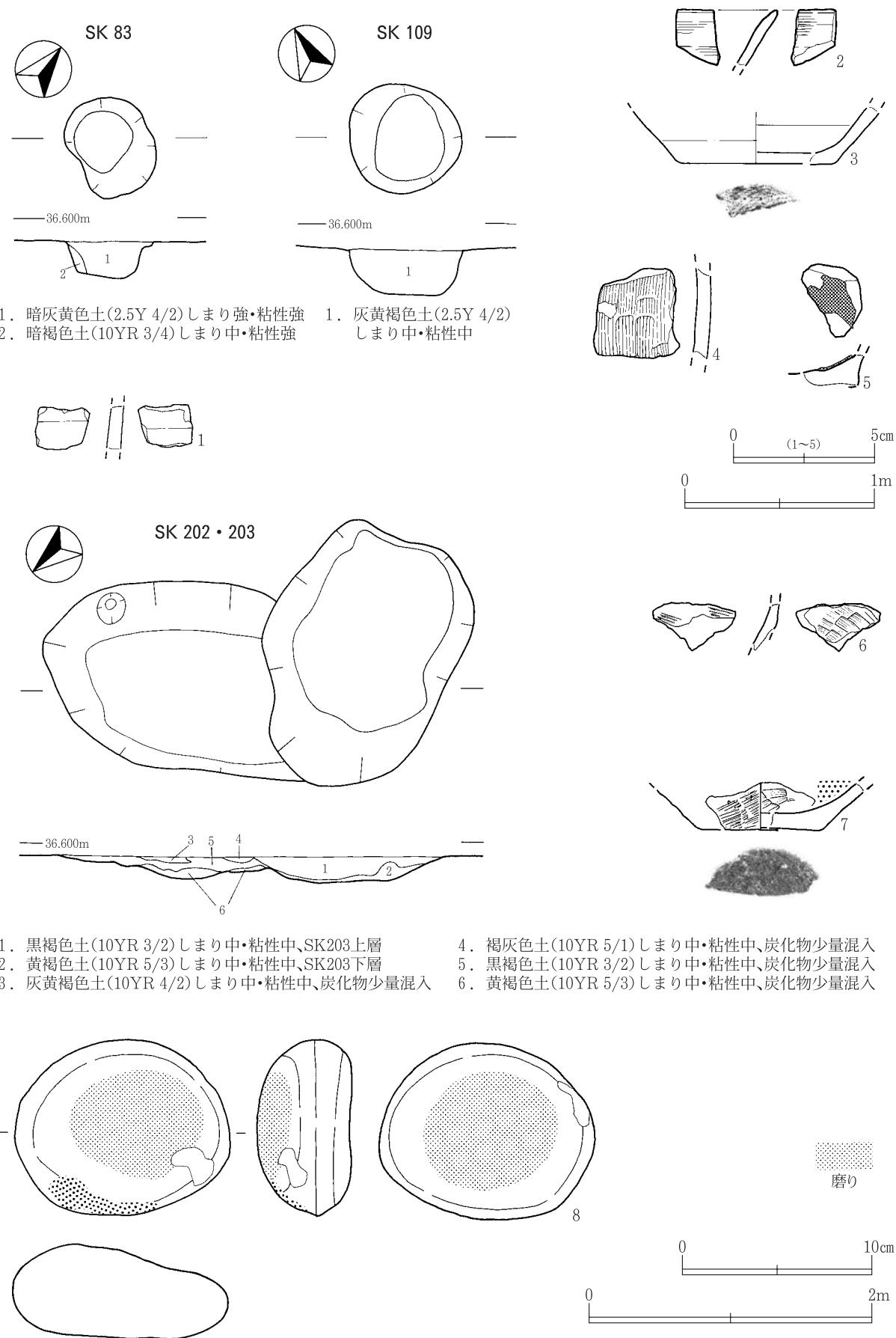
第18図 S B 208掘立柱建物跡・出土遺物(2)



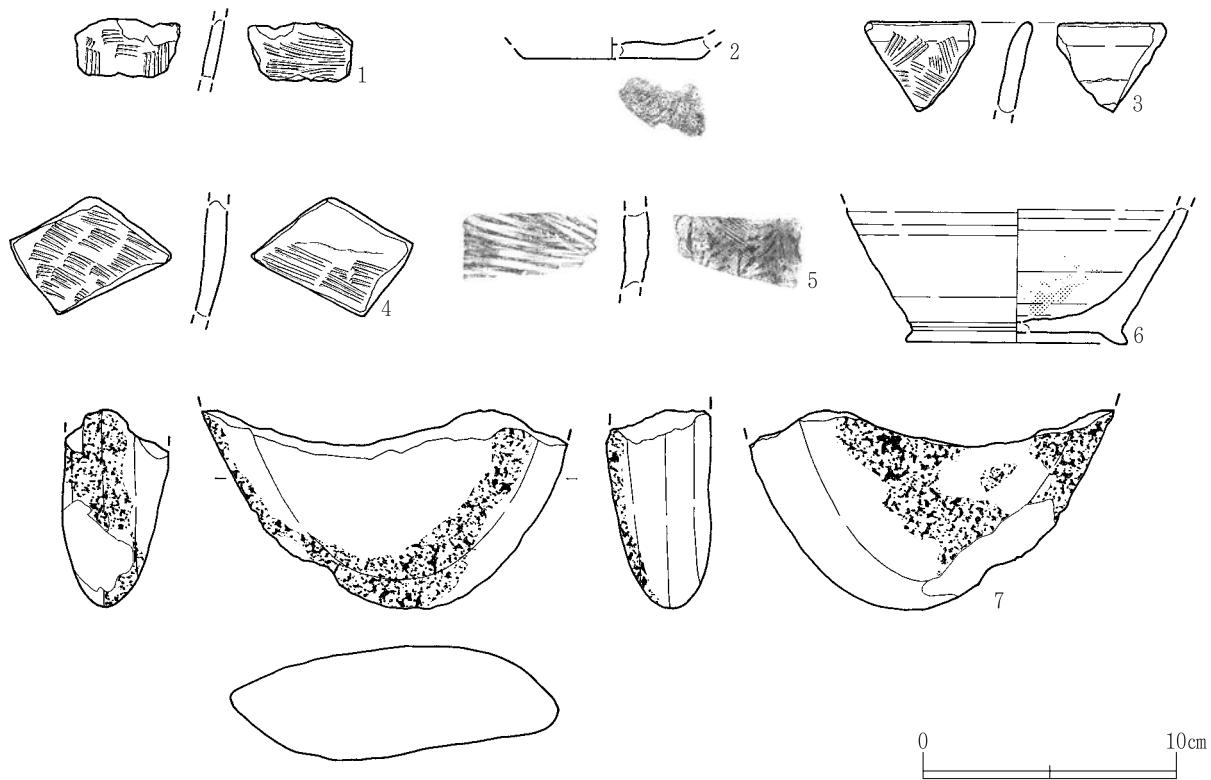
第9表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第19図1	土師器	环	口縁部	SK07	-	-	-	ロクロ 内外:ナデ 粒混じる	
第19図2	土師器	环	底部	SK07 埋土中	-	(3.0)	-	ロクロ 内:ハケ目	
第19図3	土師器	环	底部	SK07	-	(4.8)	-	ロクロ 内外:ナデ	
第19図4	土師器	甕	口縁部	SK07 埋土中	-	-	-	ロクロ 外反する	
第19図5	土師器	甕	底部	SK07 埋土中	-	(3.1)	-	ロクロ 粒混じる	
第19図6	須恵器	环	胸部~底部	SK07 埋土中	-	-	-	ロクロ 回転系切り	
第19図7	土師器	鉢	口縁部	SK44 (LP58)	(38.8)	-	-	ロクロ 外:ヘラケズリ	
第19図8	須恵器	壺	胸部	SK44 (LP58)	-	-	-	ロクロ 外:ナデ 墨 内:ナデ	

第19図 SK 07・44土坑・出土遺物



第20図 SK 83・109・202・203土坑・出土遺物



第10表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第20図1	土師器	壺	胸部	SK83 覆土中	-	-	-	ロクロ 内外:粒混じる	
第20図2	土師器	壺	口縁部	SK109 覆土中	-	-	-	ロクロ 内外:ナデ	
第20図3	土師器	壺	底部	SK109 覆土中	-	(5.7)	-	ロクロ 回転糸切り	
第20図4	土師器	甕	胸部	SK109 覆土中	-	-	-	ロクロ	
第20図5	土師器	甕	底部	SK109 覆土中	-	-	-	ロクロ 内面に漆	
第20図6	土師器	碗	胸部	SK202 R P2	-	-	-	ロクロ 内:ナデ 内外:粒混じる	
第20図7	土師器	甕	底部	SK202 R P1~4層	-	(6.8)	-	ロクロ 外:ハケ目 炭化物付着 内:ナデ→内面黒色處理 底部:ハケ目	炭化物年代測定(分析-2)
第20図8	礫石器	磨石兼敲石	-	SK202 R Q2	最大長 9.4	最大幅11.2	最大厚 5.0	重さ459.0 g 欠損有り	
第21図1	土師器	碗	胸部	SK203 覆土中	-	-	-	ロクロ 内外:ハケ目 粒混じる	
第21図2	土師器	甕	底部	SK203 覆土中	-	(7.0)	-	ロクロ 回転糸切り	磨滅著しい
第21図3	土師器	甕	口縁部	SK203 覆土中	-	-	-	ロクロ 外:ハケ目 内:粘土紐痕 内外:粒混じる	
第21図4	土師器	甕	胸部	SK203 覆土中	-	-	-	ロクロ 外:ハケ目 粘土紐痕 内:ハケ目 内外:粒混じる	
第21図5	須恵器	甕	胸部	SK203 覆土中	-	-	-	ロクロ 内外:タタキ目	
第21図6	須恵器	瓶	胸部~底部	SK203 R P1	-	(8.8)	-	ロクロ 施釉	
第21図7	礫石器	焼け石	-	SK203 R Q5	最大長 7.9	最大幅14.4	最大厚 4.6	重さ385.0 g 焼け跡著しい炭化物付着	

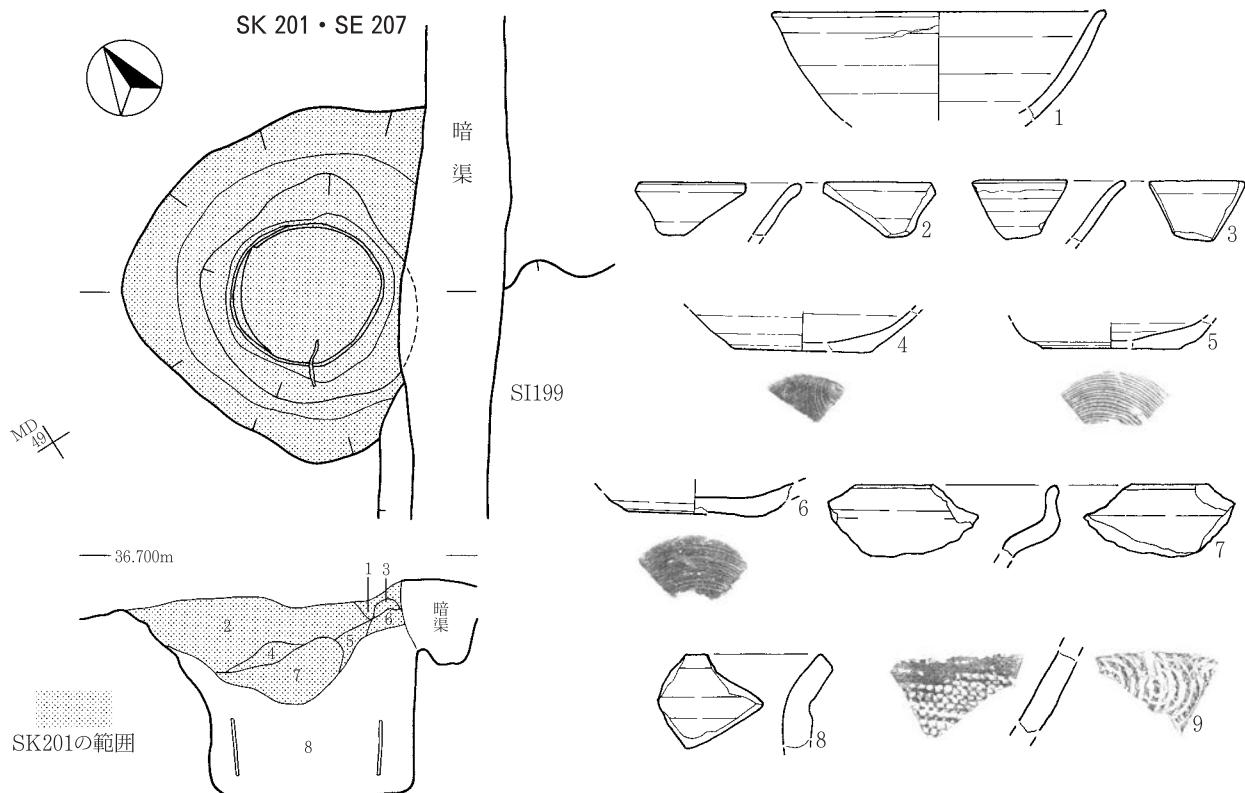
第21図 SK203土坑・出土遺物

《規模と平面形》掘立柱建物を構成する柱穴様ピット群になるものと考えたが、判定できなかった。

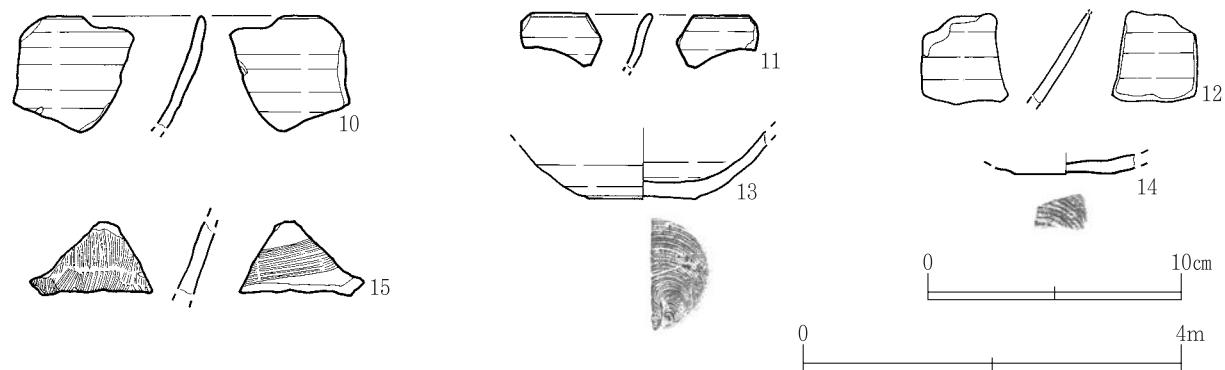
《 土 層 》 黒褐色土の単層である。

《 出土遺物 》 41点を図示した(第36図1~24、第37図1~17、第38図1~9)。いずれも破片だが土師器壺24点、土師器甕11点、土師器壺1点、須恵器壺2点、須恵器甕9点、須恵器壺2点、土錐1点である。

《 時 期 》 平安時代(9世紀代後半)と考えられる。



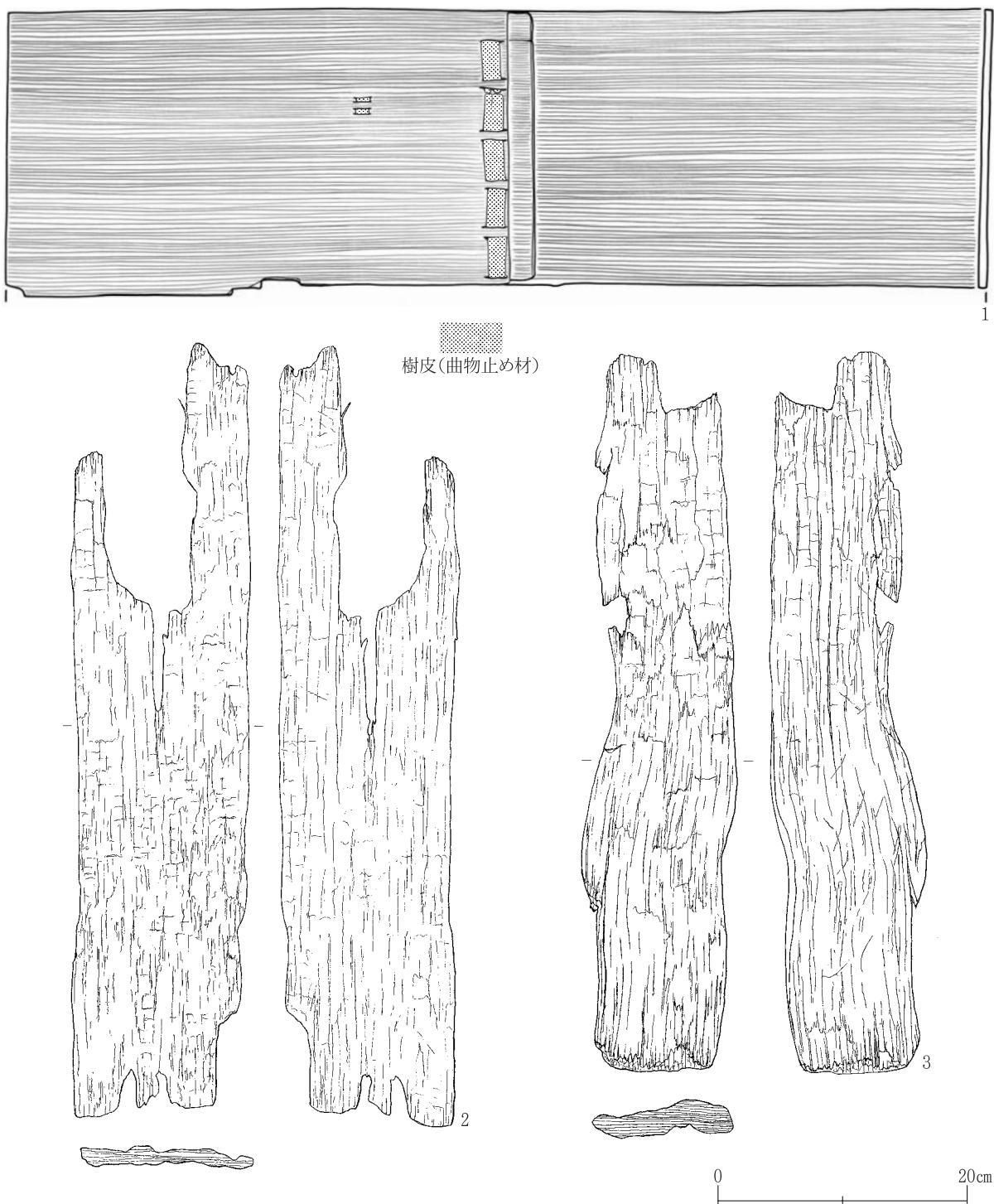
1. 黒褐色土(10YR 3/1)しまり強・粘性中、炭化物少量混入、暗灰黄色土(2.5Y 4/2)多量混入
2. 黒褐色土(10YR 2/2)しまり強・粘性中、炭化物少量混入、暗灰黄色土(2.5Y 5/2)多量混入
3. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性中、炭化物少量混入、黒褐色土(10YR 3/1)多量混入
4. 黒褐色土(10YR 3/1)しまり中・粘性中、オリーブ灰色粘土(2.5GY 6/1)多量混入
5. 黒褐色土(10YR 3/1)しまり弱・粘性強、オリーブ灰色粘土(2.5GY 5/1)多量混入
6. 暗灰黄色土(2.5Y 4/2)しまり中・粘性弱、炭化物微量混入
7. 黒褐色土(10YR 3/1)しまり弱・粘性強、オリーブ灰色粘土(2.5GY 5/1)多量混入、1~7層はSK201土坑の層
8. 緑灰色土(7.5GY 5/1)しまり中・粘性強、粘質土、黒褐色土(10YR 3/1)多量混入、8層のみSE207井戸跡の層



第11表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第22図1	土師器	环	口縁部	SK 201 覆土中	(13.0)	-	-	クロ	
第22図2	土師器	环	口縁部	SK 201 覆土中	-	-	-	クロ	口唇ふくらむ
第22図3	土師器	环	口縁部	SK 201 覆土中	-	-	-	クロ	内面に工具痕
第22図4	土師器	环	底部	SK 201 覆土中	-	(5.6)	-	クロ	回転糸切り
第22図5	土師器	环	底部	SK 201 覆土中	-	(5.6)	-	クロ	回転糸切り
第22図6	土師器	塊	底部	SK 201 覆土中	-	(5.4)	-	クロ	回転糸切り 底面中央に凹み
第22図7	土師器	甕	口縁部	SK 201 覆土中	-	-	-	クロ	内外に粒混じる
第22図8	土師器	甕	口縁部	SK 201 覆土中	-	-	-	クロ	胎土に砂混じる
第22図9	須恵器	甕	胴部	SK 201 覆土中	-	-	-	クロ	外: 布目 内: タタキ目
第22図10	土師器	环	口縁部~胴部	SE 207 覆土中	-	-	-	クロ	外面に段有り
第22図11	土師器	环	口縁部	SE 207 覆土中	-	-	-	クロ	
第22図12	土師器	环	胴部	SE 207 覆土中	-	-	-	クロ	
第22図13	土師器	环	底部	SE 207 覆土中	-	4.2	-	クロ	回転糸切り
第22図14	土師器	环	底部	SE 207 覆土中	-	(4.0)	-	クロ	回転糸切り
第22図15	土師器	甕	胴部	SE 207 覆土中	-	-	-	クロ	外: ハケ目 内外: 粒混じる

第22図 SK 201土坑・SE 207井戸跡・出土遺物(1)



第12表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第23図1	木製品	曲物	-	S E 207	78.2	-	22.5	井筒	樹皮(曲げ物止め材)
第23図2	木製品	部材	-	S E 207	最大長61.6 最大幅14.5 最大厚 1.8			井筒そばの材	
第23図3	木製品	部材	-	S E 207	最大長57.1 最大幅12.8 最大厚 3.0			井戸枠材	

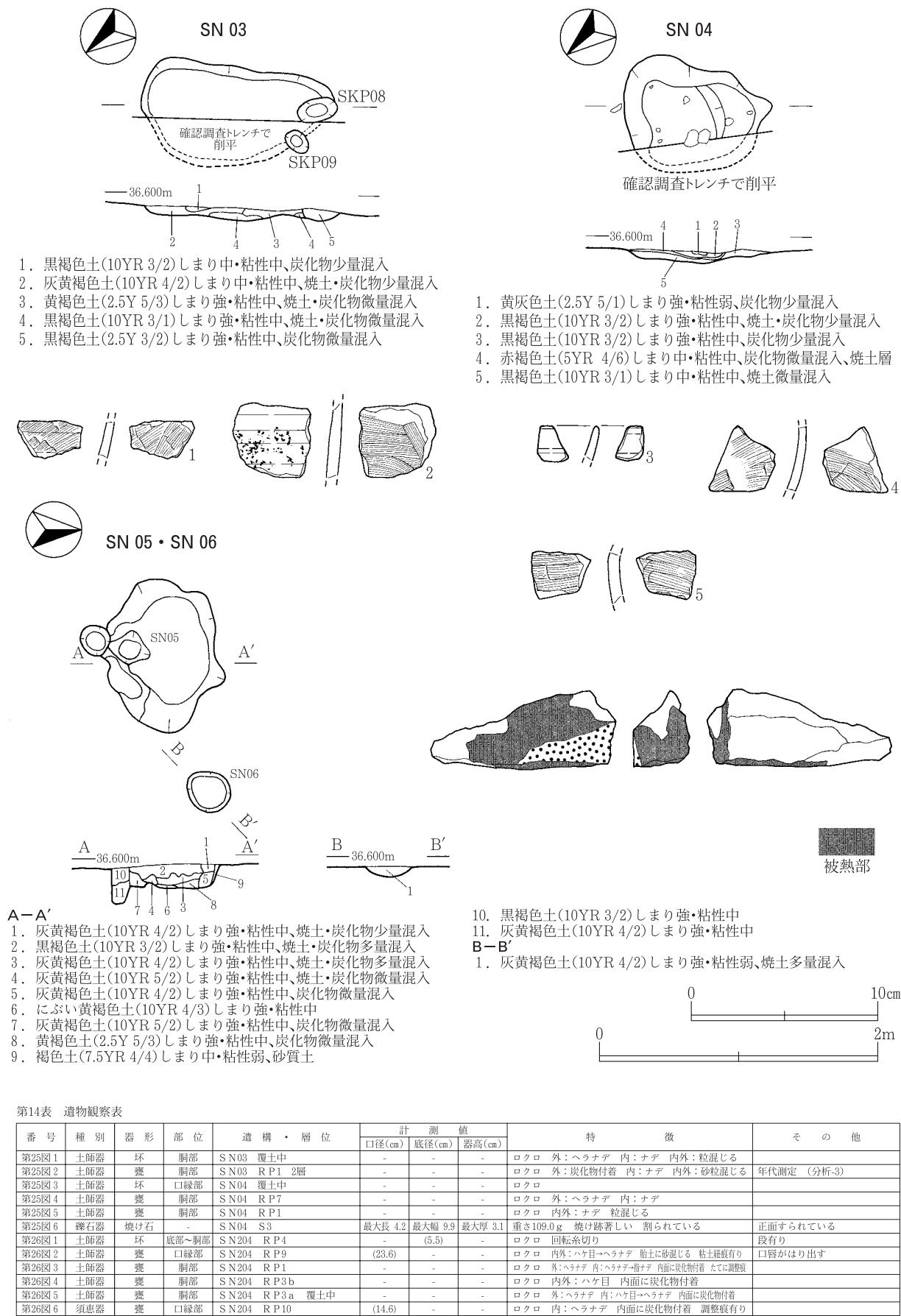
第23図 S E 207井戸跡・出土遺物(2)



第13表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第24図1	木製品	部材	-	SE 207	最大長58.6	最大幅2.5	最大厚1.8	井戸枠材の一部	
第24図2	木製品	部材	-	SE 207 覆土中	最大長50.7	最大幅6.3	最大厚4.2	井戸枠材	
第24図3	木製品	部材	-	SE 207	最大長27.8	最大幅2.9	最大厚1.9	井戸曲物北側部分の一部	
第24図4	木製品	部材	-	SE 207 4層	最大長18.8	最大幅2.4	最大厚1.9	井戸枠材の一部	(分析-18)
第24図5	木製品	部材	-	SE 207 4層	最大長18.4	最大幅5.1	最大厚2.5	井戸枠部分の一部	(分析-17)

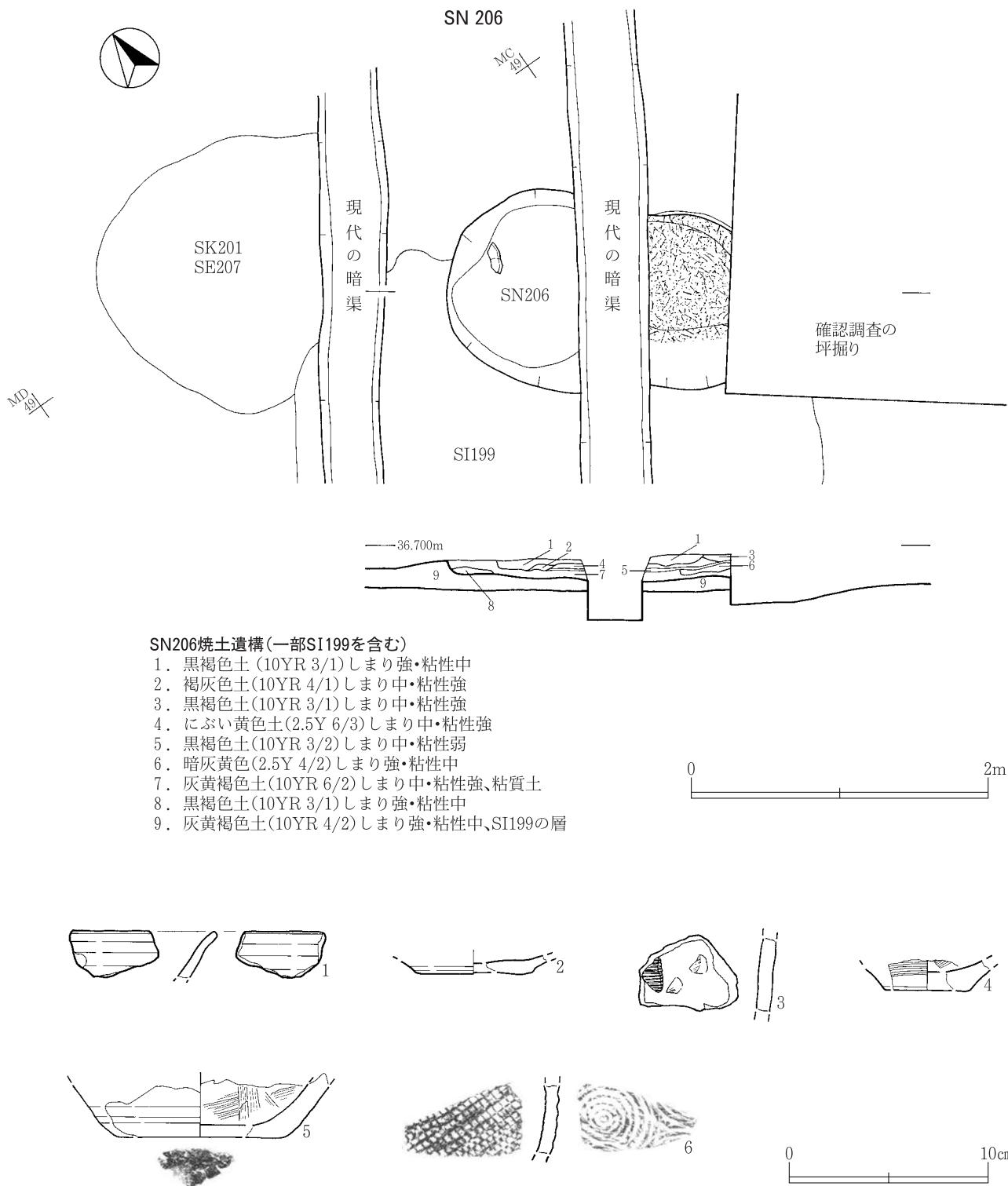
第24図 SE 207井戸跡・出土遺物(3)



第25図 SN 03・04・05・06焼土遺構・出土遺物



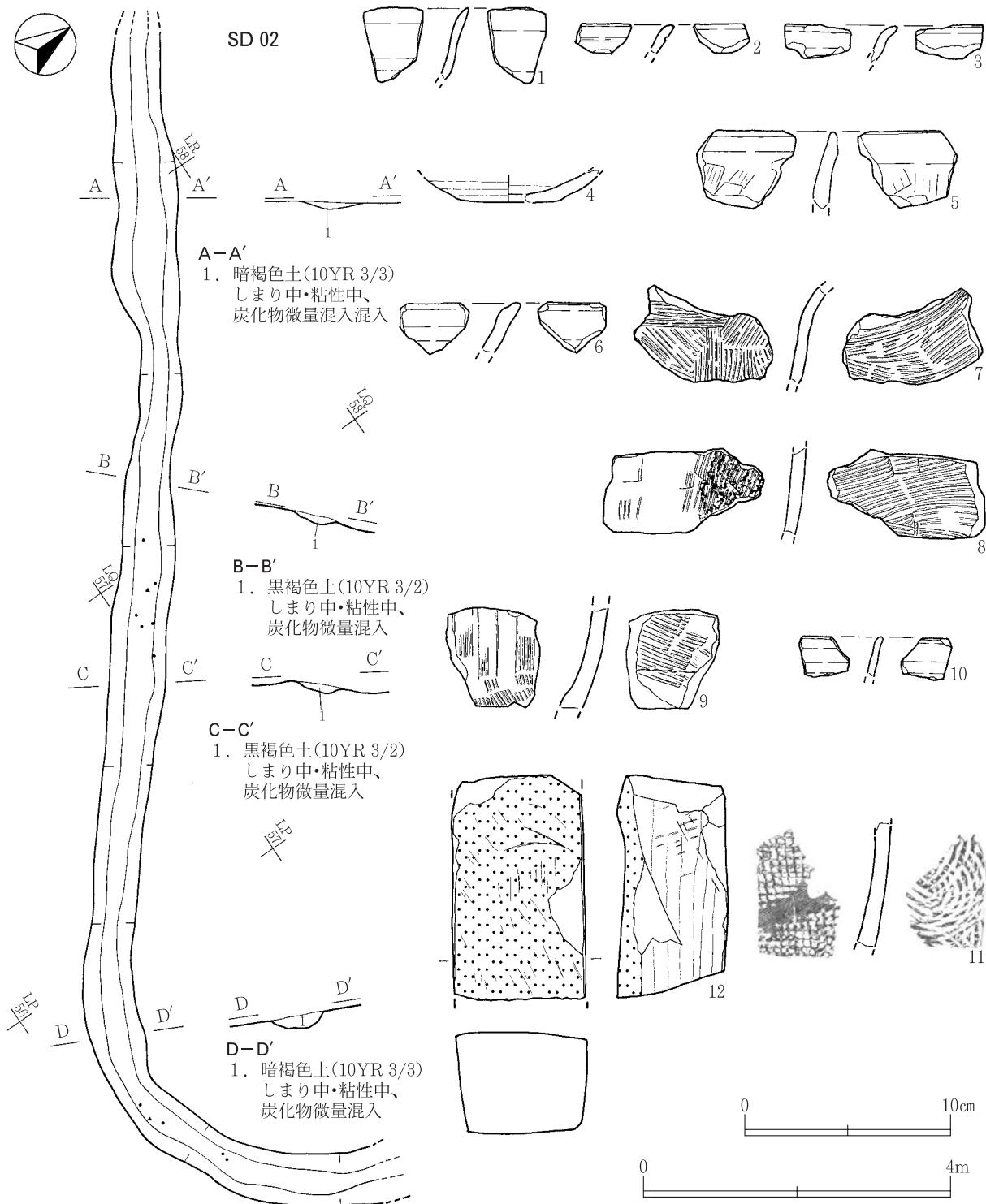
第26図 S N204焼土遺構・出土遺物



第15表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第27図1	土師器	环	口縁部	SN 206	-	-	-	クロ 内外:砂混じる	
第27図2	土師器	环	底部	SN 206 R P3	-	(5.3)	-	クロ 回転糸切り 磨滅著しい	
第27図3	土師器	甕	胴部	SN 206 覆土中	-	-	-	クロ 外:ハケ目 外面に工具痕	
第27図4	土師器	甕	底部	SN 206 覆土中	-	(4.3)	-	クロ 内外:ナデ 砂粒混じる	
第27図5	土師器	甕	底部~胴部	SN 206 R P2	-	(8.4)	-	クロ 外:ヘラナデ 内:ヘラナデ+カズリ 回転糸切り 底部外面に加工痕	
第27図6	須恵器	甕	胴部	SN 206 覆土中	-	-	-	クロ 外:布目 内:タタキ目	

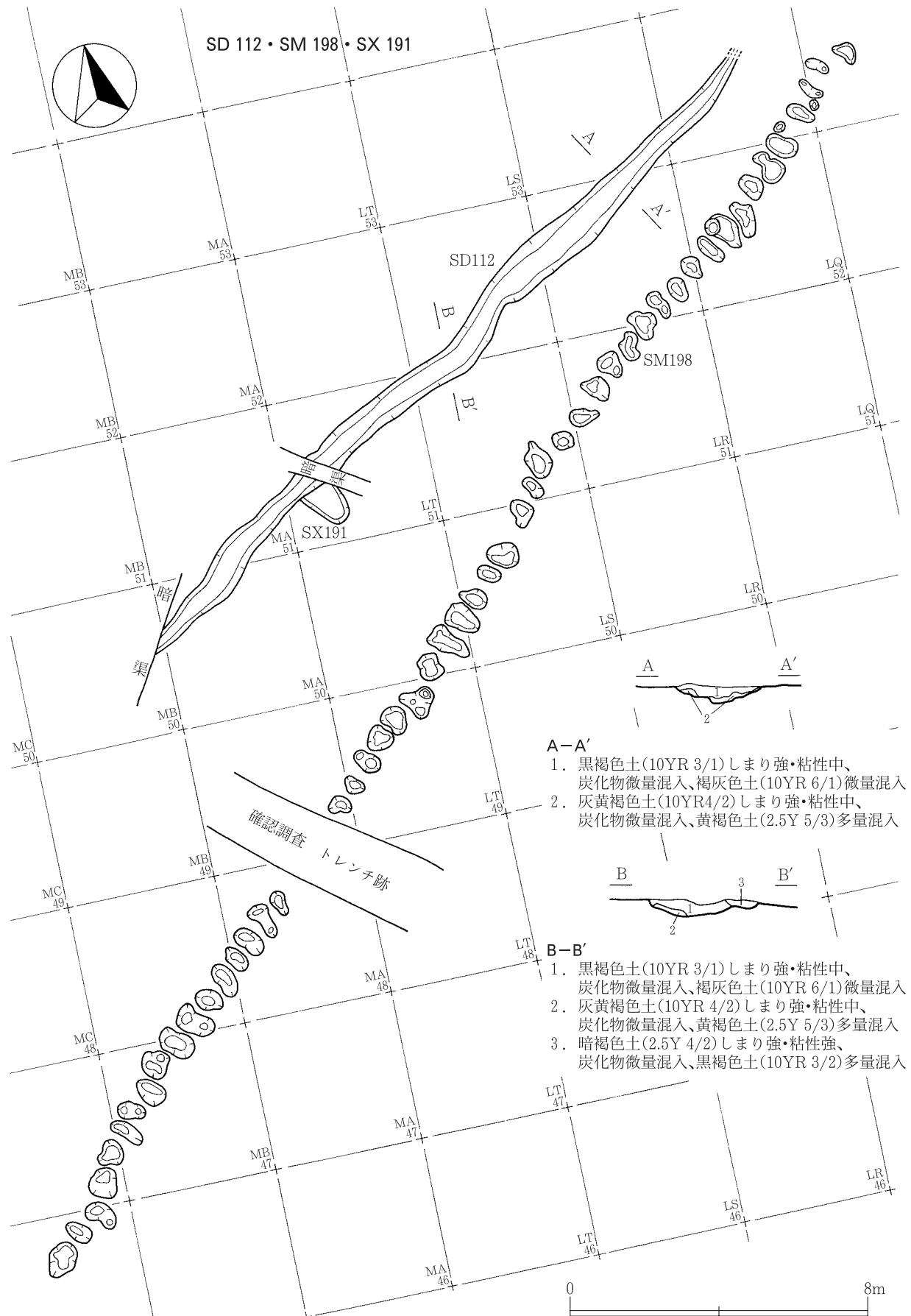
第27図 S N 206焼土遺構・出土遺物



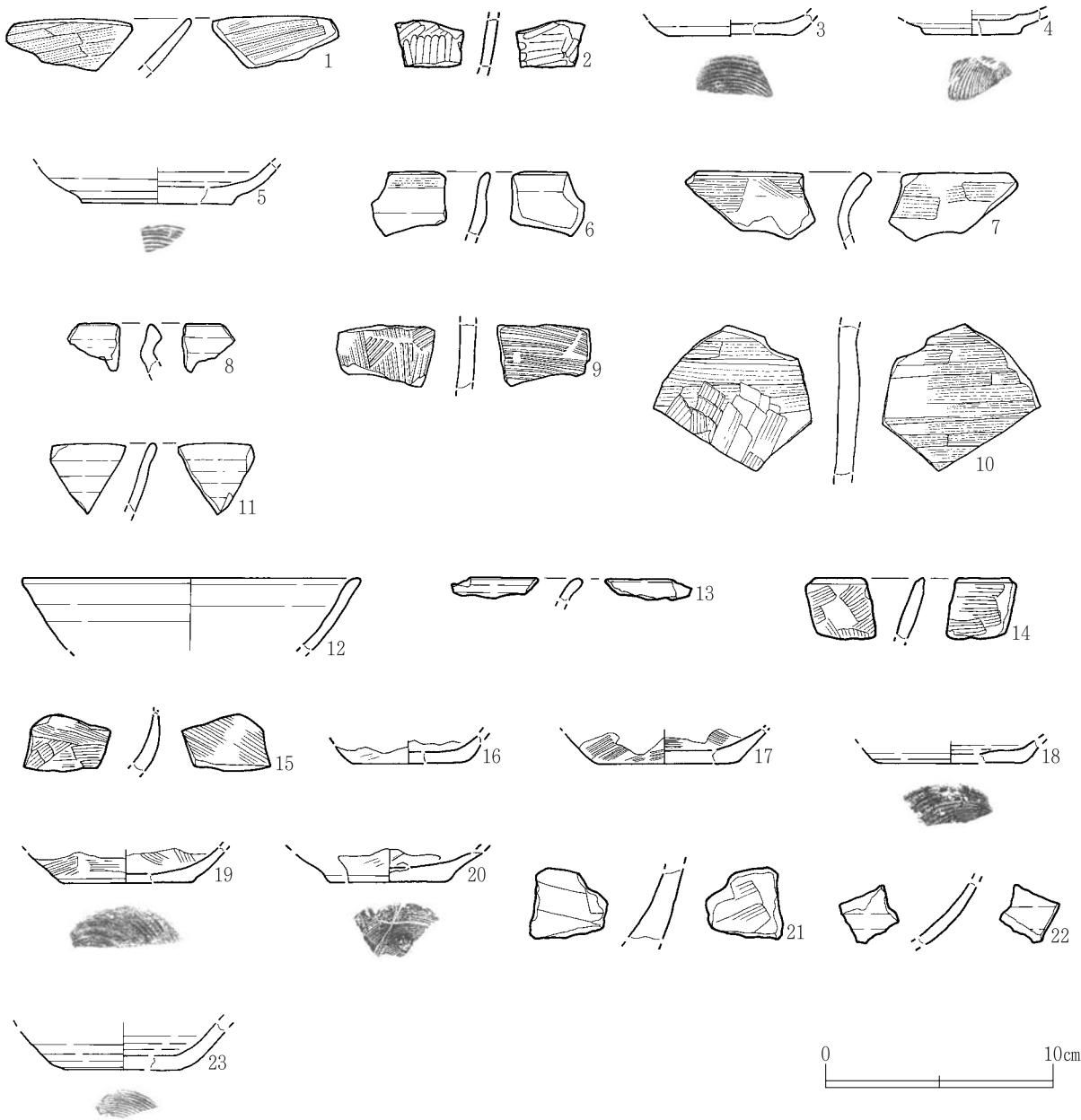
第16表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第28図1	土師器	壺	口縁部	SD 02	-	-	-	クロ	
第28図2	土師器	壺	口縁部	SD 02	-	-	-	クロ 内:一本線がある	
第28図3	土師器	壺	口縁部	SD 02	-	-	-	クロ 口縁外反する	
第28図4	土師器	壺	底部	SD 02	-	(4.8)	-	クロ 内外:砂混じる (底面磨滅)	
第28図5	土師器	甕	口縁部	SD 02	-	-	-	クロ 内外:ヘラナデ 砂混じる	
第28図6	土師器	甕	口縁部	SD 02	-	-	-	クロ 口縁外反する	
第28図7	土師器	甕	胴部	SD 02	-	-	-	クロ 内外:ハケ目 口縁直下	
第28図8	土師器	甕	胴部	SD 02 RP 11	-	-	-	クロ 外:ハケ目 炭化物付着 内:ハケ目 内外:砂粒混じる	
第28図9	土師器	甕	胴部	SD 02 RP 7	-	-	-	内外:ハケ目	輪積痕有り
第28図10	須恵器	壺	口縁部	SD 02	-	-	-	クロ	
第28図11	須恵器	甕	胴部	SD 02 RP 9	-	-	-	クロ 外:布目 内:タタキ目	
第28図12	石製品	砥石	-	SD 02 S 8	最大長10.9	最大幅6.4	最大厚5.4	重さ569.0g 一面のみ砥ぎ面有り	四角

第28図 SD 02溝跡・出土遺物



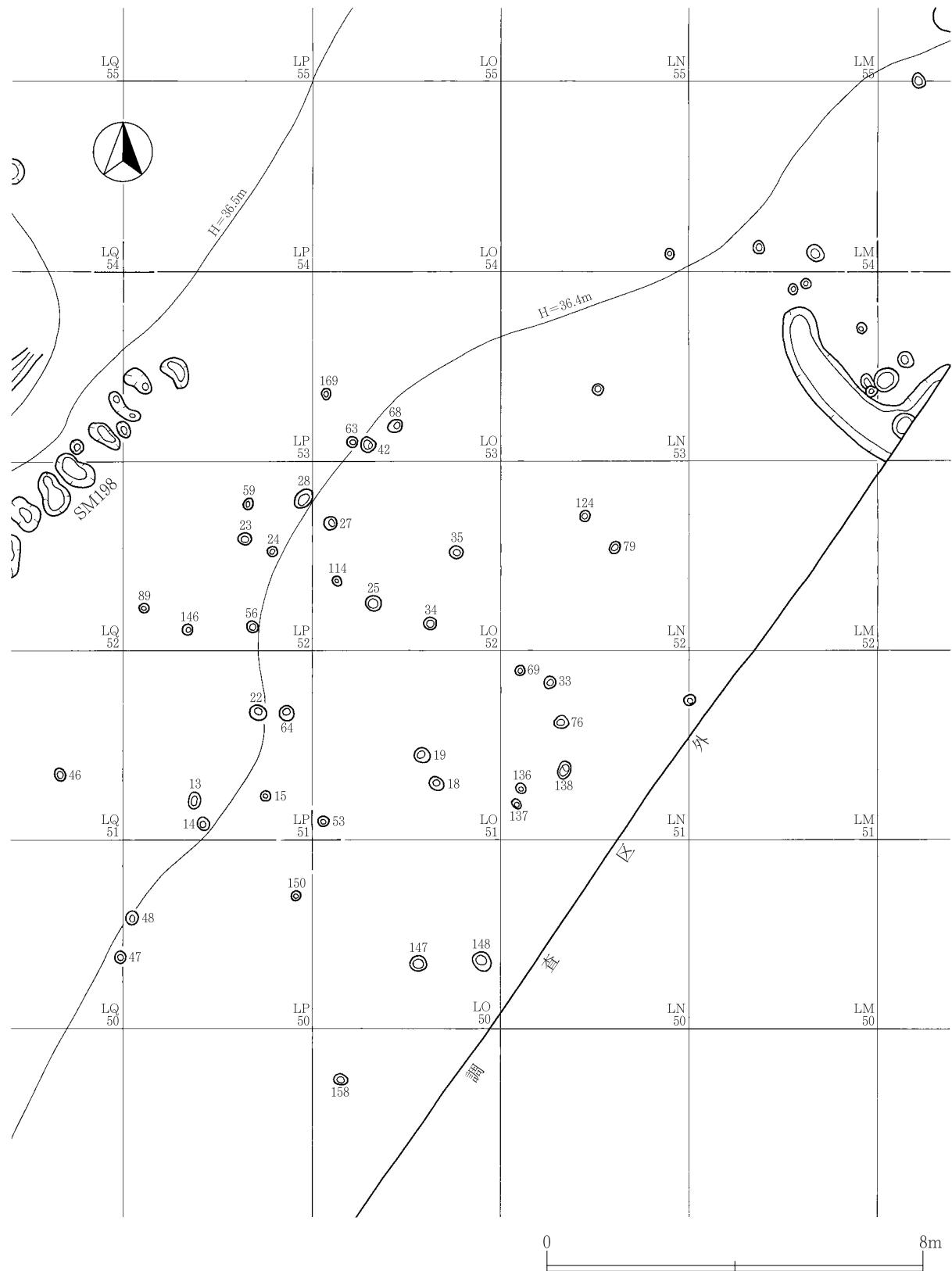
第29図 SD 112溝跡・SM 198道路状遺構



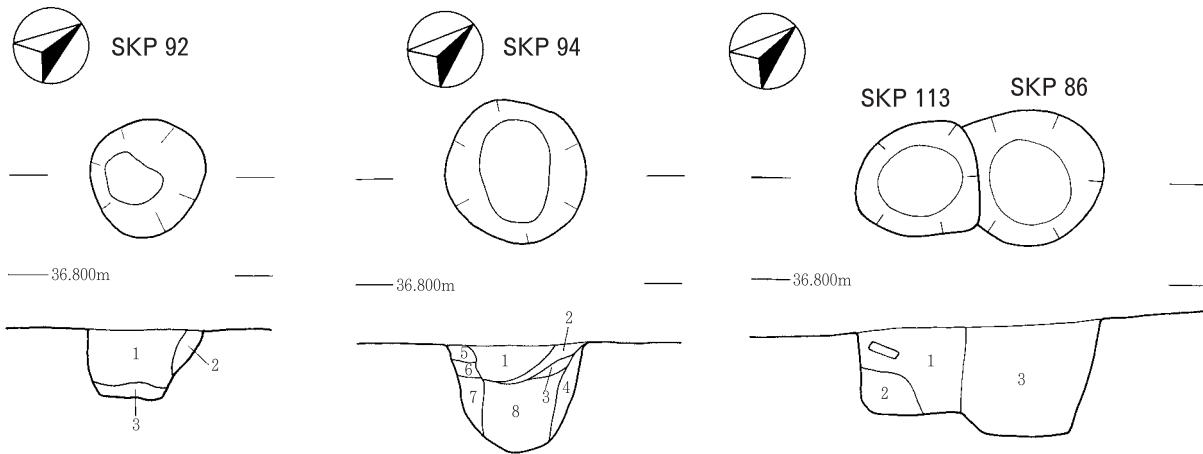
第17表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第30図1	土師器	环	口縁部	S D112 坪掘1	-	-	-	ロクロ 内外:ナデ	
第30図2	土師器	环	胴部	S D112 坪掘1	-	-	-	ロクロ 外:ナデ→ミガキ 内:ミガキ 内外:黒い	
第30図3	土師器	环	底部	S D112 坪掘1	-	(5.6)	-	ロクロ 回転糸切り	
第30図4	土師器	环	底部	S D112 坪掘1	-	(4.4)	-	ロクロ 回転糸切り	
第30図5	土師器	环	底部	S D112	-	(6.7)	-	ロクロ 回転糸切り	
第30図6	土師器	塊	口縁部	S D112	-	-	-	ロクロ 外:ナデ 口縁下の胴部ふくらむ	
第30図7	土師器	塊	口縁部	S D112 坪掘1	-	-	-	ロクロ 内外:ナデ 粒混じる	
第30図8	土師器	塊	口縁部	S D112 坪掘1	-	-	-	ロクロ 口縁外反する	
第30図9	土師器	甕	胴部	S D112 坪掘1	-	-	-	ロクロ 内外:ハケ目	
第30図10	土師器	甕	胴部	S D112 坪掘1	-	-	-	ロクロ 外:ヘラナデ→ハケ目 内:ヘラナデ 内外:砂混じる	
第30図11	須恵器	环	口縁部	S D112	-	-	-	ロクロ 内:段がある	
第30図12	土師器	环	口縁部	S M198 K38	(14.8)	-	-	ロクロ	
第30図13	土師器	环	口縁部	S M198 K26 b	-	-	-	ロクロ 口唇のみ	
第30図14	土師器	环	口縁部	S M198 K26 a	-	-	-	ロクロ 内外:ヘラナデ 口縁部の下に線入る	
第30図15	土師器	环	胴部	S M198 K41	-	-	-	ロクロ 内外:ナデ	
第30図16	土師器	环	底部	S M198 K21	-	(5.5)	-	ロクロ 回転糸切り 内外:粒混じる	
第30図17	土師器	环	覆土中	S M198	-	(6.0)	-	ロクロ 内外:ハケ目 回転糸切り	
第30図18	土師器	环	底部	S M198 K13	-	(6.2)	-	ロクロ 回転糸切り 内外:粒混じる	
第30図19	土師器	环	底部	S M198 K28	-	(5.8)	-	ロクロ 外:ナデ 回転糸切り	
第30図20	土師器	环	底部	S M198 K24	-	(5.4)	-	ロクロ 回転糸切り	
第30図21	土師器	甕	胴部	S M198 K20	-	-	-	ロクロ 外:ケズリ 内:ヘラナデ 外面が黒い	
第30図22	須恵器	环	胴部	S M198 K11	-	-	-	ロクロ	
第30図23	須恵器	环	底部	S M198 K24	-	(5.1)	-	ロクロ 回転糸切り	

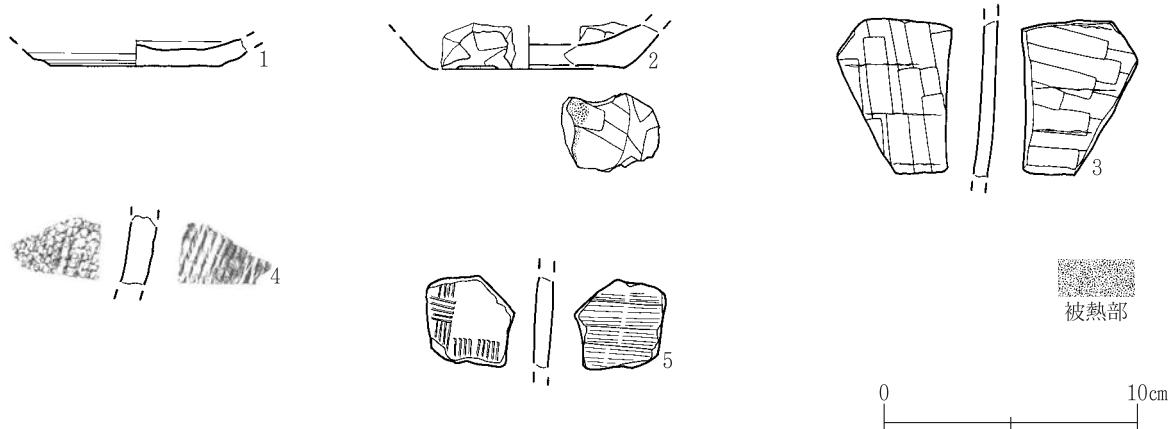
第30図 S D112溝跡・S M198道路状遺構・出土遺物



第31図 SKP柱穴様ピット配置図



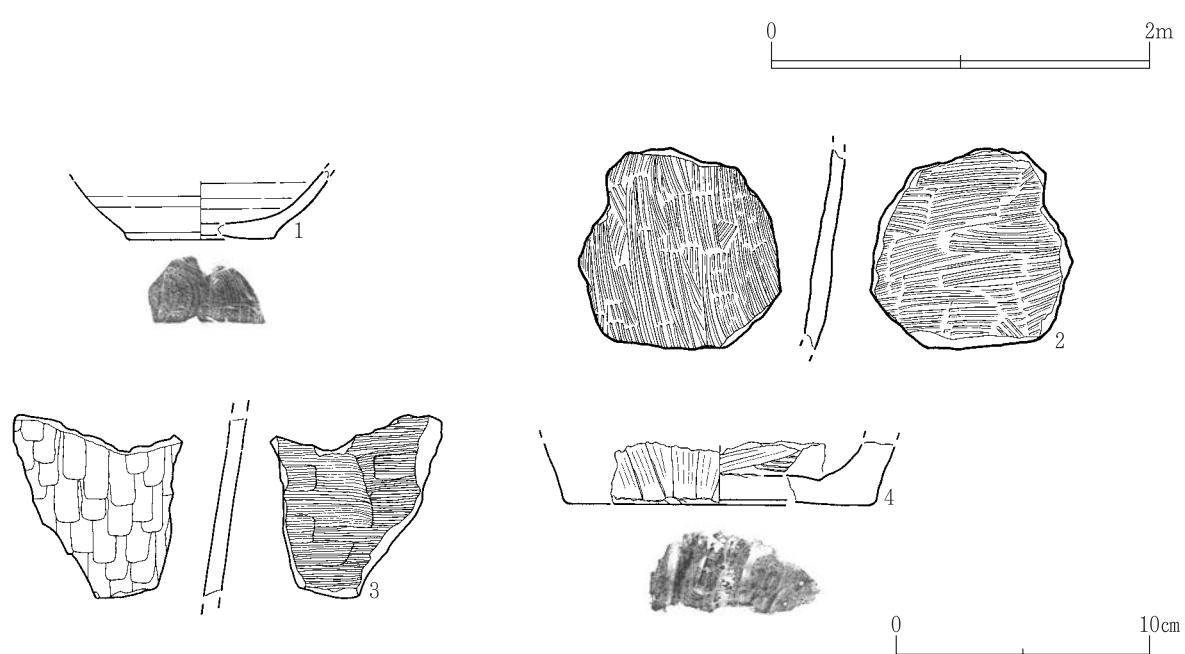
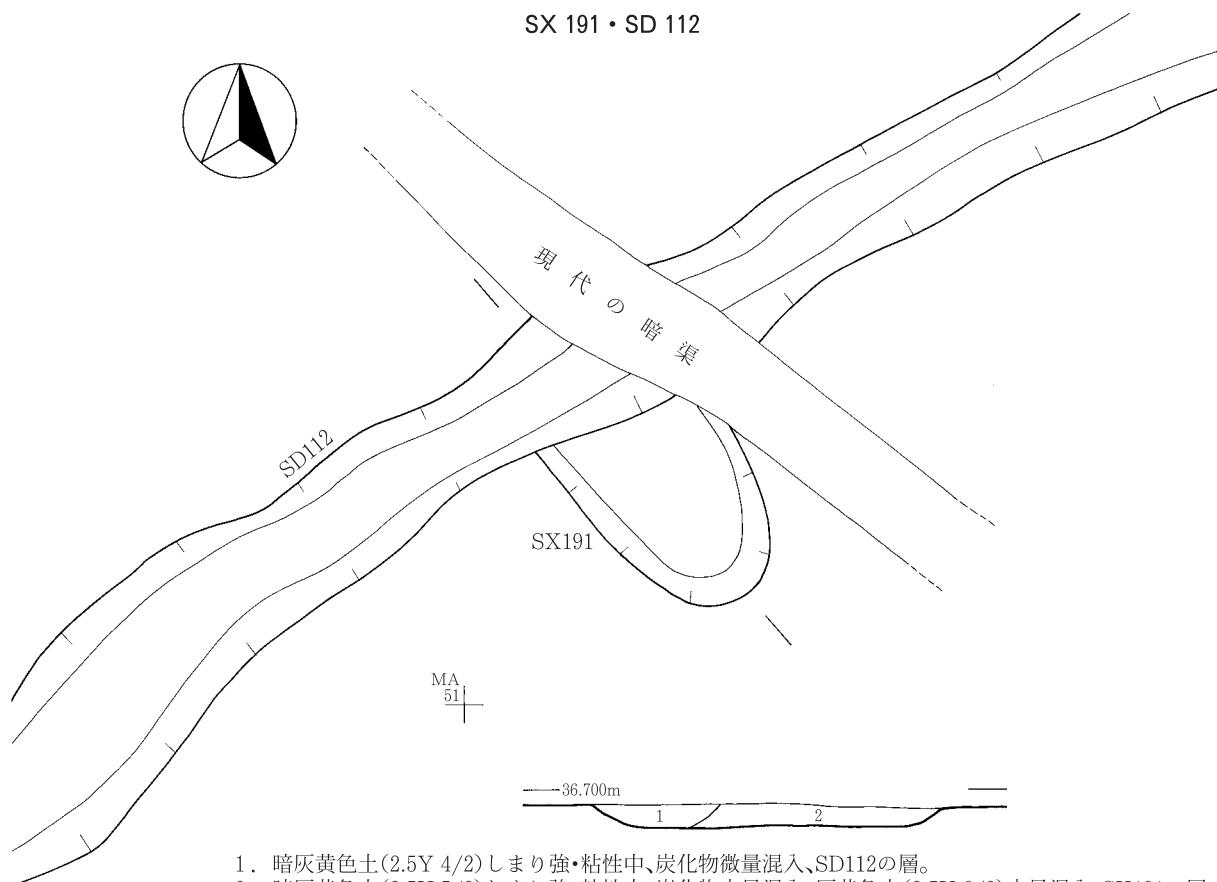
- |                              |                            |                                     |
|------------------------------|----------------------------|-------------------------------------|
| 1. 黒褐色土(10YR 3/2)しまり中・粘性中    | 1. 黒褐色土(10YR 3/2)しまり強・粘性中  | 1. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性強、SKP113の層 |
| 2. にぶい黄褐色土(10YR 5/3)しまり中・粘性中 | 2. 黄灰色土(2.5Y 4/1)しまり強・粘性中  | 2. 暗灰黄色土(2.5Y 4/2)しまり強・粘性強、SKP113の層 |
| 3. 褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性弱     | 3. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり強・粘性中 | 3. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり強・粘性中、SKP83の層  |
|                              | 4. 灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強 |                                     |
|                              | 5. 暗灰黄色土(2.5Y 5/2)しまり強・粘性弱 |                                     |
|                              | 6. 灰黄褐色土(10YR 5/2)しまり中・粘性強 |                                     |
|                              | 7. 灰黄褐色土(10YR 4/2)しまり中・粘性強 |                                     |
|                              | 8. 黒褐色土(10YR 3/2)しまり中・粘性中  |                                     |



第18表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第32図1	土師器	壺	底部	SKP94 RP1	-	(6.8)	-	ロクロ 内:ナデ へら切り 内外:砂粒混じる	
第32図2	土師器	甕	胴部	SKP92	-	(7.6)	-	ロクロ 内外:ケズリ 被熱痕有り 砂粒混じる	
第32図3	土師器	甕	胴部	SKP113 RP1	-	-	-	ロクロ 外:ケズリ 内:ナデ 内外:砂粒混じる	容器
第32図4	須恵器	甕	胴部	SKP98	-	-	-	ロクロ 外:布目 内:タタキ目	
第32図5	土師器	甕	胴部	SKP151 RP	-	-	-	ロクロ 内外:砂粒混じる 外面が黒い	

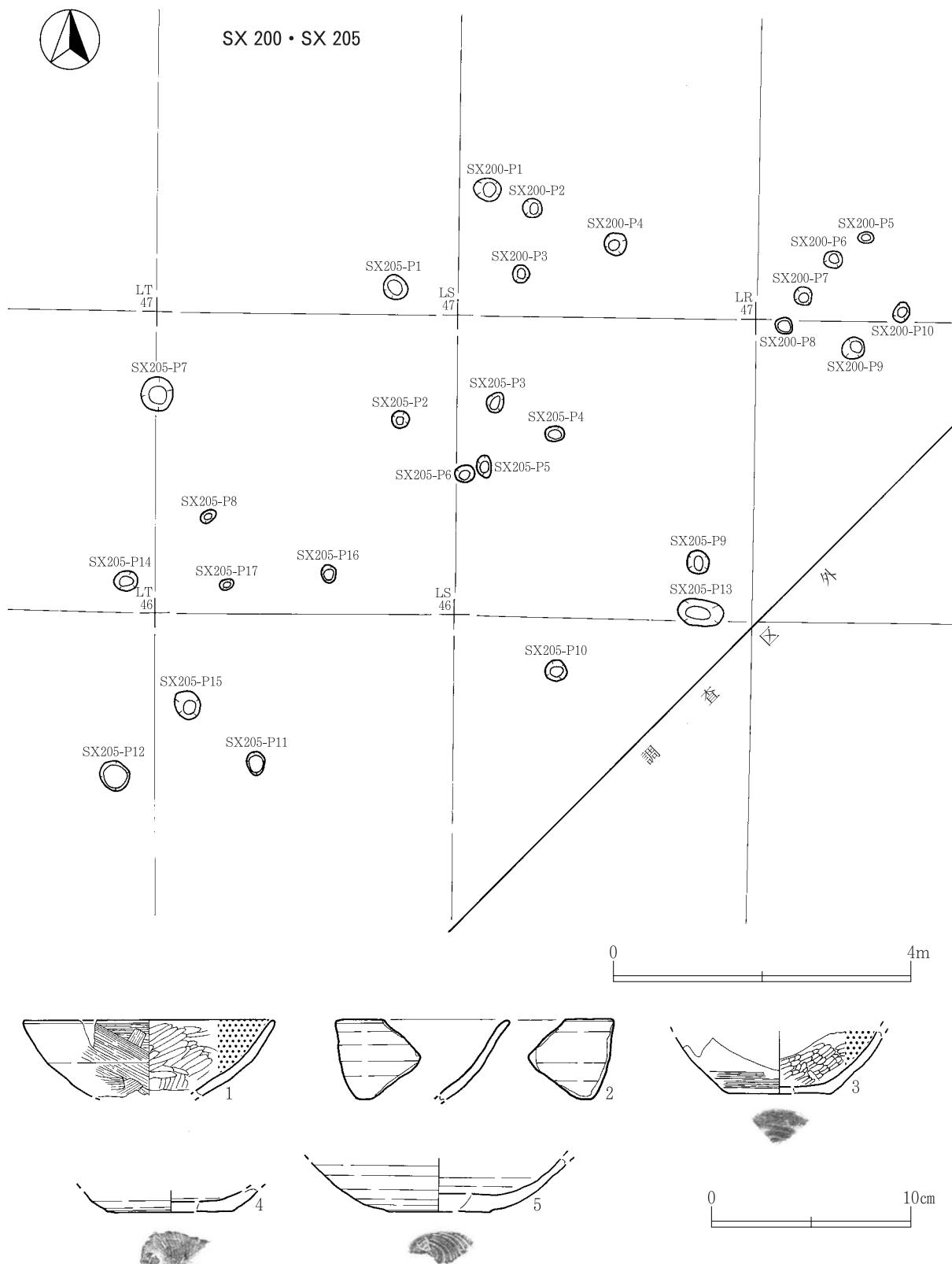
第32図 SKP 86・92・94・113柱穴様ピット・出土遺物



第19表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第33図1	土師器	环	底部	S X191 覆土中	-	(5.8)	-	ロクロ 回転糸切り	
第33図2	土師器	甕	胴部	S X191 覆土中	-	-	-	ロクロ 内外:砂粒混じる	
第33図3	土師器	甕	胴部	S X191 覆土中	-	-	-	ロクロ 内外:砂粒混じる	漆容器
第33図4	土師器	甕	底部	S X191 覆土中	-	(12.4)	-	ロクロ 外:ハケ 内:ケズリ→ナデ 粘土斑痕有り 内外:砂粒混じる	

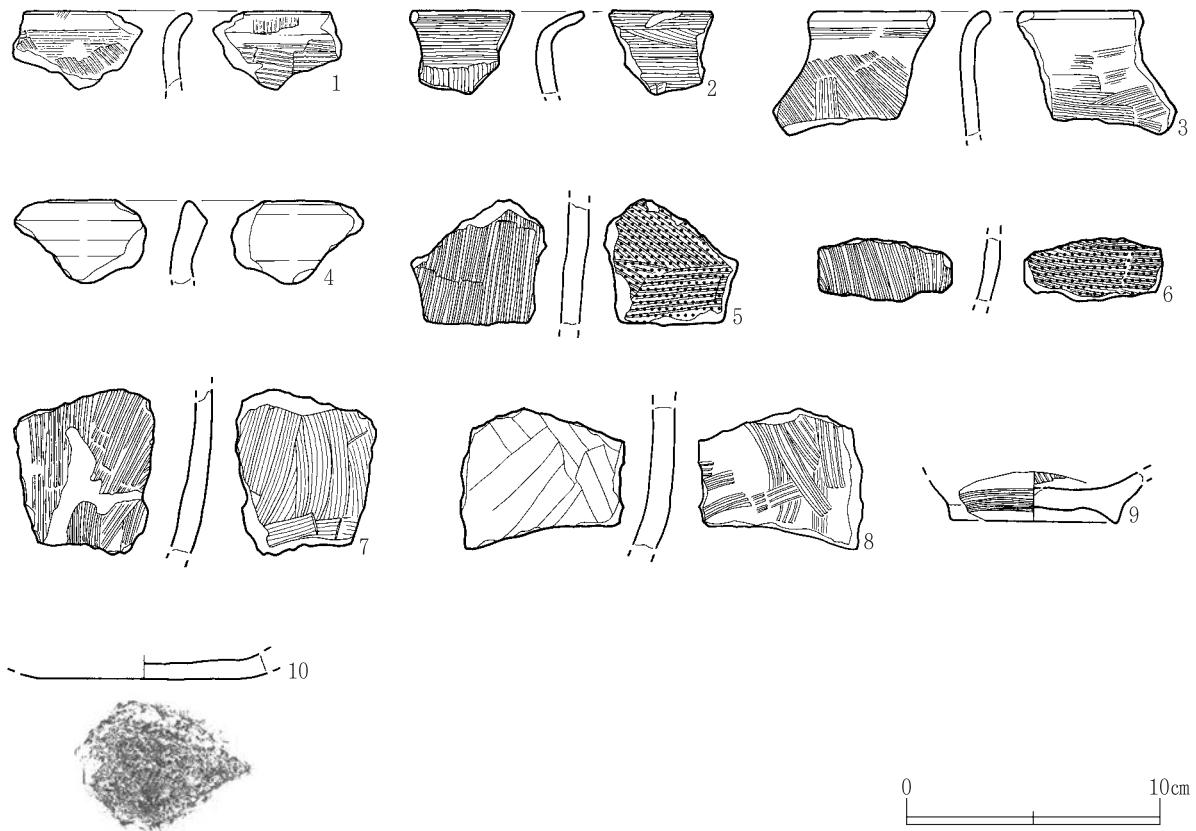
第33図 S X191その他の遺構・出土遺物



第20表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第34図1	土師器	壺	口縁部	S X 200 範疇Ⅲ層	(12.6)	-	-	ロクロ 外:ナデ 内:ミガキ→内面黒色処理	
第34図2	土師器	壺	口縁部	S X 200	-	-	-	ロクロ	
第34図3	土師器	壺	底部	S X 200 東側	-	(5.5)	-	ロクロ 外:ナデ 内:ミガキ→内面黒色処理 回転糸切り	
第34図4	土師器	壺	底部	S X 200	-	(6.4)	-	ロクロ 回転糸切り	
第34図5	土師器	壺	底部	S X 200	-	(6.1)	-	ロクロ 回転糸切り	

第34図 S X 200・205その他の遺構・出土遺物(1)



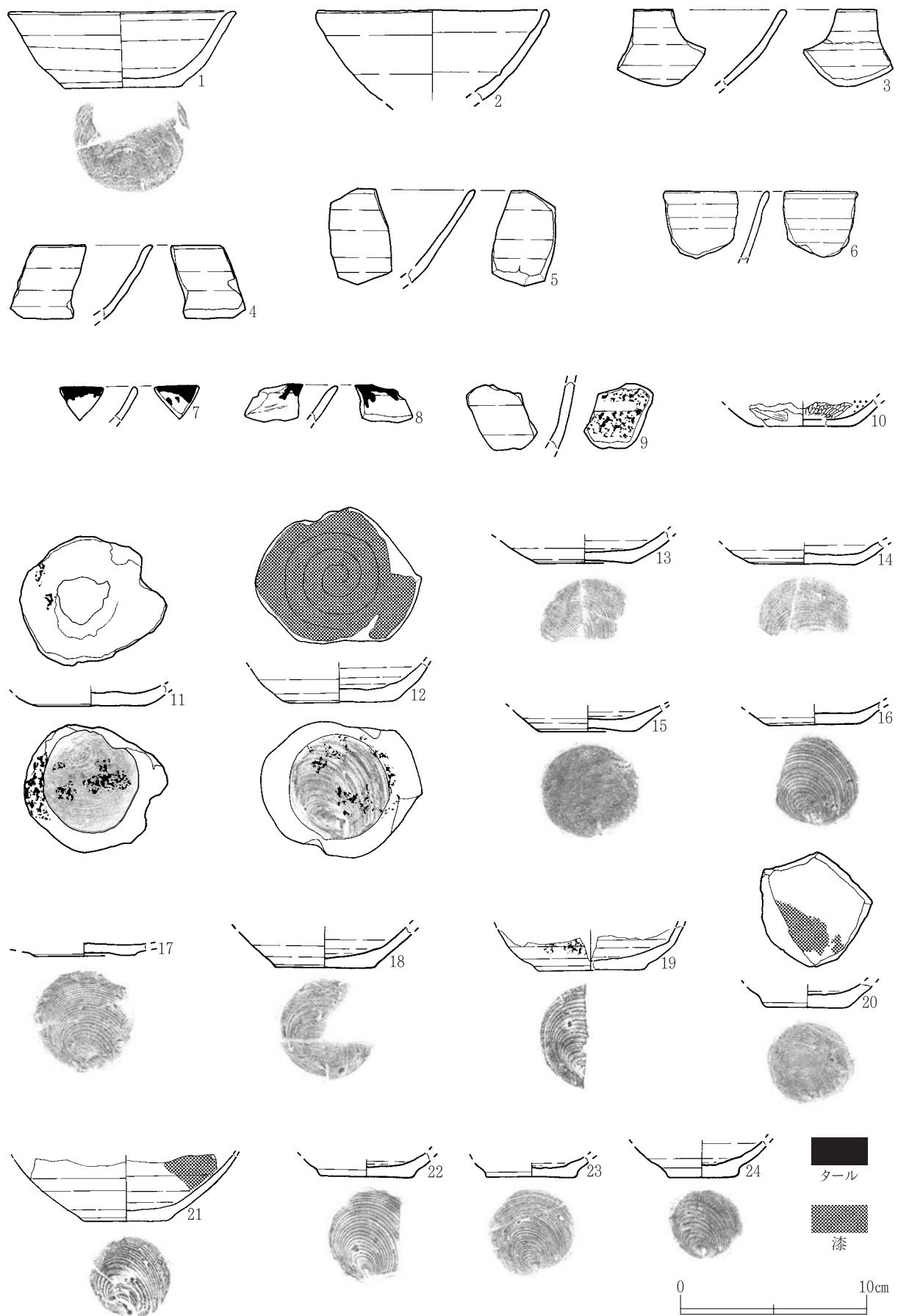
第21表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第35図1	土師器	甕	口縁部	S X200	-	-	-	ロクロ 外:ナデ→ハケ 内:ハケ目 外反する	
第35図2	土師器	甕	口縁部	S X200 P15	-	-	-	ロクロ 内外:ハケ目→ナデ 外反する	
第35図3	土師器	甕	口縁部	S X200 P5	-	-	-	ロクロ 内外:ハケ目 外反する	
第35図4	土師器	甕	口縁部	S X200	-	-	-	ロクロ 外反する	
第35図5	土師器	甕	胴部	S X200 P16	-	-	-	ロクロ 外:ハケ目 内:ハケ目→内面黒色処理 内外:砂粒混じる	
第35図6	土師器	甕	胴部	S X200	-	-	-	ロクロ 外:ハケ目 内:ハケ目→内面黒色処理 内外:砂粒混じる	
第35図7	土師器	甕	胴部	S X200 東	-	-	-	ロクロ 外:ケズリ 内:ヘラナデ	
第35図8	土師器	甕	胴部	S X200	-	-	-	ロクロ 外:ケズリ→ナデ 内:ハケ目 内外:砂粒混じる	
第35図9	土師器	台付甕	底部	S X200 東側	-	6.7	-	ロクロ 内外:ハケ目 砂粒混じる	
第35図10	須恵器	甕	底部	S X200 P15	-	8.2	-	砂底土器 底面砂底	

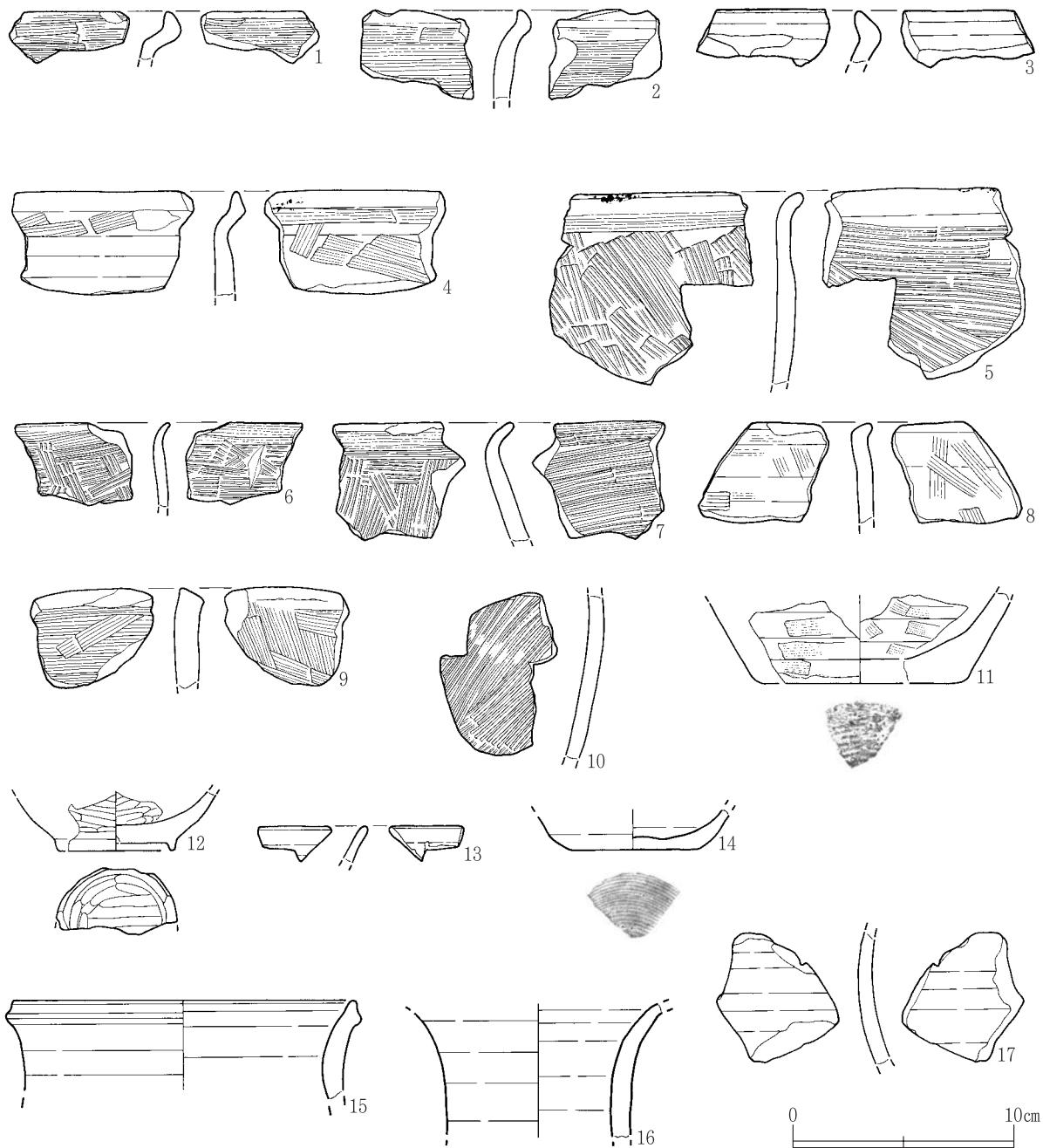
第22表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第36図1	土師器	环	ほぼ完形	S X205 R P4・L T46Ⅲ層	-	6.3	-	ロクロ 回転糸切り	赤焼き
第36図2	土師器	环	口縁部	S X205	(12.3)	-	-	ロクロ	
第36図3	土師器	环	口縁部	S X205 P31	-	-	-	ロクロ 内外:砂粒混じる	
第36図4	土師器	环	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ	
第36図5	土師器	环	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ	
第36図6	土師器	环	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ 内面に工具跡	
第36図7	土師器	环	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ 口唇部にタール付着	
第36図8	土師器	环	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ 口唇部にタール付着	
第36図9	土師器	环	胴部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外:砂粒混じる 内面に炭化物付着	
第36図10	土師器	环	底部	S X205	-	(5.8)	-	ロクロ 外:ナデ 内:ミガキ→内面黒色処理	
第36図11	土師器	环	底部	S X205	-	5.8	-	ロクロ 回転糸切り 内面に炭化物付着、剥離痕有り	
第36図12	土師器	环	底部	S X205 R P2	-	5.2	-	ロクロ 内面に漆	漆容器
第36図13	土師器	环	底部	S X205	-	5.2	-	ロクロ 回転糸切り	
第36図14	土師器	环	底部	S X205	-	(5.2)	-	ロクロ 回転糸切り	
第36図15	土師器	环	底部	S X205	-	5.1	-	ロクロ 回転糸切り 磨減著しい	
第36図16	土師器	环	底部	S X205	-	4.9	-	ロクロ 回転糸切り	
第36図17	土師器	环	底部	S X205 R P	-	5.2	-	ロクロ 回転糸切り	
第36図18	土師器	环	底部	S X205	-	5.2	-	ロクロ 回転糸切り	
第36図19	土師器	环	底部	S X205 P13	-	(5.8)	-	ロクロ 回転糸切り 外面に炭化物付着	
第36図20	土師器	环	底部	S X205	-	4.2	-	ロクロ 回転糸切り 内面に漆	
第36図21	土師器	环	底部	S X205	-	4.4	-	ロクロ 回転糸切り 内:墨付着	
第36図22	土師器	环	底部	S X205	-	5.0	-	ロクロ 回転糸切り	
第36図23	土師器	环	底部	S X205	-	4.8	-	ロクロ 回転糸切り	
第36図24	土師器	环	底部	S X205	-	3.8	-	ロクロ 回転糸切り	

第35図 S X200その他の遺構・出土遺物(2)



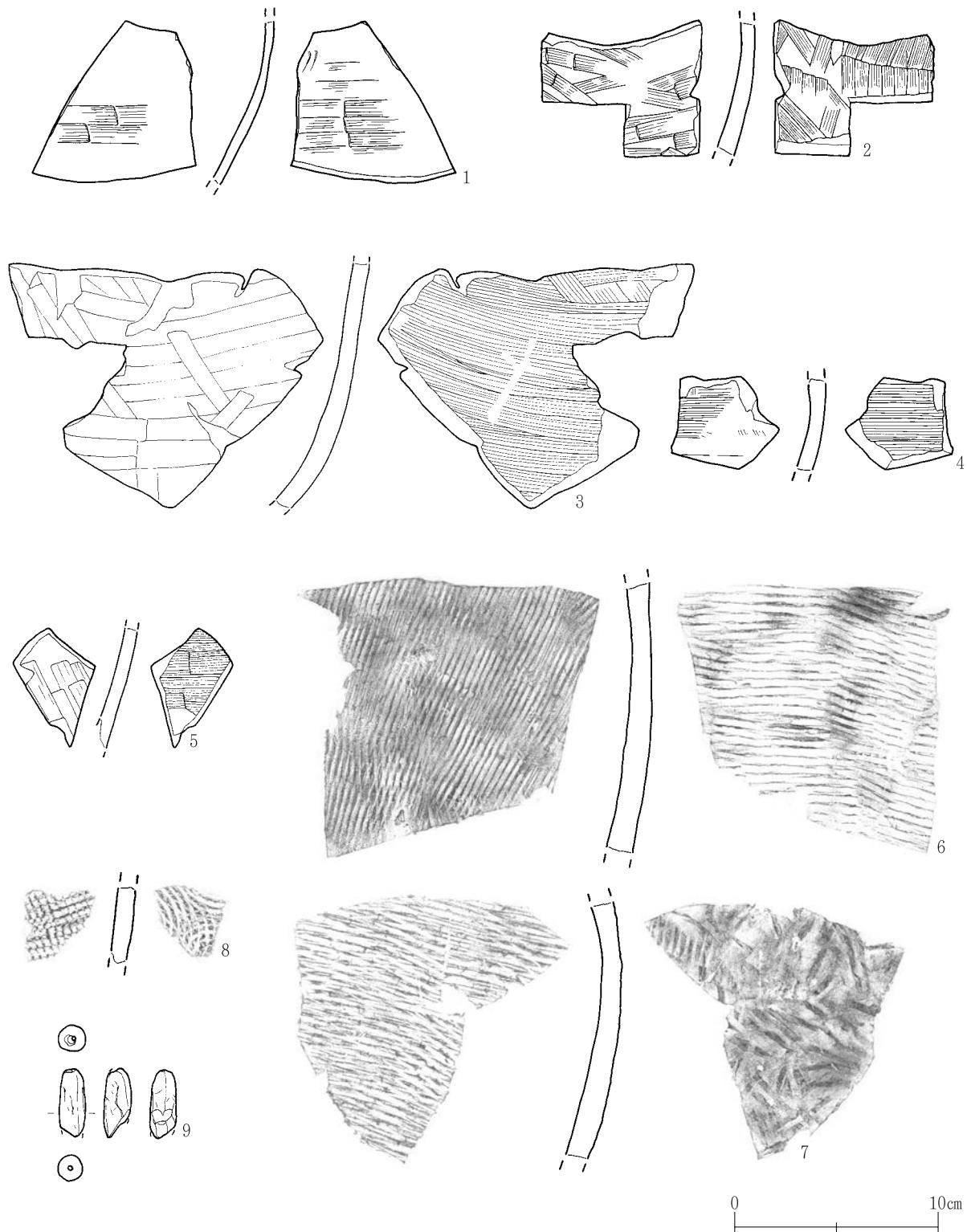
第36図 S X205その他の遺構・出土遺物(3)



第23表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第37図1	土師器	甕	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外:砂粒混じる	
第37図2	土師器	甕	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外:ナデ 砂粒だらけ	
第37図3	土師器	甕	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外:砂粒混じる	
第37図4	土師器	甕	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ 内:炭化物付着 内外:ヘラナデ 砂粒混じる	
第37図5	土師器	甕	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外:ハケ目 炭化物付着	
第37図6	土師器	甕	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ 外:ナデ→ハケ 内:ハケ	
第37図7	土師器	甕	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ 外:ナデ→ハケ 内:ナデ 内外:砂粒混じる	
第37図8	土師器	甕	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外:ナデ 砂粒混じる 磨滅著しい	口縁直下
第37図9	土師器	甕	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外:砂粒混じる	
第37図10	土師器	胴部		S X205	-	-	-	ロクロ 外:ハケ目 内外:砂粒混じる	
第37図11	土師器	甕	底部	S X205	-	(9.2)	-	ロクロ 外:ナデ 内:炭化物付着 内外:砂粒混じる	
第37図12	土師器	台付壺	底部	S X205	-	(5.3)	-	ロクロ 内外:ミガキ 黒い	台部欠損
第37図13	須恵器	环	口縁部	S X205	-	-	-	ロクロ	
第37図14	須恵器	环	底部	S X205	-	5.6	-	ロクロ 回転糸切り	
第37図15	須恵器	甕	口縁部	S X205	(15.5)	-	-	ロクロ 口縁外反	
第37図16	須恵器	壺	頸部	S X205	-	-	-	ロクロ 口縁直下	
第37図17	須恵器	壺	頸部	S X205	-	-	-	ロクロ	

第37図 S X205その他の遺構・出土遺物(4)



第24表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	遺構・層位	計測値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第38図 1	須恵器	甕	胴部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外:ナデ 薄い	
第38図 2	須恵器	甕	胴部	S X205	-	-	-	ロクロ 内外:ヘラナデ	
第38図 3	須恵器	甕	胴部	S X205 R P II層	-	-	-	ロクロ 内:ヘラナデ 外:砂粒混じる 外面に付着物	
第38図 4	須恵器	甕	胴部	S X205	-	-	-	ロクロ 白い	
第38図 5	須恵器	甕	胴部	S X205	-	-	-	ロクロ 外:ケズリ 内:ナデ 白い	
第38図 6	須恵器	甕	胴部	S X205 R P1	-	-	-	ロクロ 内外:タタキ目 大甕	
第38図 7	須恵器	甕	胴部	S X205 R P1 R P	-	-	-	ロクロ 内外:タタキ目	
第38図 8	須恵器	甕	胴部	S X205	-	-	-	ロクロ 外:布目 内:タタキ目	
第38図 9	土製品	土錐		S X205	最大長 3.5	最大幅 1.8	最大厚 1.4	重さ 4.0g 純通穴貫通 片側欠損 砂粒混じる	

第38図 S X205その他の遺構・出土遺物(5)

### 第3節 遺構外出土遺物

本遺跡の遺構外から出土した遺物は、縄文時代、古代（平安時代）、中世（鎌倉～安土桃山時代）、近世（江戸時代）以降の4つに大別される。これらの遺物の8割以上は、平安時代に比定される時期のものであり、検出遺構の内部から出土した遺物の時期と合致する。この遺構外出土遺物を第39～53図に掲載した。第39図は縄文時代の遺物、第40～50図は平安時代の遺物、第51図は中世（鎌倉時代～室町時代）の遺物、第51～52図は近世（江戸時代）の遺物である。第53図には銭貨・鉄製品・木製品を掲載したが、これ以外に小鳥田I遺跡のほぼ北側に隣接する下道溝遺跡の遺物が表採されたため、一部これも掲載した。以下、遺構外出土遺物について略述する。

第1群は、縄文時代の遺構外出土遺物である。

第39図1～5は縄文時代の土器と石器である。土器1点、石器3点、石製品1点を図示した。1は斜縄文が施された深鉢形土器の底部破片である。2はスクレイパーで一部欠損している。3は黒曜石の剝片である。原石面が一部残っており、石器加工の際に不要となった部分か。4は剝片であるが、外面に磨痕があり、礫石器の一部が欠けたものか。5は独鉛石で、両方の先端に使用痕と思われる欠損がある。中央には浅い凹みがあるものの、凹みは一周せず平坦な面を裏側に残す。

第2群は、古代（平安時代）の遺構外出土遺物である。その中の第1類を土師器、第2類を須恵器とした。

第40図1～16は土師器壺、第41図1～12および第42図1～14は土師器甕、第43図1～3は土師器塊、第43図4は土師器鍋である。

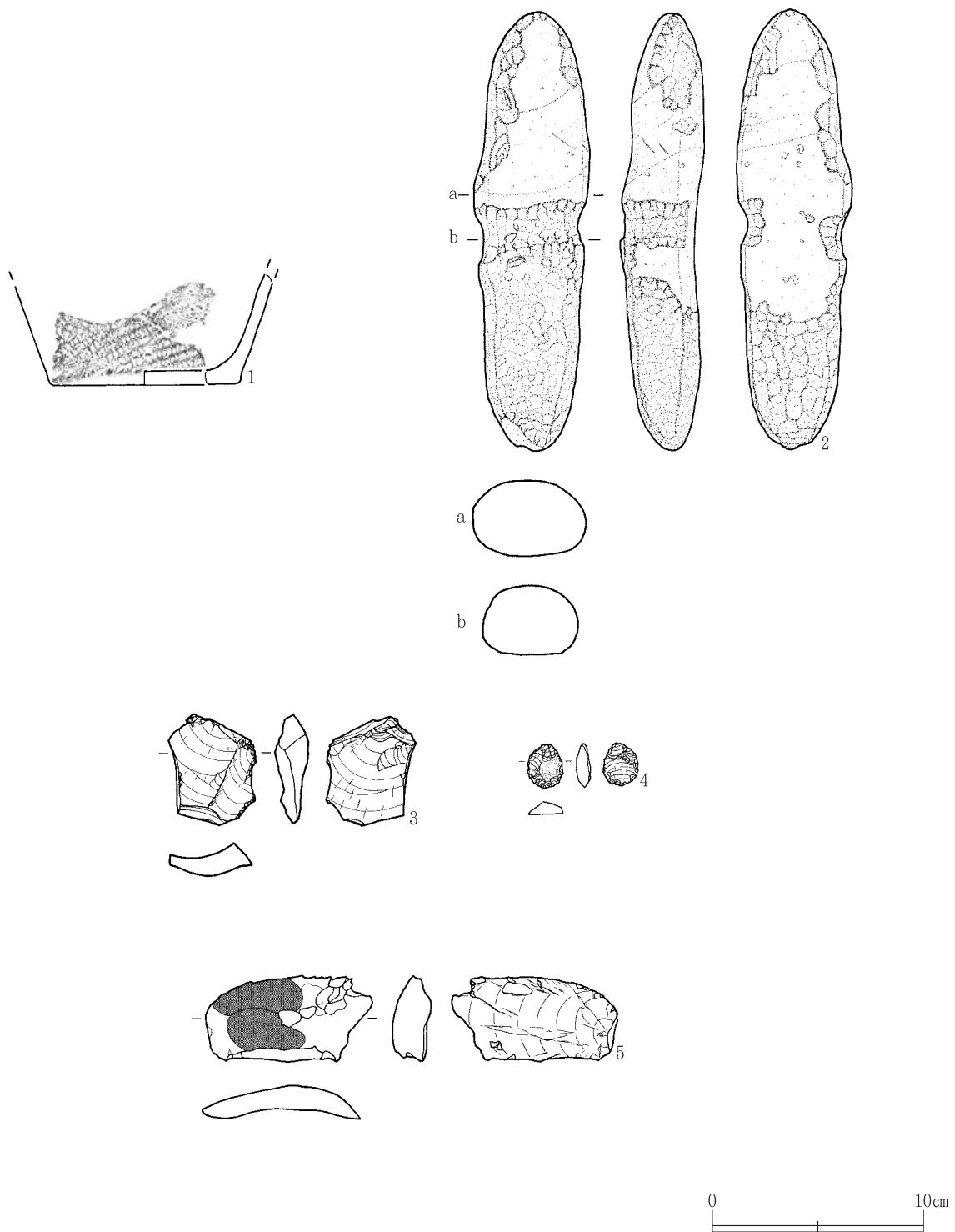
第44図1～8は須恵器壺、第44図9は須恵器塊、第44図10は須恵器鉢、第45図1～5・9、第46～47図、第48図1～4、第49図2・4～5は須恵器甕、第45図7は須恵器蓋、第45図6・8・10および第48図5～7、第49図1は須恵器壺である。

第50図1～2は灰釉陶器、3～4は緑釉陶器である。これらについては愛知県立陶磁資料館の井上喜久夫氏の教示を得た。灰釉陶器は2点とも長頸瓶の破片で、猿投窯産（K-90号窯式）9世紀後半の時期である。緑釉陶器は2点とも塊の破片で、近江窯産の10世紀前半の時期である。なお、緑釉陶器は近江窯産の最古式の深塊で、近江窯産緑釉陶器としては小鳥田I遺跡が最北の出土地となる。

第50図5は土製紡錘車、6は石製紡錘車である。石製紡錘車は外縁の一部に欠損があり、側面に線刻が施されている。このような紡錘車に線刻を施した事例は少ない。7は石帶である。裏面に紐通しの穴が6か所あり、3本の紐で固定できるようになっている。8は炭化物が付着した凹石で、古代の時期と判断した。9は砥石である。

第3群は中世・近世およびその他の遺物である。

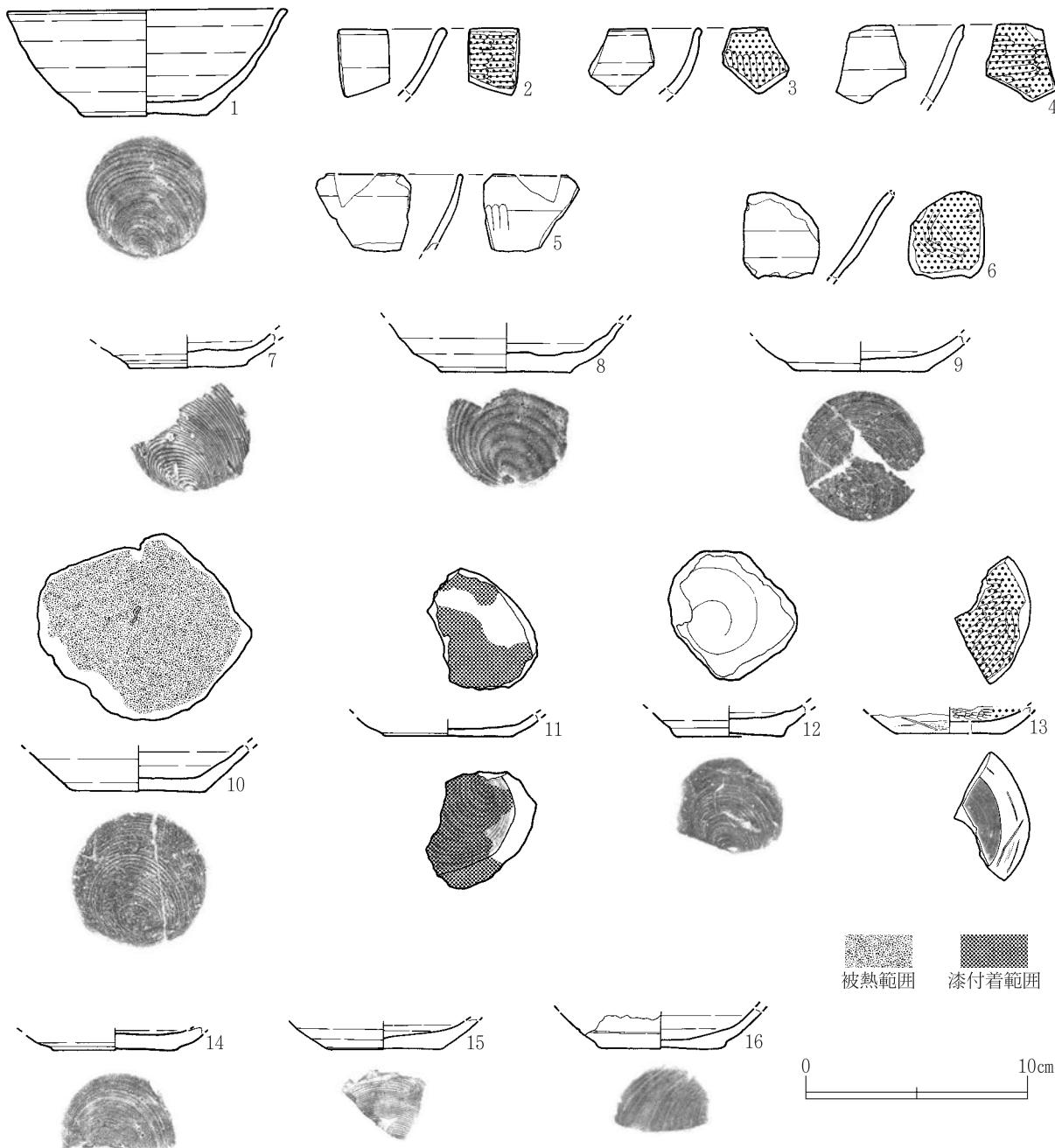
第51図1は中世陶器の擂鉢で、時期は14世紀前半と思われる。小鳥田I遺跡の中世遺物はこの1点のみである。第51図2～16、第52図1～11は近世陶磁器である。第53図1～15は近世の土器以外の遺物である。第53図1は近世の土製品、2～4は出土銭貨、6～13は鉄製品のキセル、14は木製品の椀、15は下駄である。第53図16～18は下道溝遺跡の表採遺物で、16が浅鉢の縄文土器、17が凹石兼敲石、18は近世陶磁器である。



第25表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	グリッド・位地	計測値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第39図1	縄文土器	深鉢	底部	L P55・L S55 II層	-	9.0	-	後期	
第39図2	石器	獨钻石	-	L R56 II層	最大長20.7 最大幅5.5	最大厚4.0	後期か晩期 中央にくびれあり		572.1g
第39図3	石器	剥片石器	-	L P50 II層	最大長2.5 最大幅4.1	最大厚2.0	スクリイバー		24.51g
第39図4	石器	剥片石器	-	L S51 II層	最大長1.0 最大幅1.6	最大厚0.8	黒曜石 原石面残る	刃部調整痕ある	2.12g
第39図5	礫石器	-	-	-	最大長4.0 最大幅7.8	最大厚1.8			42.0g

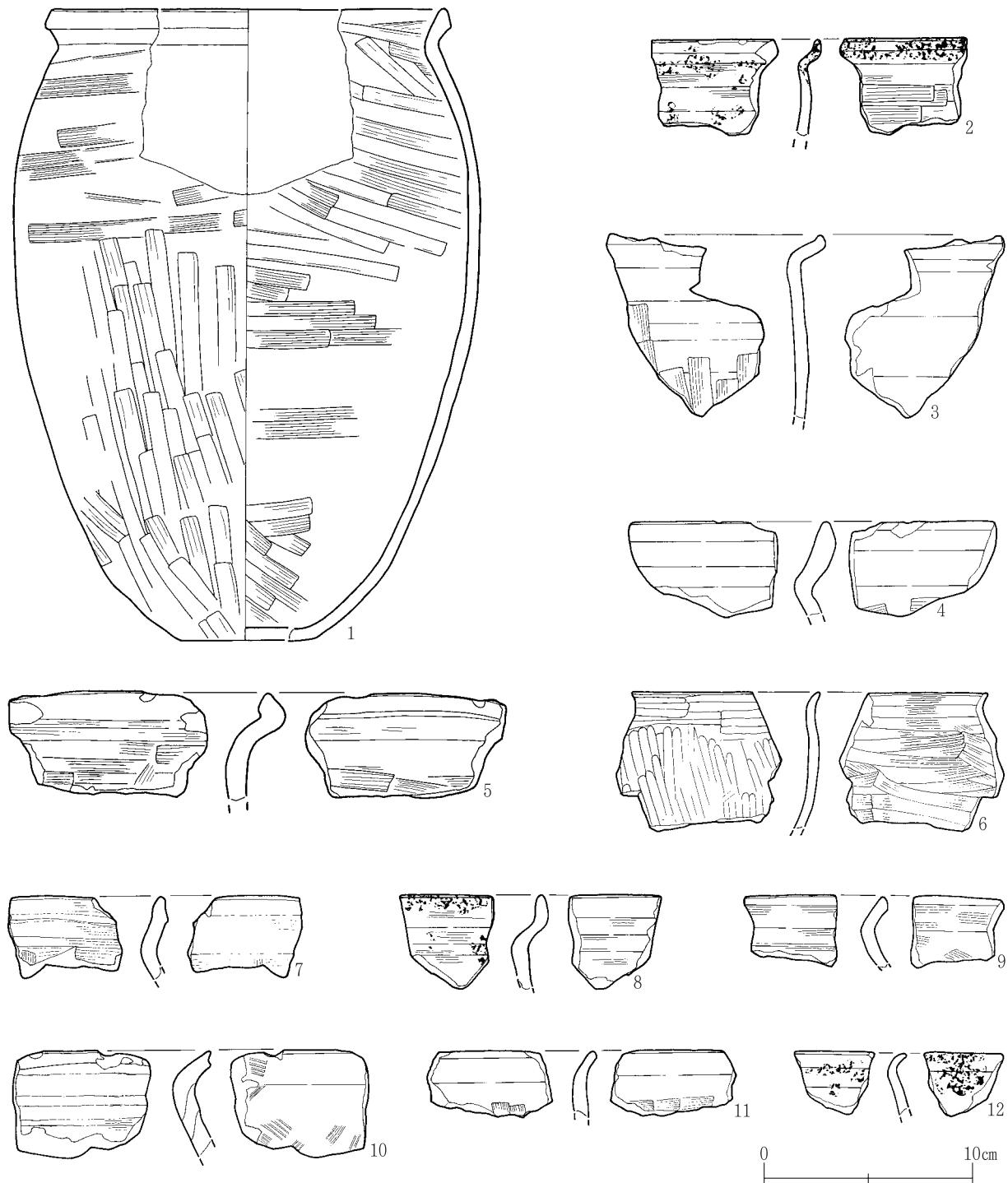
第39図 遺構外出土遺物(1)



第26表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	グリッド・位地	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第40図1	土師器	壺	ほぼ完形	LM53 R P2 II層	12.2	5.5	4.8	ロクロ 回転糸切り	
第40図2	土師器	壺	口縁部	範疇E-6トレンチIV層	-	-	-	ロクロ 内:ミガキ→黒色処理	内面黒色処理
第40図3	土師器	壺	口縁部	L T53 III層	-	-	-	ロクロ 内:ミガキ→黒色処理	内面黒色処理
第40図4	土師器	壺	口縁部	L S55 III層	-	-	-	ロクロ 外:ナデ 内:ミガキ→黒色処理	内面黒色処理
第40図5	土師器	壺	口縁部	L S55 IV層	-	-	-	ロクロ 外:よこ回転跡 内:ミガキ→黒色処理	内面黒色処理 砂粒混じる
第40図6	土師器	壺	胴部	L N53 II層	-	-	-	ロクロ 内:ミガキ→黒色処理	内面黒色処理
第40図7	土師器	壺	底部	L T53 II層	-	5.2	-	ロクロ 回転糸切り	
第40図8	土師器	壺	底部	L T53 III層 R P	-	5.6	-	ロクロ 回転糸切り	輪積み
第40図9	土師器	壺	底部	L R53 II層	-	6.0	-	ロクロ 回転糸切り	台状に高さがある
第40図10	土師器	壺	底部	L T50 II層	-	5.8	-	ロクロ 回転糸切り	内面に焼け面
第40図11	土師器	壺	底部	L M53 II層 R P	-	5.8	-	ロクロ 回転糸切り	内面に漆
第40図12	土師器	壺	底部	L Q49 III層	-	5.0	-	ロクロ 回転糸切り	磨滅著しい
第40図13	土師器	壺	底部	L N54 II層	-	(5.0)	-	ロクロ 回転糸切り	内面黒色処理 底面中央に凹み 砂粒混じる
第40図14	土師器	壺	底部	M A50 II層	-	5.6	-	ロクロ 外:ヘラケズリ 内:ハケ目・指ナデ 葉脈痕	砂粒混じる 焼成良好 ていねい
第40図15	土師器	壺	底部	L O50 II層	-	5.2	-	ロクロ 回転糸切り	10C 切り離し難 砂粒混じる
第40図16	土師器	壺	胴部～底部	LM53 II層 R P3	-	(5.8)	-	ロクロ 回転糸切り	胴部にヘラなどで強い調整痕あり

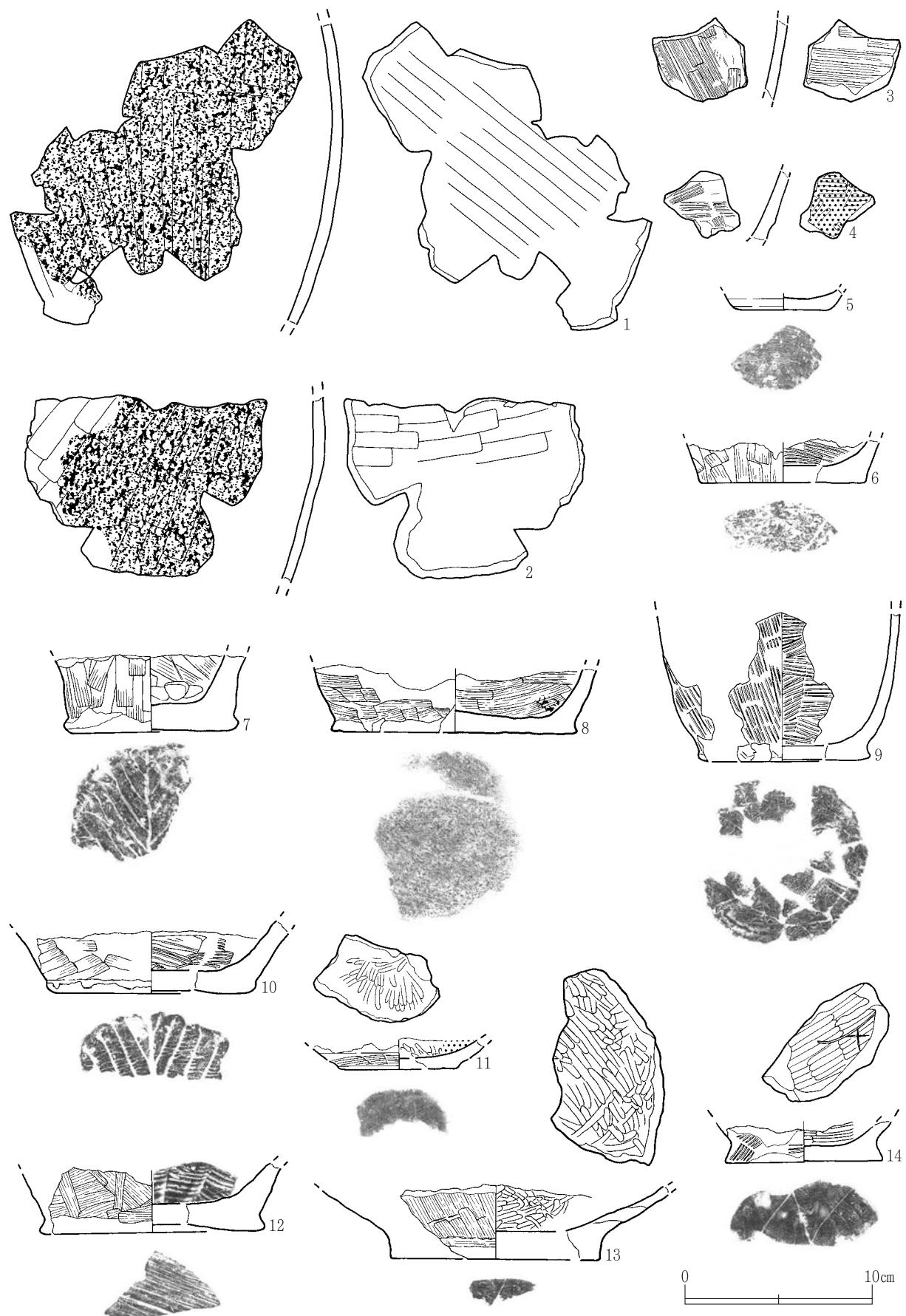
第40図 遺構外出土遺物(2)



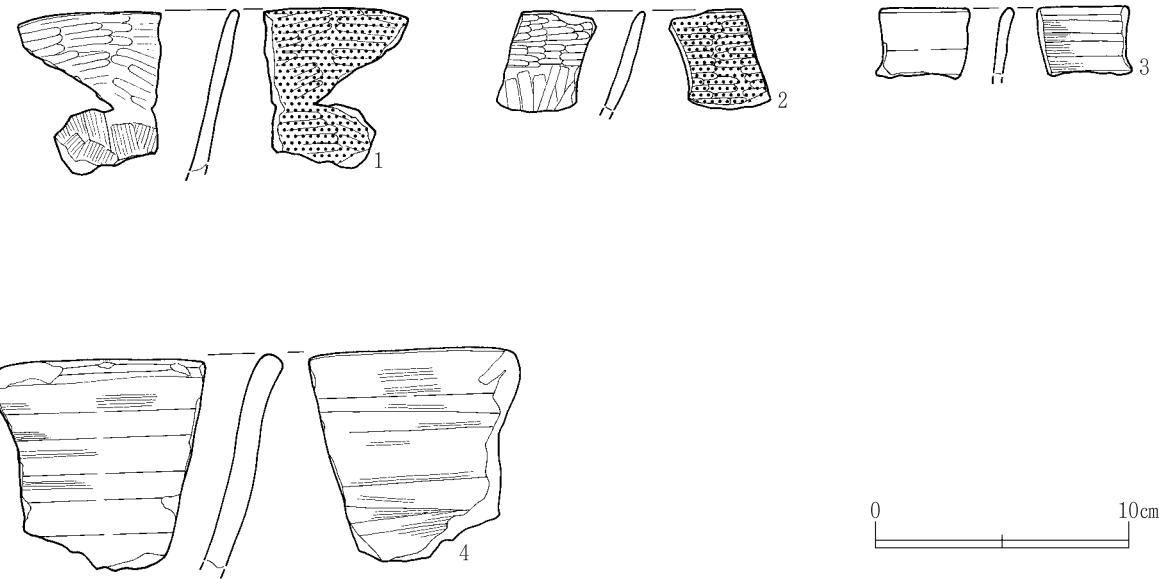
第27表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	グリッド・位地	計測値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第41図1	土師器	甕	口縁部～底部	LM53・54 II層	(18.8)	(6.4)	30.1	ロクロ 外：ヨコナデ→ケズリ 内：ナデ 煮沸に使用	砂粒混じる
第41図2	土師器	甕	口縁部	L Q55 II層	-	-	-	ロクロ 内外：ナデ 外面に炭化物付着	
第41図3	土師器	甕	口縁部	MA44 III層	-	-	-	ロクロ 内外：ナデ	口縁欠損 砂粒多量混じる
第41図4	土師器	甕	口縁部	範囲E-3トレンチ	-	-	-	ロクロ 内：ナデ	砂粒多量混じる
第41図5	土師器	甕	口縁部	L Q47 II層	-	-	-	ロクロ 内外：ナデ	砂粒多量混じる
第41図6	土師器	小甕	口縁部	LT53 III層	-	-	-	ロクロ 外：ミガキ 内：ハケ（工具跡） 外面が黒い	砂粒混じる
第41図7	土師器	甕	口縁部	L Q55 II層	-	-	-	ロクロ 外：ヘラナデ 内：ナデ 口縁下に紐状の段あり	砂粒多量混じる
第41図8	土師器	甕	口縁部	MB48 III層	-	-	-	ロクロ 外：炭化物付着 内：ナデ	外反する
第41図9	土師器	甕	口縁部	LP49 II層	-	-	-	ロクロ 内外：ナデ	外反する 砂粒混じる
第41図10	土師器	甕	口縁部	LM53 II層	-	-	-	ロクロ 外：ナデ 内：ハケ 白い	砂混じる
第41図11	土師器	甕	口縁部	LT57 II層	-	-	-	ロクロ 外：ナデ 内：ハケ	外反する
第41図12	土師器	小甕	口縁部	L Q53 II層	-	-	-	ロクロ 内外：炭化物付着	

第41図 遺構外出土遺物(3)



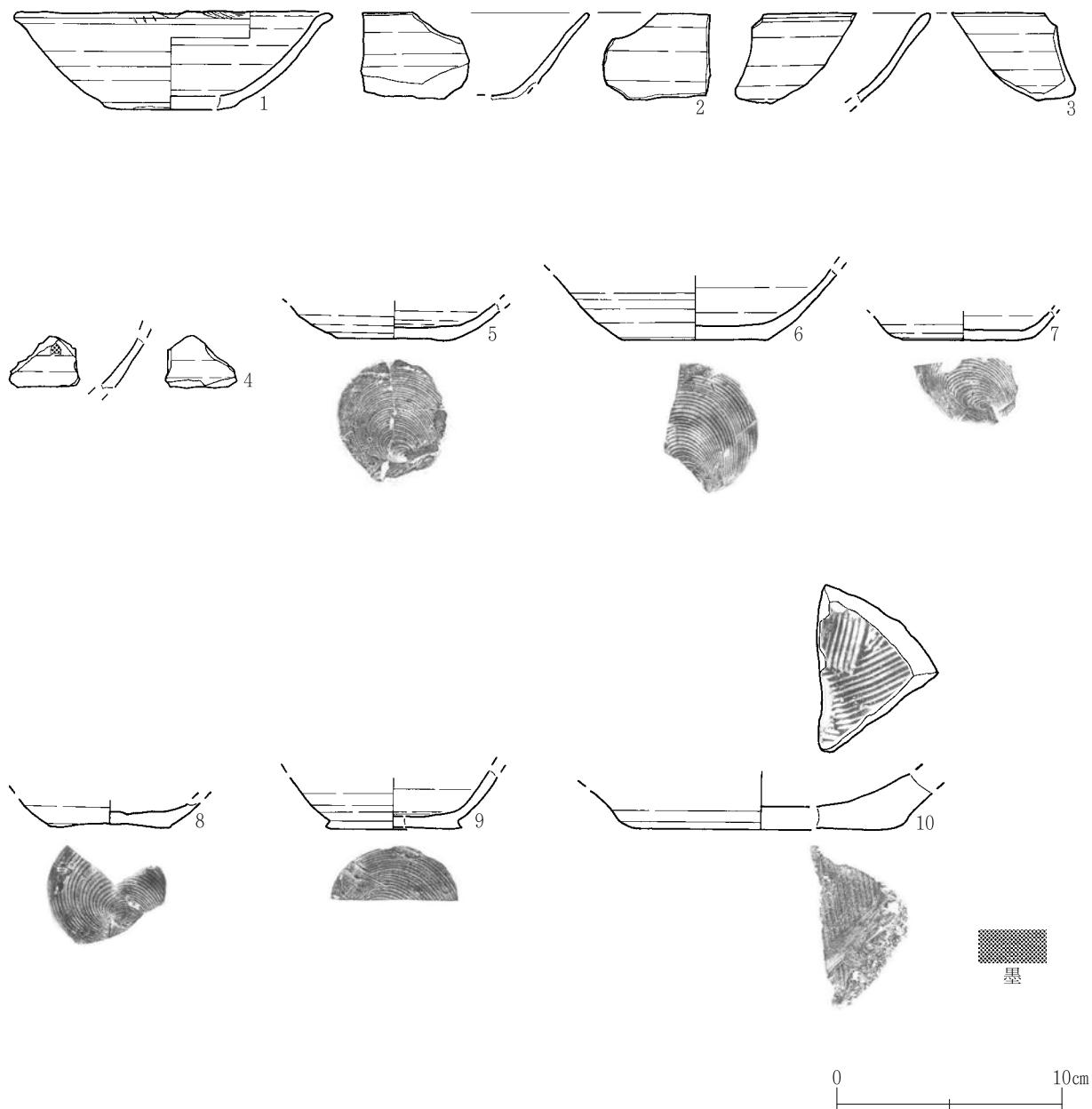
第42図 遺構外出土遺物(4)



第28表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	グリッド・位地	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第42図1	土師器	甕	胴部	LM53・54 II層	-	-	-	クロ外:ケズリ 内:ハケ→ナデ 外面に炭化物多量付着	砂粒混じる
第42図2	土師器	甕	胴部	LM53 II層 RP3・5	-	-	-	クロ外:ケズリ 内:ハケ→ナデ 外面に炭化物多量付着	砂粒混じる
第42図3	土師器	甕	胴部	L T53 II層	-	-	-	クロ外:ナデ 内:ハケ	砂粒多量混じる
第42図4	土師器	甕	胴部	L K54IV層	-	-	-	クロ外:ハケ 内:ミガキ→黒色処理	内面黒色処理
第42図5	土師器	甕	底部	L S51 II層	-	4.9	-	クロ回転糸切り	砂粒混じる 黒色土器
第42図6	土師器	甕	底部	ME51 III層	-	(8.8)	-	クロ内外:ナデ 砂底土器	砂粒混じる
第42図7	土師器	甕	底部	範疇G-3 南から10m 西へ10m 深さ80cm	-	9.0	-	クロ葉脈痕	砂粒混じる
第42図8	土師器	甕	底部	MB51 III層	-	11.8	-	クロ内面に炭化物付着 回転糸切り 砂底土器	砂粒混じる
第42図9	土師器	甕	底部	MB41 III層	-	9.0	-	クロ内外:ハケ目 底面へ↑調整	砂粒混じる
第42図10	土師器	甕	底部	MB51B層 ME46III層	-	(10.4)	-	クロ外:ヨコナデ・輪積み痕 内:ナデ 葉脈痕	砂粒混じる
第42図11	土師器	甕	底部	LN54 II層	-	6.4	-	クロ外:ナデ 内:ミガキ→黒色処理	砂粒多量混じる
第42図12	土師器	甕	底部	MC50 III層	-	(11.8)	-	クロ外:ナデ 内:ハケ 静止糸切り(筆か)	砂粒混じる
第42図13	土師器	球胴甕	底部	LL54 II層	-	11.1	-	クロ外:ケズリ 内:ハケ目 葉脈痕・砂底土器	砂粒混じる
第42図14	土師器	甕	口縁部	LN55 III層	-	(8.4)	-	クロ外:ハケ目 内:ミガキ→黒色処理 葉脈痕・内黒	内面に刻畫
第43図1	土師器	碗	口縁部	LL54・55 II層	-	-	-	クロ外:ナデ 内:ミガキ→黒色処理	内面黒色処理 煮炊きに使用
第43図2	土師器	碗	口縁部	LL54 II層	-	-	-	クロ外:よこナデ→たて 内:ミガキ→黒色処理	内面黒色処理
第43図3	土師器	碗	口縁部	LR47 II層	-	-	-	クロ外:ナデ 内:ハケ	
第43図4	土師器	鍋	口縁部	LQ49 II層	-	-	-	クロ内外:ナデ	

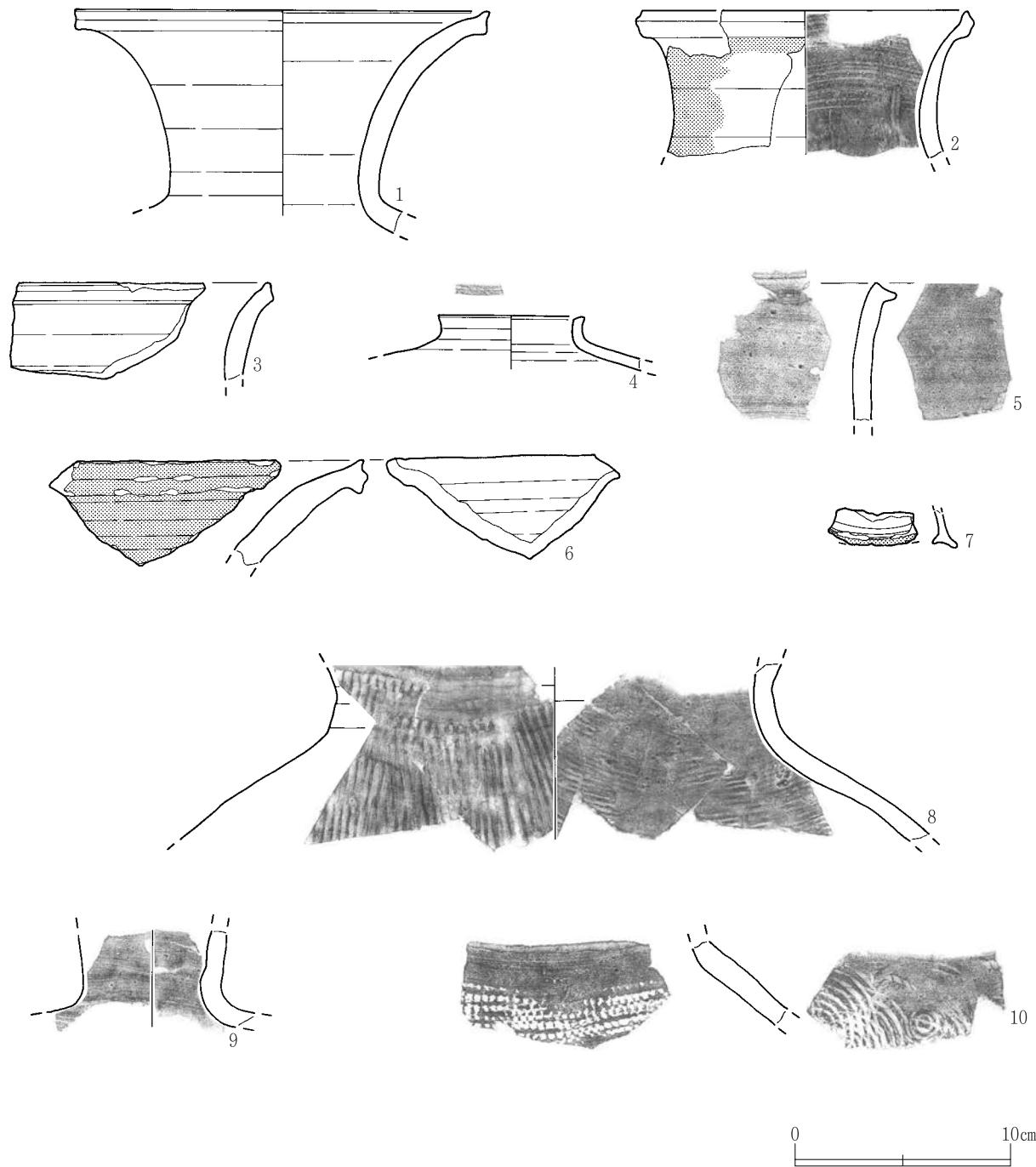
第43図 遺構外出土遺物(5)



第29表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	グリッド・位地	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第44図1	須恵器	壺	ほぼ完形	排土中	13.3	5.2	4.4	クロ回転糸切り	口縁に意図的打ち欠き
第44図2	須恵器	壺	口縁部	L T 49 II層	-	-	-	クロ外面剥離	
第44図3	須恵器	壺	口縁部	範倅C-3トレンチ	-	-	-	クロ	
第44図4	須恵器	壺	底部	L N 54 II層	-	-	-	クロ墨書きあり	
第44図5	須恵器	壺	底部	L Q 47 II層 R P	-	5.0	-	クロ回転糸切り	
第44図6	須恵器	壺	底部	L Q 57 II層	-	6.4	-	クロ回転糸切り	
第44図7	須恵器	壺	底部	L S 57 II層	-	6.0	-	クロ回転糸切り	
第44図8	須恵器	壺	底部	L N 52 II層 L M 53 II層	-	5.3	-	クロ回転糸切り	
第44図9	須恵器	壺	底部	L T 53 III層	-	6.0	-	クロ回転糸切り	台状
第44図10	須恵器	擂鉢	底部	M G 43 III層	-	(12.8)	-	クロ底面に調整痕あり	

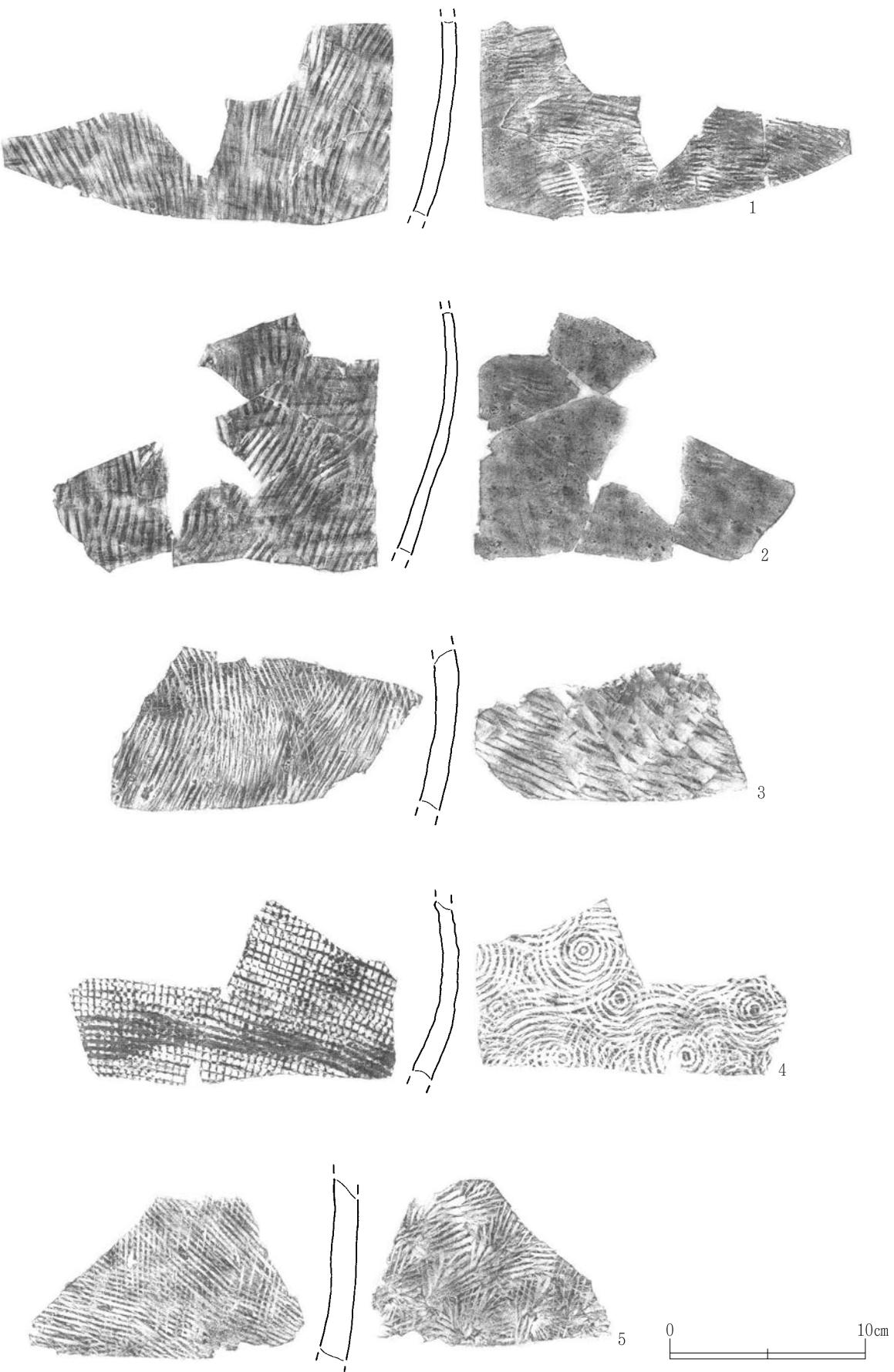
第44図 遺構外出土遺物(6)



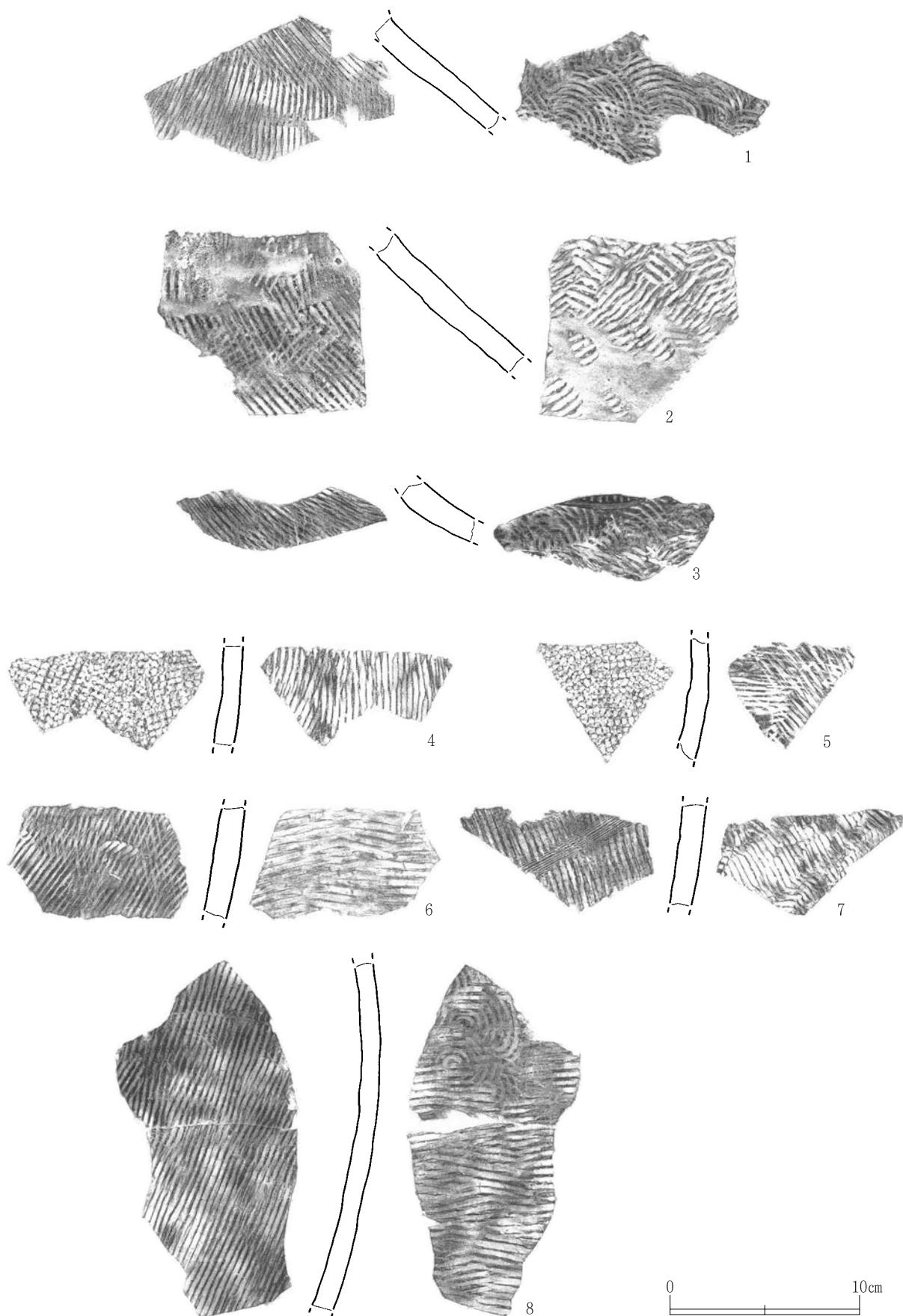
第30表 遺物観察表

番 号	種 別	器 形	部 位	グ リッド・位 地	計 測 値			特 徴	そ の 他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第45図 1	須恵器	壺	口縁部	MB46・47 LT47・48 LS50 LM53 MC42Ⅲ層 LQ52 篠山E5トレンチ	19.1	-	-	ロクロ 大型壺	
第45図 2	須恵器	壺	口縁部	MD45Ⅱ層	-	-	-	ロクロ 外：施釉	
第45図 3	須恵器	壺	口縁部	LS46Ⅱ層	-	-	-	ロクロ	砂粒混じる
第45図 4	須恵器	短頸壺	口縁部	LT49Ⅱ層MC44Ⅲ層	-	-	-	ロクロ	
第45図 5	須恵器	壺	口縁部	MD47Ⅲ層	-	-	-	ロクロ	張り出し
第45図 6	須恵器	大甕	口縁部	LT45Ⅱ層	-	-	-	ロクロ	口縁部に施釉
第45図 7	須恵器	蓋	口縁部	LO49Ⅱ層	-	-	-	ロクロ	口縁に横の張り出し
第45図 8	須恵器	大甕	頸部	MD48・49Ⅲ層MC49Ⅲ層	(19.4)	-	-	ロクロ 内外：タタキ目	
第45図 9	須恵器	壺	頸部	MD51Ⅱ層MM47Ⅱ層	-	-	-	ロクロ 未調整部あり	
第45図10	須恵器	壺	頸部	LP57R P2	-	-	-	ロクロ 外：布目 内：タタキ目	

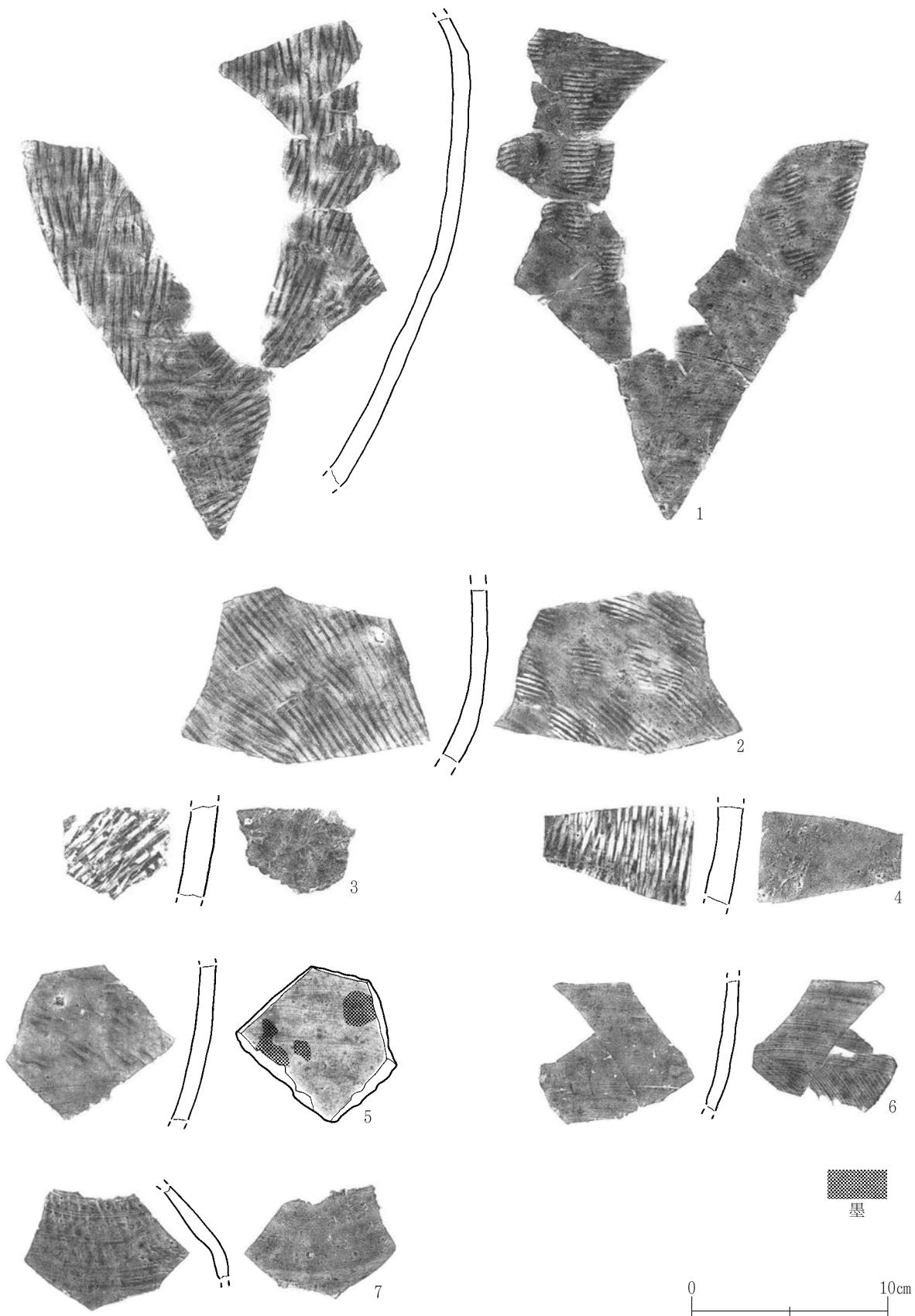
第45図 遺構外出土遺物(7)



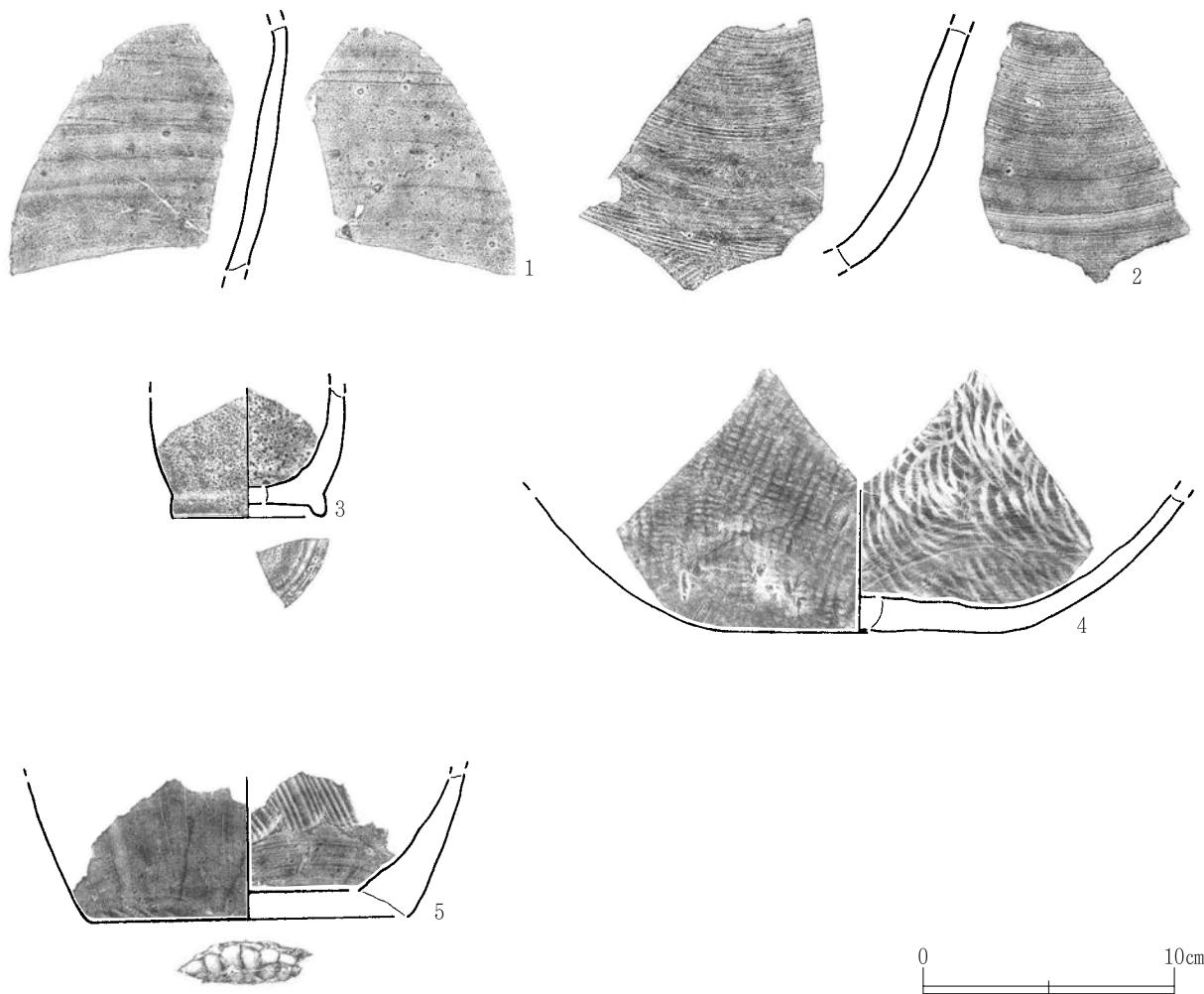
第46図 遺構外出土遺物(8)



第47図 遺構外出土遺物(9)



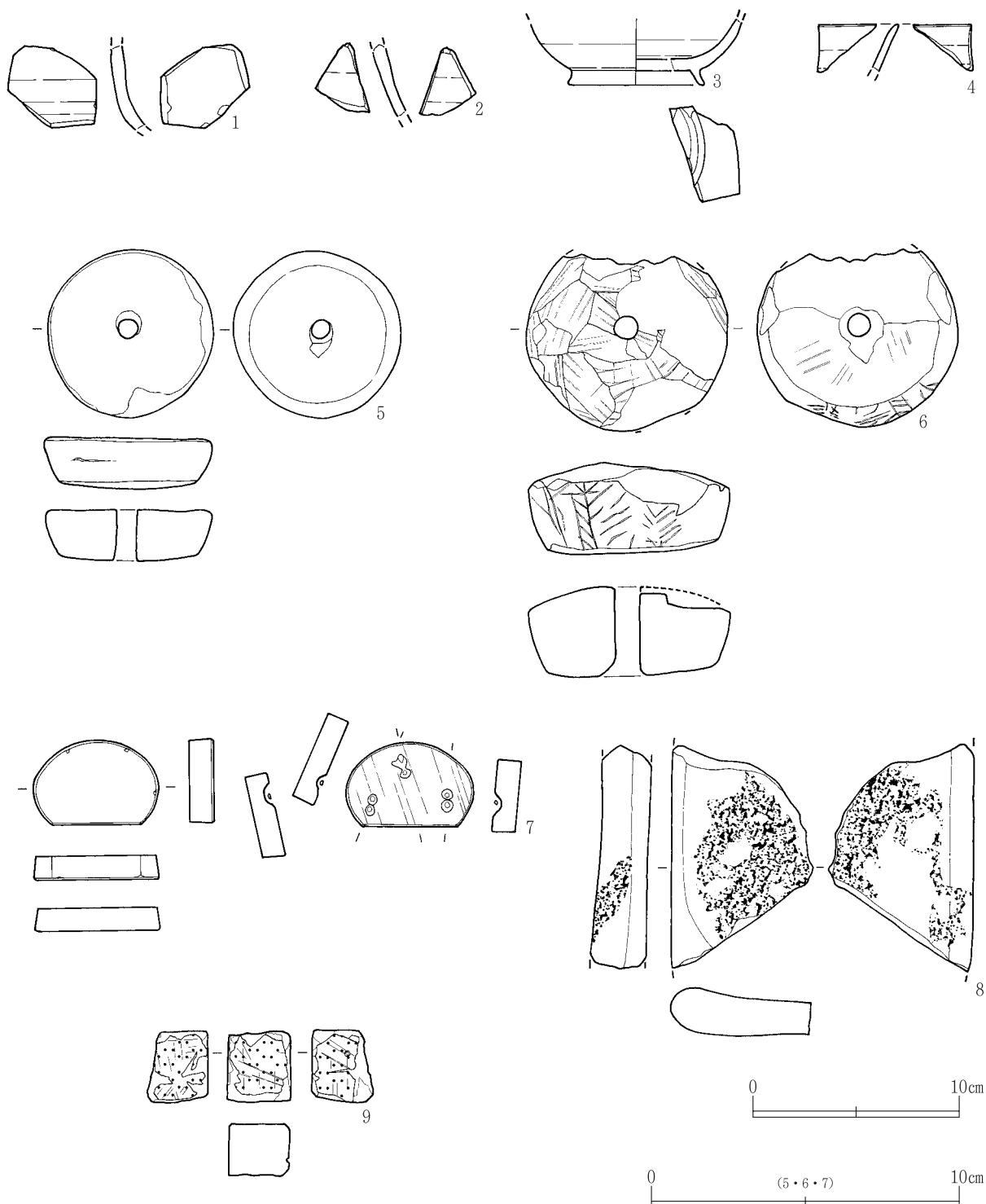
第48図 遺構外出土遺物(10)



第31表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	グリッド・位地	計測値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第46図1	須恵器	甕	胴部	M C 48・49Ⅲ層 M D 49Ⅱ層 M G 46Ⅱ層	-	-	-	クロコ 内外：タタキ目	
第46図2	須恵器	甕	胴部	M D 48・49Ⅱ層 M C 48Ⅲ層 M E 47Ⅲ層 範C-3トレンチ	-	-	-	クロコ 内外：タタキ目 内面に炭化物付着	
第46図3	須恵器	甕	胴部	L S 46Ⅱ層	-	-	-	クロコ 外：タタキ目が交差する 内：タタキ目	
第46図4	須恵器	甕	胴部	M E 46Ⅲ層 M R 43Ⅲ層	-	-	-	クロコ 外：布目 内：タタキ目 布手の跡あり	
第46図5	須恵器	甕	胴部	範確G-2トレンチIV層	-	-	-	クロコ 内外：タタキ目 内側のタタキ目に特徴あり	
第47図1	須恵器	甕	胴部	L Q 49Ⅰ層	-	-	-	クロコ 内外：タタキ目 頸部直下	
第47図2	須恵器	大甕	胴部	M B 45Ⅲ層	-	-	-	クロコ 内：タタキ目が雜	
第47図3	須恵器	甕	胴部	L R 52Ⅱ層	-	-	-	クロコ 外：タタキ目 頸部の底線あり 内：タタキ目 施釉	
第47図4	須恵器	甕	胴部	L S 54Ⅲ層 L P 49Ⅱ層	-	-	-	クロコ 外：布目が荒い	
第47図5	須恵器	甕	胴部	M B 51Ⅲ層	-	-	-	クロコ 外：布目が荒い	
第47図6	須恵器	甕	胴部	L T 57Ⅱ層	-	-	-	クロコ 外：施釉	
第47図7	須恵器	甕	胴部	範確C-2トレンチⅢ層	-	-	-	クロコ 外：タタキ目の上にナデ線あり	
第47図8	須恵器	甕	胴部	範確 M B 55Ⅱ層	-	-	-	クロコ 内：タタキ目の重なり	
第48図1	須恵器	甕	胴部	M C 48Ⅲ層 M C 49Ⅲ層 M D 48・49Ⅱ層 M E 47Ⅲ層	-	-	-	クロコ 内外：タタキ目	
第48図2	須恵器	甕	胴部	範確C-3トレンチ排水土	-	-	-	クロコ 外：タタキ目 内：丸タタキ目	砂粒混じる
第48図3	須恵器	甕	胴部	範確E-6トレンチ	-	-	-	クロコ 外：タタキ目が荒い	
第48図4	須恵器	甕	胴部	L T 47Ⅲ層	-	-	-	クロコ 内：タタキ目 施釉	
第48図5	須恵器	壺	胴部	範確E-4トレンチ	-	-	-	クロコ 外：施釉 調整あり 内：墨付着	
第48図6	須恵器	壺	胴部	L M 54・55Ⅱ層 L N 53Ⅱ層	-	-	-	クロコ 外：ナデ 内：ハケ目	底部寄り 砂粒混じる
第48図7	須恵器	壺	胴部	L S 49Ⅱ層	-	-	-	クロコ 壺の肩	
第49図1	須恵器	壺	胴部	L R 51Ⅲ層	-	-	-	クロコ	
第49図2	須恵器	甕	胴部下半	範確C-3トレンチ Ⅲ層	-	-	-	クロコ 外面に炭化物付着	
第49図3	須恵器	高台付水瓶	底部	L Q 53Ⅱ層	-	(6.1)	-	クロコ 調整	9 C 平安時代
第49図4	須恵器	甕	底部	L T 53Ⅱ層	-	(12.9)	-	クロコ 外：布目 内：タタキ目 内面に歪み	
第49図5	須恵器	甕	底部	M E 43Ⅲ層	-	(12.6)	-	クロコ 外：ケズリ 施釉 内：ハケ目	平安時代 台部の合わせ目あり 凸凹あり

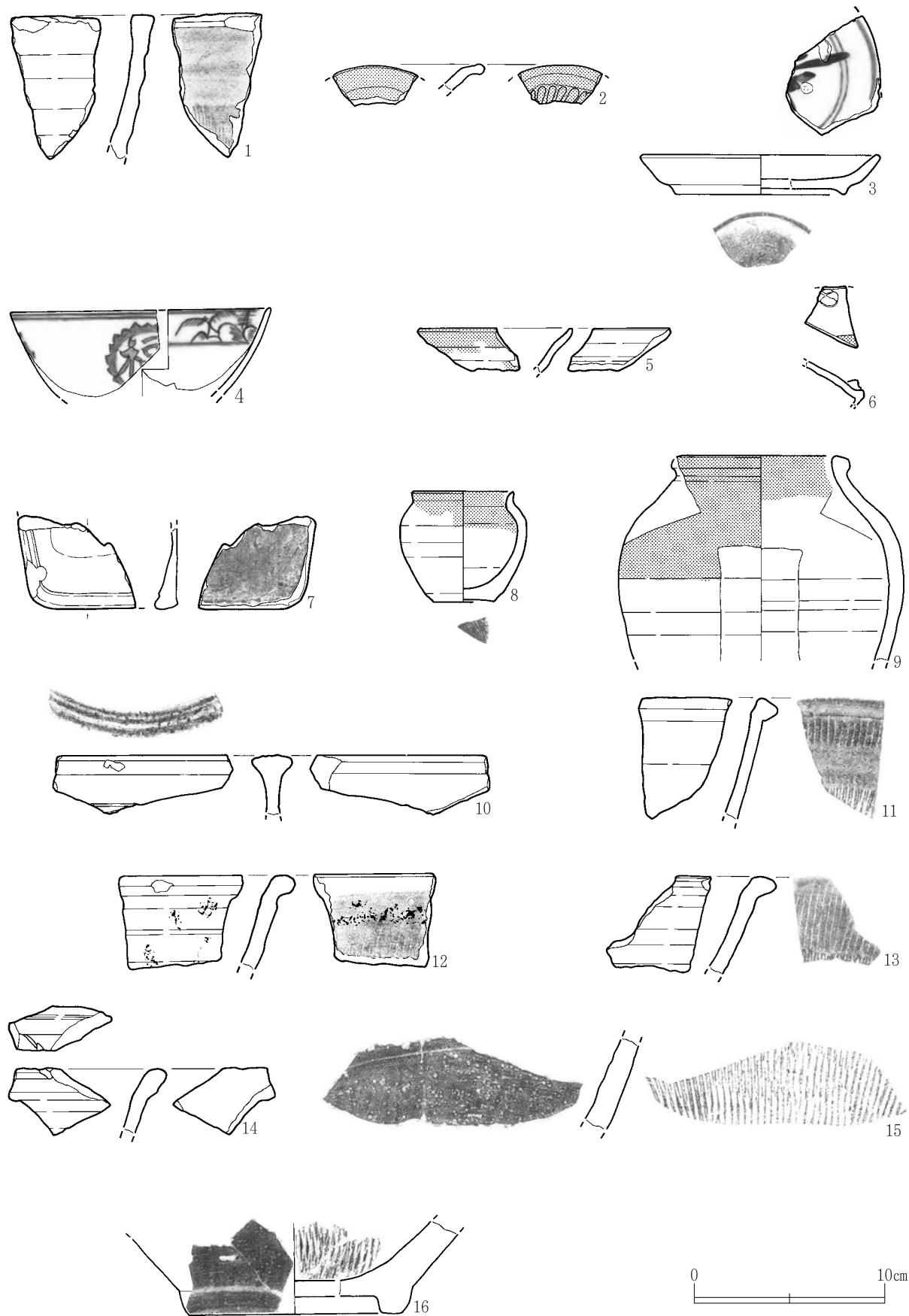
第49図 遺構外出土遺物(11)



第32表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	グリッド・位地	計測値			特徴	その他の
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第50図1	灰釉陶器	長頸瓶	胴部	MB 46 III層	-	-	-	灰釉長頸瓶 猿投窯K-90号窯式 9C後半	
第50図2	灰釉陶器	長頸瓶	胴部	L T 49 II層	-	-	-	灰釉長頸瓶 猿投窯K-90号窯式 9C後半	
第50図3	綠釉陶器	深碗	底部	L S 47 I層	(6.6)	-	-	綠釉陶器 近江窯 10C前半	
第50図4	綠釉陶器	深碗	口縁部	MA 45 II層	-	-	-	綠釉陶器 近江窯 10C前半	
第50図5	土製品	紡錘車	-	MG 47 III層	最大長5.4	最大幅5.45	最大厚1.7		完形 砂粒多量混じる
第50図6	石製品	紡錘車	-	範體E-4トレンチ	最大長6.0	最大幅6.8	最大厚3.3	側面に線刻 裏面調整あり	
第50図7	石製品	石帶	-	ME 46 II層	最大長2.8	最大幅4.1	最大厚0.8	紐通しの穴6×所あり 18.43g	平安時代
第50図8	石器	凹石	-	MF 46 III層	最大長11.0	最大幅7.0	最大厚2.3	炭化物付着 凹みあり 233.67g	
第50図9	石製品	砥石	-	範體D-1トレンチ	最大長3.45	最大幅3.1	最大厚3.0	研ぎ面3面 石質不明 50.71g	

第50図 遺構外出土遺物(12)



第51図 遺構外出土遺物(13)

### 第3節 遺構外出土遺物

第3表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	グリッド・位地	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第51図1	中世陶器	擂鉢	口縁部	M E 45 III層	-	-	-	波うつ おろし目あり	平口縁 14C前半
第51図2	近世陶磁器	碗	口縁部	M F 45 III層	-	-	-	潮戸 美濃 大窯	16C末
第51図3	近世陶磁器	台付皿	底部	M F 44 III層	(12.4)	(8.9)	2.1	絵志野	16C末~17C初頭 安土桃山末頃
第51図4	近世陶磁器	碗	口縁部	L P 55 II層 M C 46 III層	(14.0)	-	-	漳州窯 福建省 漳州の白	17C前半
第51図5	近世陶磁器	碗	口縁部	M E 42 II層	-	-	-	浅い碗 口縁部に施釉	
第51図6	近世陶磁器	蓋	-	L S 53 III層	-	-	-	上面に墨、施釉 突起部分がある 薄い	
第51図7	近世陶磁器	貝風呂	-	Cトレンチ V層	-	-	-		江戸後期~末
第51図8	近世陶磁器	小甕	口縁部~底部	範確F-2トレンチ	-	-	-	上1/3施釉	江戸時代
第51図9	近世陶磁器	甕	口縁部~胴部	L R 58 II層 M E 46	(8.2)	-	-	上半分施釉 口縁内湾	江戸時代
第51図10	近世陶磁器	鍋	口縁部	範確G-2トレンチ	-	-	-	口縁下に一条絞線あり	平口縁
第51図11	近世陶磁器	擂鉢	口縁部	M D 45 II層	-	-	-	擂り面	平口縁
第51図12	近世陶磁器	擂鉢	口縁部	範確E-6トレンチ(排土)	-	-	-	外面に炭化物付着	外反する
第51図13	近世陶磁器	擂鉢	口縁部	範確C-3トレンチ(排土)	-	-	-	おろし目あり	外反する
第51図14	近世陶磁器	擂鉢	口縁部	範確C-1トレンチ II層	-	-	-	内面に一条絞線あり	口縁下に段あり 外反する
第51図15	近世陶磁器	擂鉢	胴部	M B 55 II層	-	-	-	おろし目密 使用痕あり	
第51図16	近世陶磁器	擂鉢	底部	L R 54 II層	-	(11.2)	-	高台付 おろし目あり	

第34表 遺物観察表

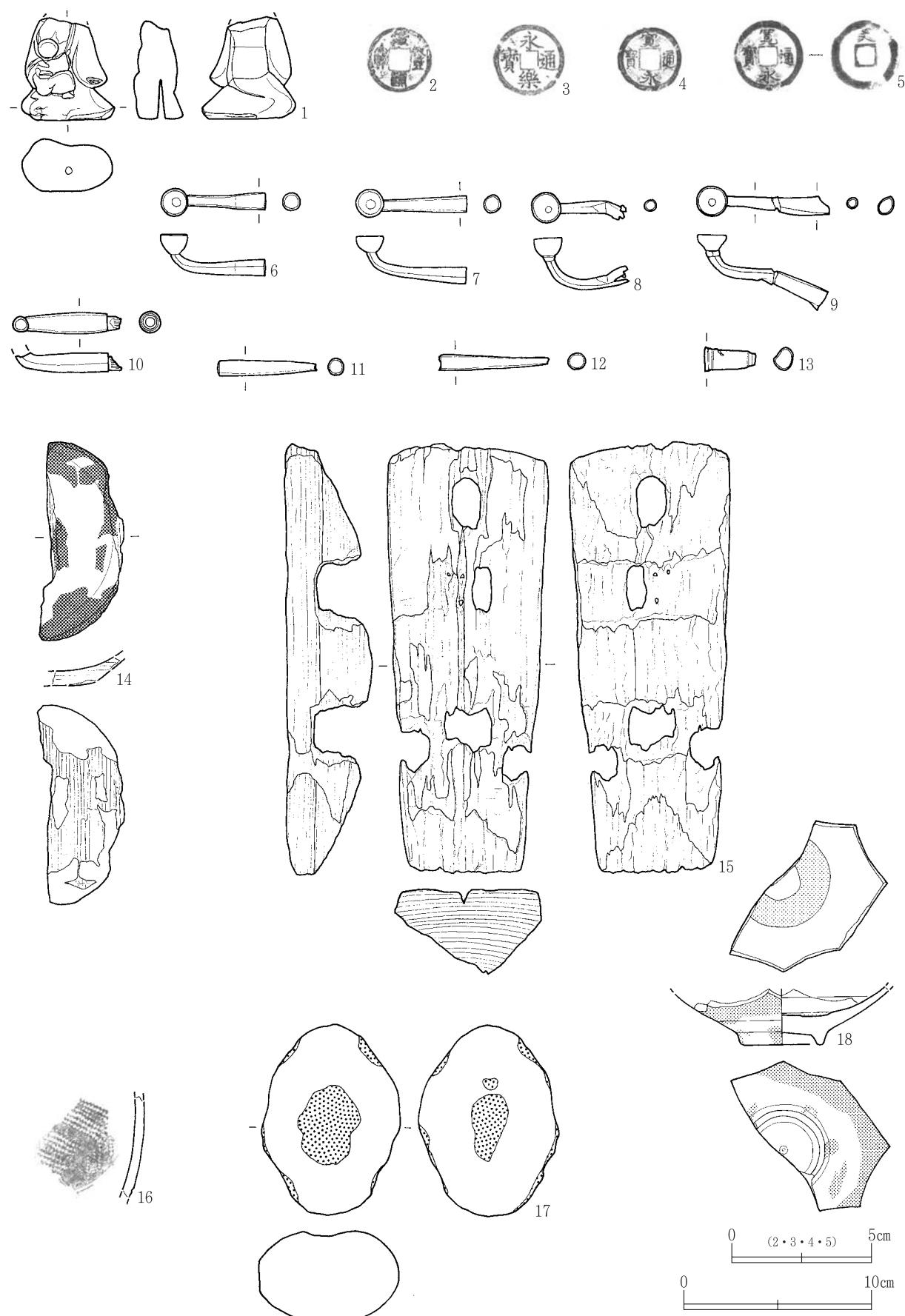
番号	種別	器形	部位	グリッド・位地	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第52図1	近世陶磁器	小さい甕	胴部	L T 51 III層	-	-	-	ロクロ 内外:施釉 胎土目積み(欠損)	模様付き 17C
第52図2	近世陶磁器	甕	胴部	範確C-1トレンチ II層	-	-	-	ロクロ 内外:施釉 胎土目積み(一点のみ)	
第52図3	近世陶磁器	壺	頸部	範確C-3トレンチ II層	-	-	-	内面帯状施釉 模様付き	砂目積みの可能性
第52図4	近世陶磁器	甕	底部	範確C-1トレンチ内 II層	-	(4.1)	-	ロクロ 内外:施釉 唐津 胎土目積み(一点のみ)	16C末~17C初頭
第52図5	近世陶磁器	台付甕	底部	Eトレンチ 排土	-	(4.5)	-	唐津	17C半初頭
第52図6	近世陶磁器	台付甕	底部	範確E-4トレンチ	-	-	-	砂目積	17C半ば 江戸時代
第52図7	近世陶磁器	台付甕	底部	M C 50 III層	-	4.0	-	肥前 太明年成(製)	17C初頭
第52図8	近世陶磁器	甕	底部	L M 45 R P集中地点	-	(3.8)	-	唐津 胎土目付け置き釉	17C初頭
第52図9	近世陶磁器	台付甕	底部	表様	12.4	4.2	3.4	波佐見系	18C初頭
第52図10	近世陶磁器	甕	底部	範確H-2トレンチ II層	-	4.0	-	ロクロ 内外:施釉 二重網目紋	台付 18C前半 江戸時代
第52図11	近世陶磁器	台付甕	底部	M E 44 II層	-	4.5	-		18C頃

第35表 遺物観察表

番号	種別	器形	部位	グリッド・位地	計測値			特徴	その他
					口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		
第53図1	土製品	人形	-	範確L-2トレンチ	5.45	4.95	2.8	母子像 底面に穴 45.0g	江戸時代 磨滅著しい
第53図2	銭貨	-	-	M D 41 III層	錢径2.3	錢厚0.12	重さ2.39g 不明		
第53図3	銭貨	-	-	L R 56 II層	錢径-	錢厚-	重さ2.17g 永楽通寶 明銭		
第53図4	銭貨	-	-	M C 44 III層	錢径2.26	錢厚0.08	重さ1.6g 寛永通寶		江戸時代
第53図5	銭貨	-	-	M D 49 III層	錢径2.47	錢厚0.11	重さ1.85g 寛永通寶		江戸時代
第53図6	鉄製品	キセル	-	L Q 53 III層	5.55	0.9	5.25	煙出し側	
第53図7	鉄製品	キセル	-	M A 55 II層	6.2	0.8	5.89	煙出し側	
第53図8	鉄製品	キセル	-	M E 44 II層	5.0	0.6	4.29	煙出し側	
第53図9	鉄製品	キセル	-	M F 43 III層	8.0	0.9	6.62	煙出し側	
第53図10	鉄製品	キセル	-	M A 50 II層	5.7	1.1	7.96	煙出し側	
第53図11	鉄製品	キセル	-	M D 48 III層	5.3	0.8	2.91	吸い口側	
第53図12	鉄製品	キセル	-	M E 42 II層	5.9	0.85	3.49	吸い口側	
第53図13	鉄製品	キセル	-	M G 44 握皿	2.9	0.8	1.77	部位不明	
第53図14	木製品	椀	-	M G 47 III層	-	-	-	漆付着	樹種 杉 (分析-19)
第53図15	木製品	下駄	-	M F 46 II層	22.85	8.55	4.7	切り欠きあり	樹種 杉 (分析-20)
第53図16	織文土器	浅鉢	胴部	0トレンチ	口径 -	底径 -	器高 -	精製土器 斜縫文 外面に炭化物付着	下道溝遺跡出土
第53図17	礫石器	四面打痕石	-	B-5トレンチ	12.0	7.5	4.8	両面に凹み 側面に敲打痕	下道溝遺跡出土
第53図18	陶磁器	皿	底部	A-6トレンチ	-	4.4	-	砂目積み 唐津焼 台付	下道溝遺跡出土



第52図 遺構外出土遺物(14)



第53図 遺構外出土遺物(15)

以上、小鳥田I遺跡は第2節で述べた平安時代（9世紀から10世紀）の検出遺構と出土遺物が確認されたほかに、縄文時代の土器・石器・石製品が出土しており、第39図1の深鉢形土器破片は縄文中期以降の時期に比定されるものと考えられる。第39図3の黒曜石剥片は、本遺跡が黒曜石原産地との交流を持っていたことを示している。また、同じ縄文時代の第53図16浅鉢破片は、北側に隣接する下道満遺跡出土の晩期精製土器である。これ以外にも、文化財保護室および中仙町教育委員会の踏査・試掘調査で縄文時代の土器・石器が出土しており、小鳥田I遺跡・下道満遺跡ともに平安時代の遺跡であるだけでなく、縄文時代の遺跡でもあることが判明した。

中世・近世の遺物からは、第51図2～4のような安土桃山時代の終わり頃から江戸時代初期に比定される陶磁器が出土しており、この頃は、常陸から秋田に転封となった佐竹義宣に従って、仙北郡長野の紫島（紫嶋城跡：遺跡地図番号49-43）に北家佐竹義廉が入った時期と重なる。また、第51図4のような漳州窯（福建省）産の陶磁器も出土している。

## 第5章 自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

秋田県仙北郡中仙町に所在する小鳥田I遺跡では、古代の住居跡・井戸跡等の遺構が確認されており、土師器・柱材・井戸枠材等が出土している。今回の分析調査では、出土した土器付着炭化物と堆積層中から抽出した炭化物を対象に加速器による放射性炭素年代測定（AMS法）を実施し、年代資料を得る。また、出土木製品の樹種同定を行い、用材選択に関する情報を得る。

### 第1節 放射性炭素年代測定

#### 1. 試料

試料は、土器付着炭化物3点（試料番号1～3）、堆積物中から抽出した炭化物5点（試料番号4～6・8・10）、腐植混じり土壤1点（試料番号9）、炭化材1点（試料番号23）の計10点である。試料の詳細は結果と共に第36・37表に示す。

#### 2. 分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。なお、炭化材については、実体鏡による木材組織の観察で樹種の同定を実施する。

#### 3. 結果

結果を第1・2表に示す。試料の測定年代（補正年代）は、SN03焼土遺構出土土器付着炭化物（試料番号3）が約2,300年前の値を示す。これは、キーリ・武藤（1982）によれば、東北地方における縄文時代晩期末に相当する。測定年代値が土器年代觀に比べて古い理由としては、付着炭化物が微量であったため、炭化物自体が土壤中の古い炭素の影響を受けていること等が考えられる。その他の試料の測定年代値は、SI199竪穴住居跡出土土器付着炭化物（試料番号1）が約1,400年前、SI49竪穴住居跡出土炭化物（試料番号6）が約1,300年前、SK202土坑出土土器付着炭化物（試料番号2）が約1,200年前、SI10竪穴住居跡出土炭化物2点（試料番号4・5）、SI199竪穴住居跡出土炭化物（試料番号8）、SN04焼土遺構出土炭化物（試料番号10）、SI91竪穴住居跡出土炭化材（試料番号23）が約1,100年前の6世紀～9世紀頃の値を示す。また、SE207井戸跡出土腐植混じり土壤（試料番号9）が約700年前の13世紀頃の値を示す。

今後は、同一遺構・同一層準から出土した炭化材・炭化物等の測定点数を増やすことにより、更に詳細な年代資料が得られると思われる。なお、SI91竪穴住居跡出土炭化材（試料番号23）の樹種はヤナギ属に同定された。

第36表 放射性炭素年代測定結果

番号	遺構	出土位置など	層位	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
1	SI199	—	5層カマド覆土中	土器付着炭化物	1440±30	-19.07±1.06	1340±30	IAAA-31882
2	SK202	RP1	4層	土器付着炭化物	1160±30	-24.83±1.00	1160±30	IAAA-31883
3	SN003	RP1	2層	土器付着炭化物	2280±40	-28.77±0.68	2340±40	IAAA-31923
4	SI010	炭サンプル④	3層	炭化物	1070±30	-8.53±0.66	800±30	IAAA-31884
5	SI010	炭サンプル⑤	3層(炭化物層)	炭化物	1100±40	-27.72±0.79	1150±30	IAAA-31885
6	SI049	炭サンプル	2層カマド覆土中	炭化物	1260±30	-22.46±0.72	1220±30	IAAA-31886
8	SI199	—	7層カマド RP20	炭化物	1080±40	-24.79±1.00	1070±30	IAAA-31888
9	SE207	—	4層	腐植混じり土壤	730±30	-25.75±0.85	740±30	IAAA-31889
10	SN004	—	3層	炭化物	1110±40	-23.63±0.70	1090±30	IAAA-31890
23	SI091	炭サンプル④	—	炭化材(ヤナギ属)	1090±40	-24.88±0.69	1090±30	IAAA-31887

1)年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用。

2)BP 年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

第37表 曆年較正結果

試料番号	補正年代(BP)	曆年較正年代(cal)										相対比	Code No.		
1	1439±33	cal	AD	601	-	cal	AD	651	cal	BP	1,349	-	1,299	1.000	IAAA-31882
2	1163±33	cal	AD	782	-	cal	AD	790	cal	BP	1,168	-	1,160	0.076	IAAA-31883
		cal	AD	814	-	cal	AD	843	cal	BP	1,136	-	1,107	0.242	
		cal	AD	858	-	cal	AD	898	cal	BP	1,092	-	1,052	0.394	
		cal	AD	921	-	cal	AD	956	cal	BP	1,029	-	994	0.288	
3	2281±37	cal	BC	397	-	cal	BC	357	cal	BP	2,347	-	2,307	0.611	IAAA-31923
		cal	BC	286	-	cal	BC	258	cal	BP	2,236	-	2,208	0.314	
		cal	BC	242	-	cal	BC	234	cal	BP	2,192	-	2,184	0.075	
4	1067±32	cal	AD	903	-	cal	AD	916	cal	BP	1,047	-	1,034	0.175	IAAA-31884
		cal	AD	964	-	cal	AD	973	cal	BP	986	-	977	0.120	
		cal	AD	975	-	cal	AD	1,004	cal	BP	975	-	946	0.573	
		cal	AD	1,008	-	cal	AD	1,017	cal	BP	942	-	933	0.133	
5	1100±36	cal	AD	896	-	cal	AD	923	cal	BP	1,054	-	1,027	0.399	IAAA-31885
		cal	AD	940	-	cal	AD	985	cal	BP	1,010	-	965	0.601	
6	1263±34	cal	AD	691	-	cal	AD	777	cal	BP	1,259	-	1,173	1.000	IAAA-31886
8	1077±34	cal	AD	900	-	cal	AD	919	cal	BP	1,050	-	1,031	0.281	IAAA-31888
		cal	AD	959	-	cal	AD	1,001	cal	BP	991	-	949	0.687	
		cal	AD	1,013	-	cal	AD	1,015	cal	BP	937	-	935	0.032	
9	729±34	cal	AD	1,265	-	cal	AD	1,295	cal	BP	685	-	655	1.000	IAAA-31889
10	1114±35	cal	AD	894	-	cal	AD	925	cal	BP	1,056	-	1,025	0.414	IAAA-31890
		cal	AD	936	-	cal	AD	979	cal	BP	1,014	-	971	0.586	
23	1089±35	cal	AD	898	-	cal	AD	921	cal	BP	1,052	-	1,029	0.357	IAAA-31887
		cal	AD	945	-	cal	AD	949	cal	BP	1,005	-	1,001	0.043	
		cal	AD	955	-	cal	AD	996	cal	BP	995	-	954	0.600	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

## 第2節 樹種同定

### 1. 試料

試料は、掘立柱建物跡の柱材または根固め材と考えられる木材6点（試料番号11～16）、井戸枠材の一部と考えられる木材2点（試料番号17～18）、椀1点（試料番号19）、加工材1点（試料番号20）の合計10点である。

### 2. 分析方法

各木製品について、木取りや破損状況を観察した。破損部を利用して、5mm角程度の木片を採取して試料とした。木片は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定した。

### 3. 結果

樹種同定結果を第3表に示す。木製品は、針葉樹1種類（スギ）と広葉樹2種類（ブナ属・モクレン属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

#### ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は広い。樹脂細胞は晚材部にのみ認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

#### ・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は单穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

#### ・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った橢円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は单穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～40細胞高。

第38表 樹種同定結果

番号	遺構	出土位置など	層位	器種	樹種
11	SB208	P4 RW1-1	1層（単層）	柱材または根固め材	スギ
12	SB208	P4 RW1-2	1層（単層）	柱材または根固め材	スギ
13	SB208	P4 RW2-1	1層（単層）	柱材または根固め材	スギ
14	SB208	P4 RW2-2	1層（単層）	柱材または根固め材	スギ
15	SB208	P4 RW2-3	1層（単層）	柱材または根固め材	スギ
16	SB208	P4 RW3	1層（単層）	柱材または根固め材	スギ
17	SE207		4層	井戸枠材の一部	スギ
18	SE207		4層	井戸枠材の一部	スギ
19		MG47グリッド	Ⅲ層	漆塗り椀の底部	ブナ属
20		MF46グリッド	Ⅲ層	ほぞ穴・切り欠きのある材	モクレン属

#### 4. 考察

掘立柱建物跡の柱材または根固め材と考えられる木材は、6点のうち試料番号15の1点を除く5点が板状を呈しており、広い面が板目となる木取りである。このうち、試料番号14では、平坦面のほぼ中央部に円形の抉れが認められる。一方、試料番号15は、広い面が木口となる木取りの木片である。これらの木材は、形状に関係なく、全てスギであった。この結果からスギが選択・利用されたことが推定される。スギ材は、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易で比較的耐水性も高い。こうした加工性等の材質が利用された背景に考えられる。井戸枠材は、いずれも板状で広い面が板目となる木取りであり、柱材または根固め材とされる試料と類似点が多い。樹種もスギであり、同様の木材利用が推定される。

漆塗り椀は、約半分に割れた状態である。割れ目にみられる組織から、横木取りであるが、器底が柾目か板目かの確認はできなかった。漆塗りは、両面とも黒色で、観察した範囲では模様などは認められない。樹種は、落葉広葉樹のブナ属であった。ブナ属は、全国的に漆器の木地としてはトチノキやケヤキと共に出土例の多い樹種の一つである（島地・伊東,1988；伊東,1990；伊東・久保,2002）。漆器については、秋田県内で樹種同定を行った例が少ないため、木材利用の傾向などは不明である。しかし、秋田県内にはブナを中心とした落葉広葉樹林が広く分布しており、木材の入手は容易であったと考えられる。

加工材は、ホゾ穴、切り欠きのある材で、横断面は五角形状で、平坦面が板目となる木取りである。平坦面は、幅6～8cm、長さ約20cmの長方形となる。ホゾ穴は、長方形の長軸方向の一方に2箇所が横に並んで配置、もう一方に1箇所認められる。側面観は両端で薄く、中央部で厚い。切り欠きは、平坦面の反対側に2箇所認められ、いずれも断面が四角い溝状を呈する。これらの形状は、差歛下駄の台によく似ており、ホゾ穴は鼻緒を通す穴、切り欠きは歯をはめる溝に該当する。確認されたモクレン属は、下駄の台にも利用される種類であり、加工材が下駄としても矛盾しない。

#### «引用文献»

伊東隆夫,1990,日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ.木材研究・資料,26,

京都大学木材研究所,93-189p.

伊東隆夫・久保るり子,2002,日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅲ.木材研究・資料,38,

京都大学木質科学研究所,39-217p.

キーリ C.T, 武藤康弘,1982,縄文時代の年代.縄文文化の研究1 縄文人とその環境,雄山閣,246-275p.

島地謙・伊東隆夫（編）,1988,日本の遺跡出土木製品総覧.雄山閣,296p.

## 第6章　まとめ

小鳥田I遺跡は、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟を始めとする様々な遺構が検出され、集落としての性格を持つことが分かった。竪穴住居跡からは、9世紀代の土師器・須恵器が多く出土し、集落の中心的な時期はこの頃に求めることができる。このほか土坑、井戸跡、溝跡、道路状遺構などを検出したが、ここでは主要な遺構である竪穴住居跡と道路状遺構について述べる。

### 竪穴住居跡について

調査区内から5軒検出したが、S I 91・199を除くS I 01・10・49については耕作による攢乱で住居の大半が失われており、カマド痕跡のみが確認され住居の規模や形態については不明である。従ってここではS I 91とS I 199について述べる。S I 199竪穴住居跡は多くの遺構と重複し、土層断面の観察からS E 207井戸跡→S K 201土坑→S I 199竪穴住居跡→S N 206焼土遺構の順に新しくなる。S I 199の南東に位置するカマドには焚口と組石、土製支脚、煙道が明瞭に確認された。そこから出土した土師器や須恵器より竪穴住居跡の時期は9世紀後半と考えられる。これとほぼ並行する時期のS I 91では、カマドの焚口と煙道は削平され支脚のみが確認できた。S I 01とS I 10は出土遺物から9世紀後半、S I 49は10世紀前半と考えられる。

### 道路状遺構について

調査区の中央で検出したSM198道路状遺構は、53か所の凹みが北東-南西方向（N-45° -E：真北に対し45度東偏）に連なった状態で検出された。ここでは、道路の軸線と方向と同じくする溝跡（道路の側溝として機能する溝状遺構）が検出されなかったため「道路状遺構」として扱った。北西側に隣接するSD112溝跡（N-57° -E）は道路状遺構の軸線と異なり、地形の等高線とも沿わない。道路状遺構の形態は他県で検出例のある波板状凹凸に類似しており<sup>(註1)</sup>、幅は2.5～4mで等高線に沿っている。道路状遺構の時期は、この凹みより出土した土師器・須恵器の年代から9世紀後半と考えられる。

秋田県内（出羽国北半）の古代道路遺構については高橋学氏の集成があり、県内の主要な古代道路遺構として、秋田城跡と払田柵跡の城柵内部および周辺での検出事例などが示されている。特に平成12年（2000年）に発掘調査された横手市前通遺跡では、掘立柱建物跡を中心とする平安時代の集落跡から道路遺構が検出され、城柵外での初の調査例となった。五十嵐一治氏は、前通遺跡の道路遺構には概ね9世紀第3四半期頃が下限と考えられる第1期と、9世紀第4四半期が下限と推定される第2期とがあり、複数の溝状遺構を側溝とした幅4m前後の規模を持つ道路遺構と考えている。この道路軸線を意識した掘立柱建物跡の配置や、溝状遺構の出土遺物から、平安時代から中世初期まで存続する第3期の道路遺構も想定している。<sup>(註2)</sup>本遺跡のSM198道路状遺構は、古代集落跡からの検出という意味では前通遺跡と同様であるが、その形態は波板状の圧痕が連続し、両側には溝跡を伴わない特徴がある。

### 出土遺物について

小鳥田I遺跡では、土師器や須恵器以外に、緑釉陶器碗の破片2点、灰釉陶器長頸瓶の破片2点、石帶1点、側面に線刻が施された石製紡錘車1点などが遺構外から出土した。緑釉陶器と灰釉陶器は、

城柵官衙およびその関連遺跡から出土する傾向が強く、石帶や線刻のある石製紡錘車とともに希少な遺物としての特徴を示している。灰釉陶器と緑釉陶器については愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏より教示を得ており、その結果、2点の緑釉陶器は近江窯産で10世紀前半の時期、2点の灰釉陶器は猿投窯産（K-90号窯式）で9世紀後半の時期ということである。なお、緑釉陶器は近江窯産の最古式の深碗で、近江窯産緑釉陶器としては小鳥田I遺跡が最北の出土地である。

以上、大まかに特徴的な遺構・遺物についてまとめたが、小鳥田I遺跡は古代城柵官衙遺跡の払田柵跡からは真北に約6kmの近い距離に位置している。さらに払田柵跡は9世紀初頭に創建され、10世紀後半に終末を迎えたとされる。<sup>(註5)</sup>このことと希少価値の高い遺物が出土していることから、本遺跡と払田柵跡は互いに関連し合って存在していたものと考えられる。

註1 早川泉「古代道路遺構に残された圧痕－波板状凹凸面の性格について－」『東京考古』9 1991(平成3)年

飯田充晴「道路築造方法について－埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして－」『古代交通研究』2 1992(平成4)年

註2 高橋学「出羽国－秋田県」『日本古代道路事典』古代交通研究会編 八木書店 2004(平成16)年

註3 五十嵐一治「第6章　まとめ」『前通遺跡』秋田県文化財調査報告書第351集 秋田県教育委員会 2003(平成15)年

註4 緑釉陶器の県内出土例としては、払田柵跡・秋田城跡・内村遺跡・上の山II遺跡・厨川谷地遺跡などがあり、灰釉陶器は払田柵跡・秋田城跡・小谷地遺跡・江原嶋1遺跡・小林遺跡・厨川谷地遺跡などで出土している。

註5 秋田県教育委員会『払田柵跡I－政庁跡－』秋田県文化財調査報告書第122集 1985(昭和60)年

秋田県教育委員会『払田柵跡II－区画施設－』秋田県文化財調査報告書第289集 1999(平成11)年など、一連の秋田県教育庁払田柵跡調査事務所の調査成果による。



1. 調査区近景(南西→)



2. 調査区近景(北→)



1. SI01竪穴住居跡検出状況(南西→)



2. SI01竪穴住居跡断面(南西→)



1. SI10竪穴住居跡北側(北西→)



2. SI10竪穴住居跡焼土断面(東→)



3. SI10竪穴住居跡検出状況(北東→)



4. SI10竪穴住居跡南側焼土断面(南西→)



5. SI10竪穴住居跡南側焼土検出状況(北西→)



1. SI49豊穴住居跡完掘(北西→)



2. SI49豊穴住居跡カマド確認(北→)



3. SI49豊穴住居跡カマド確認(南→)



4. SI49豊穴住居跡カマド1断面(西→)



5. SI49豊穴住居跡カマド2断面(南西→)



1. SI91竪穴住居跡完掘(南東→)



2. SI91竪穴住居跡断面(北西→)



3. SI91竪穴住居跡カマド内支脚(北東→)



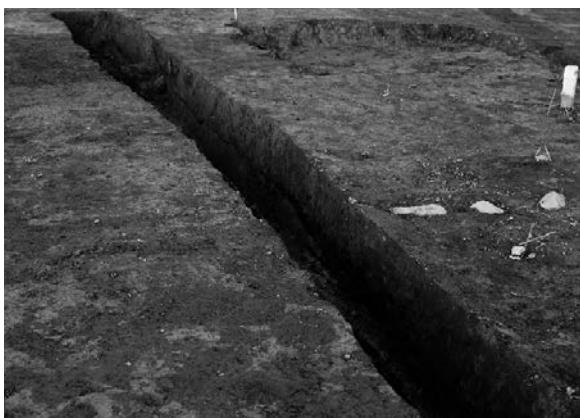
4. SI91竪穴住居跡カマド(南東→)



5. SI91竪穴住居跡カマド断面(北西→)



1. SI199竪穴住居跡完掘(北西→)



2. SI199竪穴住居跡断面(北西→)



3. SI199竪穴住居跡遺物出土状況(北東→)



4. SI199竪穴住居跡カマド検出状況(北西→)



5. SI199竪穴住居跡カマド断面(南西→)



1. SB208掘立柱建物跡完掘(北東→)



2. SB208掘立柱建物跡柱穴断面(西→)



3. SK07土坑断面(北西→)



4. SK07土坑完掘(北西→)



5. SK44土坑断面(南→)



1. SK83土坑断面(東→)



2. SK109土坑断面(北東→)



3. SK109土坑完掘(北東→)



4. SK201土坑断面(南東→)



5. SK201土坑断面(北西→)



6. SK201土坑材出土状況(北西→)



7. SK202・203土坑検出状況(北→)



8. SK202・203土坑完掘(南西→)



1. SE207井戸跡検出状況(北→)



2. SE207井戸跡完掘(北→)



3. SE207井戸跡湧水状況(西→)



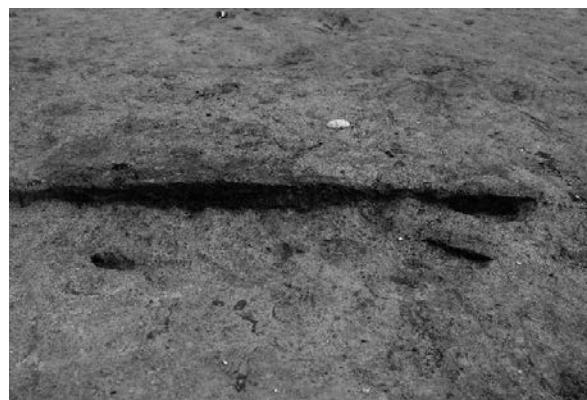
4. SE207井戸材出土状況(南西→)



5. SE207井戸材出土状況(南→)



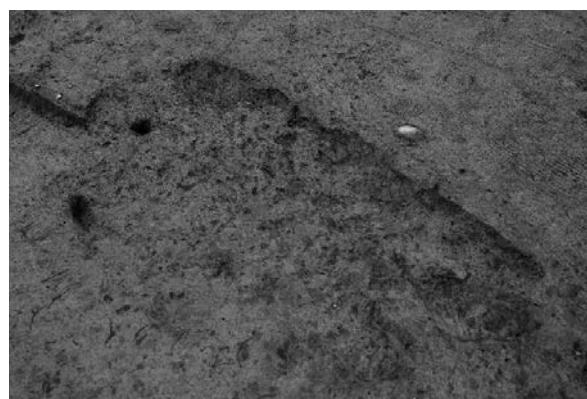
1. SN03焼土遺構検出状況(北西→)



2. SN03焼土遺構断面(北西→)



3. SN04焼土遺構断面(北西→)



4. SN04焼土遺構完掘(南→)



5. SN05焼土遺構断面(南西→)



6. SN05焼土遺構完掘(西→)



7. SN06焼土遺構断面(南東→)



8. SN06焼土遺構完掘(南東→)



3. SN206燒土遺構斷面(南西→)



4. SN206燒土遺構斷面(北→)



1. SN204燒土遺構出土狀況(北東→)



2. SN204燒土遺構斷面(南西→)



1. SD02溝跡検出状況(北→)



2. SD02溝跡検出状況(北東→)



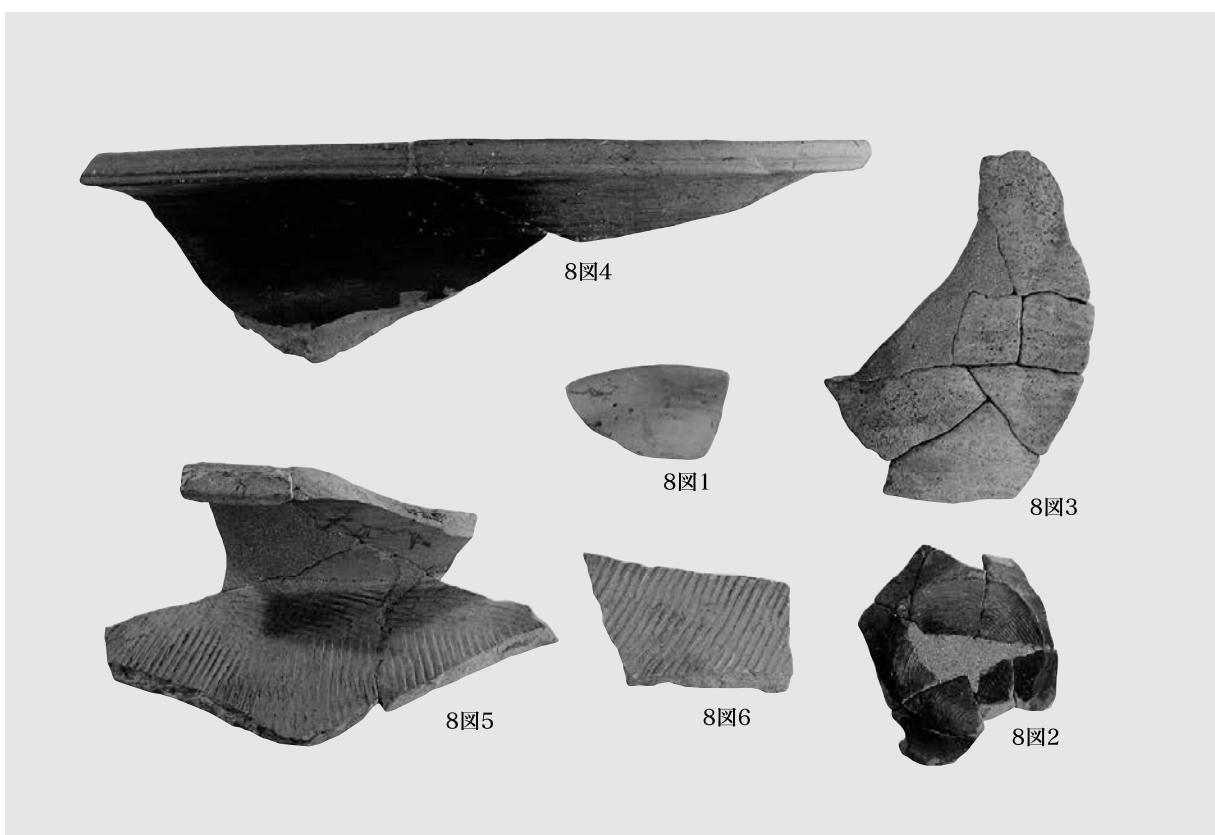
3. SD112溝跡断面(南西→)



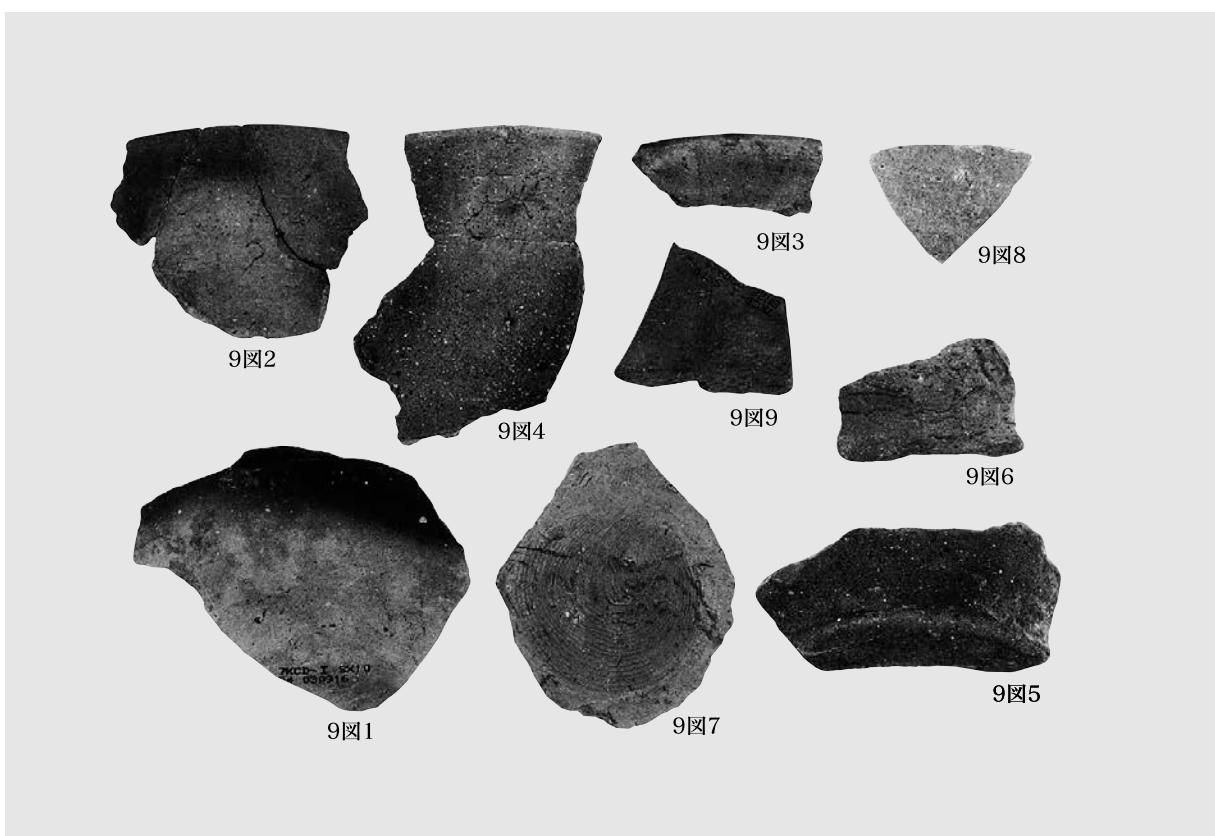
4. SD112溝跡・SX191断面(南西→)



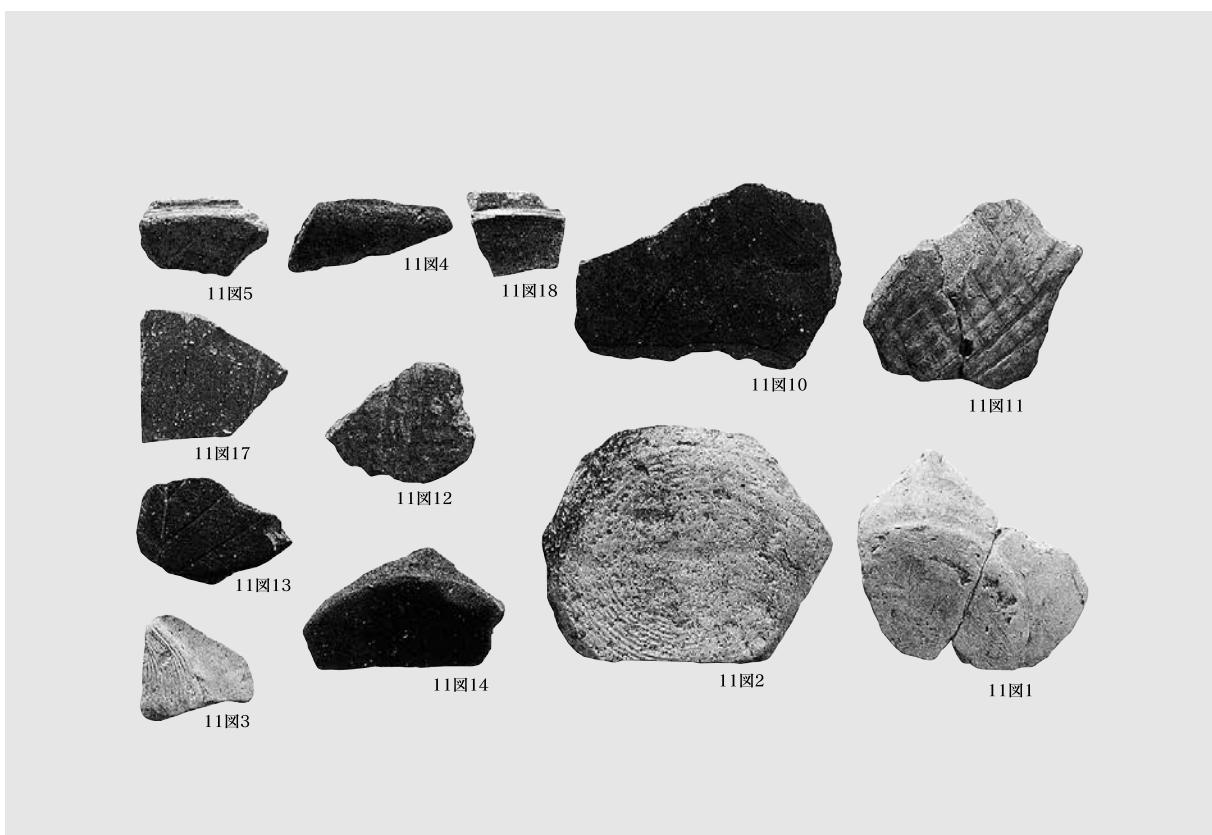
5. SD112溝跡・SM198道路状遺構(北東→)



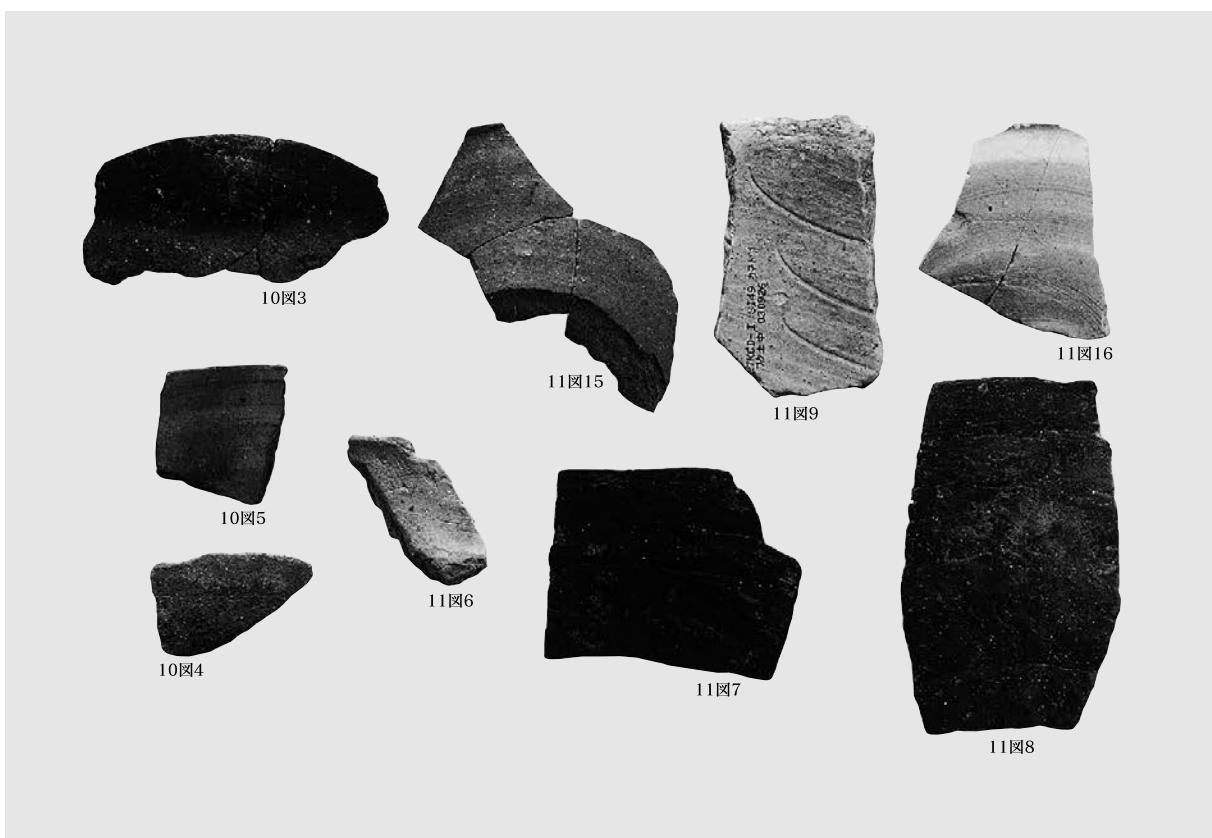
1. SI01竪穴住居跡出土遺物



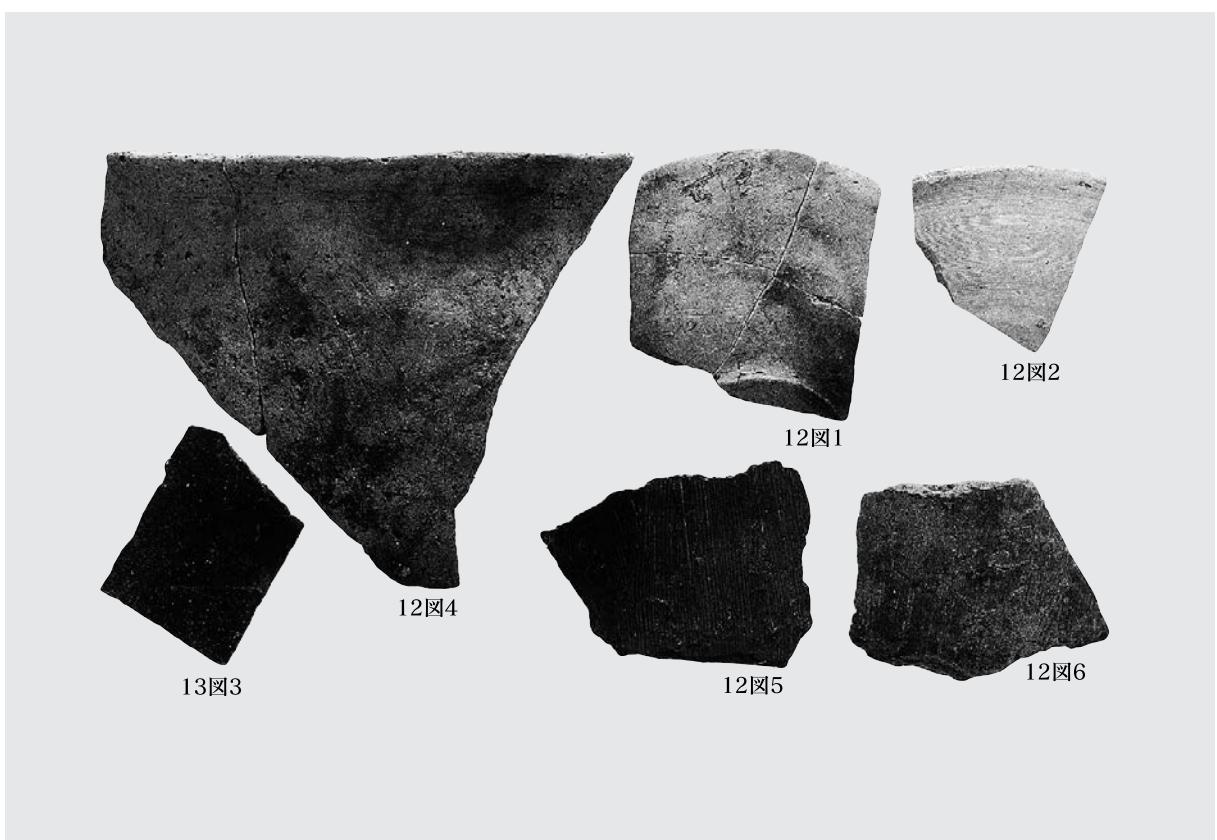
2. SI10竪穴住居跡出土遺物



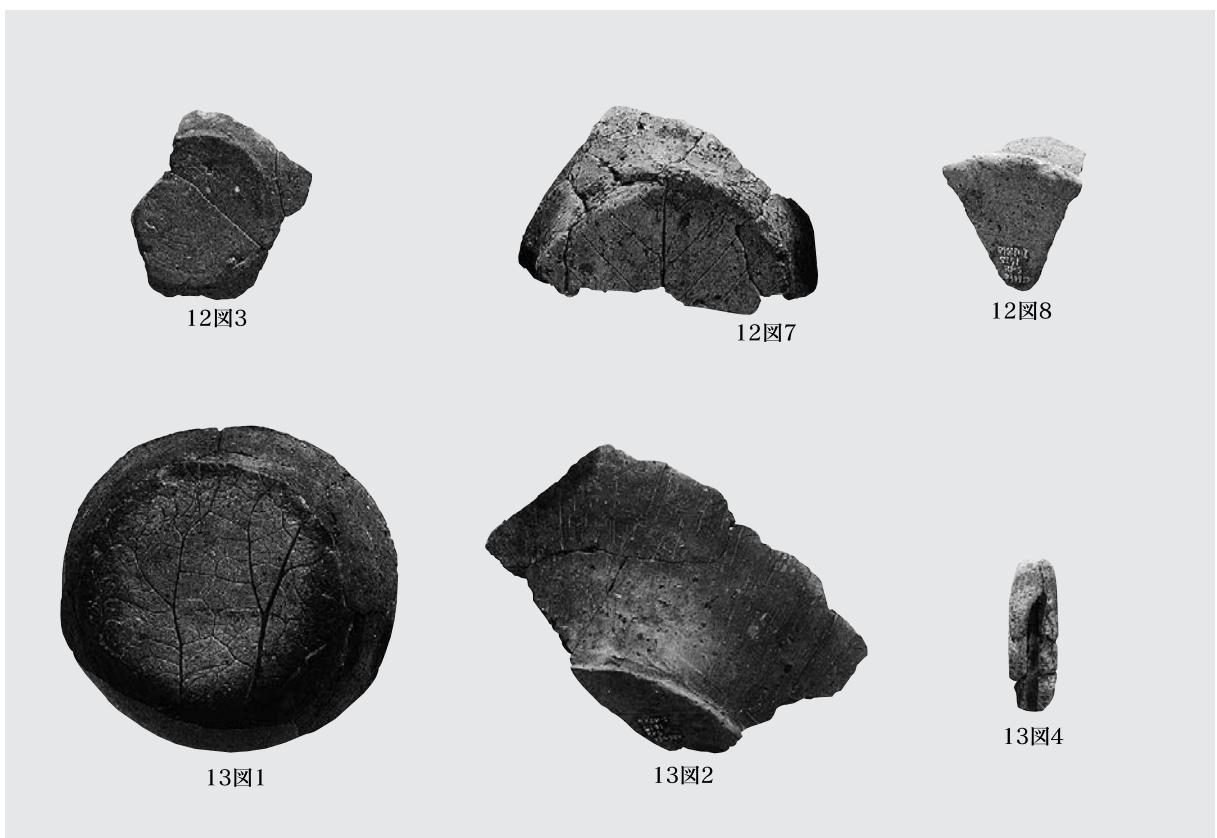
1. SI49竪穴住居跡出土遺物(1)



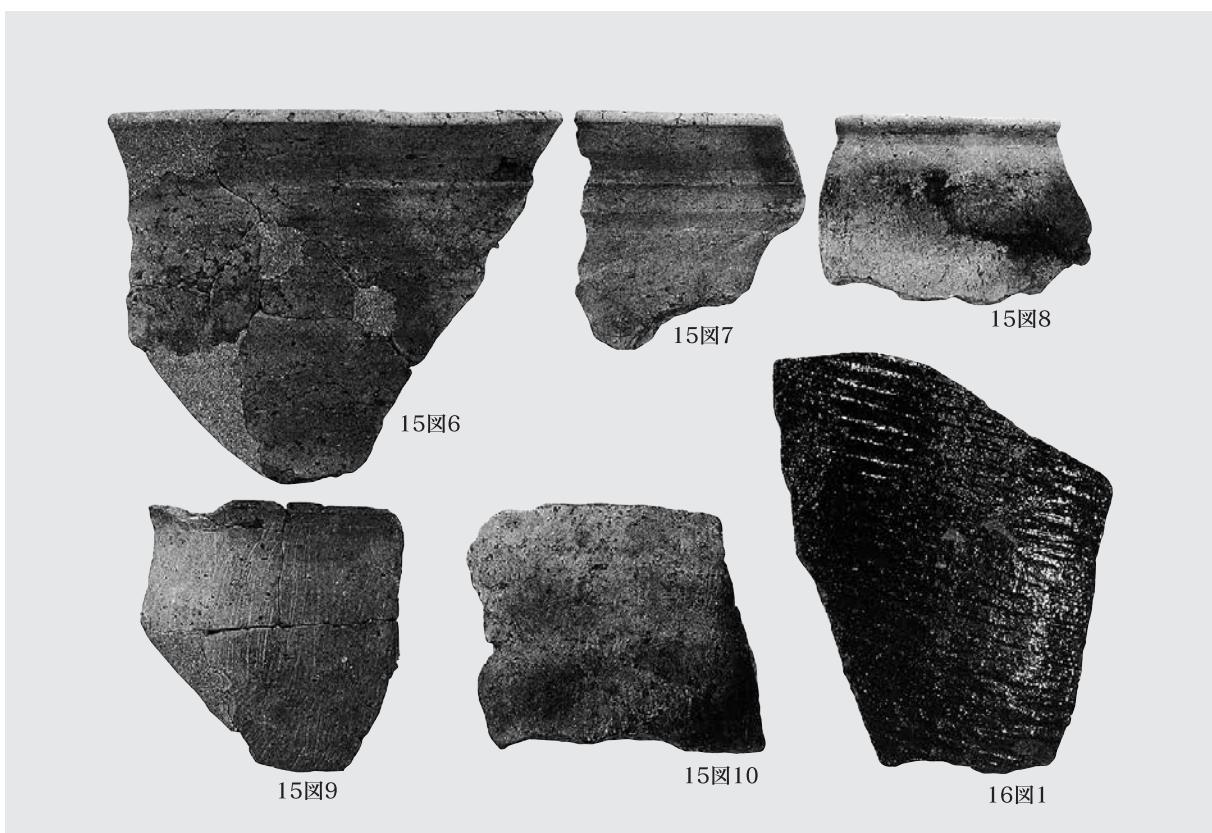
2. SI49竪穴住居跡出土遺物(2)



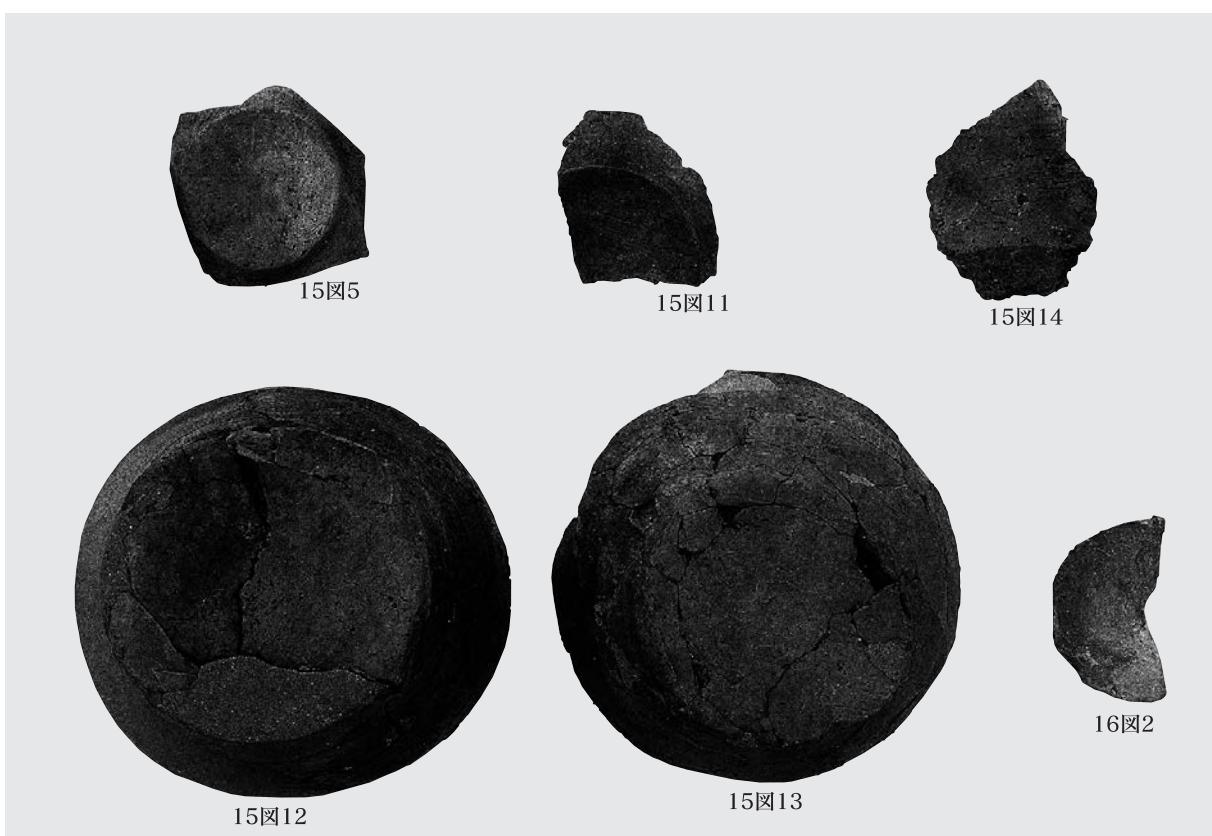
1. SI91竪穴住居跡出土遺物(1)



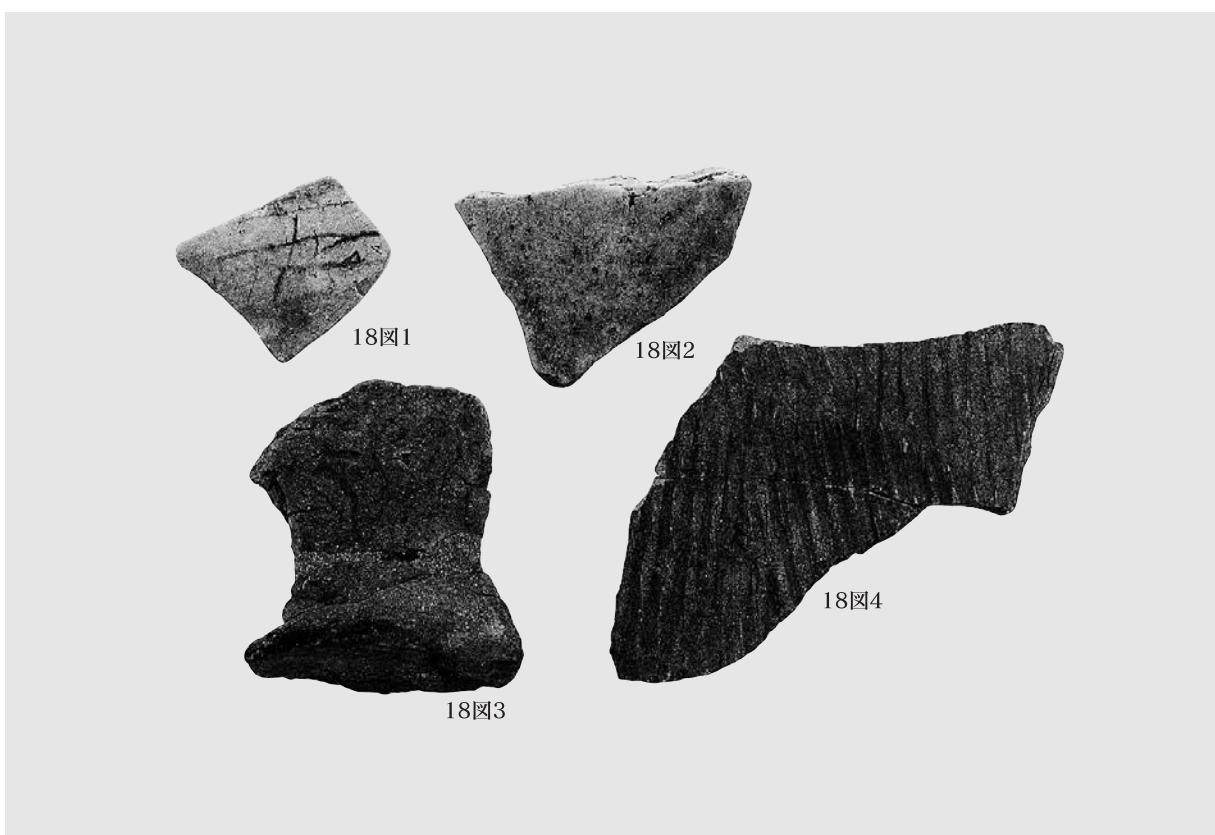
2. SI91竪穴住居跡出土遺物(2)



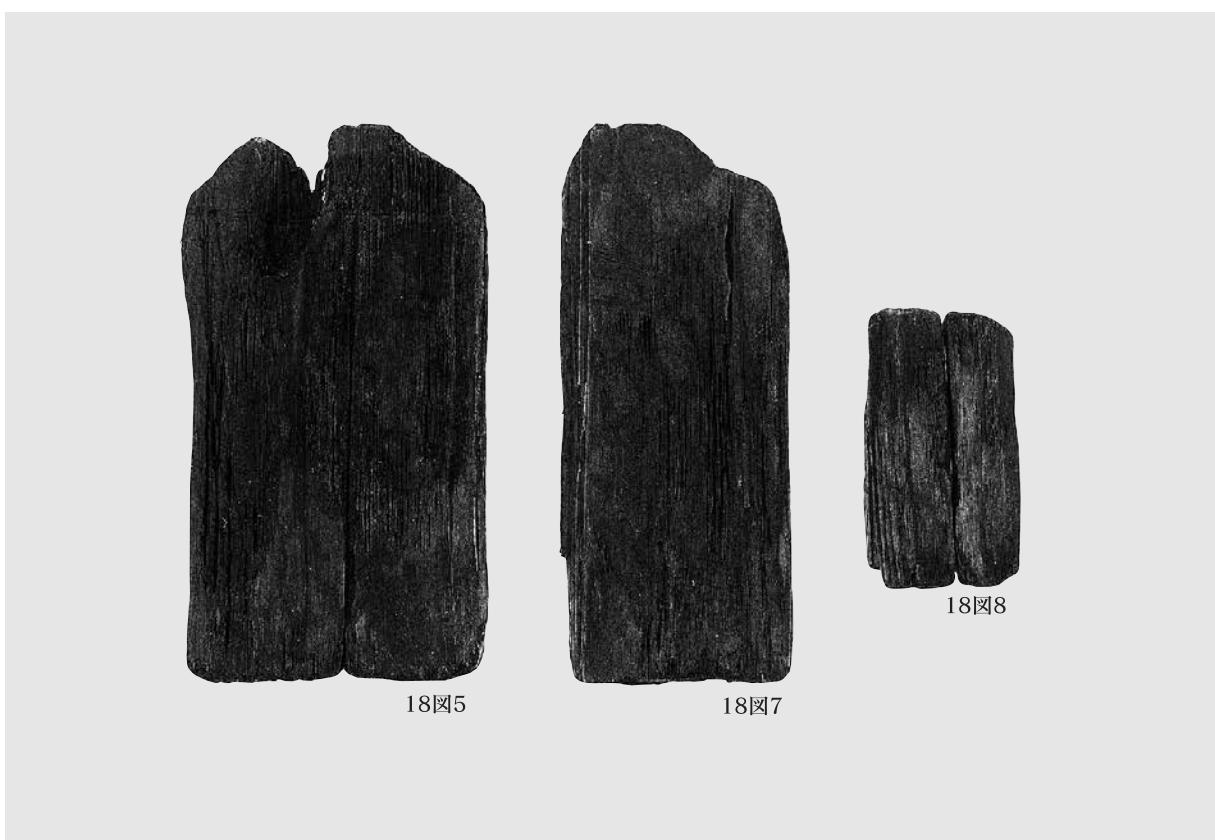
1. SI199竪穴住居跡出土遺物(1)



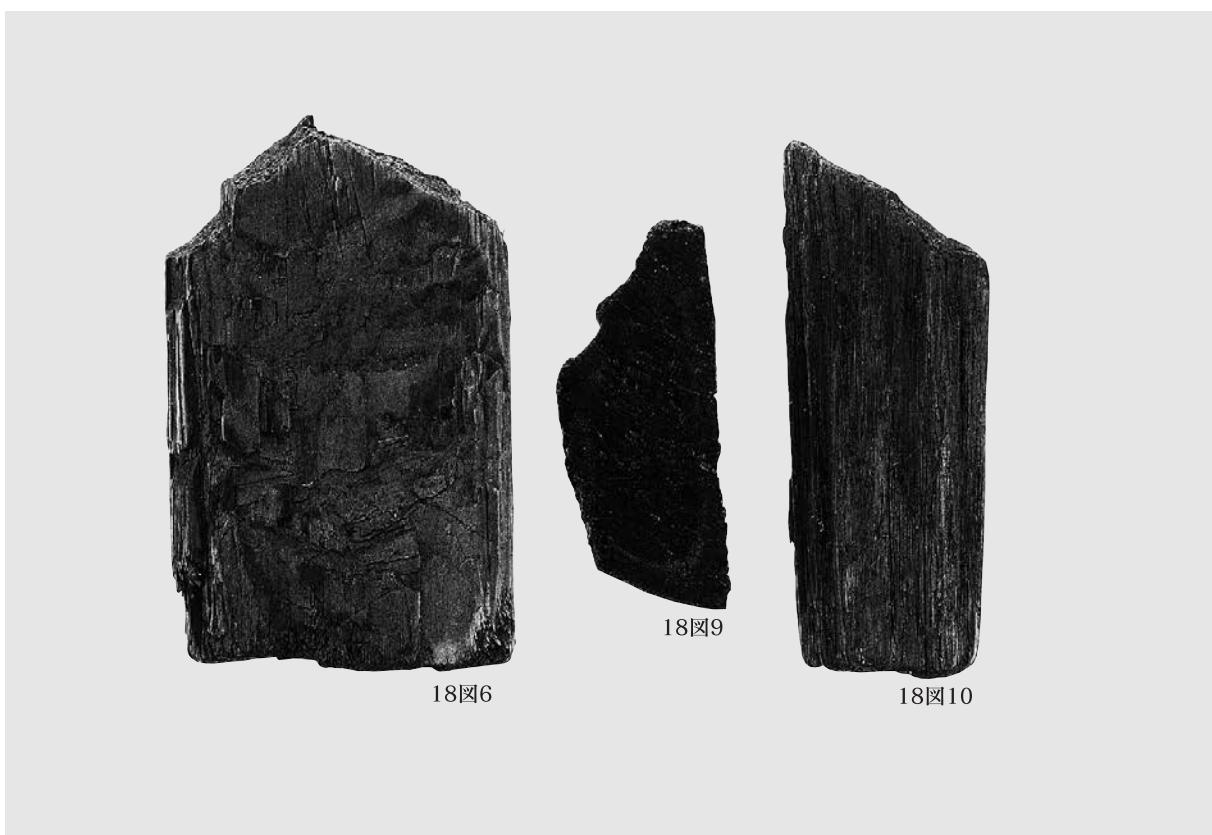
2. SI199竪穴住居跡出土遺物(2)



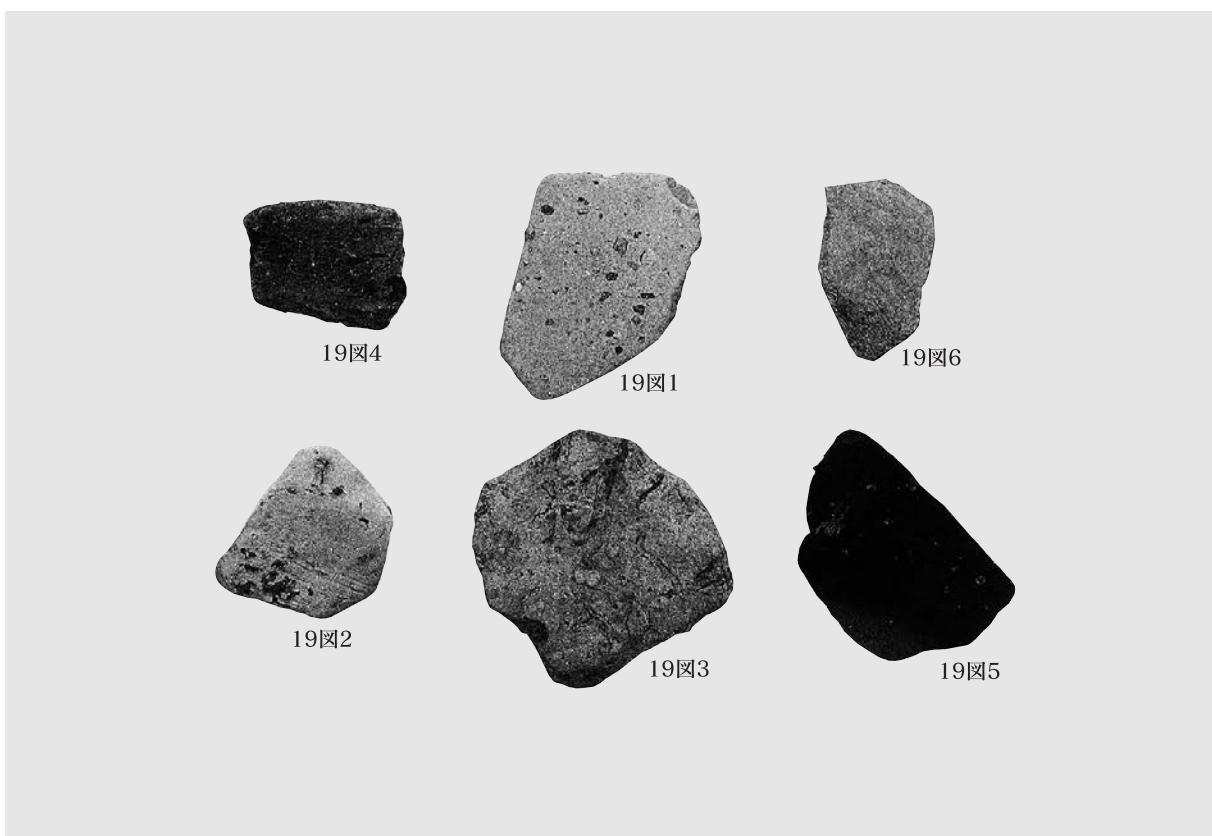
1. SB208掘立柱建物跡出土遺物(1)



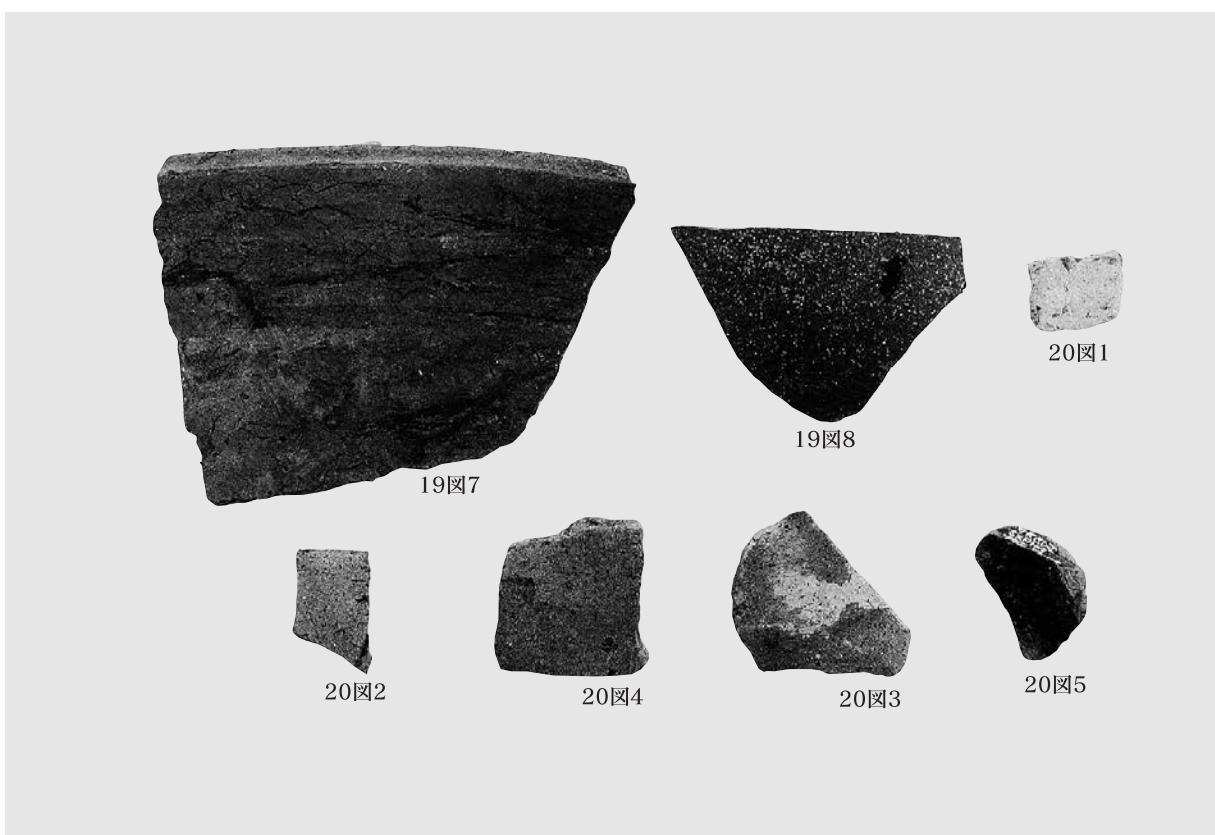
2. SB208掘立柱建物跡出土遺物(2)



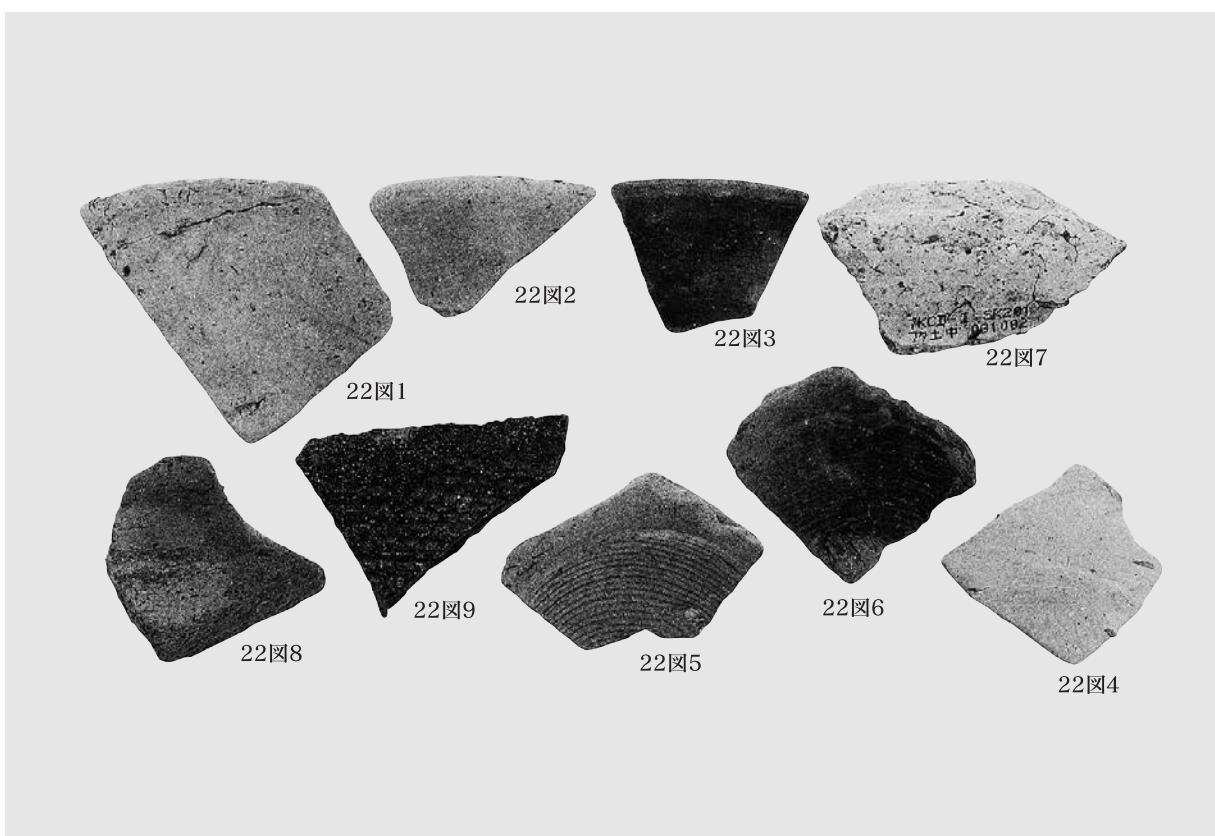
1. SB208掘立柱建物跡出土遺物(3)



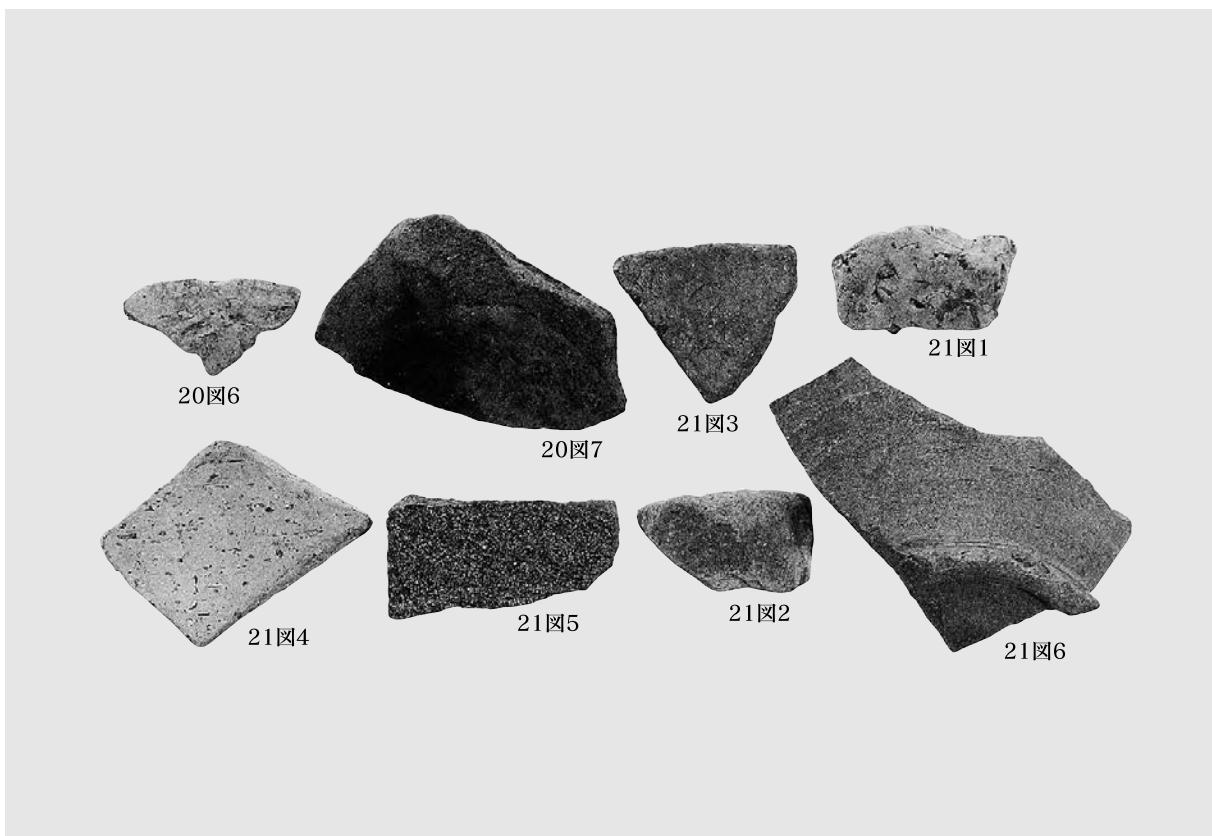
2. SK07土坑出土遺物



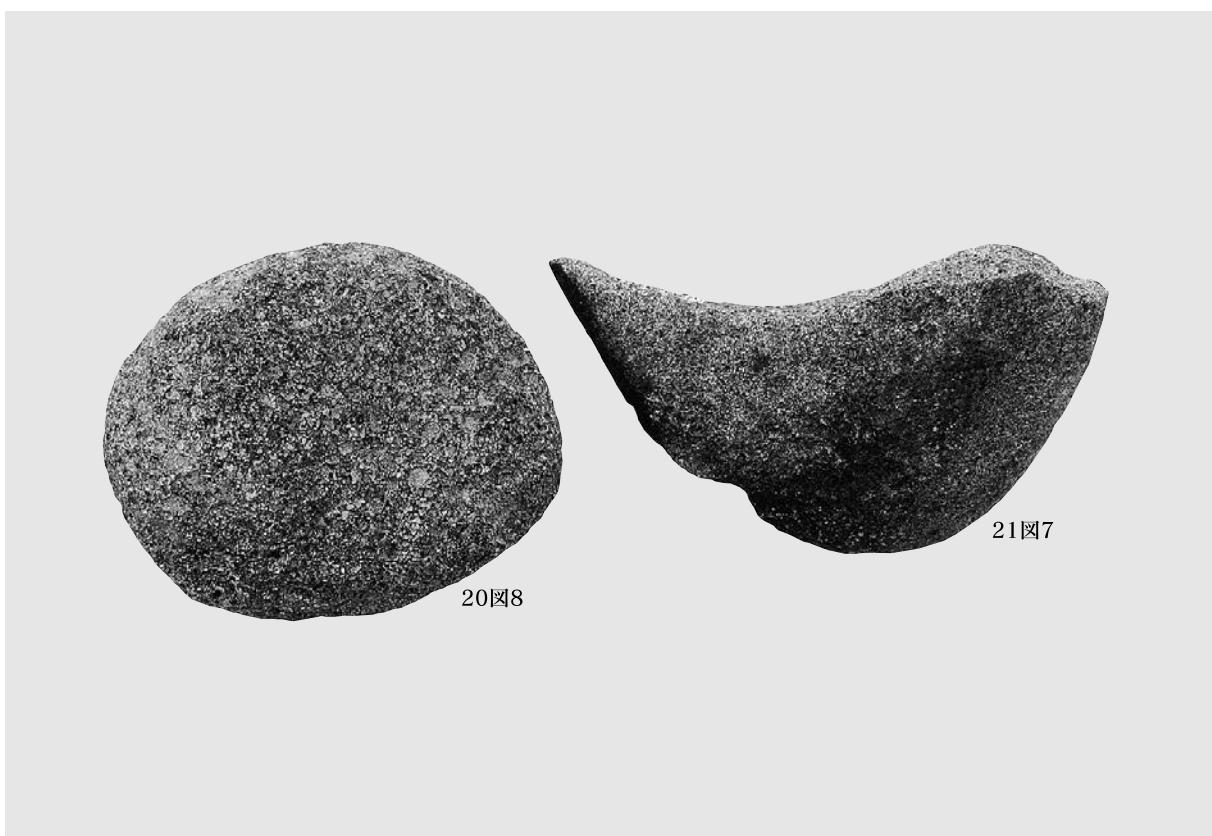
1. SK44・83・109土坑出土遺物



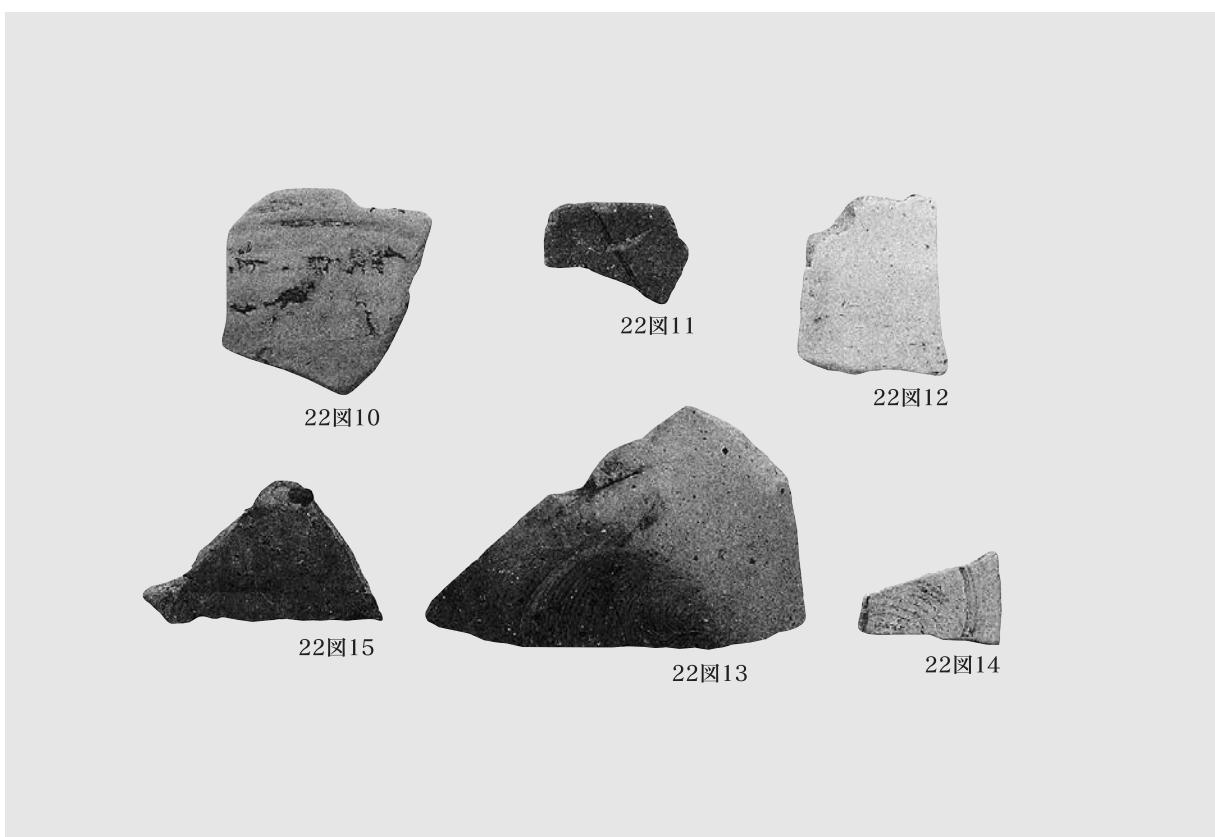
2. SK201土坑出土遺物



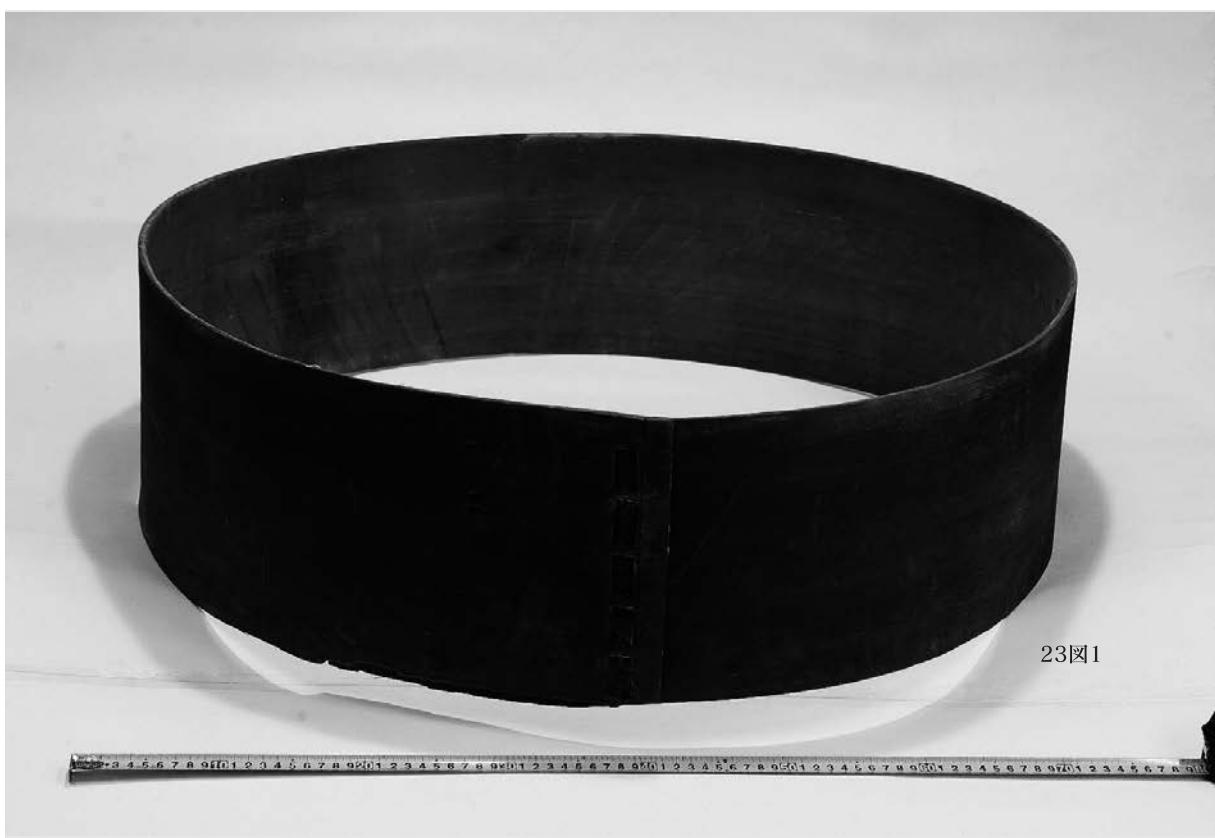
1. SK202・203土坑出土遺物(1)



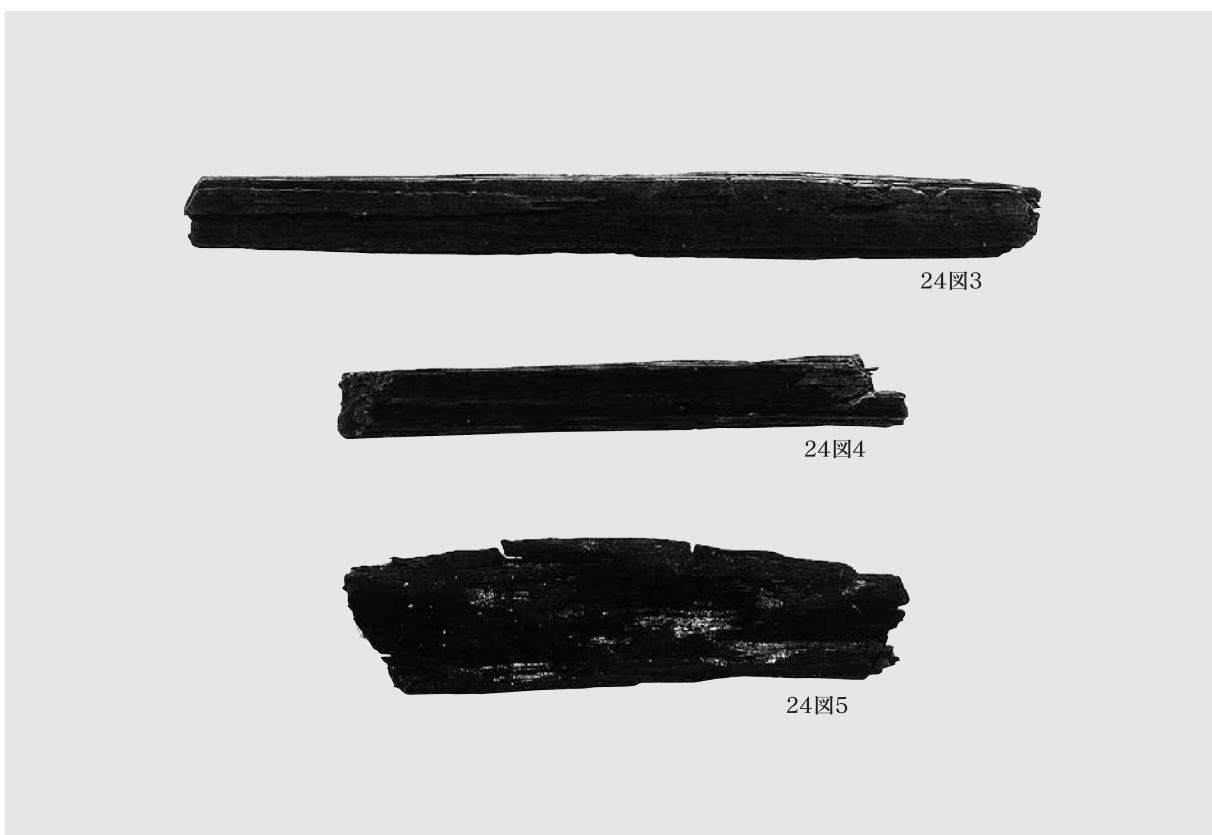
2. SK202・203土坑出土遺物(2)



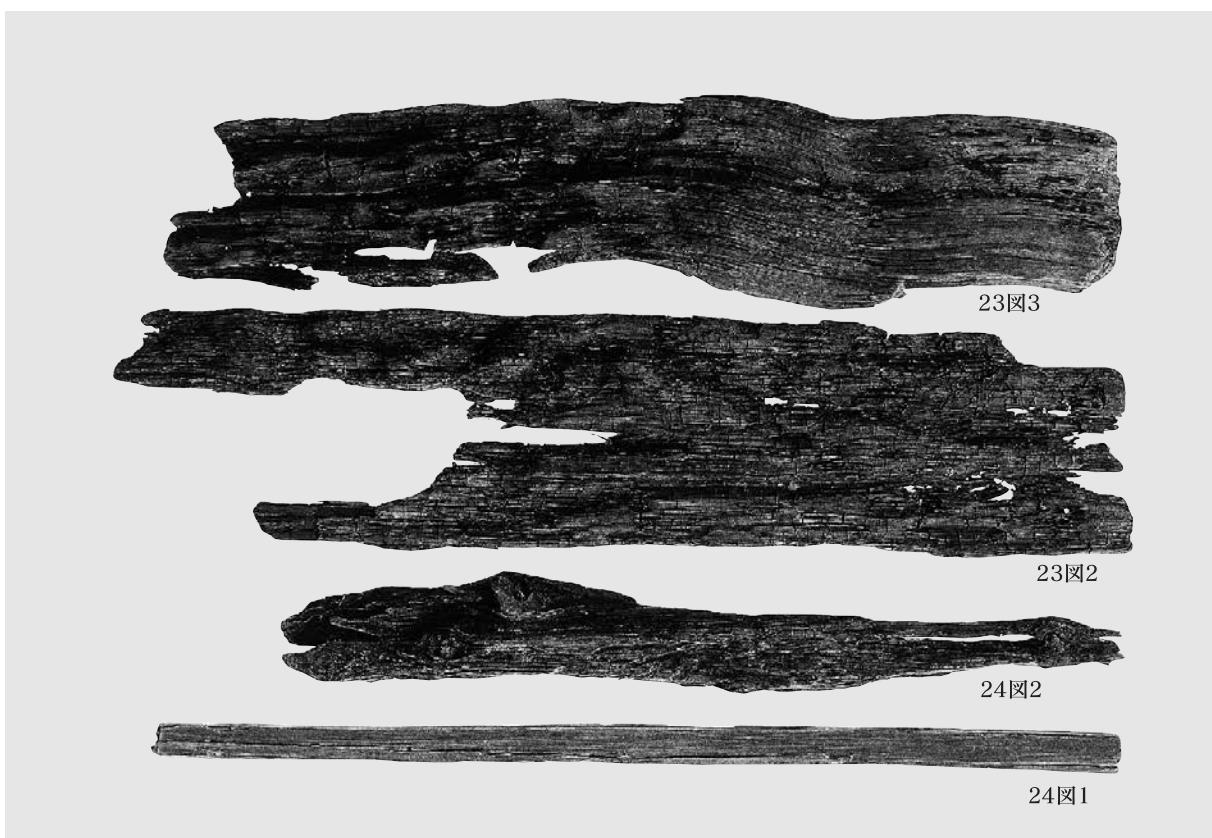
1. SE207井戸跡出土遺物(1)



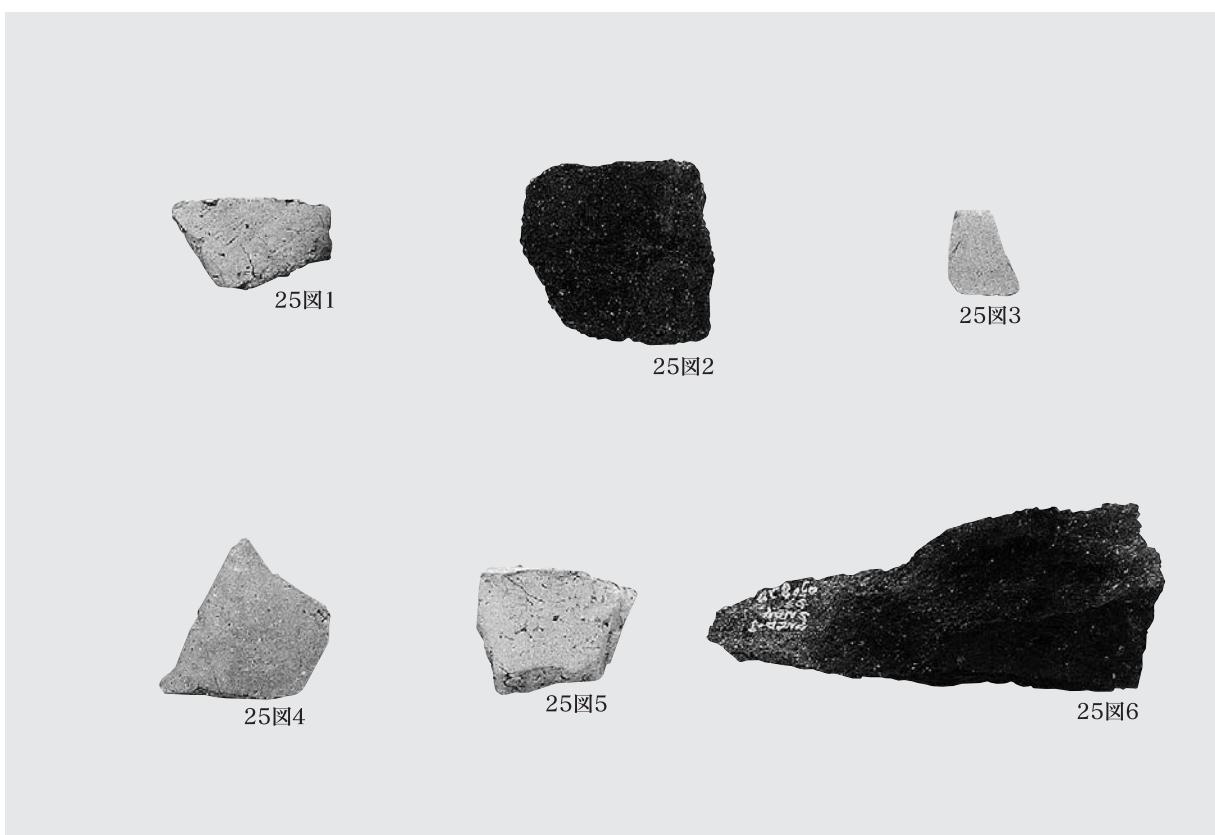
2. SE207井戸跡出土遺物(2)



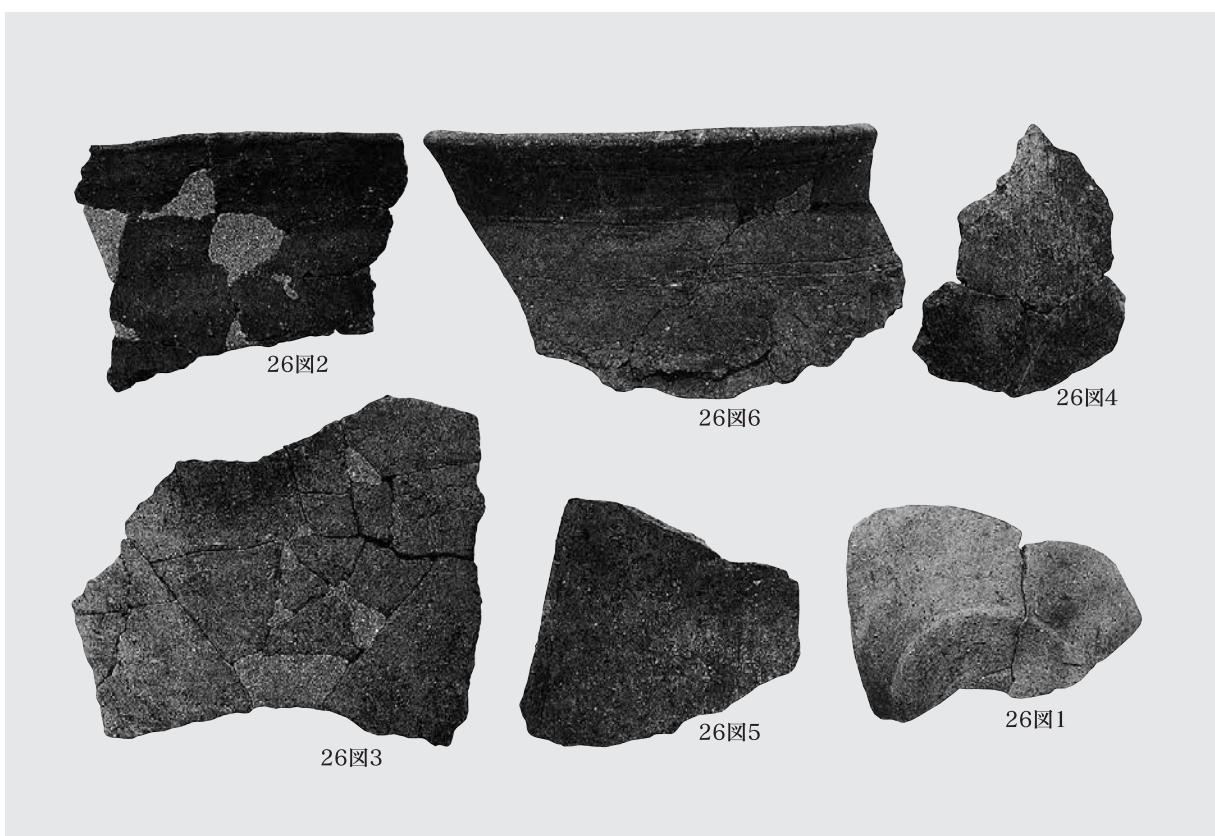
1. SE207井戸跡出土遺物(3)



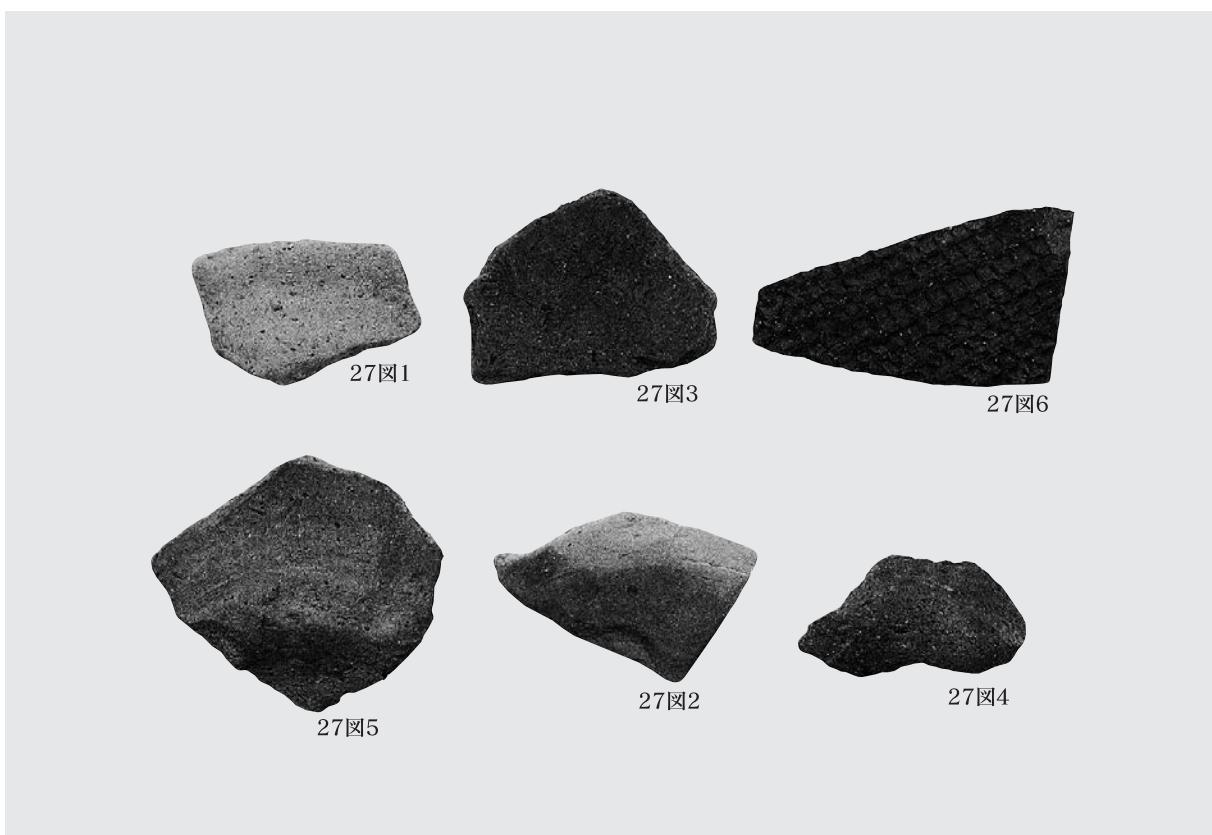
2. SE207井戸跡出土遺物(4)



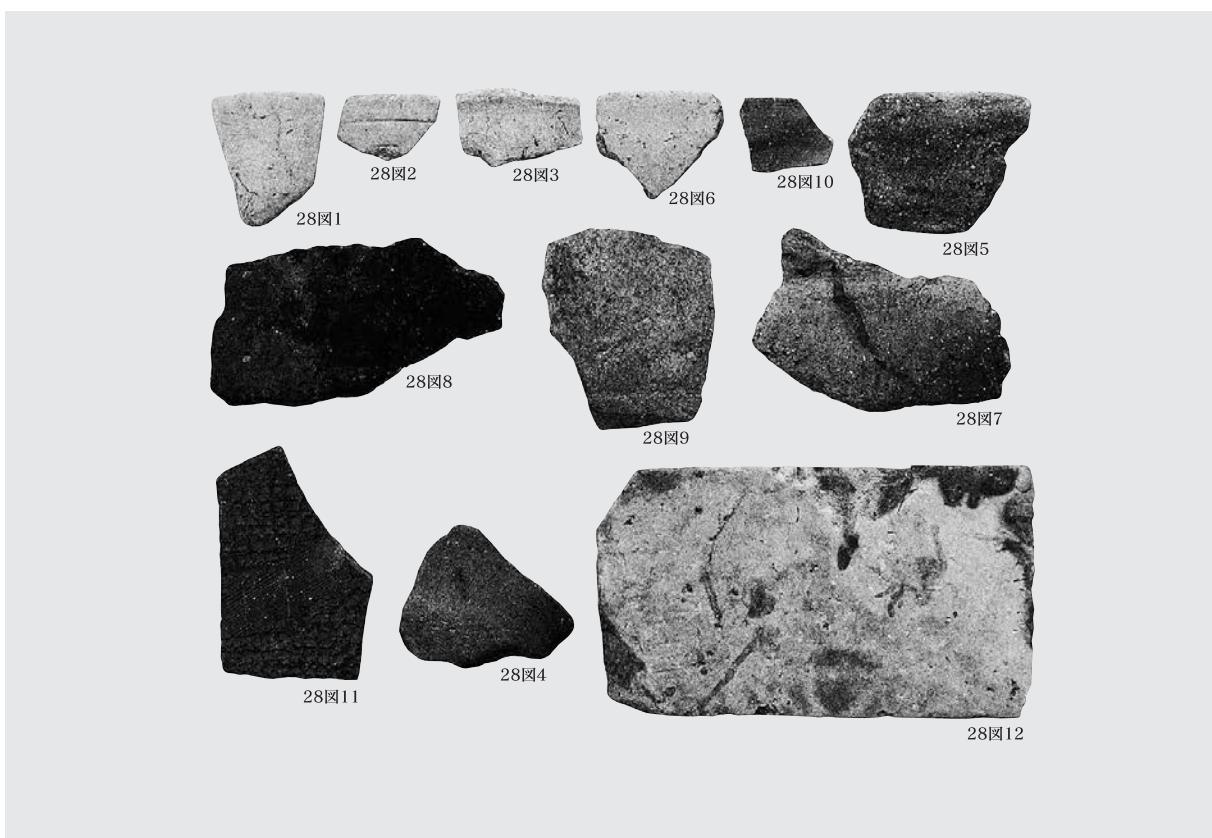
1. SN03·04焼土遺構出土遺物



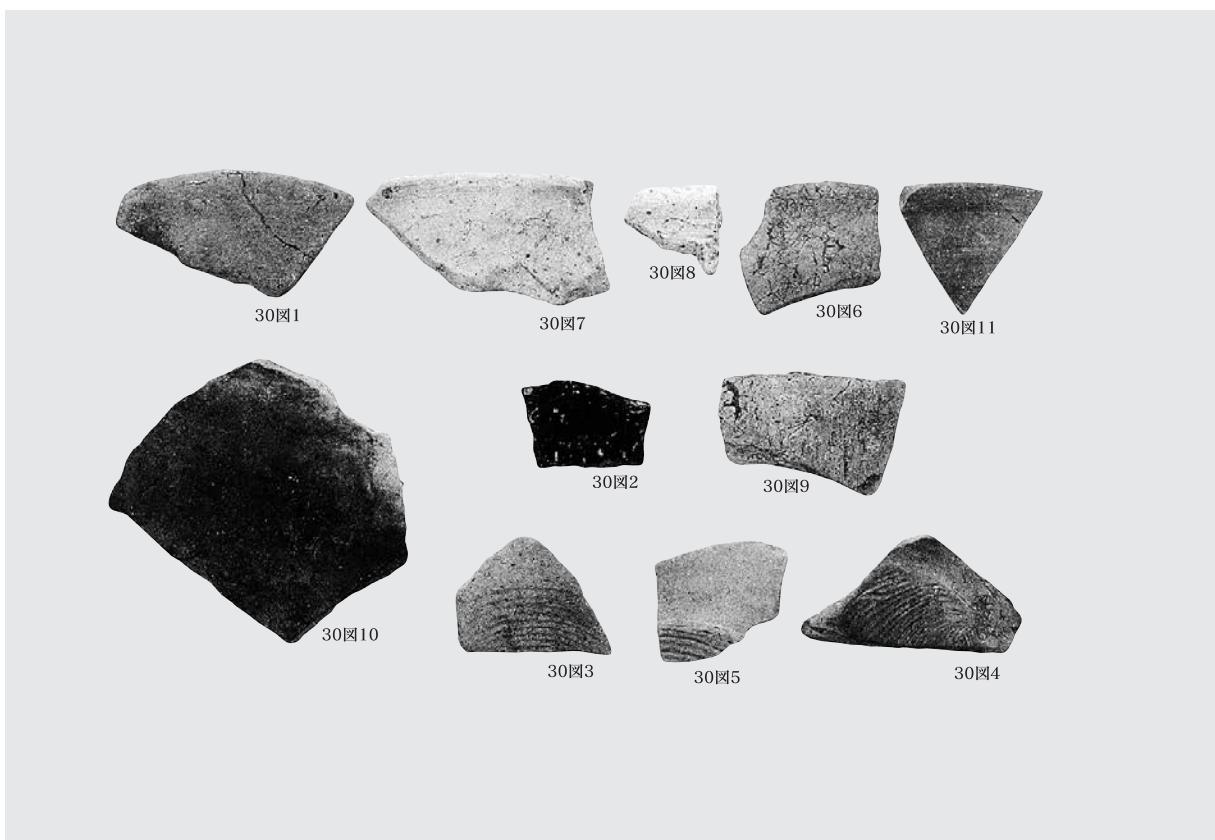
2. SN204焼土遺構出土遺物



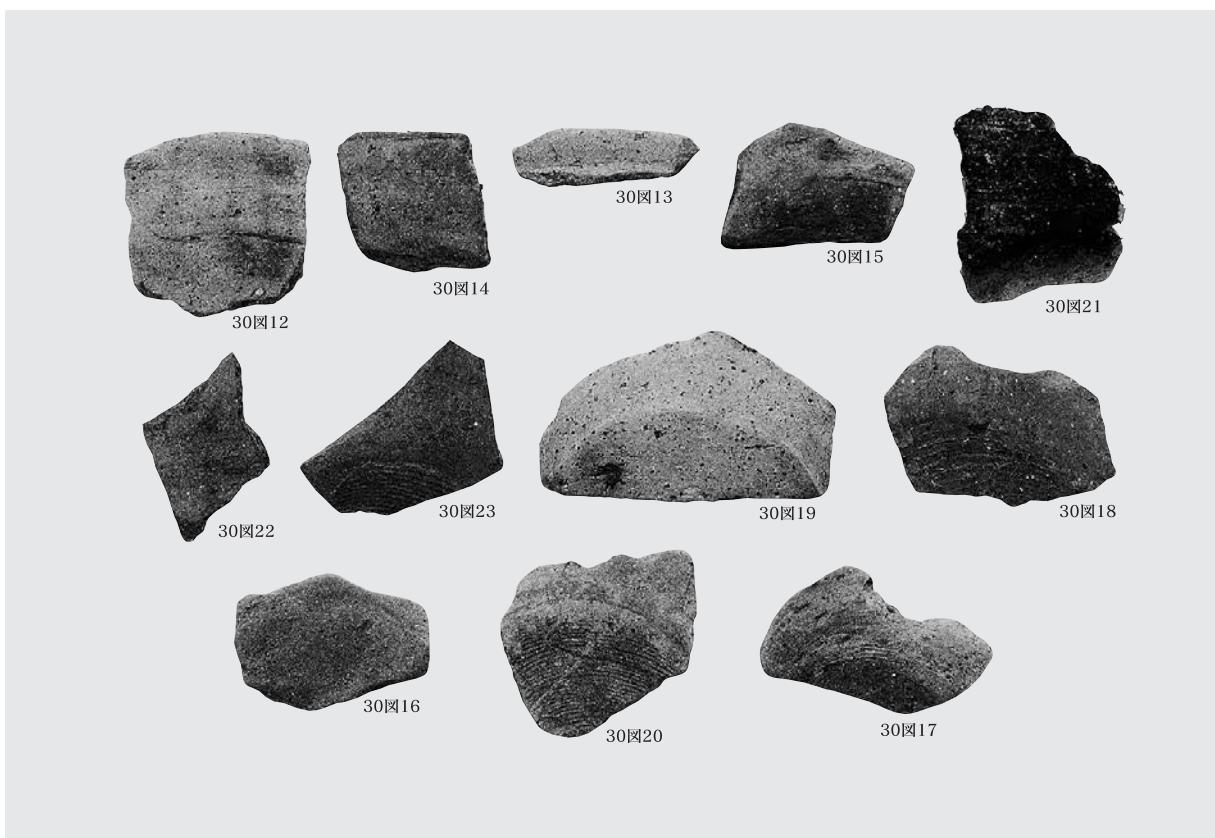
1. SN206焼土遺構出土遺物



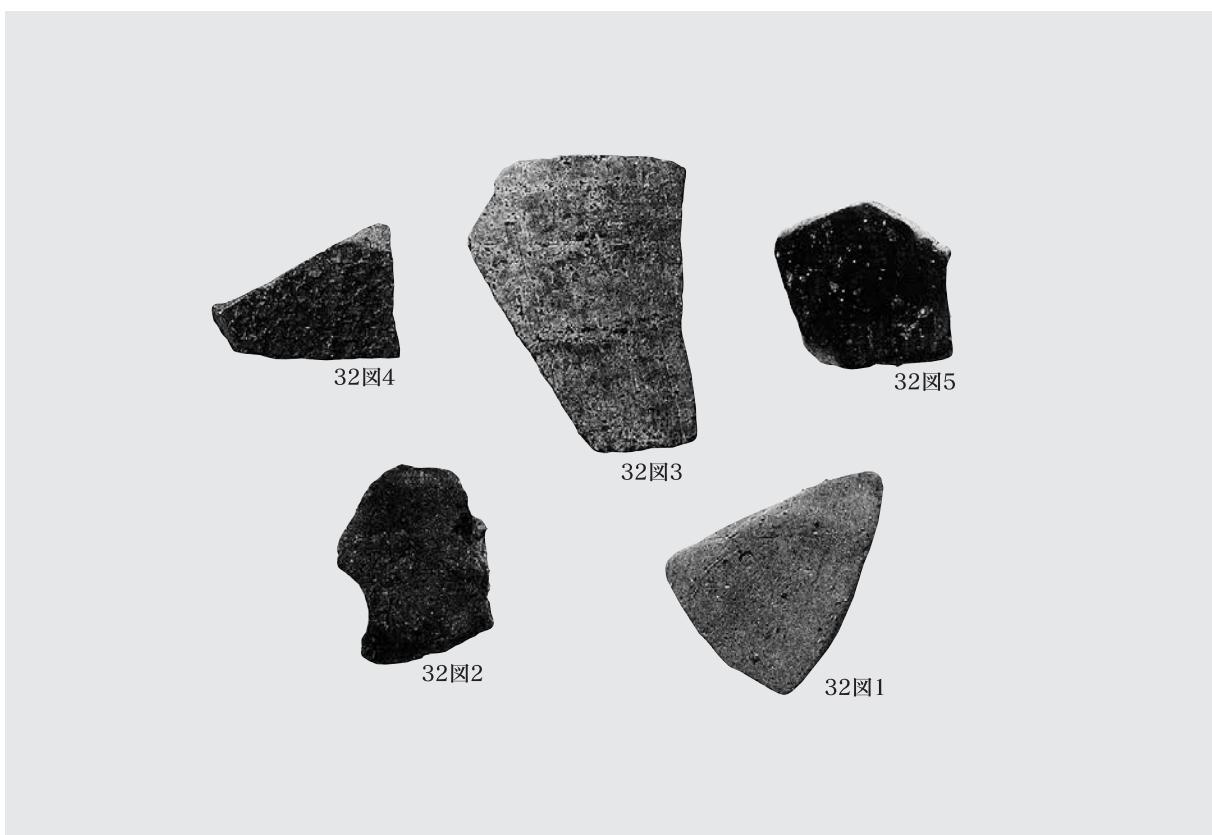
2. SD02溝跡出土遺物



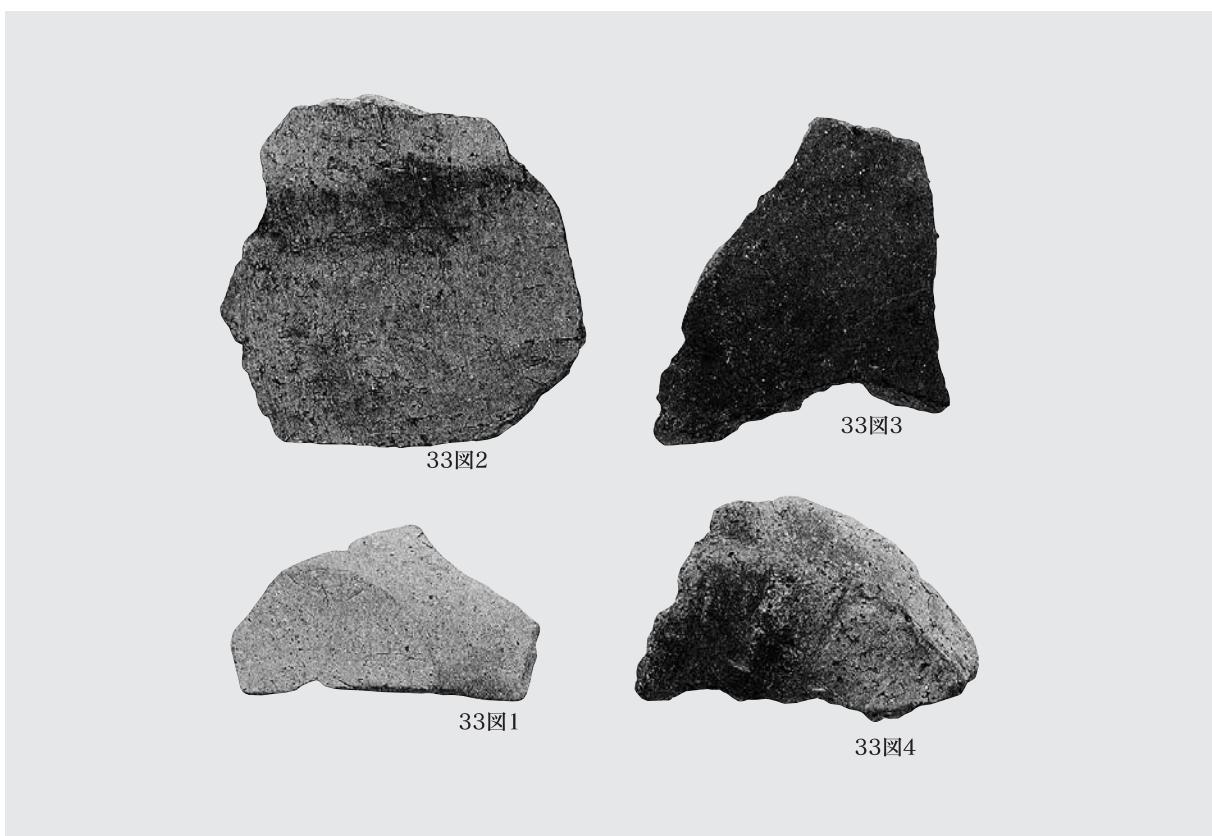
1. SD112溝跡出土遺物



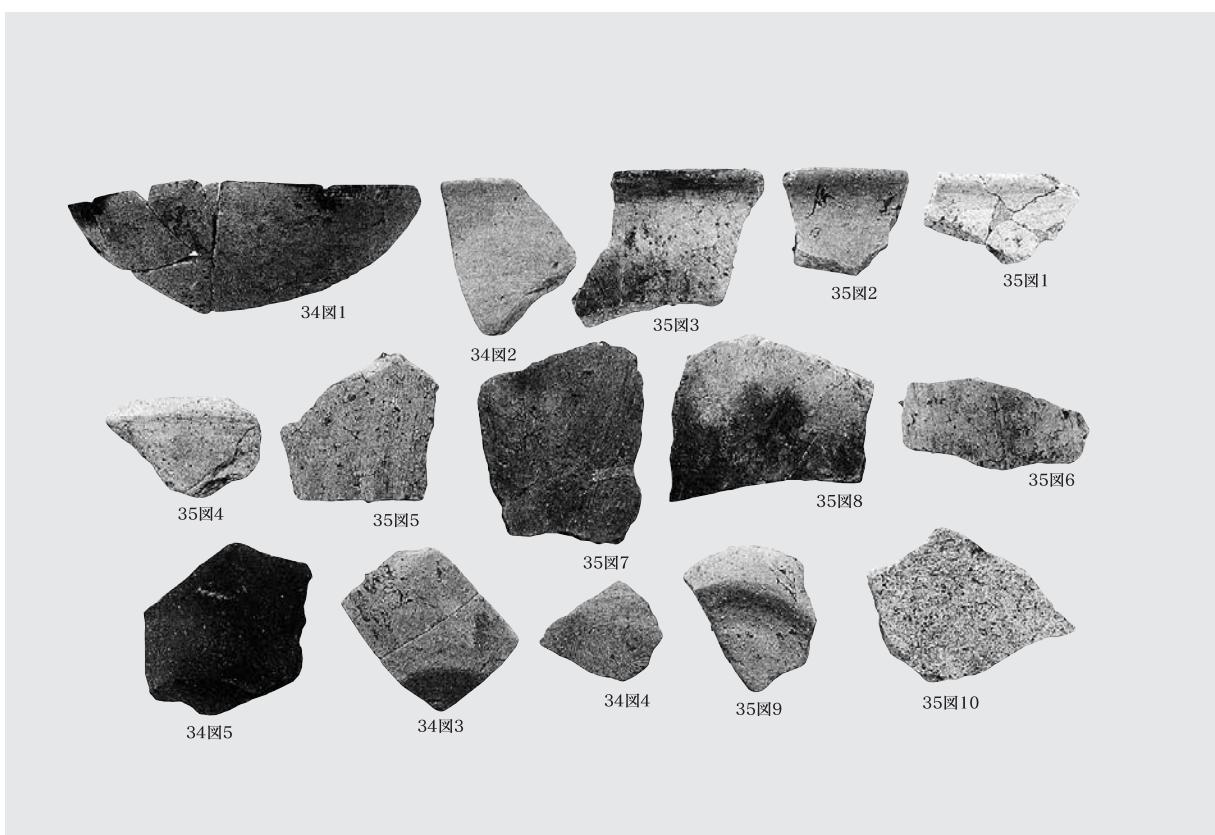
2. SM198道路状遺構出土遺物



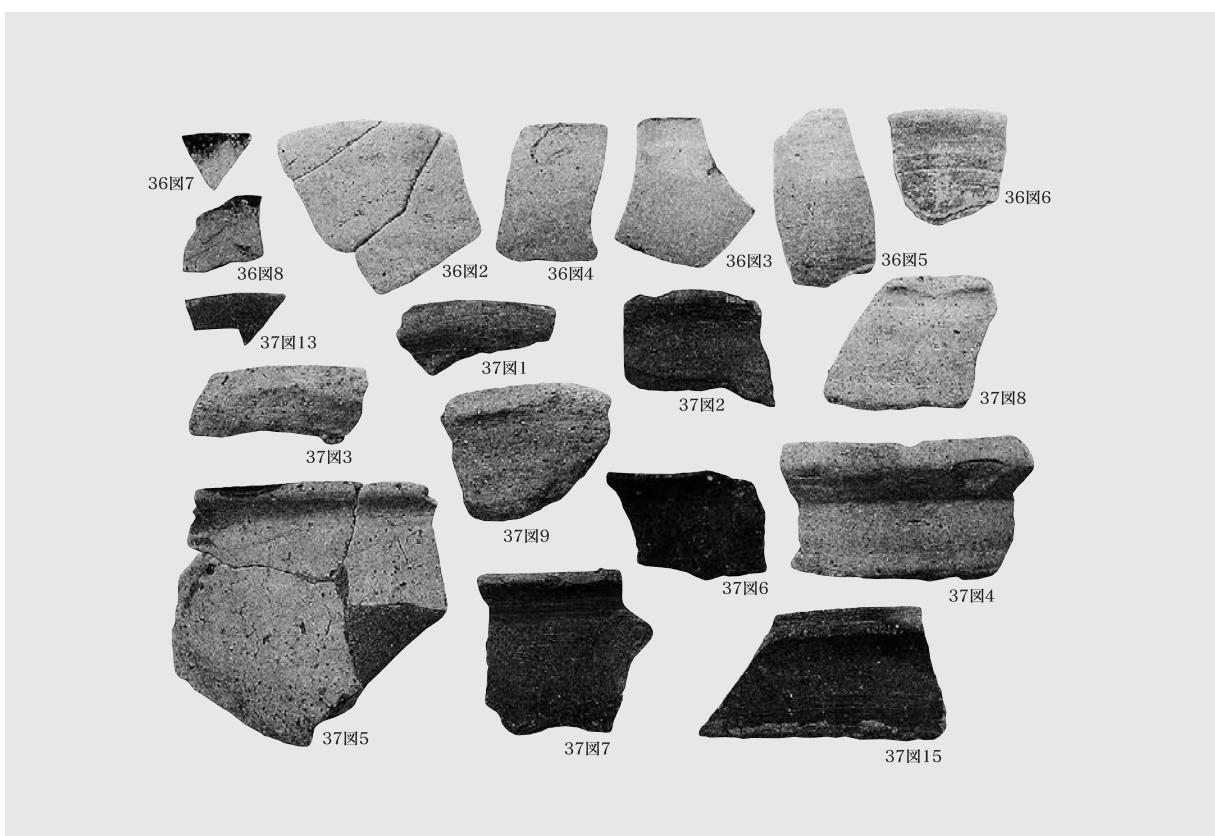
1. SKP92~115柱穴様ピット出土遺物



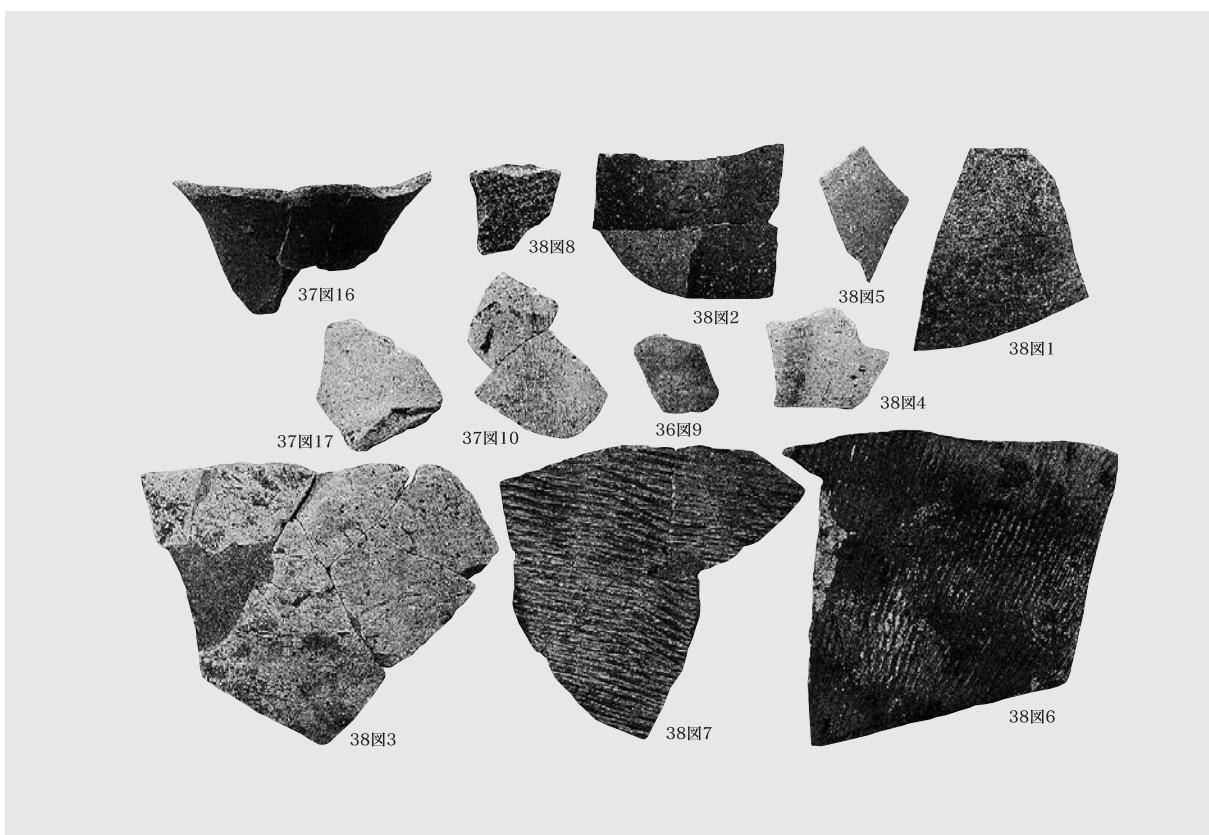
2. SX191その他の遺構出土遺物



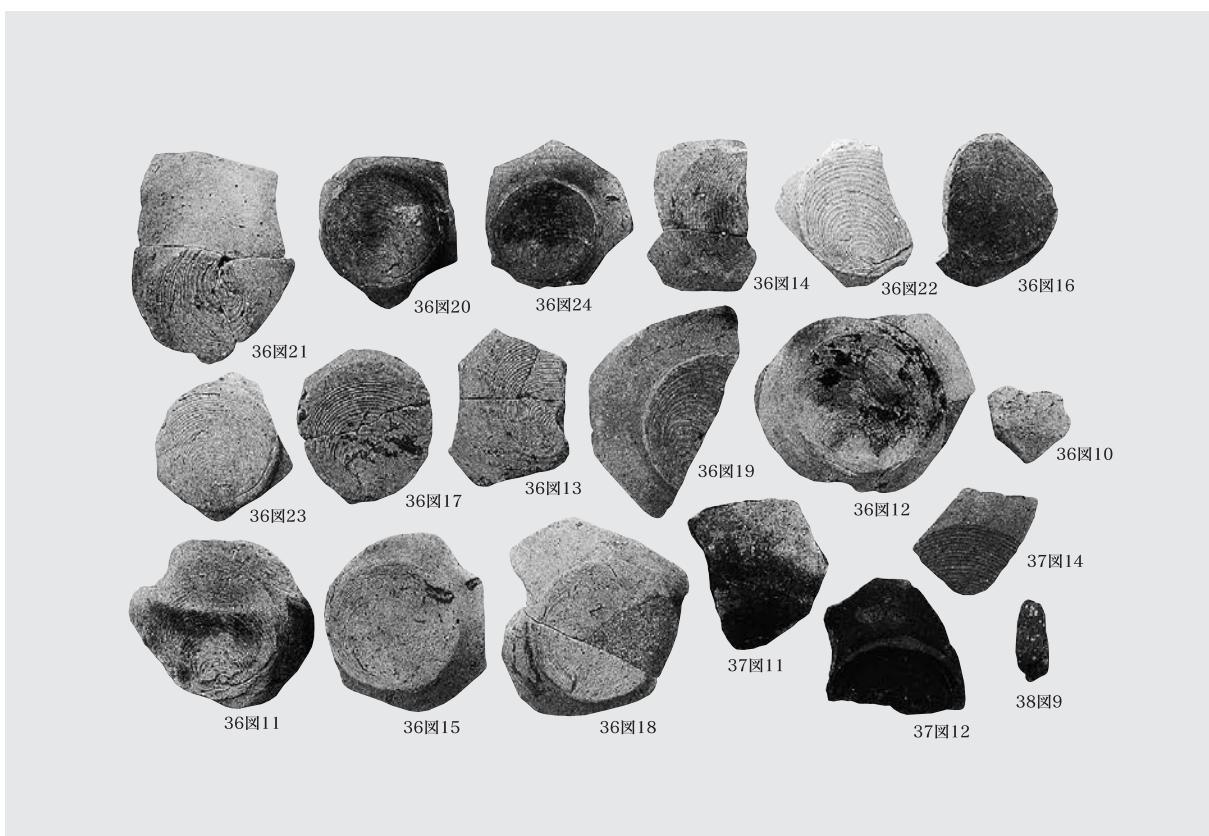
1. SX200その他の遺構出土遺物



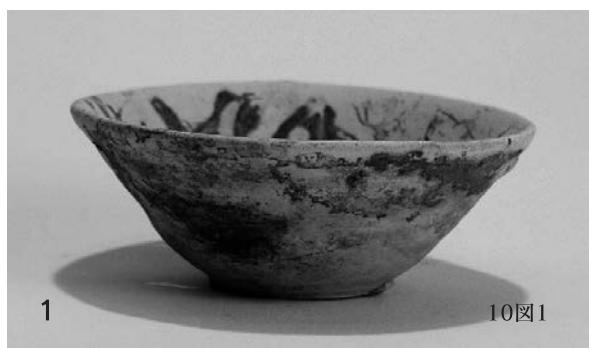
2. SX205その他の遺構出土遺物(1)

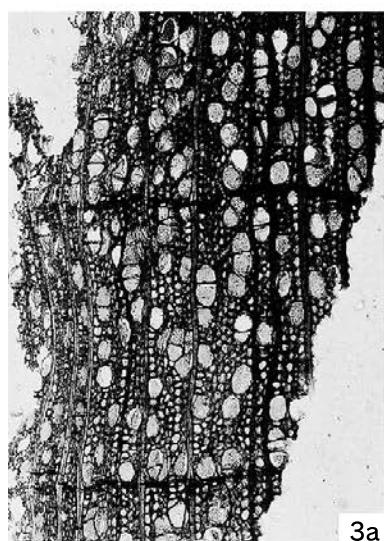
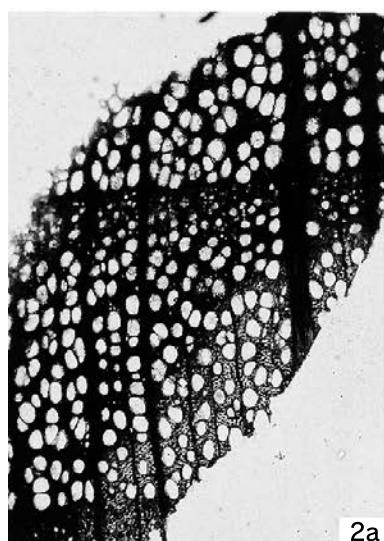
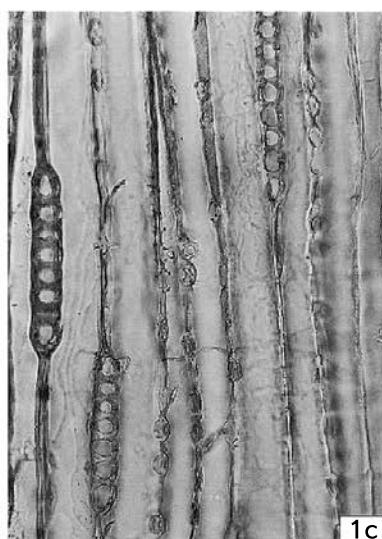
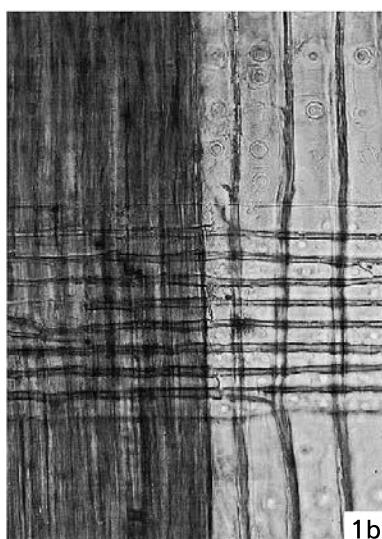
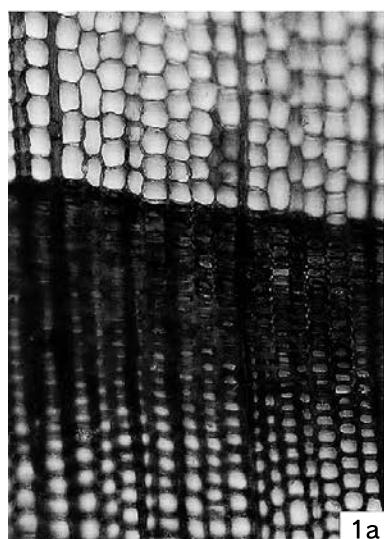


1. SX205その他の遺構出土遺物(2)



2. SX205その他の遺構出土遺物(3)





1.スキ(試料番号18)

2.ブナ属(試料番号19)

3.モクレン属(試料番号20)

a:木口,b:柾目,c:板目

	200 $\mu\text{m}$ :1a
	100 $\mu\text{m}$ :1b,c
	200 $\mu\text{m}$ :2,3a
	200 $\mu\text{m}$ :2,3b,c

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	こちょうだいちいせき							
書名	小鳥田I遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業（中仙南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第385集							
編著者名	石澤宏基・大信田壽一・打矢泰之・千葉史宏							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 TEL 0187-69-3331							
発行機関	秋田県教育委員会							
所在地	〒010-8580 秋田市山王3丁目1番1号 TEL 018-860-3193							
発行年月日	西暦 2005年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
所収遺跡名	市町村	遺跡番号						
こちょうだいちいせき 小鳥田I遺跡	あきた けんせんばくぐん 秋田県仙北郡 なかせんまちやりみない 中仙町鑓見内 あざみずがみ ほか 字水上216-1外	05425	46-91 (新発見 の遺跡)	39度 31分 21秒	140度 31分 49秒	20030806 20031007	2,400m <sup>2</sup>	県営ほ場整備 事業（中仙南 部地区）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
こちょうだいちいせき 小鳥田I遺跡	散布地 集落跡	縄文時代 平安時代前半	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 井戸跡 焼土遺構 溝跡 道路状遺構 柱穴様ピット 性格不明遺構	5軒 1棟 7基 1基 6基 2条 1条 130基 3基	縄文土器 石器・剥片 土師器・須恵器 灰釉陶器 綠釉陶器 土製品(紡錘車等) 石製品(石帶等) 木製品(井戸材等)	玉川の左岸から約1km 東の河川平野(標高36~ 37m)上に営まれた平安 時代の集落跡である。主 体となる時代は平安時代 前半(9世紀~10世紀) である。堅穴住居跡と掘 立柱建物跡を中心とする 集落の中に多数の凹みを 持つ道路状遺構がある。 縄文時代および中世から 近世期のものは遺物のみ 出土した。		
	散布地 散布地	鎌倉時代以降 江戸時代以降		計156遺構	中世陶器・錢貨 近世陶磁器・錢貨			

秋田県文化財調査報告書第385集

**小鳥田 I 遺跡**

—県営は場整備事業（中仙南部地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷・発行 平成17年3月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地

電話(0187) 69-3331 FAX(0187) 69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号

電話(018) 860-5193

印 刷 株式会社 佐藤印刷

